西の口遺跡第１次発掘調査概要

――市立縄手中学校分教場建設工事に伴う第１次調査――

１９８７

(財)東大阪市文化財協会

序

東大阪市における埋蔵文化財保護行政の進展については、年々目ざましいものがあり、昭和61年までに埋蔵文化財包蔵地分布図を2回改訂いたしました。改訂のたびに新発見の遺跡が登録されているわけで、現在までに137ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

遺跡の発見の契機となるのは、各種の土木・建築工事によるもので、以前は工事中に土器片などが不時発見されることが比較的多かったのですが、最近では、遺跡のないところでも、共同住宅や病院など大規模な建造物の建設については、事前の試掘調査を行い、偶発的ではなく積極的計画的に遺跡の発見や保護に努めているところであります。

今回報告いたします西の口遺跡も市立中学校分教場建設予定地内での試掘調査の結果、新たにその存在を確認したものです。

本調査により、西の口遺跡が弥生時代から平安時代にいたる複合遺跡であることが判明し、とりわけ古墳時代後期の溝で囲まれた掘立柱建物を5棟検出するなど大きな成果を得ました。本遺跡が東大阪市東地区で最南端に位置するところから、川を隔てて、北に位置する馬場川遺跡との関係はもとより、八尾市域の楽音寺遺跡や西の山古墳、花岡山古墳などとの関連も考えていかねばならないと思われます。また、別の観点からすれば、東大阪市を中心とする地域史にも新たな1ページを書き加えることになるわけで、本書が考古学的な文献としてだけではなく、広く文化財の保護や活用のために資することになれば幸いであります。

最後になりましたが、調査の実施にあたり格別な御協力を頂いた関係諸機関各位、とくに東大阪市教育委員会に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　木　寺　　宏

例　　言

1．本書は、東大阪市立縄手中学校分教場建設に伴う西の口遺跡第１次の発掘調査概要報告書である。

2．本調査は、東大阪市教育委員会の委託を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が実施した。

3．現地における調査は、昭和60年４月30日より９月６日まで、同年11月26日より12月25日まで２回にわたって実施した。

4．調査および整理は、次の事務局体制により進めた。

理事長　　木寺　宏（東大阪市教育委員会教育長）
事務局長　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
庶務部長　吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部員　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調査部員　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）
　　菅原章太（東大阪市教育委員会文化財課）

5．遺構の略号は下記の通りである。

ＳＢ……掘立柱建物、ＳＤ……溝、ＳＥ……井戸、ＳＫ……土坑、ＳＰ……ピット、ＮＲ……自然流路

遺構番号は検出した順に１、２、３、……と付している。

なお、遺構実測図でのピットについて、◎とあるのは、柱痕、掘形ともに検出できたもの、◎とあるのは掘形のみで柱痕が不明であるものを示す。

6．現地の土色名および土器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じており、記号の表記もそれに従った。

7．本書の執筆は、Ⅰ、Ⅲ－1)、6)、Ⅳ－5)を下村、Ⅴを下村・菅原が共同で行ない、その他の項および編集を菅原が行った。遺構写真は、下村、菅原が撮影した。遺物写真はＧ・Ｆプロに委託して実施した。

8．本書中、石器の実測については、松田順一郎の協力を得たほか、曽我恭子が整理作業に参画した。厚く御礼申し上げる。また調査の実施にあたっては、東大阪市教育委員会施設課、株式会社山田工務店、菊田建設株式会社、安西工務店に格別な御協力をいただいた。記して御礼申し上げる次第である。

本 文 目 次

序……
例言……
Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の概要……4
1)．地区割……4
2)．層位……7
3)．平安時代以降の遺構……8
4)．平安時代の遺構……9
5)．古墳時代の遺構……12
6)．弥生時代の遺構……20
Ⅳ．出土遺物……28
1)．平安時代の土器……28
2)．古墳時代の土器……31
3)．製塩土器……41
4)．その他の遺物……41
5)．弥生時代の土器……42
Ⅴ．まとめ……53
観察表……59

挿　図　目　次

第１図　現地説明会風景……1
第２図　遺跡周辺図……3
第３図　調査地地区割図……4
第４図　土層断面図……5～6
第５図　平安時代以降の畝実測図……8
第６図　ＳＫ５土器出土状況実測図……9
第７図　ＳＫ３出土甑実測図……10
第８図　ＳＥ２実測図……11
第９図　ＳＥ３上部構造実測図……11
第10図　ＳＥ３下部構造実測図……11
第11図　ＳＥ３覆屋実測図……12
第12図　ＮＲ２実測図……12
第13図　ＮＲ２断面図……13
第14図　ＳＢ１実測図……14
第15図　ＳＢ２実測図……15
第16図　ＳＢ３実測図……16
第17図　ＳＫ25土器出土状況実測図……16
第18図　ＳＫ26土器出土状況実測図……16
第19図　ＳＫ26出土羽釜実測図……16
第20図　古墳時代遺構配置図……17～18
第21図　弥生時代遺構配置図……20
第22図　ＮＲ１実測図（上層）……21
第23図　ＮＲ１実測図（下層・ＳＤ78）……21
第24図　ＮＲ１上層出土片口鉢実測図……21
第25図　ＮＲ１（ＳＤ78）断面図……22
第26図　ＳＥ５土器出土状況（上層）……23
第27図　ＳＥ５土器出土状況（下層）……23
第28図　ＳＥ６土器出土状況実測図……24
第29図　壺棺位置図……25
第30図　壺棺１・２実測図……25
第31図　壺棺３実測図……25

第32図　壺棺１、壺・鉢実測図……26
第33図　壺棺２・３実測図……27
第34図　ＳＫ５出土土器実測図……29
第35図　平安時代遺構出土土器実測図……30
第36図　ＮＲ２出土土器実測図……31
第37図　ピット出土土器実測図……32
第38図　ＳＤ65出土土器実測図……33
第39図　ＳＤ67出土須恵器実測図……34
第40図　ＳＤ67出土土師器実測図……35
第41図　ＳＫ25出土土器実測図……36
第42図　第４層出土土器実測図……37
第43図　第５層出土須恵器実測図……39
第44図　第５層出土土師器他実測図……40
第45図　製塩土器実測図……41
第46図　石器実測図……41
第47図　縄文土器拓影……42
第48図　ＳＤ78出土土器実測図……43
第49図　ＳＤ78出土土器実測図……44
第50図　ＳＤ78・81・83出土土器実測図……46
第51図　ＳＤ80・81出土土器実測図……47
第52図　ＳＥ５出土土器実測図……48
第53図　ＳＥ５出土土器実測図……49
第54図　ＳＥ６出土土器実測図……50
第55図　包含層出土土器実測図……51

図　版　目　次

図版一	遺跡周辺の調査前航空写真		
図版二	土層断面	１．調査地中央部断面	２．調査地東端断面
図版三	平安時代以降の遺構	１．畝掘削前の状況	２．畝検出状況
図版四	平安時代の遺構	１．ＳＫ５土器出土状況	２．ＳＫ６土器出土状況
図版五	平安時代の遺構	１．ＳＥ２上部検出状況	２．ＳＥ２上部検出状況
図版六	平安時代の遺構	１．ＳＥ２井戸枠組み合わせの状況	２．ＳＥ２最下部検出状況
図版七	平安時代の遺構	１．ＳＥ３と覆屋検出状況	２．ＳＥ３上部構造検出状況
図版八	平安時代の遺構	１．ＳＥ３下部構造検出状況	２．ＳＥ３下部構造検出状況
図版九	平安時代の遺構	１．ＳＥ３最下部検出状況	２．ＳＫ３土器出土状況
図版十	古墳時代の遺構	１．遺構全景掘削前の状況	２．遺構全景検出状況
図版十一	古墳時代の遺構	１．ＳＤ65、ＳＤ67、ＳＢ１検出状況	２．ＳＢ１完掘状況
図版十二	古墳時代の遺構	１．ＳＢ２検出状況	２．ＳＢ２完掘状況
図版十三	古墳時代の遺構	１．ＳＢ２の根石検出状況	２．ＳＢ２の根回り石検出状況
図版十四	古墳時代の遺構	１．ＳＢ３検出状況	２．ＳＢ４検出状況
図版十五	古墳時代の遺構	１．ＳＫ25土器出土状況	２．ＳＫ25土器出土状況
図版十六	古墳時代の遺構	１．ＳＫ26土器出土状況	２．ＳＫ26完掘状況
図版十七	古墳時代の遺構	１．ＳＤ65土器出土状況	２．ＳＤ65土器出土状況
図版十八	古墳時代の遺構	１．ＮＲ２検出状況	２．第５層内有孔円板出土状況
図版十九	弥生時代の遺構	１．ＳＤ78検出状況	２．ＳＤ78完掘状況
図版二十	弥生時代の遺構	１．ＳＤ78完掘状況	２．ＳＤ78土器出土状況
図版二十一	弥生時代の遺構	１．ＳＤ78土器出土状況	２．ＳＤ78土器出土状況
図版二十二	弥生時代の遺構	１．ＳＤ80完掘状況	２．ＳＤ80土器出土状況
図版二十三	弥生時代の遺構	１．ＳＤ81・82完掘状況	２．ＳＤ81・82完掘状況
図版二十四	弥生時代の遺構	１．ＳＤ83土器出土状況	２．ＳＤ83土器出土状況
図版二十五	弥生時代の遺構	１．ＳＤ83完掘状況	２．ＳＤ83完掘状況
図版二十六	弥生時代の遺構	１．ＳＥ５第１層土器出土状況	
		２．ＳＥ５第２層土器出土状況	
図版二十七	弥生時代の遺構	１．ＳＥ５第２層土器出土状況	
		２．ＳＥ５第２層土器出土状況	
図版二十八	弥生時代の遺構	１．ＳＥ５最下層土器出土状況	２．ＳＥ５完掘状況

図版二十九	弥生時代の遺構	１．遺構全景	２．ＳＥ６完掘状況
図版三十	弥生時代の遺構	１．壺棺１・２・３全景	２．壺棺１検出状況
図版三十一	弥生時代の遺構	１．壺棺１内部の状況	２．壺棺１完掘状況
図版三十二	弥生時代の遺構	１．壺棺２検出状況	２．壺棺２内部の状況
図版三十三	黒色土器・土師器・須恵器	１．ＳＫ３・ＳＫ５・ＳＫ６・ＳＥ２・ＳＥ３出土土器	
図版三十四	土師器	１．ＳＫ５出土土器	
図版三十五	黒色土器・土師器・須恵器	１．ＳＫ５・ＳＫ６・ＳＥ２・ＳＥ３出土土器 ２．第４層出土土器	
図版三十六	須恵器・土師器	１．ＮＲ１・ＮＲ２出土土器	
図版三十七	須恵器	１．ＳＤ65　杯身	
図版三十八	須恵器・土師器	１．ＳＤ65出土土器	
図版三十九	須恵器・土師器	１．ＳＤ67出土土器	
図版四十	須恵器	１．ＳＤ67　提瓶	
図版四十一	須恵器	１．ＳＤ67・第５層　瓿・坩	
図版四十二	須恵器・土師器	１．ＳＤ67・ＳＫ26・ＳＫ25出土土器	
図版四十三	須恵器・土師器	１．ＳＫ25出土土器	
図版四十四	漢式系土器・土師器	１．ＳＫ25出土土器	
図版四十五	須恵器	１．ＳＤ65・ＳＤ67　杯・甕	２．第５層　甕
図版四十六	須恵器	１．第５層　杯蓋	２．第５層　杯身
図版四十七	土師器	１．ＳＤ67・第５層出土土器	２．第５層　羽釜
図版四十八	須恵器・土師器	１．第４層、第５層出土土器	
図版四十九	須恵器・製塩土器	１．ＮＲ２・ピット・第４層出土土器	２．製塩土器
図版五十	その他の遺物	１．石鏃、有孔円板、管玉他	
図版五十一	縄文土器・弥生土器	１．包含層　深鉢・浅鉢	２．壺棺１・壺棺２
図版五十二	弥生土器	１．ＳＤ78　鉢	
図版五十三	弥生土器	１．ＳＤ78　壺・高杯・甕	
図版五十四	弥生土器	１．ＳＤ78　甕	２．ＳＤ78　甕
図版五十五	弥生土器	１．ＳＤ78　高杯脚部	
図版五十六	弥生土器	１．ＳＤ83壺・甕、ＳＤ85甕、ＳＤ81高杯・甕	
図版五十七	弥生土器	１．ＳＤ80甕、ＳＤ83甕、ＳＤ81甕、ＳＤ78壺 ２．ＳＤ80高杯、ＳＤ81甕、ＳＤ82甕、ＳＥ６壺	
図版五十八	弥生土器	１．ＳＤ78甕・高杯、ＳＤ80甕、ＳＥ５第１層鉢・甕 壺棺１片口鉢、壺棺３壺	
図版五十九	弥生土器	１．ＳＤ78高杯、包含層高杯	

図版六十	弥生土器	１．ＳＥ５第１層高杯・小型鉢、第２層甕・壺	
図版六十一	弥生土器	１．ＳＥ５第２層壺・甕・高杯・鉢・小型器台	
図版六十二	弥生土器	１．ＳＥ５第２層甕	
図版六十三	弥生土器	１．ＳＥ５第１層甕・高杯・鉢、第２層壺・甕	
		２．ＳＥ６壺	
図版六十四	弥生土器	１．包含層甕底部・高杯脚部	２．ＳＤ78甕底部

Ⅰ．調査に至る経過

西の口遺跡は、東大阪市横小路町３丁目1508番地外に所在する縄文時代から中世期まで続く複合遺跡である。本遺跡が所在する横小路町付近一帯は、都市化がすすむ本市にあって、唯一田畑を残す市街化調整区域であった。この結果、開発に伴う発掘調査はこれまでおこなわれておらず、幸か不幸か遺跡の空白区になっていた。

この地に、東大阪市教育委員会では市立縄手中学校の生徒増に対処するため分離校の計画があり用地買収がすすむなかで、本市施設課より文化財課へ遺跡の有無について照会があった。文化財課では、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内ではないが、周辺には馬場川遺跡、萩山遺跡など重要な遺跡があるので、工事予定地については、新遺跡が発見される可能性が高いと判断し、試掘調査が必要と回答された。その後、文化財課と施設課の協議がおこなわれ、とりあえず、用地買収が完了した土地を対象として試掘調査を実施することになった。試掘調査は、昭和59年４月10日～４月15日まで延６日間、東大阪市教育委員会の主体で計６ヵ所の試掘トレンチ（計24㎡）を設定して実施された。

試掘調査の結果、No.１～２・No.４トレンチで縄文時代・弥生時代の遺物包含層が確認され、遺構が検出される可能性が高いと考えられ、工事予定地全域の全面調査が必要であると判断された。その後、両者で再三の協議がおこなわれ、校舎建築等で破壊される部分について全面調査を実施し、当初予定されていた切土による造成を変更し、できるだけ盛土による造成をおこない、一部どうしても切土をおこなう場所は全面発掘調査を実施することになった。発掘調査は、用地買収の関係で二回に分けて実施した。１回目は、昭和60年４月30日～９月６日まで2199㎡を対象として実施し、２回目は昭和60年11月26日～12月25日まで168㎡を対象として実施した。この間、後述のとおり予想以上の重要な遺構・遺物が検出され、あらたに西の口遺跡と名付けるとともに、調査中の60年８月11日の日曜日を現地説明会の日にあて、研究者や市民の方々に現場を見ていただいた。

今回の調査は、用地買収が一部完了していない段階での作業であったため、周辺の土地所有者の方々に大変なご迷惑をかけ、またご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。

第１図　現地説明会風景

II．位置と環境

西の口遺跡は、大阪府と奈良県の境にそびえ立つ生駒山地の西麓、東大阪市東地区（旧枚岡市域）の最南端に位置している。行政区画でいえば、東大阪市横小路町２丁目～４丁目が遺跡の範囲であり、南隣の八尾市楽音寺の集落とは指呼の間にある。遺跡は前章で述べたように、遺跡確認のための試掘調査によってその所在が明らかになったもので、今後の調査の進展が期待されるところだが、今回の調査成果から、弥生時代から平安時代にわたる複合遺跡と思われる。今回の発掘調査を実施した地点は横小路町３丁目1508番地他で、分校建設予定地約15,000㎡のうち2,367㎡が調査の対象となった。

生駒山地は大阪府側に急で、奈良県側に緩やかな山系をもち、西麓部では、谷あいを流れる小河川による、発達した扇状地の形成がみられる。西の口遺跡も、そうした小河川の一つ、箕後川左岸の扇状地上、標高21～22ｍの間に立地している。

さて、東大阪市東地区における縄文時代以降の遺跡の立地の状況を観察すると、大きく分けて次の三つのグループを想定することができる。

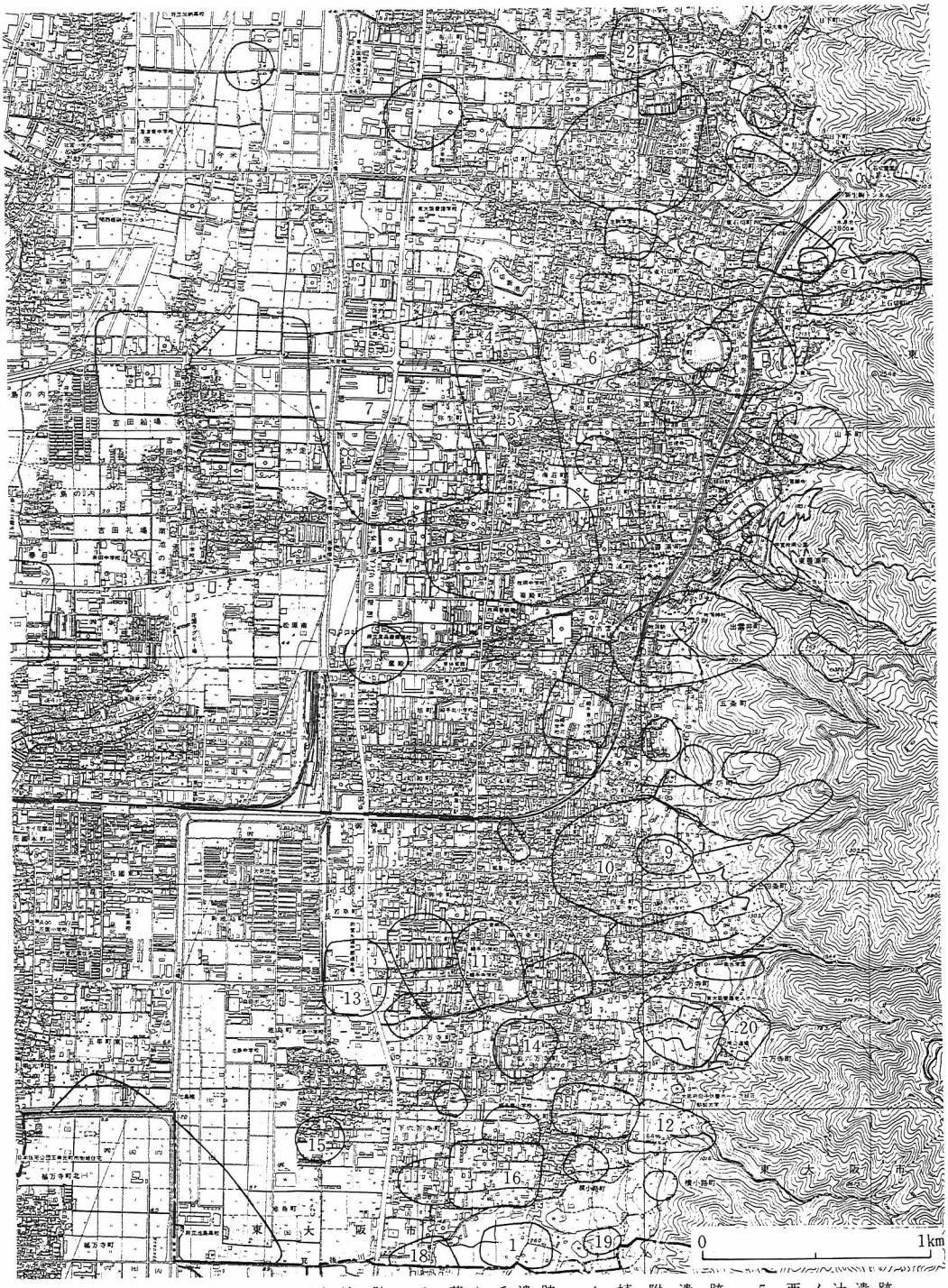
① 山麓から扇状地発端にかけて標高 150ｍ前後につくられる古墳時代後期の群集墳。北は辻子谷古墳群から南は浄土寺谷古墳群まで分布している。

② 旧東高野街道以東、扇状地中央、標高15～20ｍに所在する遺跡。北より日下、芝ヶ丘、神並、西ノ辻、鬼塚、縄手、船山、馬場川、西の口など、１～２㎞の間隔をおいて点在している。

③ 旧東高野街道以西、現国道170号線(外環状線)にかけて、扇状地末端から平野の低湿地へ移行する部分、標高５ｍ前後に営まれる遺跡。鬼虎川、北鳥池、池島などがあげられる。

以上のうち②と③に関わる旧東高野街道の存在は大きいと言わねばならない。遺跡分布図で標高15ｍの等高線と、②の遺跡群は無関係ではありえないのであって、旧東高野街道が②の集落遺跡を結ぶルートとして早くから機能していたことが想定できる。

微視的に西の口遺跡周辺の歴史的環境をみてみよう。縄手遺跡、馬場川遺跡がまず縄文時代に営なまれはじめる。いずれも前記分類の②に該当する。これは、縄文時代の河内平野が河内湾という入江であることに起因するとみられる。この入江が旧大和川の堆積作用により湖沼となり、集落が営なまれるようになるのは弥生時代に入ってからである。鬼虎川遺跡のような弥生時代中期の大集落跡は当地域では、現在のところ発見されていないが、後期に入ると、北鳥池遺跡が出現してくる。ここでは、既往の調査により弥生時代後期～古墳時代中期にいたる複合遺跡であることが判明している。古墳では、４世紀後半の西ノ山古墳、花岡山古墳の前期古墳やえの木塚古墳、心合寺山古墳の中期の古墳が量は少ないながら点在し、山麓には、山畑古墳群などの後期群集墳が分布している。従って弥生時代後期から古墳時代後期にかけて、西の口遺跡周辺には、さまざまな遺跡が断続的に営なまれてきたのであった。



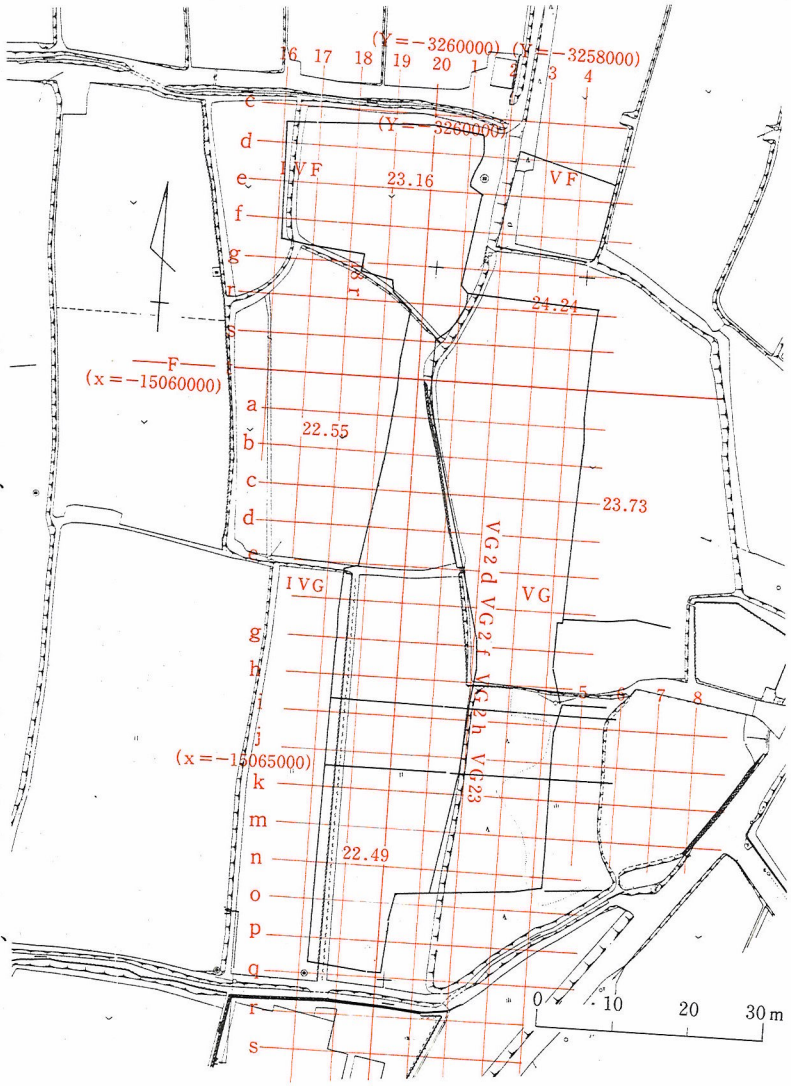
1．西の口遺跡　2．日下遺跡　3．芝ケ丘遺跡　4．植附遺跡　5．西ノ辻遺跡
6．神並遺跡　7．鬼虎川遺跡　8．鬼塚遺跡　9．山畑遺跡　10．山畑古墳群
11．縄手遺跡　12．浄土寺谷古墳群　13．北島池遺跡　14．船山遺跡　15．池島東遺跡
16．馬場川遺跡　17．辻子谷古墳群　18．楽音寺遺跡　19．萩山　20．往生院金堂跡

第2図　遺跡周辺図

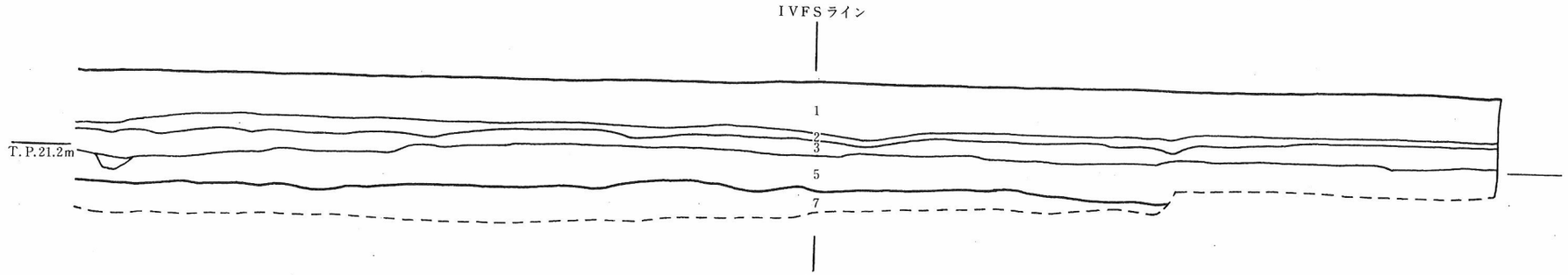
Ⅲ．調査の概要

1）地区割

今回の調査は、第１次調査であり、今後周辺の調査が続く場合を想定し周辺を含めて地区割をおこなった。地区割は、国土座標系に基づいて100ｍ方眼の大区画とさらにその中を５ｍメッシュの方眼の小区画とした。地区割の基点(0点)を遺跡外の西北(x＝－150000.00、y＝－32500.00)に置いて100ｍ毎の大区画のＸ軸を西から東へⅠ・Ⅱ・Ⅲとローマ数字で表わし、Ｙ軸を北から南へＡ・Ｂ・Ｃのアルファベットの大文字で表記し、それぞれの南東の交点をその地区名とした。小区画は、100ｍ方眼の大区画を５ｍメッシュで区画し、Ｘ軸を１・２・３の数字で表わし、Ｙ軸をａ・ｂ・ｃのアルファベットの小文字で表わすようにした。この地区割を今回の調査地点でみると、中央にＹ軸Ⅳライン（ｙ＝－32600.00）が通り、北寄りにＸ軸Ｆライン(ｘ＝－150600.00)が通っている。このため調査地は、大区画ⅣＦ、ⅣＧ、ＶＦ、ＶＧ地区の４大地区に区分される。その大区画の中をさらに５ｍ方眼で小区画に区分しているため、調査地の西北端の地区名は、ⅣＦ17ｄとなり、南東端は、ⅣＧ20Ｐと呼ぶことになる。遺物の取り上げ、遺構の表示は、この地区名にしたがっておこなった。

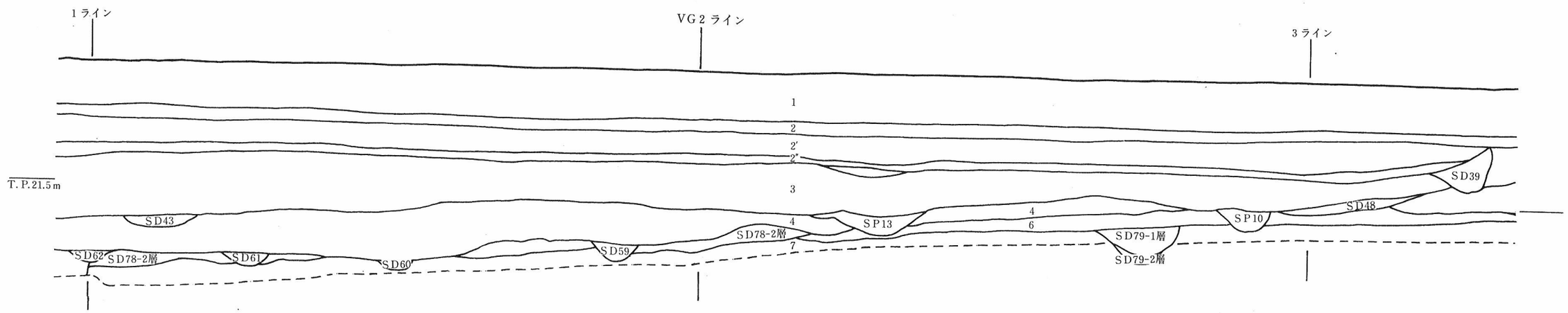


第３図　調査地地区割図



1．耕土、オリーブ灰色(10Y4/2)細砂
2．床土、赤褐色(5YR4/7)中～細砂
3．オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細砂
5．暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト
7．黒褐色(7.5YR2/2)シルト質粘土

(上)　調査区北部断面



2′ 旧耕土
2″ 旧床土
4．にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細砂

(下)　調査区中央部断面

0　2　4 m

第4図　土層断面図

2）層　位

今回の調査地においては、面積が広く、調査地南側で検出した自然河川（ＮＲ２）に向かって南側へ傾斜するため、調査地北側、中央東側、中央西側、南側では、それぞれ、堆積している土層が相違している。そこで、全地区で確認した土層をすべて列挙した上で、各地区の特長を記していくことにしたい。基本層序は以下の通り。

第１層　耕土層。オリーブ灰色（10Ｙ4/2）細砂。部分的に粗砂を含む。層厚28～36cm。

第２層　床土層。赤褐色（５ＹＲ4/7）中～細砂。酸化マンガン粒を含む。層厚４～10cm。

第３層　オリーブ褐色（2.5Ｙ4/3.5）シルト質粗～細砂。江戸時代の染付椀を含む。層厚10～45cm。

第４層　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト質細砂。律令国家成立期（７世紀中葉）から平安時代の遺物包含層。平安時代の遺構面。層厚12～45cm。

第５層　暗褐色（7.5ＹＲ3/3）粘土質シルト。細礫～粗砂を多量に含む。古墳時代後期の遺物包含層。層厚18～26cm。

第６層　黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト質細砂。弥生時代後期末の遺物包含層。層厚13cm前後。

第７層　黒褐色（10ＹＲ2/2）シルト。弥生～平安時代の遺構面。縄文時代晩期後半の突帯文土器を微量に含む。層厚20cm。

第８層　明黄褐色（10ＹＲ6/6）シルト質粘土。遺物は含まない。層厚30cm以上。

まず、第１層、第２層については調査地全域に分布している。調査地中央東側では、もと２枚の水田があったのを、第２次大戦後、地上げを行い、１枚の水田にして拡大したため、2′層、2″層として旧耕土、旧床土を確認したが、江戸時代に遡るものではない。第３層は全域に広がるが、やや起伏のある旧地形を平坦にするための客土の可能性があり、北から南、東から西へ向かってかなり厚くなっている。下面において、この層よりもやや粗砂を多く含む層を埋土とする畝状遺構が検出されている。

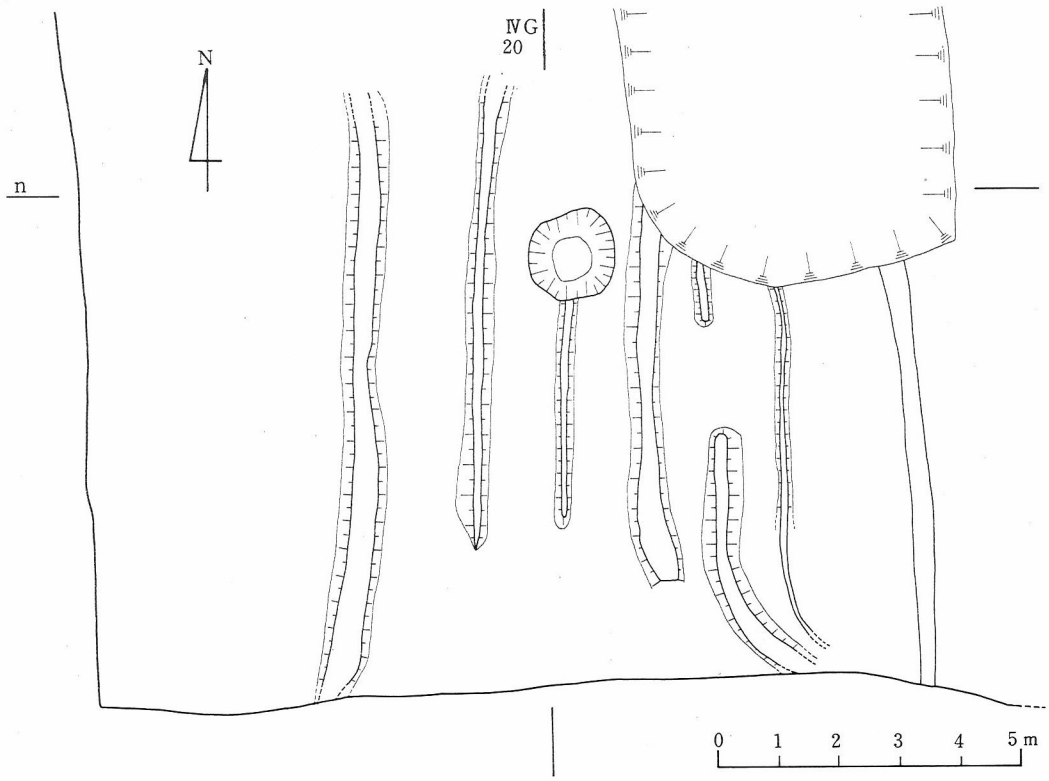
次に、第４層は調査地中央の一部（ＶＧ１～２ｆ付近）にのみ分布している。調査地中央西側では、近世～近現代の耕地拡大により完全に削平されており、未確認である。この層を切りこんで平安時代の土坑が３基検出されているが、江戸時代の削平のため、本来の遺構面は不明。第５層は、調査地北側から中央部にかけて広がる。これは、古墳時代後期の集落遺構の分布と一致するものである。第６層は第５層の分布とは逆に、調査地中央から南側にかけて広がりをもっていた。とくに調査地東端では、後世の削平を比較的まぬがれたためか層が厚くなる傾向があった。第６層と第７層とは土色、土質の点で非常に近似している。ただ、第７層は北側のごく一部分で遺物が確認されたのみで、ほとんど遺物を含まないこと、また、第６層に少量ながら砂粒を含むのに比べ、全くそれを含まないこと、などから分層を行った。第８層はいわゆる洪積層に相当するものと思われる。遺物は全く含まれていなかった。本遺跡のベースを形成する層と考えられる。

3）平安時代以降の遺構

第３層上面で調査区中央を北から南へ流れる近現代の溝５条と、方形の池状落ちこみを１ヶ所検出。山麓部での段々状水田の灌漑施設と思われる。南東部では同じ用途の野井戸（ＳＥ１）を確認した。池状落ちこみは一辺５ｍの方形で一隅のみ丸くなっており、池状落ちこみの南辺で溝と接続していた。その溝には太さ２～３cm大の竹を丸く束ねたものを管状にした装置が施されていた。水量を調整するためのものであろう。

第４層～第６層上面では、調査区全域で溝、畝状遺構を多数検出している。溝は断面カマボコ形を呈し、深さ２～３cm、幅６～７cmの規模であった。畝状遺構は、精査時には溝状で検出したもので、溝の両肩の間に１条から数条の瘤（こぶ）状隆起を造り出したものである。瘤状隆起は、断面の観察によると、４～６層を削って造ったもので、置き土をしたものではない。溝と畝状遺構は、畑地の耘耕時の鋤跡であろう。埋土は３層とよく似たもので、粗砂の混入がやや少なかった。時期的には、埋土中より瓦器片を確認しているので、中世期の所産であろう。

第５図は、南西部（Ⅳ～ＶＧ、20～2j～l）で検出した５条の畝状遺構を示す。瘤状隆起の端が不明だが、畝と畝の間が0.8～1.7ｍ、検出した畝の長さ3.5～9.5ｍ、畝の幅20～40cm、深さ6.5～10.8cmを測る。畝の方向はほぼ磁北を示し、南北に造られていた。



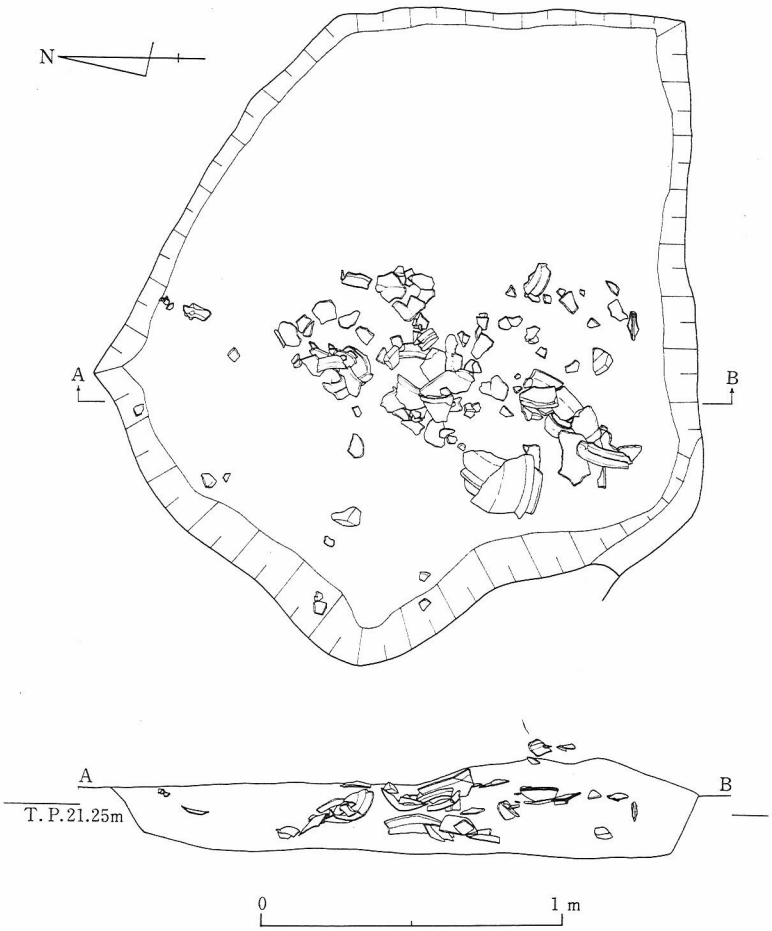
第５図　平安時代以降の畝実測図

4）平安時代の遺構

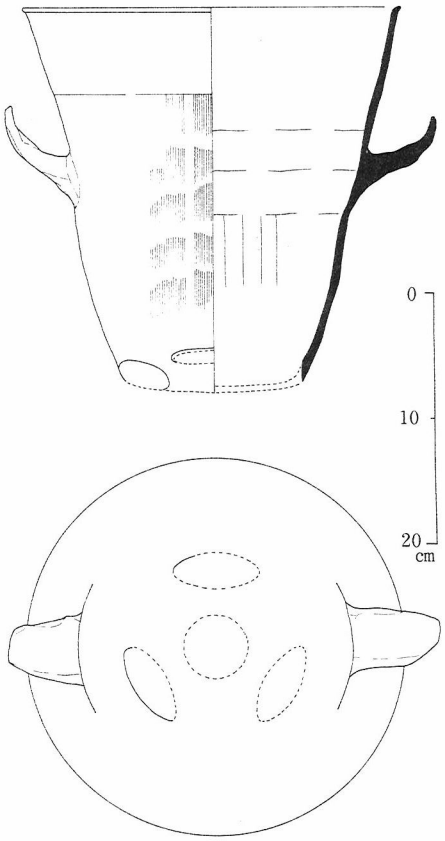
平安時代の遺構として、調査区中央、第４層上面で土坑３基、調査区北東部と中央部西端で第７層上面において井戸２基とそれに付属する柱穴群が検出された。土坑はＶＧ２ｆ周辺に偏って存在し、井戸は互いに隔って位置していた。これは、第３層堆積時の耕地拡大に伴う整地作業に伴って、当該期の遺構を削平したために、土坑や井戸など、遺構として比較的深い規模をもつものだけが残存したことによるものと思われる。遺構面の広がりや集落の具体相など、今後の調査の進展が望まれるところである。

土坑

ＳＫ５（ＶＧ２ｇ区）調査区中央で検出。前述したように、本来の遺構面は、現状よりもう少し高かったものと思われる。東隣のＳＫ６と同じく、遺構の南部を畝状遺構ＳＤ52によって切られているために、遺構の全容は不明である。検出した規模を記すと、東西2.1m、南北2.0m、中央部での深さ40cmを測る。不整形な土坑で、埋土は、黒色(7.5ＹＲ2/1.5)シルト質細砂で炭の混入が認められた。土色、土質とも第４層に非常に近似していたため、精査したにもかかわらず、規模、性格などについて不明な点が多かった。ただ、出土した土師器羽釜のなかに底部を打ち欠いたものがあり、何らかの祭祀を行うための土坑であった可能性がある。遺物は、こぶし大の礫に混じって、土師器羽釜、甕、黒色土器椀、須恵器片が一



第６図　ＳＫ５　土器出土状況実測図



第７図　ＳＫ３内出土甑実測図

括出土している。

ＳＫ６（ＶＧ２・３ｇ区）

ＳＫ５のすぐ東に位置している。実長、東西1.3ｍ、南北1.9ｍを測り、深さ20㎝。壁面は直に落ちる、楕円形の土坑と思われる。埋土はＳＫ５と同じく黒色シルト質細砂で、微量に炭が混入していた。遺物は一括出土したが、ＳＫ５と比べると少量で、土師器小型甕、杯、須恵器杯などであった。

ＳＫ３（ＶＧ３ｆ区）

ＳＫ６のすぐ北に位置。遺構の東部を不整形な落ちこみ状遺構ＳＸ５によって切られているため全体の規模はわからない。現存する規模は、東西0.9ｍ、南北1.0ｍ、深さ12㎝であった。遺構内より土師器甑が約１個体分出土している（第７図）ほかは、土師器と須恵器の細片のみであった。埋土は、ＳＫ５・６と同じく黒色シルト質細砂で、炭の混入のほかに、中～粗砂が混じっていた。これは、後で述べる自然流路の影響と考えられる。遺構の性格は不明だが、廃棄坑的なものとは思われない。

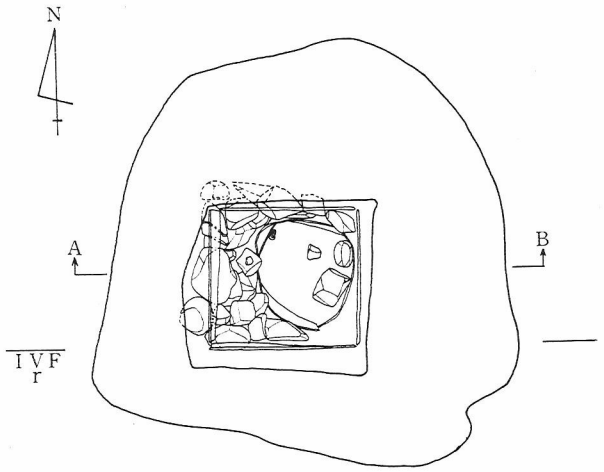
井戸

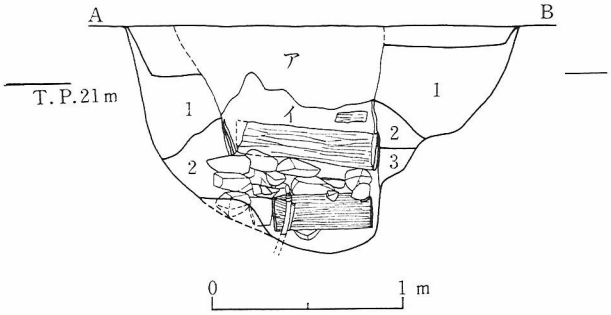
ＳＥ２（ＶＦ１ｒ～ｓ区）

調査区北部で、第７層上面精査時（古墳時代遺構検出作業時）に検出した。初め、検出面から古墳時代の土坑と考えていたが、出土遺物より平安時代の遺構であることが判明した。掘形は東西2.1ｍ、南北2.2ｍのやや歪んだ隅丸方形である。井筒は東西1.0ｍ、南北0.9ｍの長方形をなし、深さは1.2ｍを測った。井筒内の施設として最下部に円形曲物を置いて取水口とし、その上部と側面に人頭大の礫を組み合わせ、さらにその上部に枡形に枠板を差し込んで井桁としていた。井桁は東西方向の横板をＬ字状に切りこんだものに、南北方向の側板を差し込んだものであった。土層観察から、この井戸の構築法が復元できる。即ち、①掘形を掘り、②曲物、石組のあと、③掘形２、３層で裏込めをし、④井桁を何段か差し込んで、⑤掘形１層で再び裏込めを行い、完成したものと思われる。井戸の地上構造は、削平をうけ不明であるが、おそらく枠板を何段も積み重ねて井桁にしたものと考えられる。掘形および井筒の土層中より出土した遺物はきわめて少なく、黒色土器椀、鉢、土師器椀、甕の各破片のみを数えるにすぎない。とくに、この井戸廃絶後の埋土と思われる井筒１層内からは、全く遺物は出土しなかった。井戸周辺に平安時代の集落を示す他の遺構がないことから、飲料に供していたかどうかは不明である。

ＳＥ３（Ⅳ Ｇ20ｆ区）

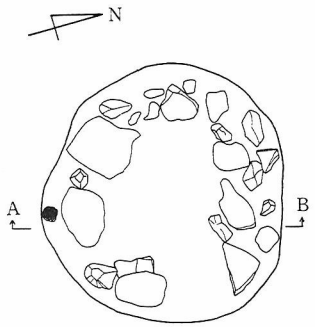
調査区中央西端、第７層上面で検出。掘形は不明。井筒は一辺1.3mの円形をなし、深さ1.3mを測る。最下部に小型の曲物を二段に据え、その上に人頭大の礫を組み込み、さらにその上部に枠板を差し込んだ構造をもつと思われるが、枠板の遺存状態が悪く不詳の点が多い。井戸上面から多量のこぶし大の礫が検出されたが、これは廃絶時に礫を投棄したものと思われる。出土遺物はきわめて少なく、黒色土器椀の破片を１点確認したのみであった。

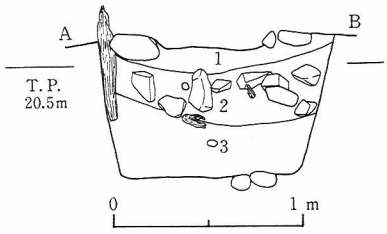




1．黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土に地山がブロック状に混入
2．黒色(10Y R2/1)粘土質シルト
3．黒褐色(2.5Y3/1)粘土
ア．黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
イ．オリーブ黒色粘土質シルト

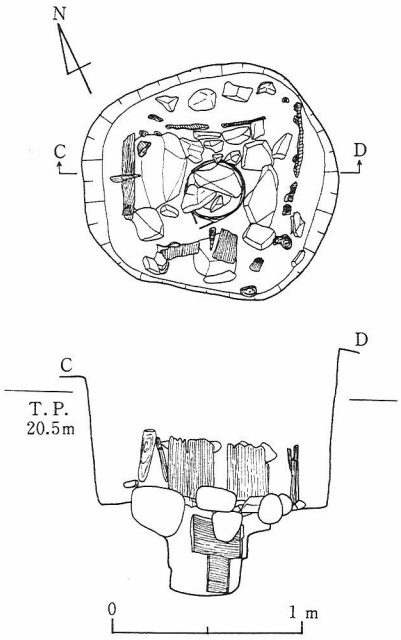
第８図　ＳＥ２実測図



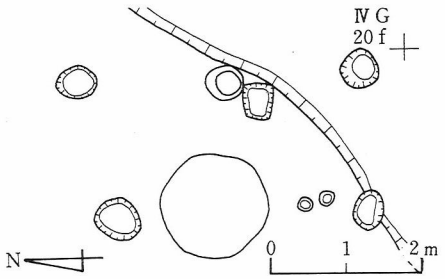


1．黒褐色(2.5Y3/2)細砂
2．暗緑灰色(7.5G Y3/1)粘土
3．暗オリーブ灰色　砂混粘土

第９図　ＳＥ３上部構造実測図



第10図　ＳＥ３下部構造実測図



第11図　ＳＥ３の覆屋実測図

ＳＥ３周辺の柱穴群（ⅣＧ20ｆ区）

ＳＥ３の周辺で合計６個のピットを検出した。検出面は第７層上面で、自然流路による削平をうけ、ピットの深さは５cm程度しか遺存していない。径は40cmを測る。柱穴群が周囲に見られないことから、ＳＥ３の覆屋と考えられる。規模は東西１間（柱間2m）、南北２間(同)で、柱穴群内の遺物は皆無であった。

5）古墳時代の遺構

調査区北部を中心に、古墳時代の集落の一部を検出した。遺構は、掘立柱建物５棟、土坑３基、溝10条、自然流路１本、柱穴群１ヶ所を数える。検出面は第６層ないし第７層上面であった。以下、遺構毎に略説したい。

自然流路

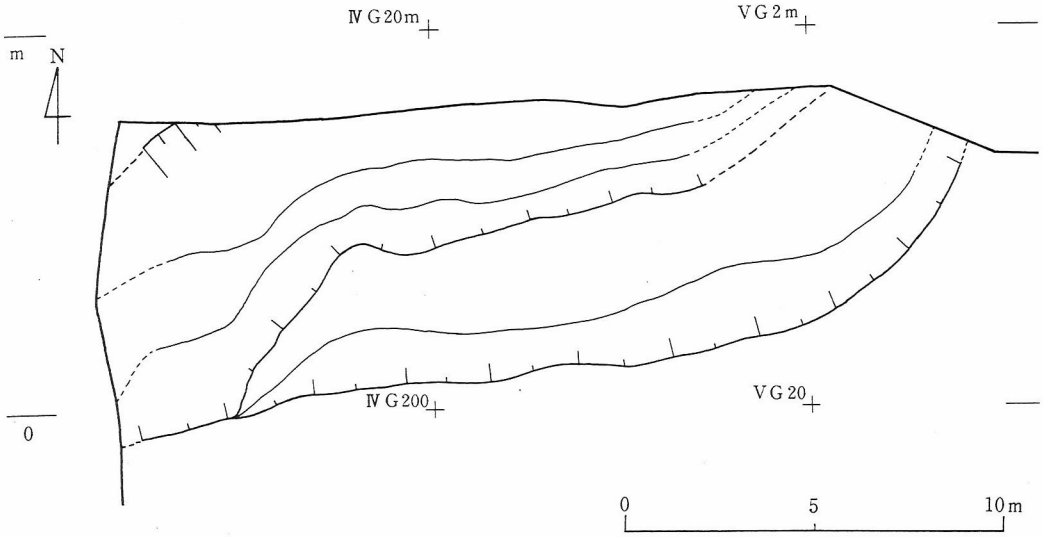
ＮＲ２（ⅣＧ20n～０、ＶＧ４n～０区）

調査地最南端を北東から南西へ流れる自然流路。幅７ｍ、最深部1.6mの規模をもつ。遺物のとり上げは１～２層を上層、３層を下層とした。流路内の堆積土は砂層を主体にしている。調査区南東部の２つの溜池はこの自然流路を塞ぎ止めて築造したものであろう。上層より須恵器壺、下層より須恵器杯蓋、身が出土したが、出土の密度は高いものではなかった。

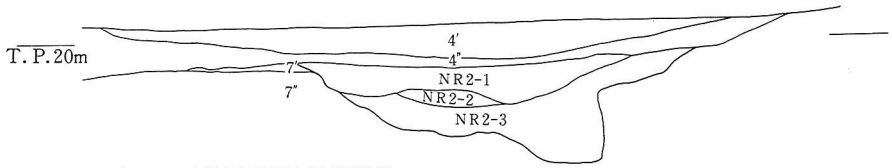
掘立柱建物

ＳＢ１（ⅣＦ20r～s、ＶＦ１r～s区）

調査地北部で検出。桁行３間(柱間1.7m)、梁間2間（柱間２ｍ）の東西棟掘立柱建物。主軸の方向は、N－73°－Wである。東側梁間の中間の柱穴はＳＥ２によって切られている。柱掘形



第12図　ＮＲ２実測図



4′　暗褐色(10YR3/3)粘質細砂
4″　灰色(7.5Y4/1)極細砂
　同色　シルト質粘土
　同色　細礫混粘土
　同色　粗　砂
NR2-1　灰色(7-5Y5/1)粗砂
　同色　細砂
　同色　粘土
　同色　細所
NR2-2　灰白色(5Y7/1)中砂
NR2-3　暗青灰色(10BG3/1)細砂

7′　灰色(N4)砂混粘土
7″　オリーブ灰色(5GY5/1)細礫～中砂

0　2　4 m

第13図　ＮＲ２断面図

は一辺60cmの隅丸方形または円形をなし、柱痕跡の径は30～40cmと大きく、今回検出した５棟の掘立柱建物のうち、もっとも規模の大きいものである。集落の中心的な家屋であろう。かなりの削平をうけながらも柱の根入は30cmの深さに達していた。

ＳＢ２（ⅣＧ20a～ⅤＧ1a区）

ＳＢ１よりＳＤ67の対岸、約８ｍ隔てた地点に位置する。桁行３間（柱間1.3ｍ）、梁間３間（柱間1.3ｍ）の正方形をなす掘立柱建物。西側の柱穴列のうち１個は、平安時代以降の落ちこみにより失われていた。方位は、Ｎ－3°－Ｅであった。柱掘形は不整形な円形で径80cm、柱痕跡は径30～40cmを測る。柱間が短く、柱掘形が巨大であることから、倉庫的建物と推定されよう。柱穴の１つ、ＳＤ98は柱痕跡の周りに３個の花崗岩質の根回り石を配していた。柱の根入は30cm。ＳＰ45、47は根石が残存していた。

ＳＢ３（ⅤＧ３～４Ｃ区）

調査地中央北側、ＳＢ２より南東12ｍに位置。桁行３間以上(柱間1.5ｍ)、梁間２間(柱間1.8ｍ）の南北棟掘立柱建物。桁行側、南端の柱穴は自然流路により欠失。ＳＢ１、２と比べて、柱穴の規模は小さく、柱掘形は径40cmの円形ないし楕円形を呈し、柱痕跡は径25cmを測る。方位はほぼ磁北を示す。付属的な家屋と考えられる。根入は35cm。

ＳＢ４（ⅤＦ４r～５r、４s～５s区）

調査地北東部、ＳＢ１より東へ16ｍに位置。桁行３間(柱間1.2ｍ)、梁間２間(柱間1.6ｍ)の東西棟掘立柱建物。主軸の方位はＮ－80°－Ｗである。柱掘形は径50～60cmの円形で、柱痕跡は径20～30cmをなす。柱根入は20cm。

ＳＢ５（ⅤＦ４ｓ区）

ＳＢ４のすぐ南に接している。柱穴の切り合い関係からＳＢ４より新しい建物である。桁行２間（柱間２ｍ)、梁間２間（柱間1.7ｍ）の東西棟掘立柱建物。方位はＮ－80°－Ｗで、ＳＢ４と同じ。ＳＢ４の建て替えに伴う家屋であろう。柱掘形は径50cmの円形で、柱痕跡は径20cmであった。柱根入は23cm。

各建物の柱穴より須恵器、土師器の破片を確認した。遺物はほぼ６世紀前半におさまるとこ

ろから、これら建物群が同時に存在した可能性は大きいと思われる。

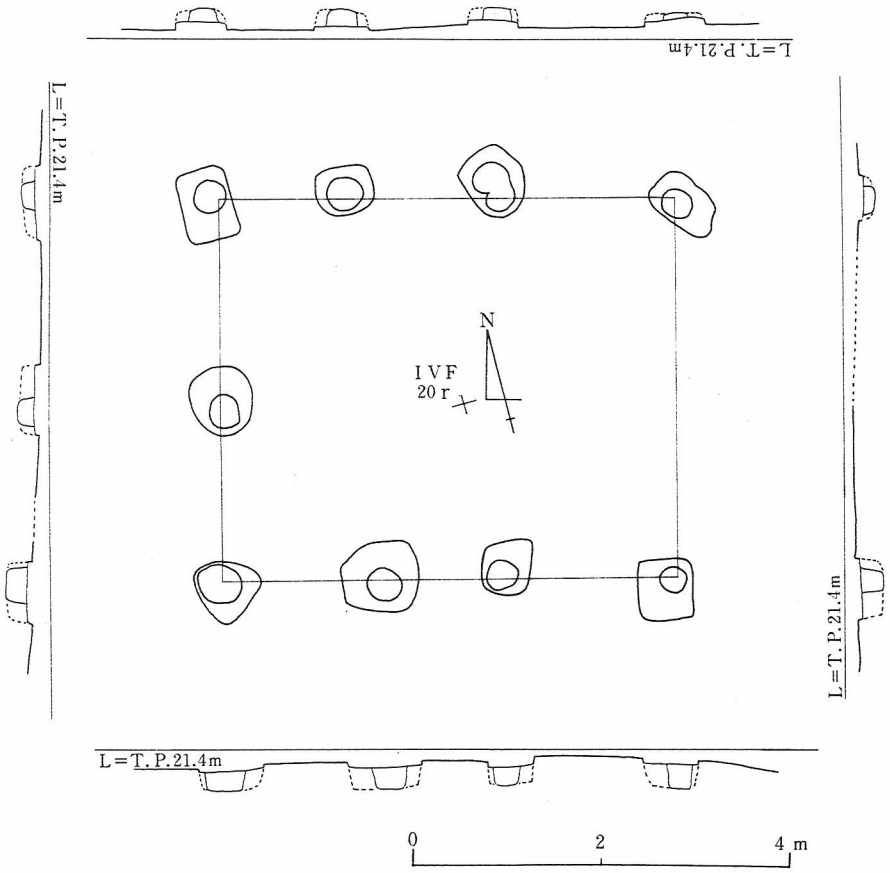
土坑

ＳＫ25（ＶＦ５s～t区）

調査区北東部で検出。遺構の東側は調査区外へ延びているため全容は不明。東西1.6m以上、南北1.9mの円形の土坑である。遺構北端では２層に分かれており、その凹みに多数の遺物が出土している。遺物は、土師器甕、壺、高杯、羽釜、須恵器無蓋高杯、壺、平瓶、韓式系土器の甕を検出した。時期的には、５世紀後半から６世紀後半を含みこむもので、他の集落遺構とは趣を異にしている。深さ25cm。

ＳＫ26（ＶＧ２g区）

調査区中央で検出。東西0.5m、南北1.4mの帆立貝形の土坑。深さ20cmを測る。遺構の北側で土師器甕が１個体分出土し、その口縁部を打ち欠いているところから、甕棺墓の可能性がある。第19図は、ＳＫ26より出土した土師器羽釜である。現存口径42.4cm、器高63.8cmを測る。体部外面から底部にかけてハケメ調整し、内面にはユビオサエが残る。



第14図　ＳＢ１実測図

柱穴群

調査区北西部（ⅣＦ18ライン以西）において密集した柱穴群を検出。何棟かの建て替えによるものと思われ、東西１間以上、南北３間の建物を想定しうるが、現状では詳かにしない。柱穴は径50cm、深さ20cmのものが多い。

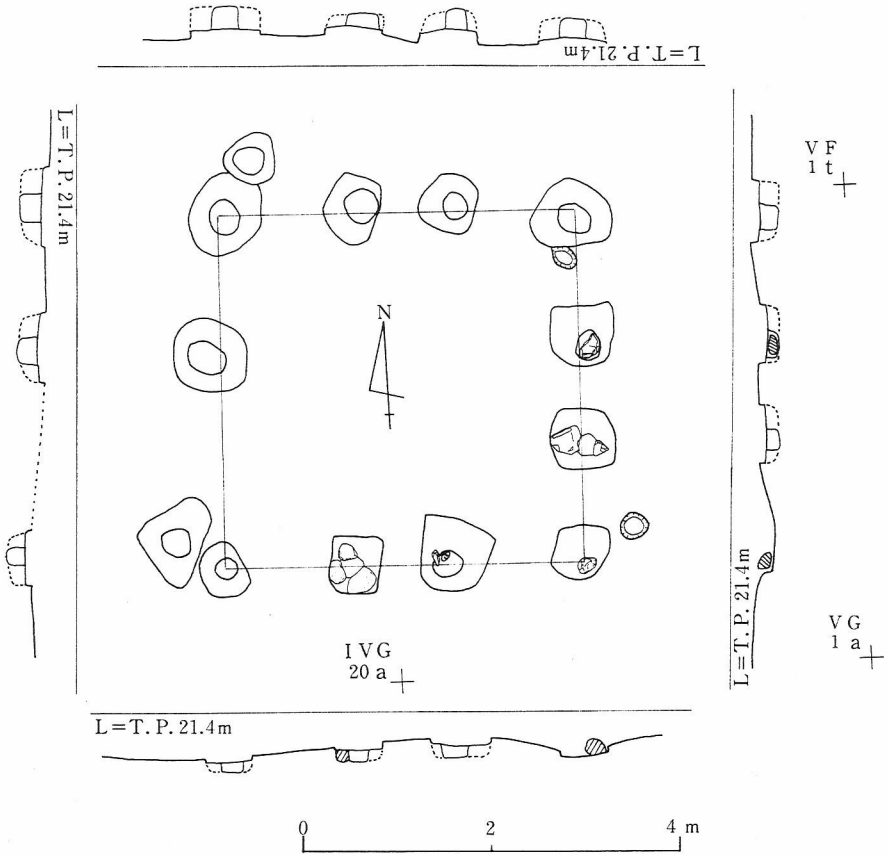
溝

ＳＤ65

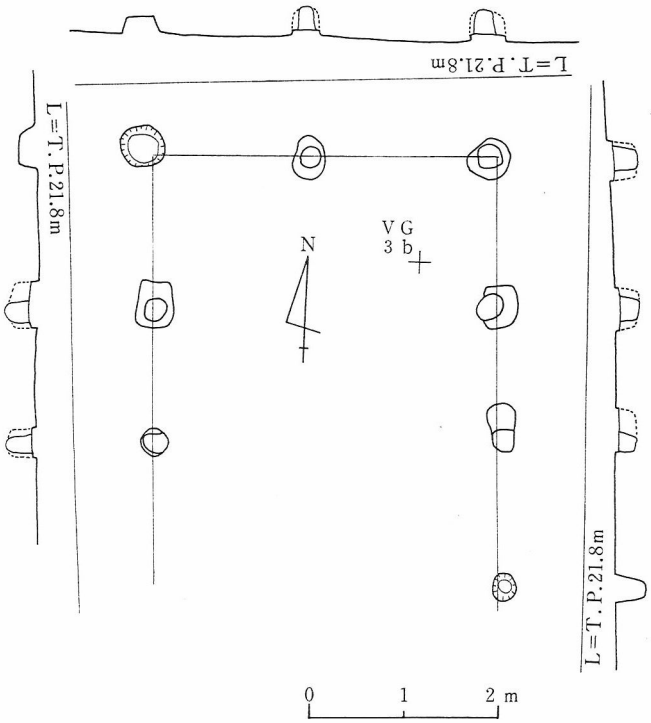
調査地北端より南へ流れる溝。幅0.3～2.0m、深さ25cmを測る。溝の南端はＳＤ67と交わって広がりつつ終わっている。北端がきわめて狭くなっているのは、ＳＤ65の起点を示すものであり、そのことから、ＳＢ１の西辺を区画する機能をもっていたと考えられる。溝内より、須恵器杯蓋、身、高杯、瑳、平瓶、土師器甕、杯、鉢、羽釜が多量に出土した。

ＳＤ67

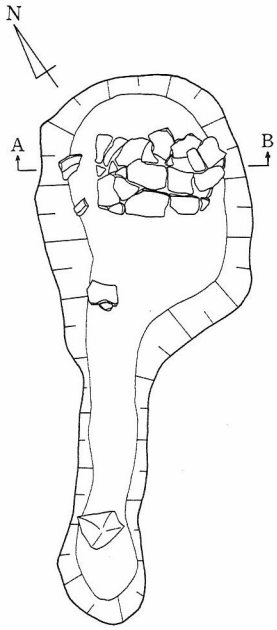
調査区北東から西へ流れる溝。幅1.3m、深さ30cmを測る。精査したが、ＳＫ25との先後関係は不明である。ＳＢ１、４、５の南辺を区画する溝であろう。

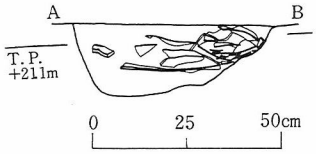


第15図　ＳＢ２実測図

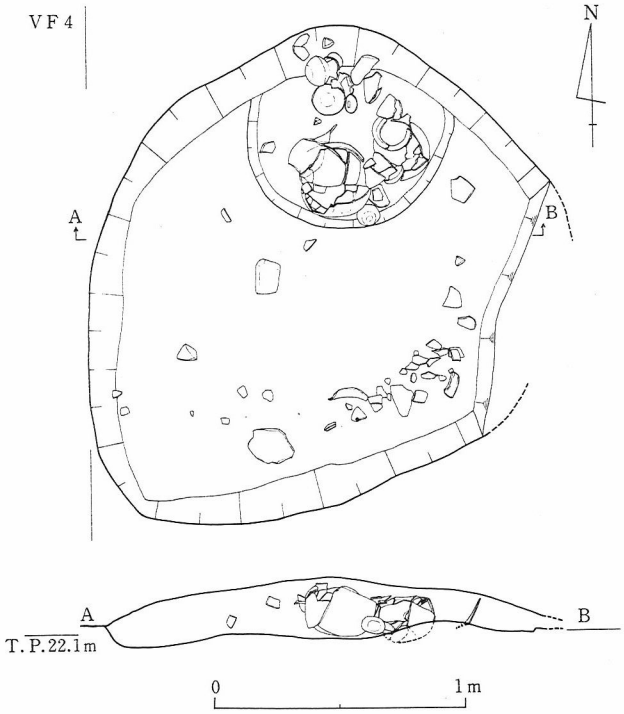


第16図　ＳＢ３実測図

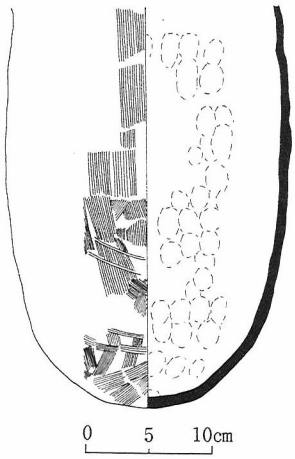




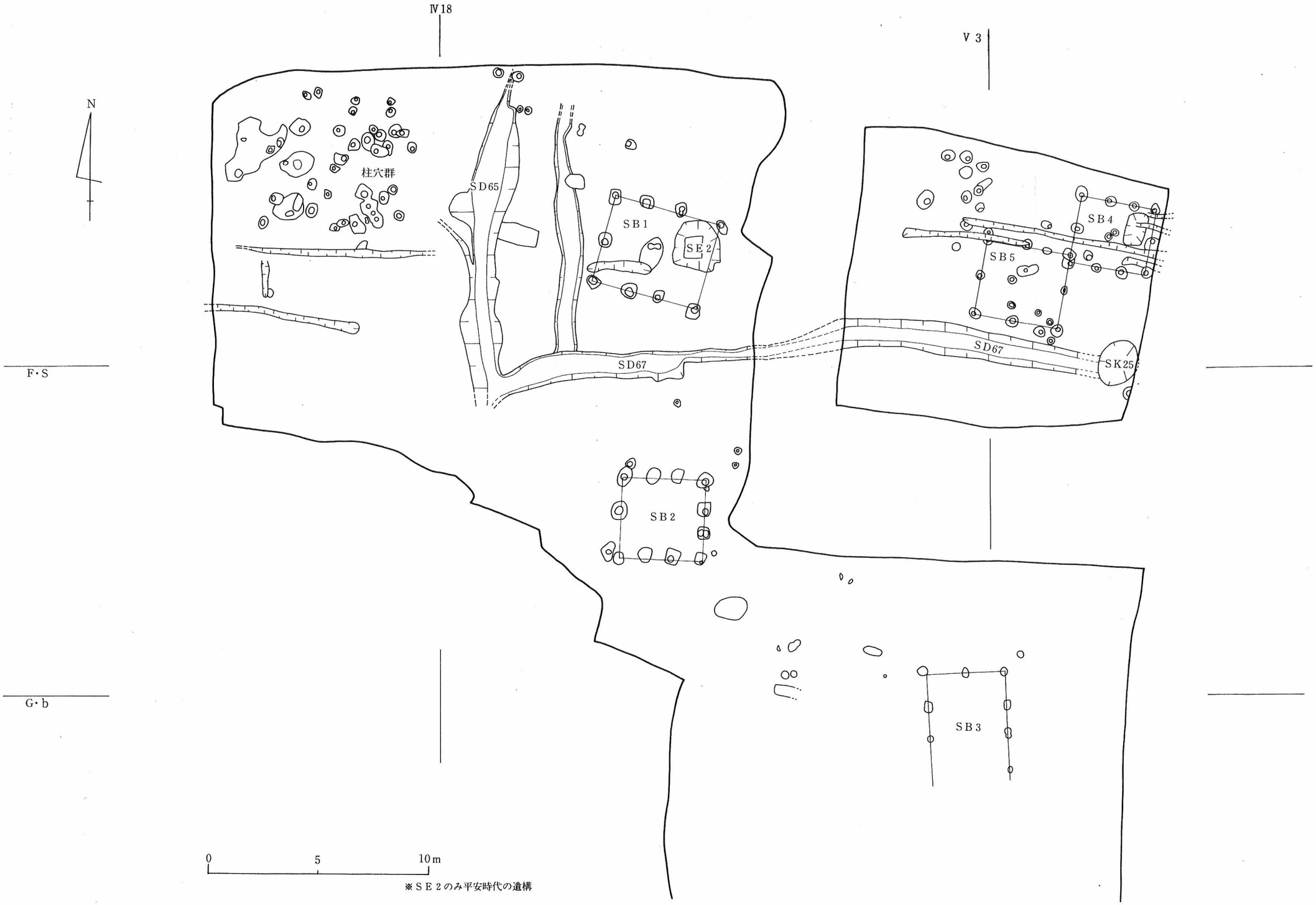
第18図
ＳＫ26土器出土状況実測図



第17図　ＳＫ25内土器出土状況実測図



第19図　ＳＫ26内出土羽釜実測図



第20図　古墳時代遺構配置図

小結――西の口遺跡における古墳時代の集落について

ここでは本遺跡での古墳時代遺構をめぐる若干の問題点を挙げ、本節の小結としておきたい。

(1) 古墳時代の遺構の範囲

昭和60年11月～12月に追加して調査を実施した地区（ＶＦ3r･s～4r･s）において、調査地最北端部で地山面を切りこんだ自然の落ちこみを検出している。これは北方へ延びているものと思われ、掘立柱建物の柱穴は、落ちこみを避けて掘られていた。また、遺構群の北方には箕後川が流れ、地形的に、今回の調査地から北へ傾斜することが予想されることからすれば、当該期の遺構分布の北限は自明の理として限られよう。南限としては、ＳＫ26を除いて、ほぼ後述のＳＤ78上層（ＮＲ１）までに限定されている。従って古墳時代の集落は箕後川の河岸段丘上最高位にあり安定した地盤に立地しているといえるだろう。その範囲は南北約50ｍの幅で東西方向に広がりをもち、集落としてはコンパクトにまとまった景観が想像される。

(2) 掘立柱建物について

今回の調査により、ＳＤ65とＳＤ67によって区画された中にＳＢ１、４、５が、区画外にＳＢ２、ＳＢ３が配置されているのを確認した。周辺部の調査の進展により、集落の具体相が明らかになると思われるので、現状での考察はあくまで予測にしかすぎないが、柱穴の規模からいえば、ＳＢ１が在地の豪族の主家であり、ＳＢ２が倉、ＳＢ４、ＳＢ５が住居、ＳＢ３が副次的な建物になると思われる。

ＳＤ65とＳＤ67の先後関係は、遺構面精査の段階では詳かにしなかったが、後述するように出土した須恵器杯の年代観からすれば、ＳＤ65がＳＤ67より先行するようである。

さて、市内における掘立柱建物については、中西克宏氏により資料の集成[(1)]がなされている。それによると、現在までに、芝ヶ丘遺跡、神並遺跡、鬼虎川遺跡、鬼塚遺跡、西岩田遺跡及び西の口遺跡で、合計６遺跡25棟が確認されている。時期的には、４世紀から６世紀後半に及んでいるが、５世紀後半から６世紀前半までの時期に築かれたものが多いようである。規模では２×２(間)、または２×３(間)のものが多い。従って本遺跡における掘立柱建物は、市内出土例からすれば、最大公約数的だといえそうである。

次に、建物区画施設として今回、柵列を確認できなかった。このことが、本遺跡の建物区画の特徴なのか、あるいは今回のみがそうなのか、周辺の調査例の増加を俟って考えねばならないが、ここで問題提起をしておく。時期的にも、小笠原好彦氏が明らかにされたように[(2)]、濠(溝)で囲まれた古代豪族の居宅の出土例は７世紀以降に下るようであり、今回のＳＤ65やＳＤ67のように後世の削平を考慮しても深さ30cmの溝を濠と呼べるかどうか、今後の課題としたい。

注(1) 中西克宏「東大阪市域における古墳時代の掘立柱建物」(『協会ニュース』１－３、1986年)

(2) 小笠原好彦「古代豪族の居宅の類型」(『帝塚山考古学』４、1984年)

6）弥生時代の遺構

ここで記述する弥生時代の遺構とは、弥生時代末から庄内期に属する遺構である。この時期の遺構は、古墳時代の遺構及び平安時代以降の田畑の整地作業によってかなり削平されており溝、井戸といった比較的深い掘削を伴う遺構のみが検出されている。

今回の調査で検出した弥生時代の遺構は、溝６条、井戸状遺構２ヵ所、土坑１ヵ所、ピット３ヵ所である。以下順に説明を加えていくことにする。

ＳＤ78（ＮＲ１）

第３層（オリーブ褐色土）下部、第６層上面で検出した。検出当初は、両肩の輪郭が不明瞭であり、内部には細砂～粗砂が認められるところから比較的新しい時期の自然流路と考えていた。その後、流路内の掘り上げをおこなった結果、下層より弥生時代後期の土器が多量に出土したことから、弥生時代に機能していた自然流路が古墳時代以降に埋没し、その後も凹みとして残っていたものと思われる。

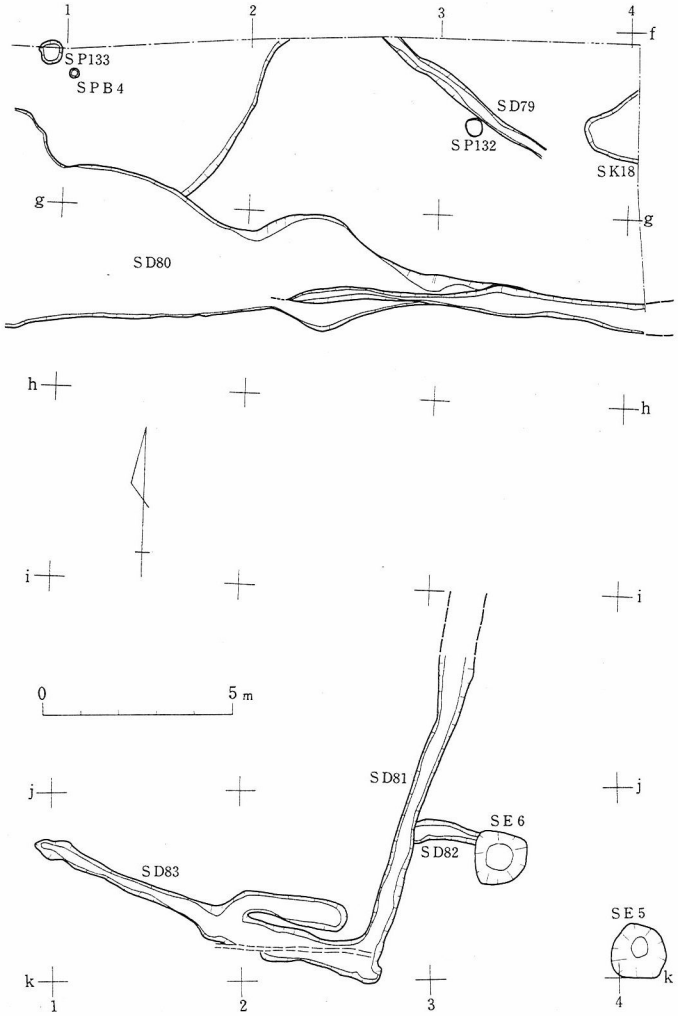
ＳＤ78は、ＶＧ４Ｃ区からＶＧ１ｅ区まで延長で約20mを検出した。東北から西方へ蛇行しながら、西側で浅く大きく広がっている。トレンチ東端では比較的明瞭に溝の肩を検出することができるが、西端では、明らかにすることはできない。

トレンチ東端での規模は、幅3.8m、深さ0.5mを測る。但し、ベース面の第６層は、南から北へ低くなっており、南肩での深さは約 0.9mになる。ＳＤ78の上層の堆積土をトレンチ東壁で観察すると

１層　耕土

２層　床土

３層　オリーブ褐色シルト質粗～細砂



第21図　弥生時代遺構配置図

となる。層序の項でも記したように第３層はほぼ中世期以降の堆積層と考えられるところから、ＳＤ78は少なくともこの時期には完全に埋没していたと思われる。

次に流路内の堆積土を観察すると

Ａ層　オリーブ褐色粗砂～極細砂

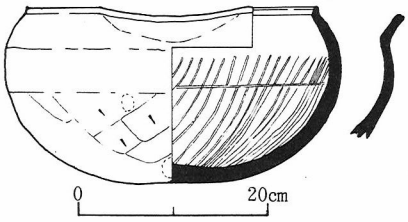
Ｂ層　黒色細砂

Ｃ層　黒色シルト質細砂

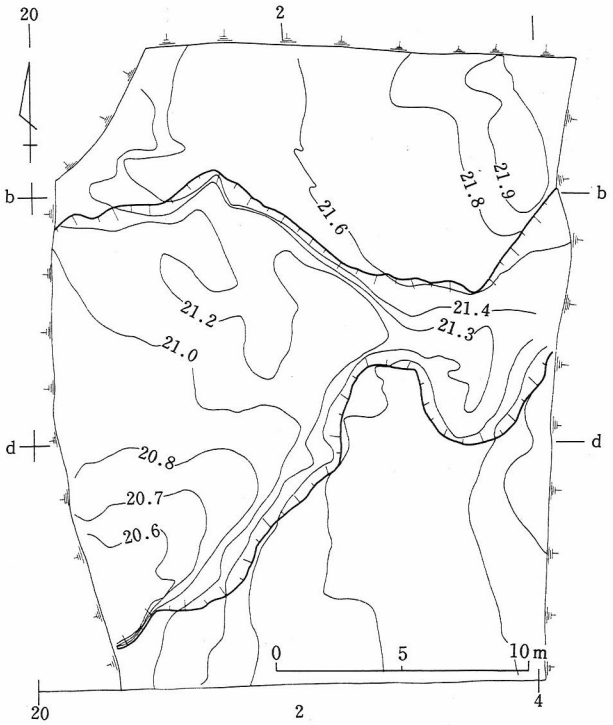
Ｄ層　黒色粘質シルト

となるが、大きくはＡ層とＢ層以下の２層に分層できる。また、Ａ層とＢ層の間にはＳＤ78北端で5′層黒褐色細砂(7.5ＹＲ$^{2.5}/_{2}$)が認められる。第５層は、基本層序にもあるとおり、古墳時代に比定される層であり、古墳時代中頃にはＳＤ78の下層はほとんど埋没し、西側の深いところは中世頃まで浅い凹みとして残っていたことが想像される。この状態は、第22図に示したとおりである。出土遺物は、Ｂ層以下から弥生時代後期後半の土器が出土しているが、土器の大半は溝の肩から出土し、流路底にはほとんど遺物は認められなかった。Ａ層の上層から古墳時代の須恵器片、奈良時代の片口鉢(第24図)などが少量出土している。

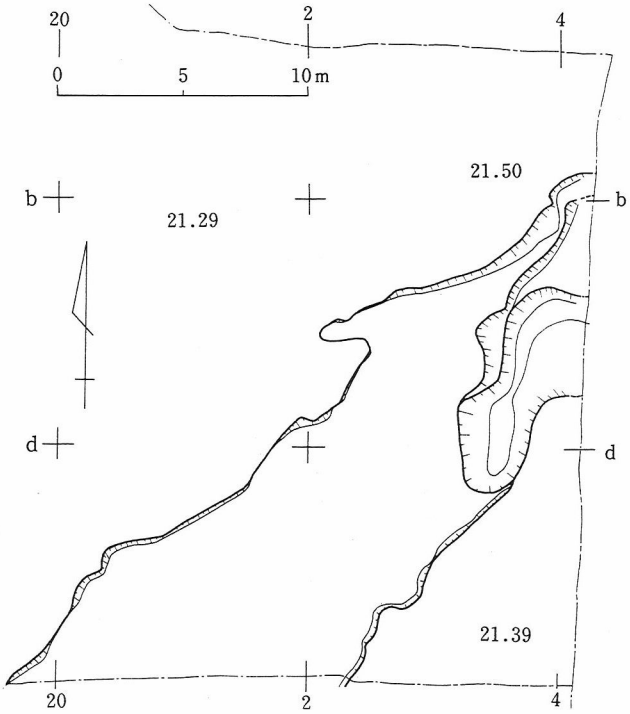
これらのことから、ＳＤ78は弥生



第24図　ＮＲ1上層出土片口鉢実測図



第22図　ＳＤ78（ＮＲ１）平面図（上層）



第23図　ＳＤ78（ＮＲ１）平面図（下層）

時代後期後半に掘削された溝の一部を検出したと考えられ、溝は東側の調査範囲外へ広がると思われる。また弥生時代末の土器が溝肩に集中して認められ、一部は溝内に落ち込んだ状況を示しているところから、集落の中心も溝に囲まれる東側に存在すると判断される。

出土遺物は、溝内及び肩の部分から弥生時代末の土器が多量に出土している。庄内甕は２点と少なく他の溝とは違っている。弥生時代末の土器の中でも高杯の出土量が多く、壺の出土量が少ないのが特徴である。

ＳＤ79～ＳＤ83

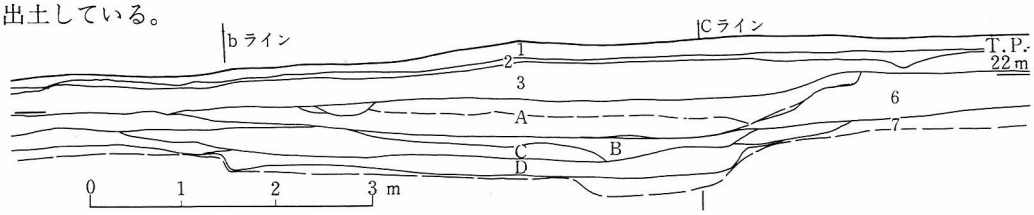
ＳＤ79からＳＤ83までの５本の溝は、調査地の東南端で集中して検出されていた。この地域は、調査地の中で最も高い位置にあり、中世以降の整地によってかなり削平されていることが予想された。結果は当初の予想どおり、弥生時代の包含層は中世期の整地で削平されており、溝、井戸など比較的深い遺構のみが検出された。

ＳＤ79は、ＶＧ４ｇ地区で延長約5.0ｍのみ検出された。幅0.4ｍ、深さ0.2～0.3ｍで東北から北西に向かって流れる。東南端は、後世の削平によって失なわれたものと考えられる。溝内には何らの遺物も認められなかった。

ＳＤ80は、１ｈ地区～４ｈ地区で検出された。東から西へまっすぐにのびている。東端では幅0.7ｍ、深さ0.5ｍの規模を測り、西にいくにしたがって徐々に幅が広がっている。トレンチ東端から西へ９ｍ付近（ＶＧ３ｈ区）で溝は深さ0.15～0.2ｍ程度に浅くなるとともに幅約２ｍ以上と急に広くなり、さらに西では広く浅くなり両肩も不明瞭になる。溝内より弥生時代後期末の甕、高杯、床内甕などが出土している。

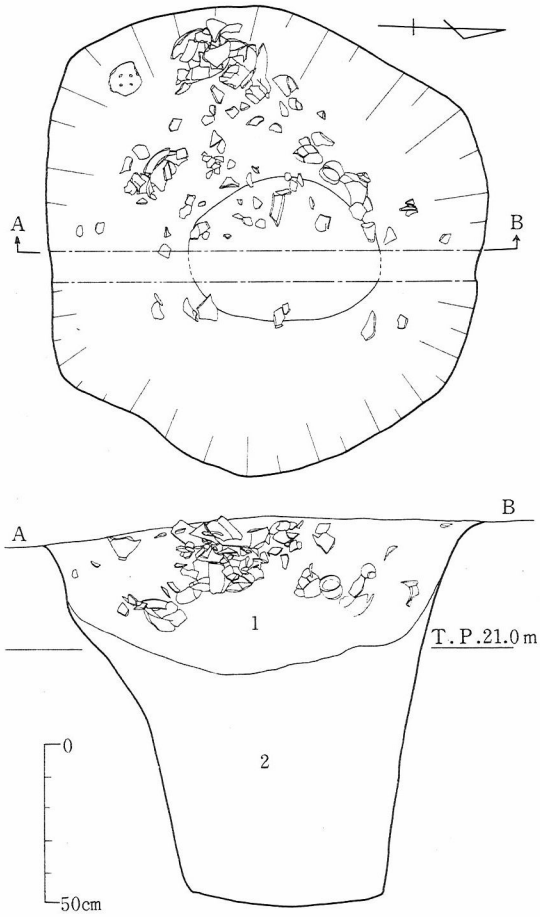
ＳＤ81～83は、検出した順に番号を付したが、もとは同一の遺構と考えられる。ＳＤ81は、北端を後世の削平によって失なわれているが、ほぼ幅0.8ｍ、深さ0.3ｍ～0.5ｍの規模で北から南へ続き３ｋ区で直角に西へ方向を変え、同様の規模で約10ｍ検出できた。西端は、後世の削平によって失なわれているのか、ここで終るものか判断できない。西端では幅0.5ｍ、深さ0.15cmの規模になる。ＳＤ82は、東端でＳＥ６に西端をＳＤ81に切られている。遺構の切り合い関係からもっとも古く掘削された遺構と考えられるが、出土遺物からはほとんど時間差はない。

出土遺物は、ＳＤ81と83から多く認められ、弥生時代後期末の短頸壺、甕、高杯と庄内甕が出土している。

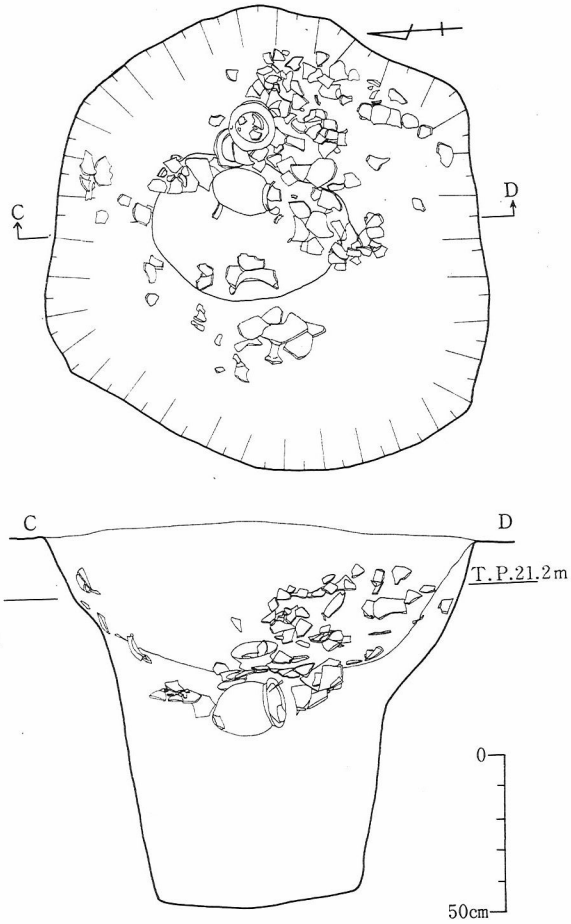


1．耕　土　6．黒褐色(10ＹＲ3/3.5)粘質シルト　Ａ．オリーブ褐色粗砂～極細砂(2.5Ｙ4.5/3)　Ｄ．黒色粘質シルト(10ＹＲ1.9/1)
2．床　土　7.地山。黒褐色(10ＹＲ2/2)シルト　Ｂ．黒色細砂(10ＹＲ2/1)
3．オリーブ褐色(2.5Ｙ4/3.5)シルト質粗～細砂　Ｃ．黒色シルト質細砂(7.5ＹＲ)

第25図　ＮＲ１（ＳＤ78）断面図



第26図　ＳＥ５土器出土状況（上層）



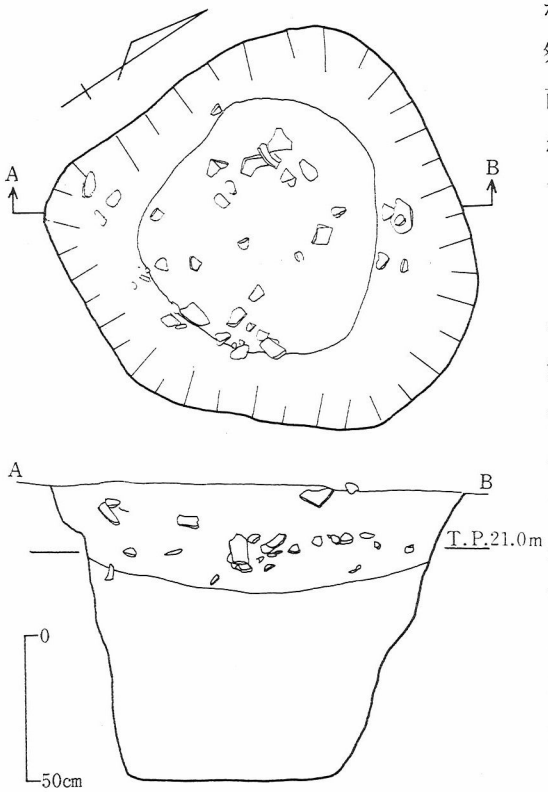
第27図　ＳＥ５土器出土状況（下層）

ＳＥ５

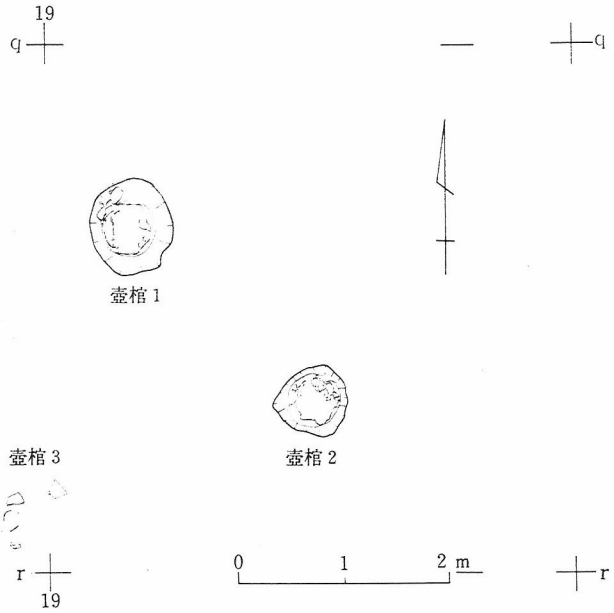
ＳＥ５は、トレンチ南東端（ＶＧ５地区）で検出した。上部は、削平されていると思われる。井戸は南北1.4m、東西1.5m、深さ1.25mを測り、隅丸方形状を呈する。素掘りで井桁、井筒等の痕跡は認められなかった。地表より約0.5m下位までゆるやかに斜めに掘り込み、それより以下はほぼ垂直に掘り込んでいる。底部は、ほぼ平担になっている。現在では、ほとんど湧水もなく、実際に井戸として機能していたものかどうか判断できない。

井戸内の堆積土は、大きく１層と２層に分けることができる。１層は、黒褐色（10ＹＲ2/2）粗砂混りシルトで多量の土器が出土している。２層は、オリーブ黒色（５Ｙ3/1）シルト質粘土層でほとんど遺物は認められない。１・２層の境界は、遺物の出土状況によって明瞭である。

上層では、井戸西側肩部に甕を中心として破壊された土器が認められた。上層の土器を取り除くと井戸東側肩部にかたまって甕の完形品を中心とした下層の土器を検出した。土器は井戸の東肩から斜めに落ち込んだ状況を呈しており、底に並べられたものではない。これらの状況



第28図　ＳＥ６土器出土状況実測図



第29図　壺棺位置図

から土器は、井戸が半分近く埋まった段階で祭祀などの行事がおこなわれ、その後東側と西側から土器を内部に落し込んだものと思われる。このことは、完形の土器が多く含まれていることからもうかがわれる。

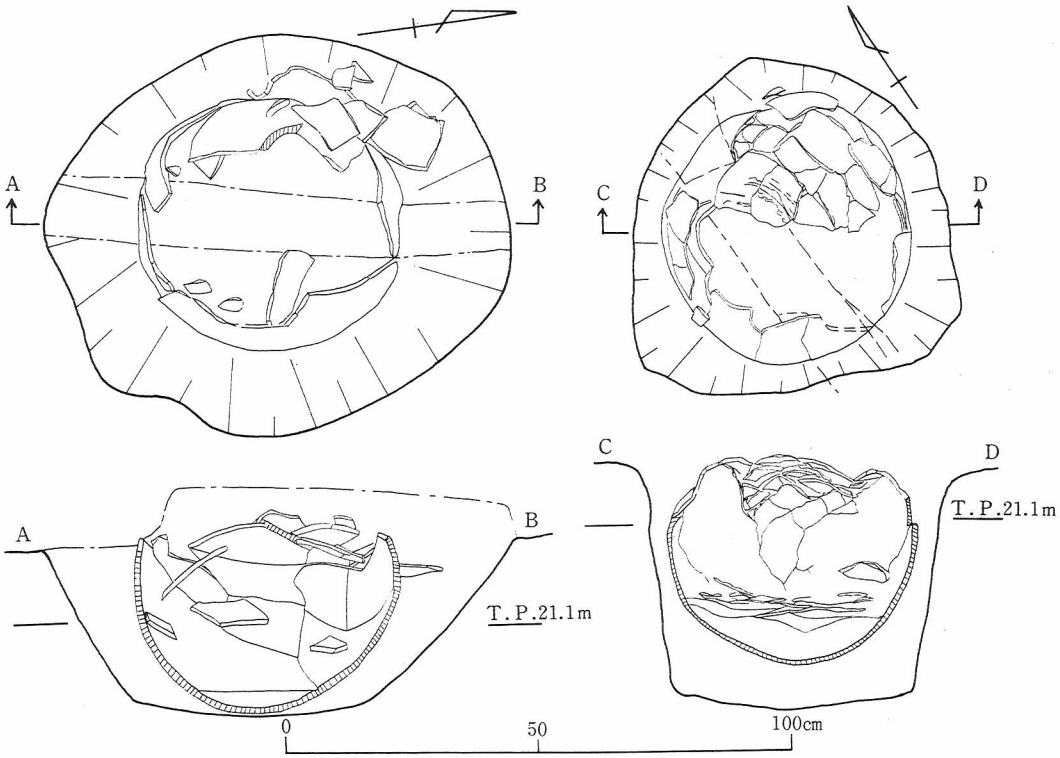
ＳＥ６

ＳＥ６は、ＳＥ５の北西約３ｍ（ＶＧ４ｋ区）の位置で検出した。東西1.38ｍ、南北1.35ｍ深さ1.1ｍを測る。隅丸方形状を呈している。井戸は、素掘りでＳＥ５と同様井桁、井筒等の痕跡は認められなかった。内部は、若干斜めに掘り下げており、底は平坦になっている。堆積土は、１層（黒褐色10ＹＲ2/2）粗砂～中砂混シルト）と２層（黒色7.5Ｙ2/1）シルト質粘土に分けることができ、１層内より弥生土器壺・甕・高杯などが出土しているが、いずれも破片で完形になるものはない。

壺棺１

壺棺１は、今回の調査地区のもっとも北側の地点１ＶＦ20ｒ区で検出された。南北0.9ｍ、東西0.78ｍ、深さ0.45ｍの皿状に凹む墓坑底部を上にして、ほぼ正立の状態に裾えられていた。壺棺の蓋及び上半部は、後世の削平によって失なわれているが、完全な形に復元することができた。壺の頸部から上の口縁部を打ち欠いており、これは埋葬時に口縁部を大きくするため故意に打ち欠いたと思われる。また頸部付近に鉢形土器の破片を検出しているので、これが蓋になると考えられる。内部からは何らの遺物も認められなかった。

片口鉢（第32図－４）・口縁部の約1/5が残るのみで底部は欠損している。すり鉢状の体部にゆるやかに外反する口縁部がつき、口縁端部は角張って終る。口縁部に幅4.0cmの片口が付く。壺棺周辺には、これ以外の土器は出



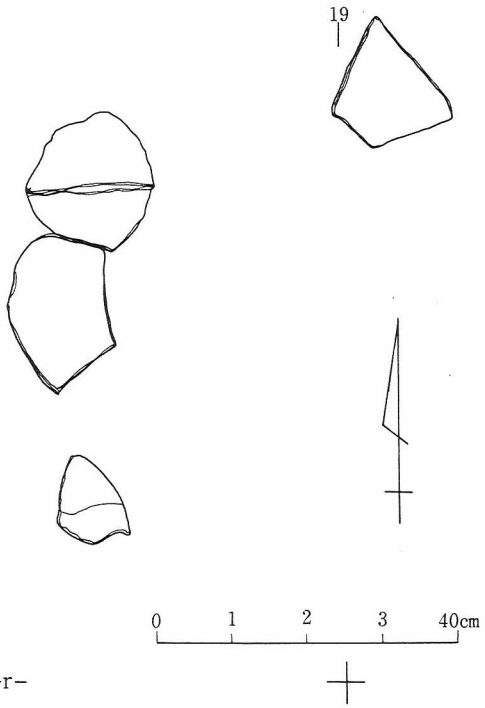
第30図　壺棺１・２実測図

土していないので、鉢を蓋に転用したものと考えられる。

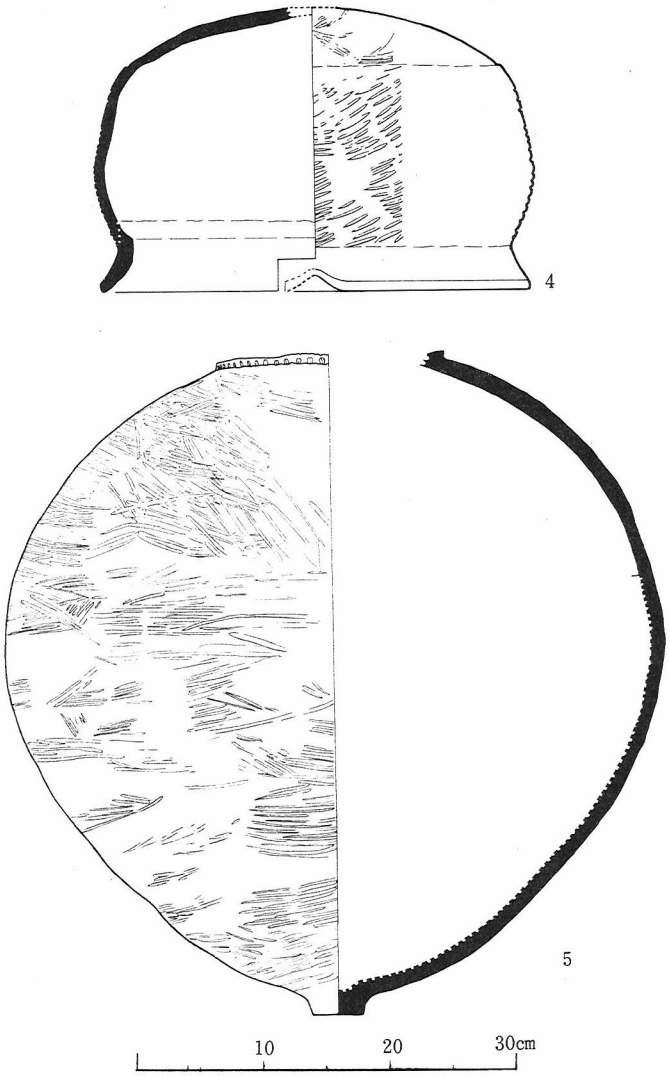
壺　（第32図－５）　口縁部を欠損している以外は、ほぼ完全な形をとどめる。残存の器高52.2cm、最大復径52.0cm、底径4.2cmを測る。最大復径が体部中位にある球形の体部にわずかに突出する小さな平底の底部がつく。頸部に刻目を施した突帯を１条めぐらす。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げている。弥生時代末から庄内期の前半に属するものと考えられる。

壺棺２

壺棺２は、壺棺１の南東約２ｍの地点（Ⅳ F 20ｒ区）で検出した。南北0.67ｍ、東西0.64ｍ、深さ 0.5ｍの隅丸方形状の墓坑内に底部より約10ｍ浮いた状態で、壺棺１と同様に頸部を上



第31図　壺棺３実測図



第32図　壺棺１実測図

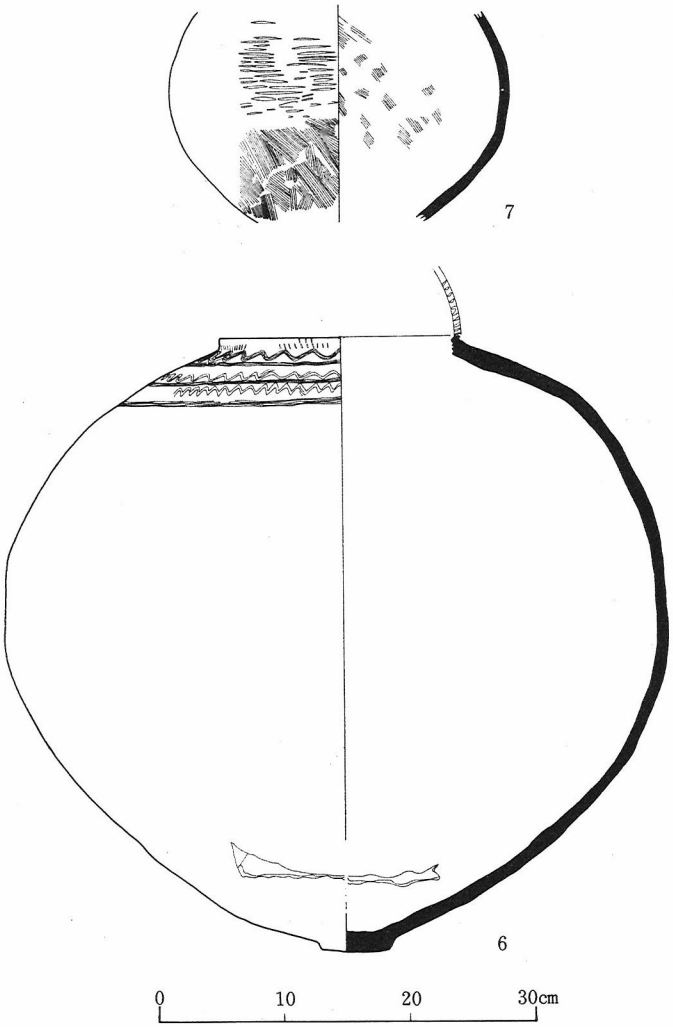
に向けて正立の状況に裾えられていた。墓坑は、ほぼ垂直に掘り込んでいた。壺は、頸部から上の口縁部を故意に打ち欠いているが、周辺からは蓋として使用されたと思われる土器は検出できなかった。

壺（第33図－６）　口縁部を欠損している以外は完存。残存の器高45.2cm、復径52.3cm、底径５.１cmを測る。最大復径が体部中位にあり、わずかに扁平な器体に突出する小さな平底がつく。頸部に刻目を施す突帯が一条付き、体部下半には長さ15.6cmの横長の孔があけられている。体部外面の調整は、風化が激しく不明、内面はナデ調整により仕上げられている。壺棺１と同様、弥生時代末から庄内期の前半に属すると考えられる。

壺棺３

壺棺３は、壺形土器が散乱した状況で検出した。壺形土器の周辺の精査をおこなったが墓坑などの施設も認められず、壺も他の壺棺と比較して小型であるため、壺棺と断定することはできない。ただ他の壺棺と近接していること、単一で出土していることから可能性が高いと考え、ここで取り扱うことにした。壺は、体部の中央部分を残すのみで、口縁部、底部は欠損している。同一個体が、４片となり散乱しており、蓋になる土器は認められない。

壺（第33図－７）　口縁部、底部を欠損しており、全体像は不明。残存の器高17cm、復元の復径26.8cmを測る。体部外面は、上半部はヘラミガキ、下半部は比較的細い叩目（２条/cm）ののちヘラミガキ調整で仕上げている。内面は刷毛目で調整している。胎土に長石、石英などの石粒を含む他地域産の土器である。



第33図　壺棺２・３

ＳＫ18

トレンチ東端（ＶＧ４ｇ区）で検出した。東側部分が調査地外へ広がるため、全体の規模、性格などは不明である。今回の調査で検出した規模で、南北2.0ｍ、東西1.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。底面は平坦で、旧地形にそって東から西へゆるやかに傾斜している。内部より、少量の弥生時代末期の土器片が出土している。

その他の遺構

ピット状の遺構を３ヵ所検出している。ＳＰ133は、ＶＧ１ｇ区で検出した。径50cm、深さ30cmの規模を測る。ＳＰ132は、ＶＧ４ｇ区で検出した。

径40cm、深さ30cmの規模を測る。これらのピット状の遺構は、第６層（地山）上面で検出しているが、この遺構につながるピットもなく、単独で検出していることやピット内部より出土遺物がまったく認められないことなどから、弥生時代に属するものか全く不明である。

この他に今回の調査では確認できなかったが、縄文時代の遺構が今後検出される可能性がある。縄文土器は、ⅣＦ18ｆ区周辺で縄文時代晩期後半の土器が出土しており、ⅣＧ20ｈ区では後期後半の土器が出土している。特にⅣＦ18ｆ区で検出した土器は、古墳時代、弥生時代の遺構のベース面・第６層中より出土している。このことから、縄文時代の遺構が今回の調査地より西あるいは北側で検出される可能性がある。本遺跡の150ｍ北側には縄文時代晩期の馬場川遺跡という大遺跡もあり、今後周辺の遺跡の調査がすすめば、明らかになると考えられる。

Ⅳ．出土遺物

1）平安時代の土器

まず器形毎の分類概要を試みたい。

(1) 黒色土器

椀３点、鉢１点を数える。椀は田中琢氏分類[1]のＡ類のみで、見込みのヘラミガキ調整の有無により大別（A_1、A_2）され、A_1は体部外面の調整法によりA_1－ａ、A_1－ｂに分類できる。

(2) 土師器

杯は高台の有無により大別（Ａ、Ｂ）する。Ａは体部内面の暗文の有無によりA_1とA_2に分類できる。

椀は低い貼り付け高台をもち、口縁部内外面での強いヨコナデのため、口縁下端に鋭い稜線がつき、それ以下は未調整のまま残している。これは平城宮分類[2]のｅ手法にあたる。

羽釜は、半球状の体部に短く斜下方に鍔がつくもの（Ａ）と、長胴形の体部に鍔がつくもの（Ｂ）に分類される。Ａは、鍔の機能を重視すれば、「鍋」と称呼すべきかもしれない。

ＳＫ５出土土器

良好な一括の状況で出土した。とくに土師器羽釜の出土は顕著であった。

土師器　杯A_2(11)、椀(12)は、高台の有無の点を除外すれば、調整法では前述のｅ手法によっている。即ち口縁部内外面を強くヨコナデ調整する他は未調整で、体部外面には成形時のユビオサエ痕が顕著に認められる。

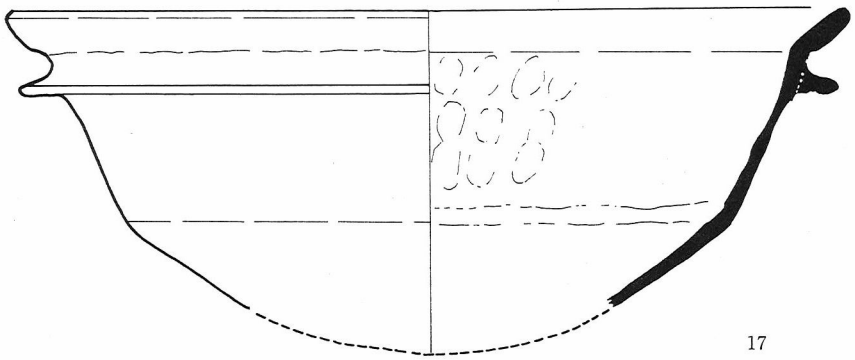
羽釜Ａ（17、18、19）は今まで市内で出土したことのない新資料である。器形の全容が把める17で言えば、丸底から外へ開き、体部下位で大きく屈曲し、外反しながら口縁部へ続いている。これは、土器の煮沸用具としての機能によるものか、または竈などとの接続形態を反映したものであろうか。ただ、17．18とも体部外面下半には煤状の付着は認められず、17には底部を打ち欠いたとも思われるので、羽釜棺として二次使用された可能性が考えられる。編年的には、菅原正明氏の型式分類[3]で言えば、河内Ａ型とＢ型との狭間、即ち、長胴形羽釜から半球形羽釜に移行する段階（体部下位に稜をもつのがその折衷形と考えられる）に位置付けられる。胎土は、石英、長石の他、角閃石、雲母を多量に含んでおり、いわゆる「生駒西麓産の土器」である。

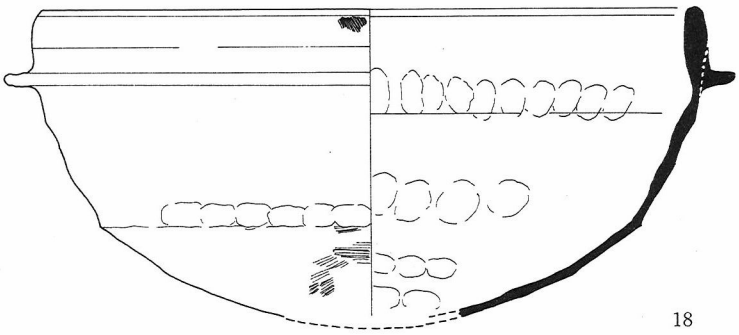
ＳＫ６出土土器

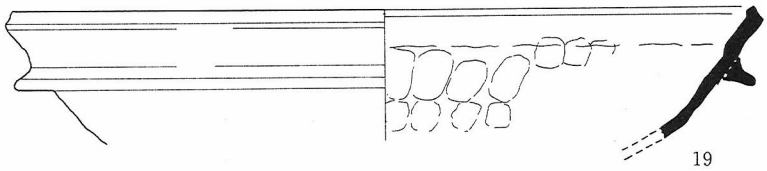
ＳＫ５に比べて出土量は少ない。図化したもの以外には、土師器、須恵器の細片を数えるのみである。

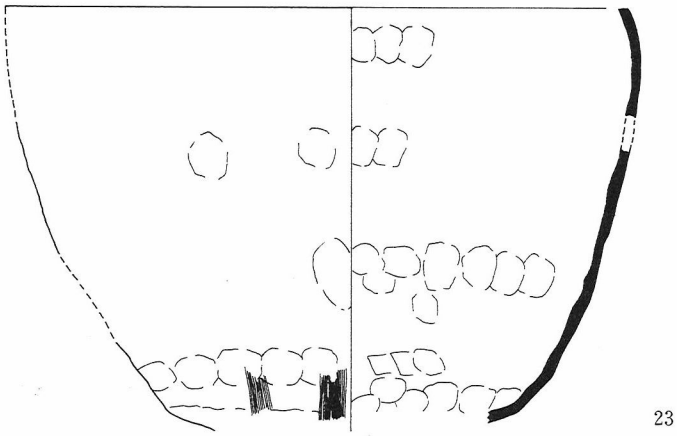
須恵器　24の立ち上がりは短く、大きく内傾する。ヘラケズリは底部のみに行われている。25は、底部のヘラ切り後未調整で、体部との境の狭い範囲にのみヘラケズリが施されている。それぞれ滋賀県美園遺跡杯身Ａ－Ⅲａ～Ⅲｂ、Ｂ－Ⅱａ[4]に比定される。

土師器　甕(27)は、球体に近い体部から「く」の字状に外反し、口縁端部でさらに外折して面









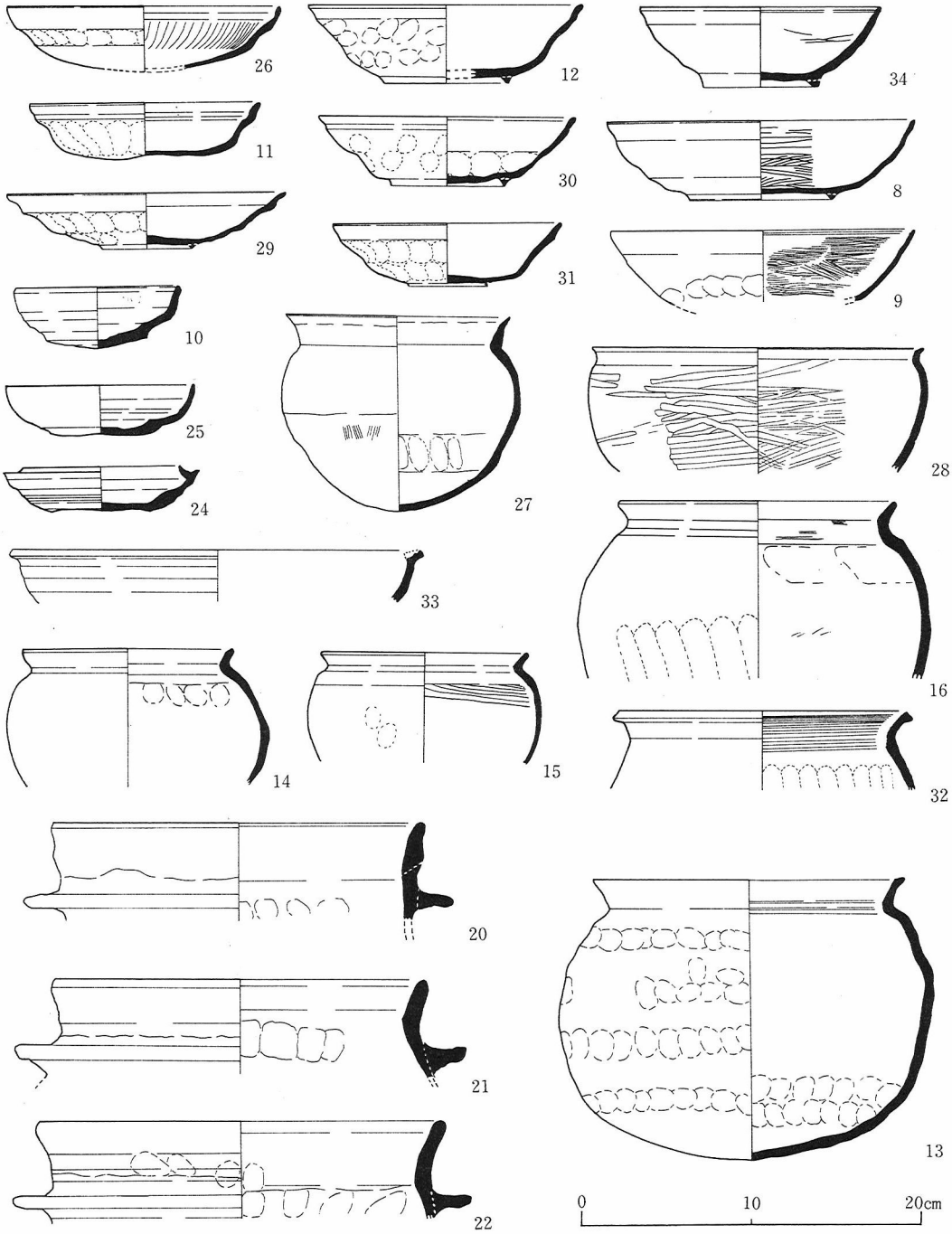
0 10 20cm

第34図　ＳＫ５出土土器実測図

をなしている。体部外面は摩耗が著しいが、ハケメ調整がわずかに認められる。

ＳＥ２出土土器

黒色土器　鉢(28)は、体部内外面とも緻密なヘラミガキ調整を行い、平滑に仕上げている。口



第35図　平安時代遺構出土土器実測図

縁部はごく短く外反し、端部でさらに外折して面をなす。丁寧なつくりである。

土師器　杯B(29)と椀12(30、31)はともにe手法。皿池遺跡[5]の杯、椀に相当するものか。

ＳＥ３出土土器

出土量は極微量で２点を数えるにすぎない。

黒色土器　椀(34)は、高台の断面が台形状になっている。体部内面のヘラミガキ調整はやや粗いものの器厚は厚く、10世紀代に属するものであろう。

須恵器　鉢(33)は、口縁部から体部内外面ともヨコナデ調整によっており、ヘラケズリのあとは認められない。京都府篠古窯跡群の前川２・３号窯[6]に最も近似するタイプである。

注(1)　田中琢「畿内」(『日本の考古学Ⅵ』所収　1967年)

(2)　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976年

(3)　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』所収　1983年)

(4)　滋賀県教育委員会他『美園遺跡発掘調査報告』1975年

(5)　東大阪市遺跡保護調査会『瓜生堂土層遺跡・皿池遺跡』1979年

(6)　石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第７号、1983年)

２）古墳時代の土器

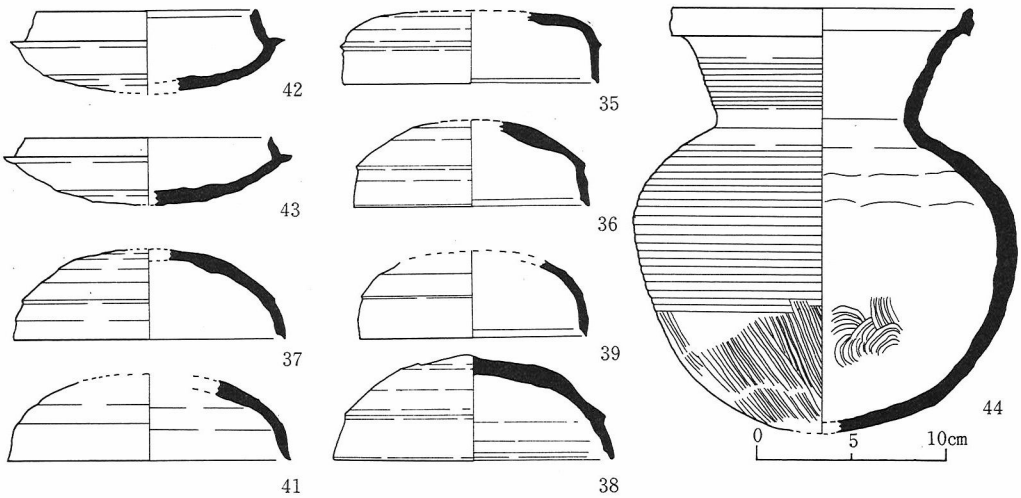
本節では、古墳時代遺構及び第４層・第５層出土須恵器、土師器他を考察の対象とし、製塩土器は次節で取り扱うことにする（ただし、第４層内には、一部奈良～平安時代の土器が混入しているが、便宜上、本節で取り扱う）。

まず、土器概観の導入として、ＮＲ２及びピット出土土器について考えてみたい。

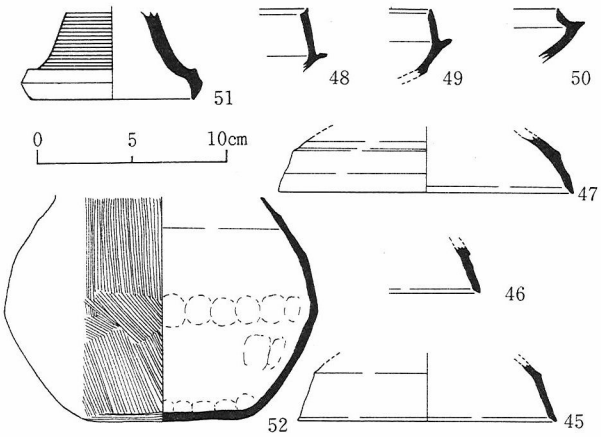
ＮＲ２出土土器

遺構の大きさの割には、出土量は稀少である。

須恵器杯蓋には、天井部と口縁部とを分ける稜が鋭く張り出しているもの(35)から、その境界



第36図　ＮＲ２出土土器実測図



第31図　ピット内土器実測図

には稜や凹線の認められないもの(41)まであり、河川という性格上、土器の時期差は当然と思われる。須恵器壺は、体部外面に平行タタキメを施して後、カキメ調整が行われている。その他に土師器壺（図版三十六、イ）がある。平底で、体部内面にはヘラケズリが著しい。

ピット出土土器

土師器壺(52)以外全て細片である。ここでは、建物の築造年代を考える際の参考となるべきものを選んで図示した。須恵器杯蓋は大概天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭いが、杯身では立ち上がりの長いもの(48)の他に、50のように、立ち上がりは0.7cmを測るのみで、逆「1」の字状に短く外反するにすぎないものがあり、掘立柱建物の築造期と廃絶期を示すものと推測される。土師器壺(52)は平底で体部中央で最大径をもつ。外面はやや粗いハケメ調整を施している。

以上、ＮＲ２及びピット出土土器を手がかりにして、古墳時代土器の概観を試みた。その結果、出土量の豊富な須恵器を中心に、型式分類を行うのが、適切と考えられるので、以下にその概略を記すことにする。

(1)　須恵器

杯蓋

Ａ．天井部と口縁部との境界に稜や凹線などを施すもの。

A_1　天井部と口縁部とが稜によって分かれるもの

A_1－ａ　稜が短く強く張り出して鋭いもの。

A_1－ａ′　稜は鋭いが、やや丸味を帯びるもの。

A_1－ｂ　稜が丸く鈍いもの。

A_2　天井部と口縁部とが凹線によって分かれるもの。

A_2－ａ　強い凹線

A_2－ｂ　弱く浅い凹線

A_3　凹線が退化し、ナデ（指頭）による稜線がめぐるだけのもの。

Ｂ　天井部と口縁部との境界に稜や凹線のみとめられないもの。

杯　立ち上がりの有無により分類する。

Ａ　立ち上がりのあるもの。

Ｂ　立ち上がりのないもの。

Ａは立ち上がりの高さによって

A_1　高さが２cmを超えるもの。

A2　高さが1.5～2.0cmのもの

A3　高さが1.0～1.5cmのもの

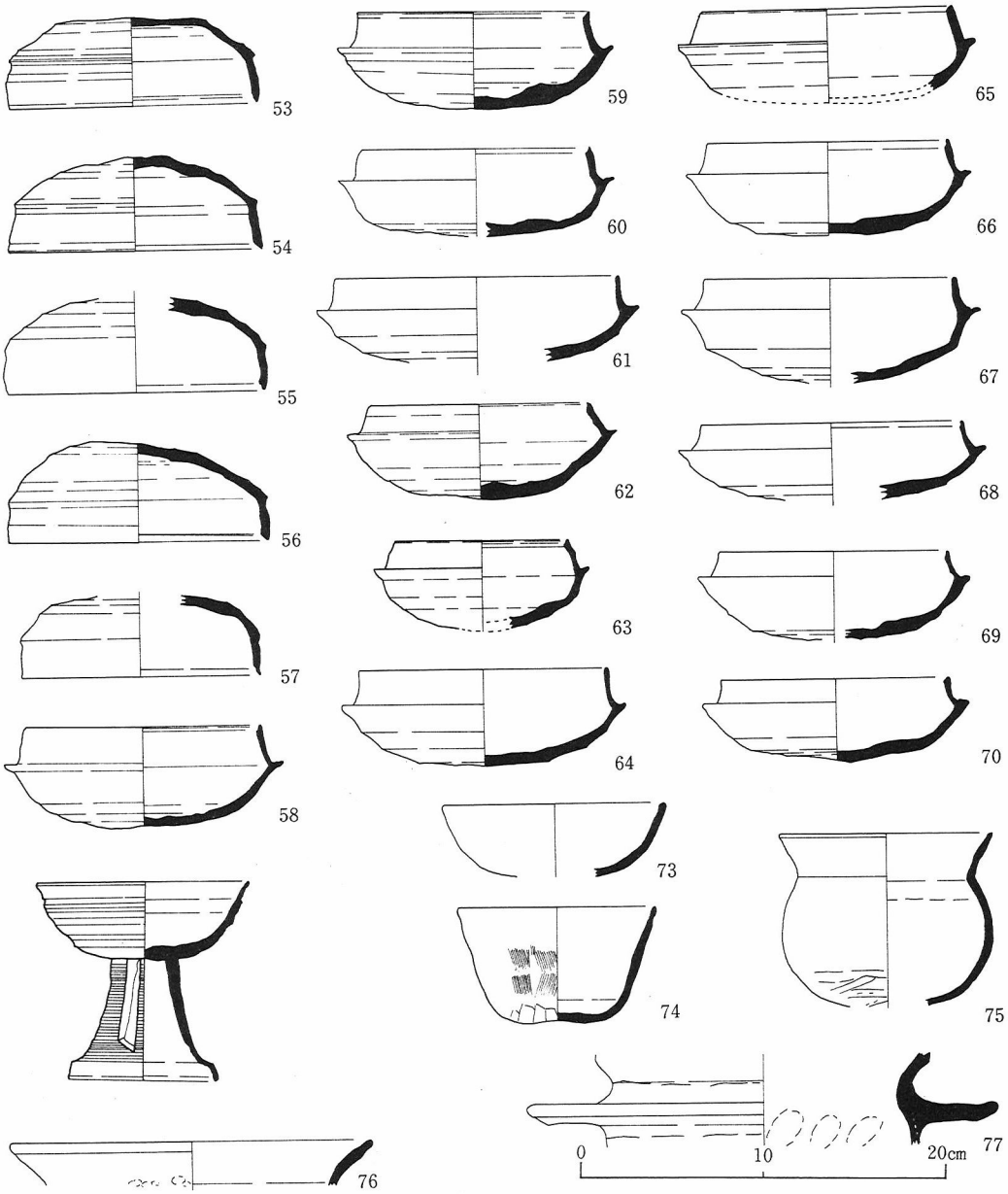
A4　高さが0.5～1.0cmのもの

A5　高さが0～0.5cmのもの

A6　立ち上がりが受部端と同高のもの。

と、6種に細分でき、また立ち上がり先端の形状により、

a．先端が鋭いか、内側に段を構成するもの。



第38図　ＳＤ65出土土器実測図

b　先端は丸く終わるもの。

の２種に区分できる。従って杯の分類は、A_1－a、A_1－b、A_2－a、A_2－b、A_3－a、A_3－b、A_4－a、A_4－b、A_5－a、A_5－b、A_6－a、A_6－b、Ｂと13のタイプ分けが可能となる。

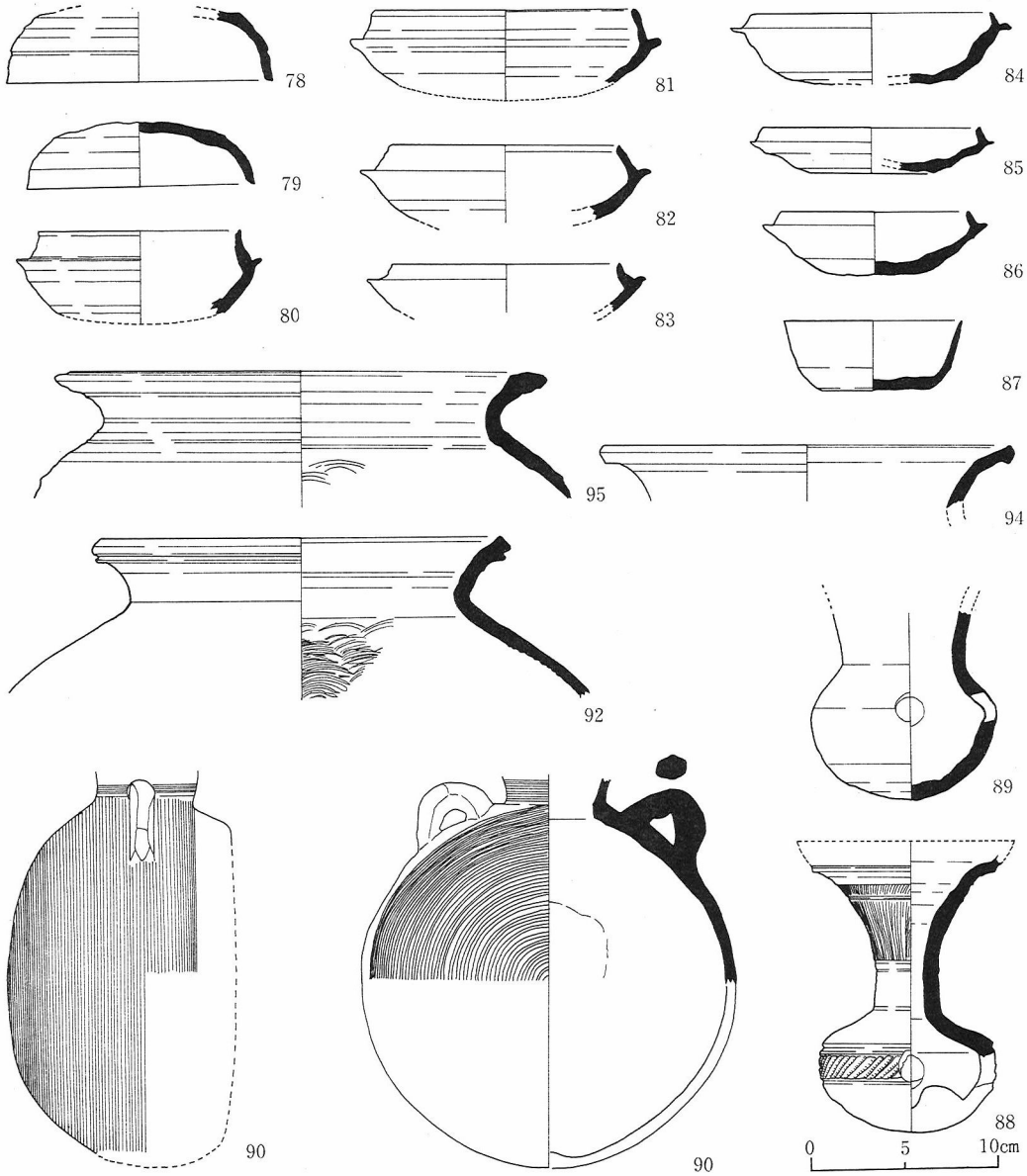
甕、２種に分類できる。

Ａ．口頸端部を、上下ないし上方に拡張させて、面をなすもの。

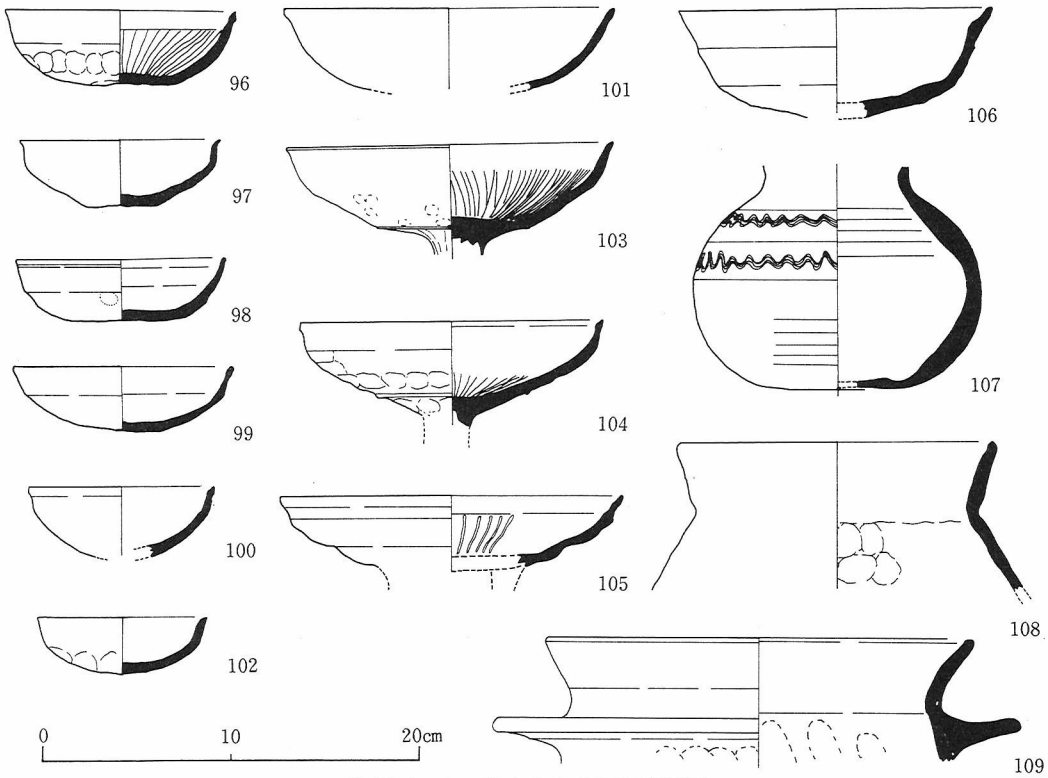
Ｂ．口頸端部は、丸く終わるもの。

(2)　土師器

須恵器に比して出土量は多くなく、分類しうる器種は少ない。



第39図　ＳＤ67内出土須恵器実測図



第40図　ＳＤ67内出土土師器実測図

杯、２種に分類できる。

Ａ．体部内面に放射状の暗文をもつもの。

　A_1　口径が大きいもの（大概15cm以上）

　A_2　口径が小さいもの（大概15cm以下）

Ｂ　体部内面に放射状暗文をもたず、ナデ調整により仕上げているもの。

高杯　２種ある。

Ａ．杯部は深い椀形を呈し、体部内面には放射状暗文が認められないもの。

Ｂ．杯部はＡに比して浅い皿形で、杯底部と杯体部を粘土でつぎたすため、外面に接合時の段がつくもの。

甕

Ａ．口頸部内面に横方向のハケメ調整を施すもの。

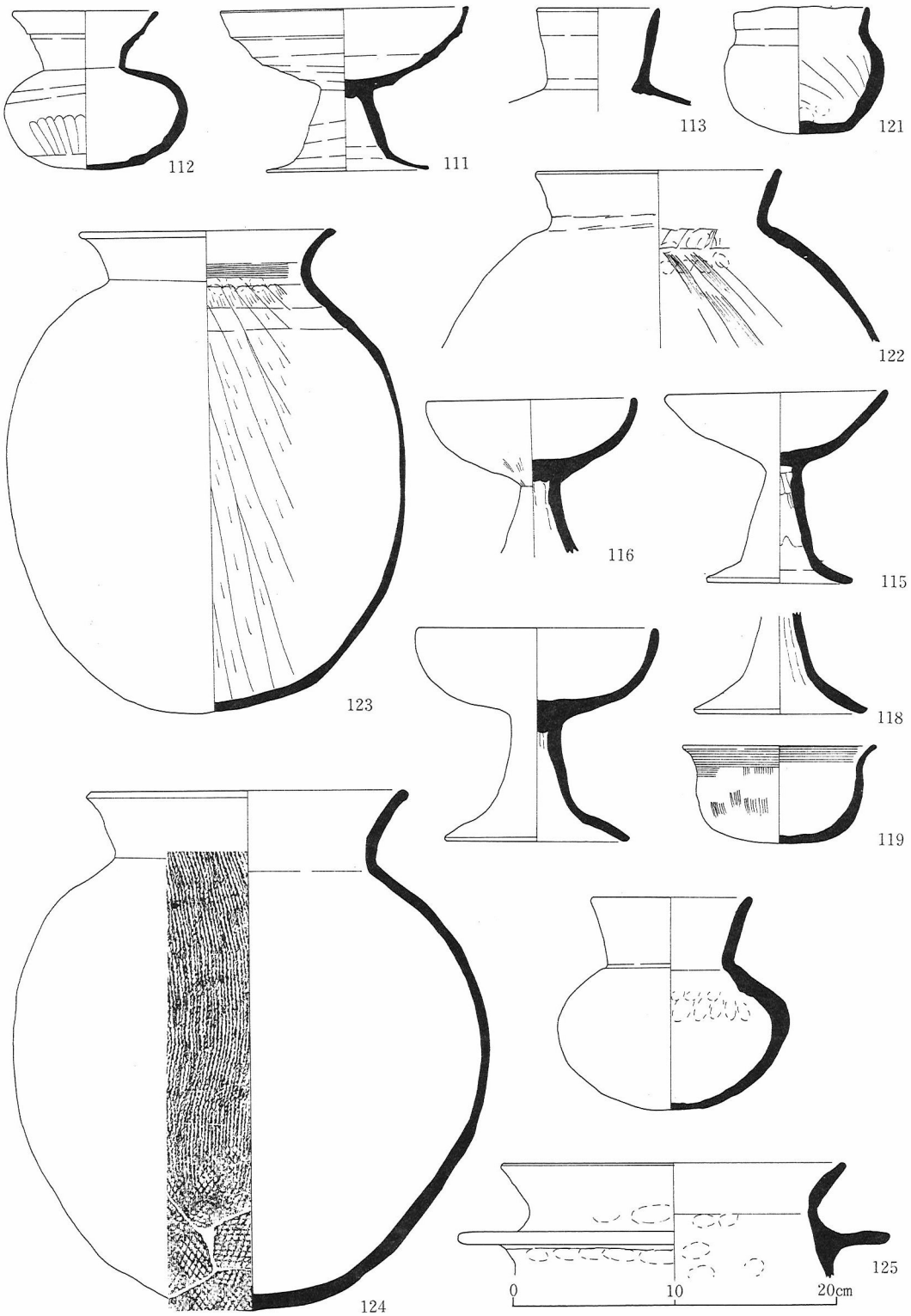
　A_1　端部は面をなすもの。

　A_2　端部は丸く納めるもの。

Ｂ．口頸部内面はナデ調整をするもの。

　B_1　端部は面をなすもの。

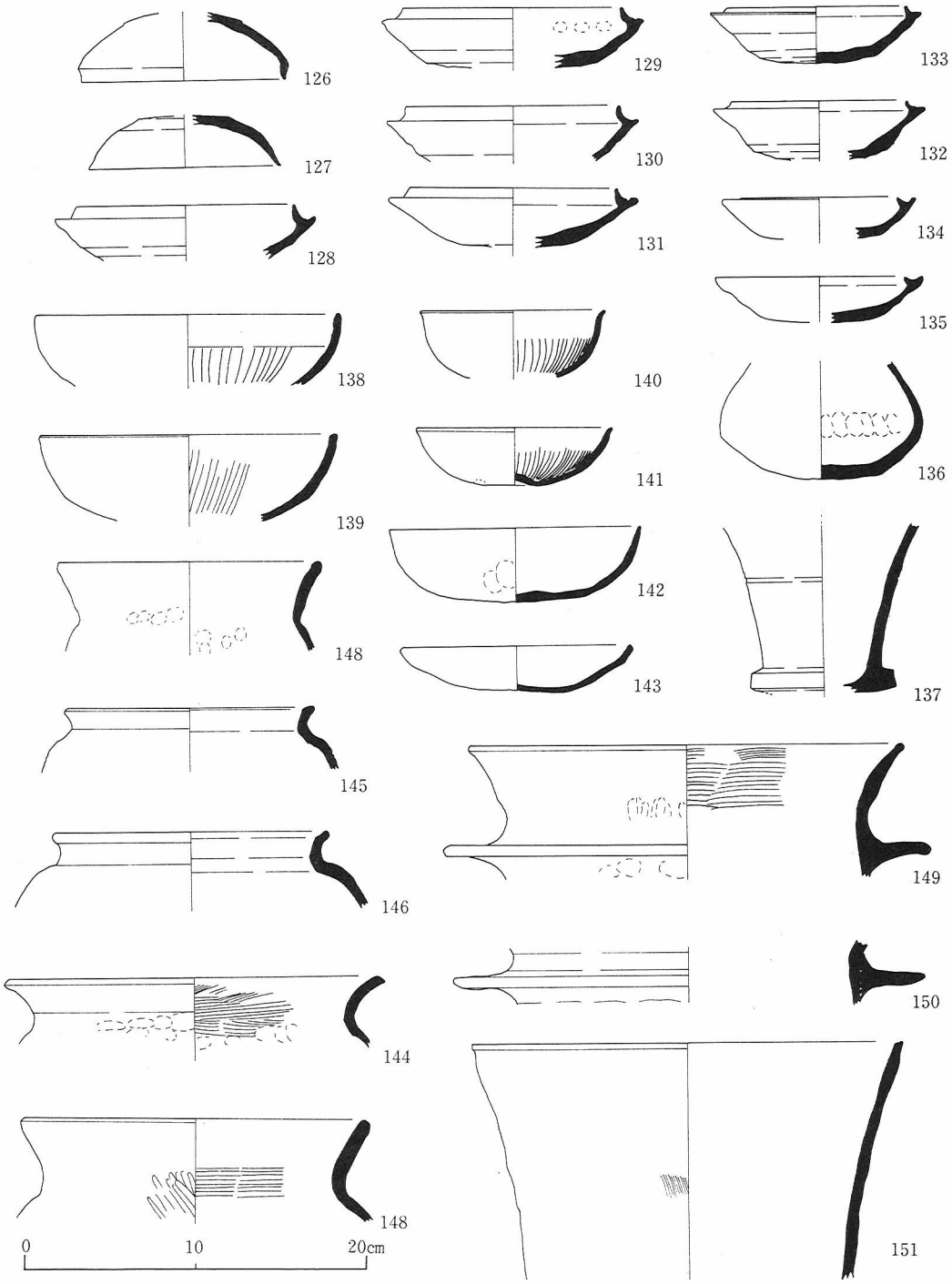
　B_2　端部は丸く納めるもの。



第41図　ＳＫ25出土土器実測図

ＳＤ65出土土器

須恵器　杯蓋は２タイプ５点出土。そのうちA1－bが４点を数える。杯身は４タイプ13点あり、A1－aが２、A2－aが４、A2－bが６、A3－aが１であった。A2タイプに集中していると



第42図　第４層出土土器実測図

ころから、先の杯蓋の傾向を参照すると、陶邑編年のＴＫ47～ＭＴ15併行期[1]に位置付けられる。高杯(71)は無蓋で、杯体部を回転力を利用したモコナデ調整により、いくつもの段をつくって装飾している。

土師器　鉢(74)、壺(75)は水簸を行っており、砂粒の含有は極微量である。他の土師器と比してきわだっており、特別な用途（例えば祭祀）に供されていた可能性がある。

ＳＤ67出土土器

土器取り上げは上層と下層に分けて行ったが、整理作業中、それぞれで出土した須恵器杯蓋が同一個体となった(78)ので、溝内の堆積土の違いによる時期差は想定しにくい。

須恵器　杯蓋は２タイプ２点。Ｂ(79)は小型化の傾向を示す。杯身は５タイプ８点出土。A_4－ｂが４点あり、最も多いが、A_2－ａからＢまで存在するので、美園遺跡杯ＡⅢｂ期[2]を中心とした時期、即ち、６世紀末から７世紀中葉の時期が与えられる。また、立ち上がりの高さが小さくなるにつれて、口径も小型化していく傾向が窺われる。瑳は３点出土。88と89は、口頸部の形状、調整法の差違の他、胎土も相違している。これは時期差はもとより、産地差が想定できる。89は千里山丘陵の古窯産のものと考えられる[3]。提瓶２点のうち、91の体部両側の耳は退化して円形粘土粒を貼り付けただけの「痕跡器官」化しているもので、体部前面は丸くふくらまずに中央で凹んでいる。

土師器　高杯は４点出土。全て杯部外面に杯底部と杯体部の接合痕たる段がつくＢタイプ。船橋遺跡Ｏ－Ｖ高杯C_2タイプ[4]と同型式である。壺(107)は平底で体部に櫛描き波状文をめぐらす。

ＳＫ25出土土器

須恵器　高杯(111)、壺(瑳未製品、112)ともに体部下半～底部は手持ちヘラケズリである。口縁部内外面も両者テイネイなヨコナデを行っている。

土師器　高杯４点のうち、脚部のみ出土した118を除いて全てＡタイプ。杯体部の内湾は強く、116はほぼ垂直に立ち上がる。鉢(119)は、出土状況では、口縁を下にして壺(120)の上に覆い破さっており、壺の蓋の代用かと考えられる。口縁部内外面とも緻密な横方向のハケメ調整が施される。壺(121)は手づくねの土器。粘土塊より直接ひき出したものであろう。

第４層出土土器

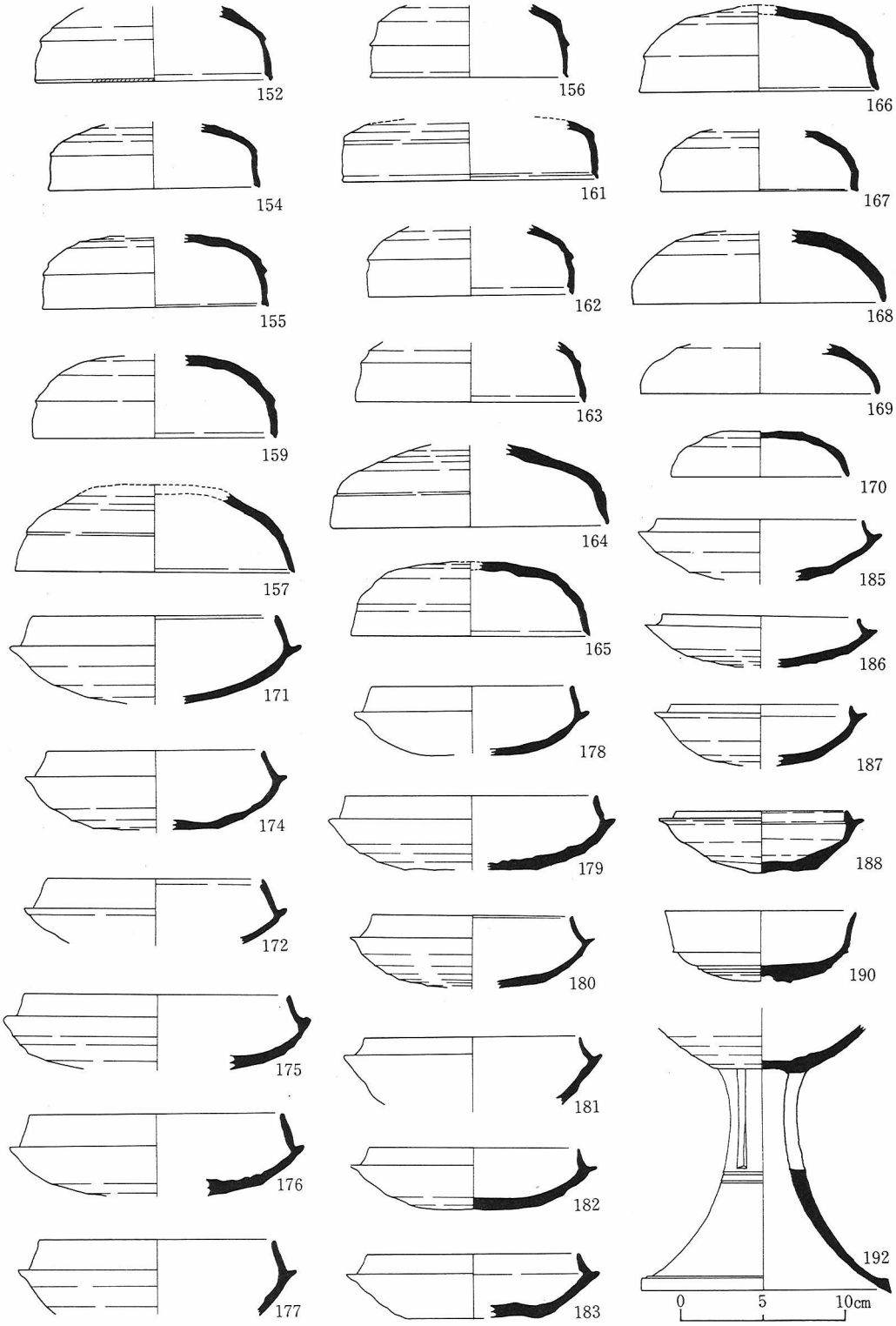
須恵器　杯蓋はＢタイプ２点。杯身は３タイプ８点。Ａ6－ａは美園遺跡杯ＡⅢc期に比定。

土師器　甕Ａ(145)はＳＫ５出土甕(15)と近似しており、平安時代の所産か。

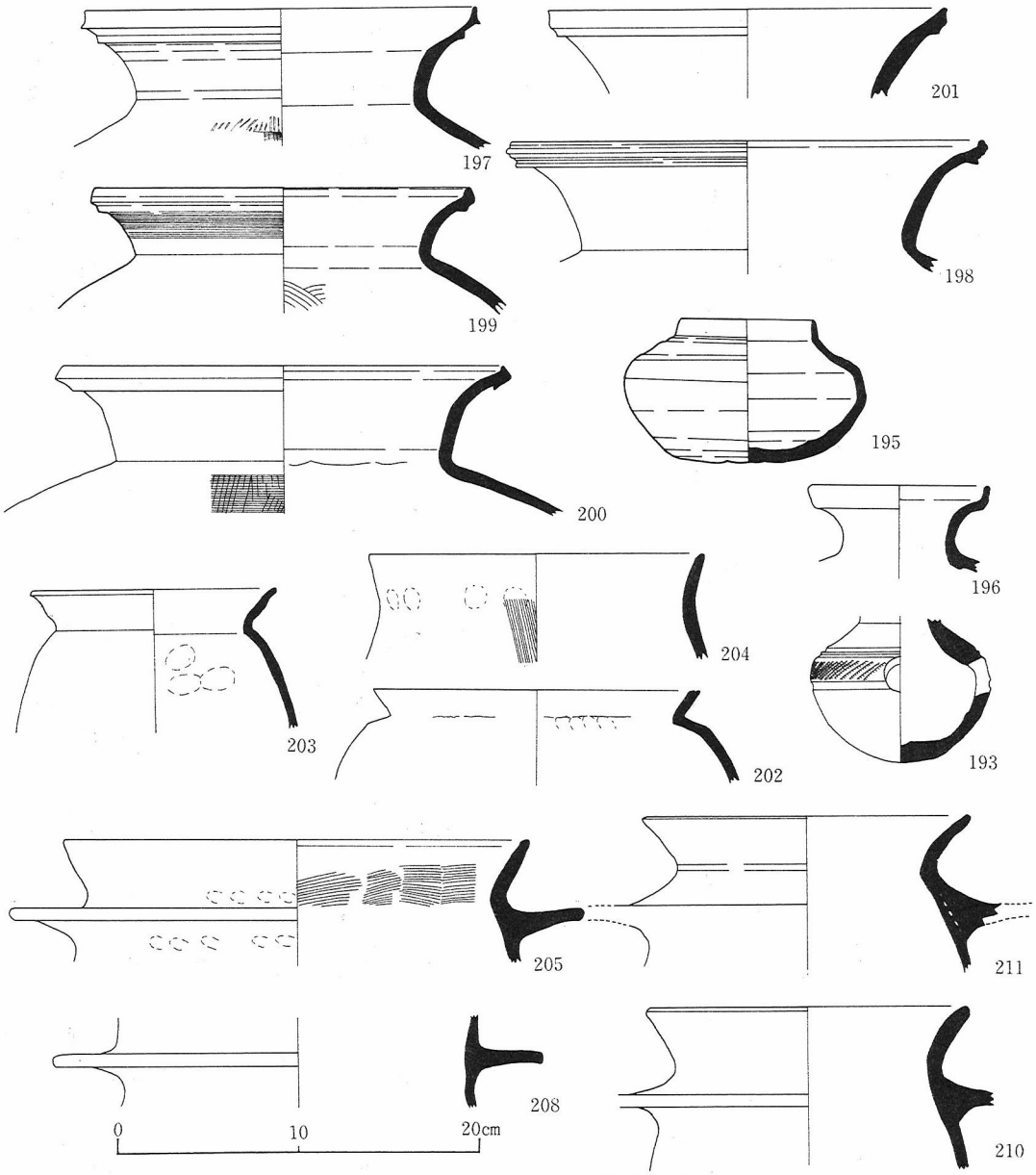
第５層出土土器

須恵器　杯蓋は７タイプ19点。杯身は５タイプ19点。高杯(192)は長脚透しで、陶邑ＴＫ209併行期に属す。坩(195)は焼成不良のため、赤紫色を呈する。陶邑ＴＫ10併行期と思われる。甕は５点、全てＡタイプ。とくに甕(197)は、外面上位に鋭い断面三角形の段をつくり出している。

土師器　甕は３点で、Ａが２、Ｂが１である。Ａ(202)の口縁部はごく短く、強く外反している。また口縁端を平らにナデるため、端部は外折して面をなす。Ｂ(204)の口縁部は屈曲が弱



第43図　第５層出土須恵器実測図



第44図　第5層出土土師器他実測図

いまま立ち上がるため、内面に稜がつかない。

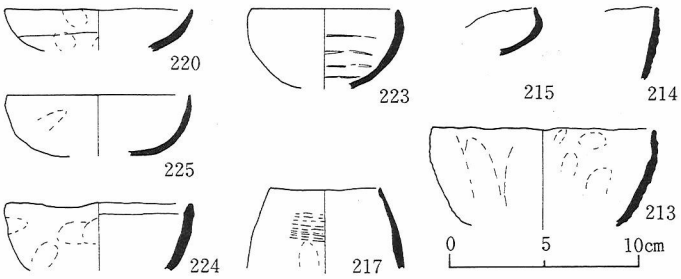
注(1)　平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966年

(2)　滋賀県教育委員会他『美園遺跡発掘調査報告』1975年

(3)　橋本正幸氏から御教示頂いた。厚く御礼申し上げる。

(4)　平安学園考古学クラブ『船橋Ⅱ』1962年

3）製塩土器



第45図　製塩土器実測図

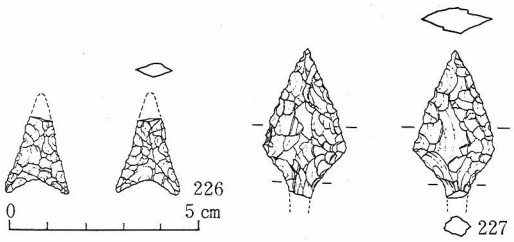
ＳＤ65及び第５層を中心に製塩土器が出土している。才原金弘氏の器形分類に従って順に記す。213、Ｄタイプ、ＳＤ65出土。214、Ｄタイプ、ＳＤ65出土。215 Ａタイプ、第５層出土。216、Ａタイプ、ＳＤ65出土。217、Ｃタイプ、第５層出土。218、Ａタイプ、ＳＤ65出土。219、Ａタイプ、ＳＤ65出土。220、Ａタイプ、ＳＤ65出土。221、Ａタイプ、第５層。222、Ａタイプ、ＳＤ65出土。223、Ｃタイプ、ＳＤ65出土。224、Ａタイプ、ＳＤ65出土。225、Ａタイプ、第５層出土。

以上のうち、220、223、224、225は器形については従来知られている漏斗形ではなく椀形であり、新資料だといえる。編年的には漏斗形が５世紀代に出現することからすれば、椀形は６世紀代に下るものと考えられる。これは、ＳＤ65の機能時期と矛盾するものではない。

4）その他の遺物

各遺構及び包含層より石鏃他の遺物が出土している。順に説明していきたい。

226、石鏃。凹基でやや長細い二等辺三角形を呈する。基部の抉りは直線的で、基端は尖る。先端部は欠損。予想される先端―基部中央長は約22mm。基端部幅は17.3mm。厚さ3.9mm。重さ1.1g。ＮＲ２出土。サヌカイト製。縄文時代の遺物。227、石鏃。凸基有茎。ぶ厚く、鋭利な先端と側縁部を有す。現存長39.1mm。幅21.9mm、厚さ7.2mm、重さ4.8ｇ。第５層出土。サヌカイト製。弥生時代の遺物。228、有孔円板。中央に１ヶ所穿孔(孔径1.5mm)。2.6cm×2.7cm。厚さ2.5mm。滑石製。周縁を面取り。表裏面に研磨痕。第５層出土。229、管玉。長さ2.3cm。径6mm、孔径３mm。上下から穿孔。碧玉製。第５層出土。230、紡錘車。上径2.5cm、下径4.8cm。高さ1.4cm、孔径5.5mm。滑石製。截頭円錐形を呈する。未製品で、裏面に円弧を描いている。表面に石ノミの研削痕が明瞭に認められるところから、その途中で廃棄したものと考えられる。西の口遺跡の集落内でこのような製品の製作が行われていたことが偲ばれる。ＳＤ67出土。231、分銅形石製品。裏面の径３×2.9cm。高さ3.9cm。孔径４mm。鈕部に穿孔している。第４層出土。弥生時代の遺物と考えられる。232、鉄鏃。いわゆる有茎三角形式鏃に属するものと考えられるが、銹化が著しい。全長10.8cm、刃部幅3.3cm、厚さ1.0cmで、レンズ状を呈する。第５層出土。



第46図　石器実測図

以上のように、出土量は多くないが、各種遺物が検出されている。特に、228、231の如く、祭祀的な遺物が注目されるところである。

5）弥生時代の土器

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、各種石器、木器など各種、各時代にわたって、コンテナ収納箱に約　箱程度が出土した。その中でも特に、弥生時代後半～庄内期の遺構に伴う土器及び古墳時代中期末～後半の遺構に伴う土器が出土量の大半を占めている。ここでは、両時期の遺構内出土遺物を中心に説明をおこなうとともに、各時代の遺物も順を追って説明を加えていくことにする。

(1) 縄文土器

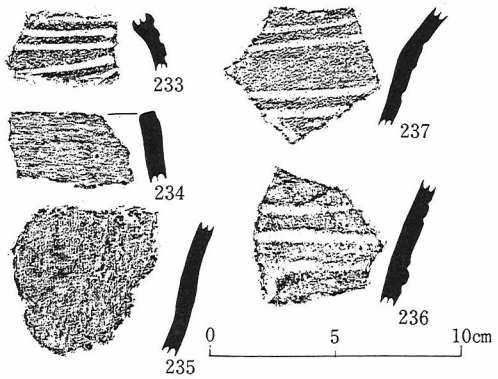
縄文土器は、調査地全域で十数片出土しているが、すべて破片で全体を復元できるものはない。出土地点は限られており、ⅣＧ20ｈ～20ｐ区で第２層及び地山直上で縄文時代後期後半の土器が認められ、ⅣＦ18ｆ・18ｇ～19ｆ・19ｇ区の古墳時代遺構のベース面となっている第６層より少量の縄文時代晩期後半の突帯文土器が出土している。

第47図(233)～(237)の土器はⅣＧ20ｈ～20ｐ区第２層から出土した。(236)(237)は、体部より口縁部にかけての破片で頸部がわずかに屈曲している深鉢である。頸部より上方に凹線文を施す。(236)は三条の凹線文に巻貝による扇状圧痕が認められる (234)(235) は粗製の鉢で、(234)は口縁部、(235)は体部の破片で中央部でわずかに屈曲し、下半にケズリ調整が認められる。(233)は沈線文を施した浅鉢である。

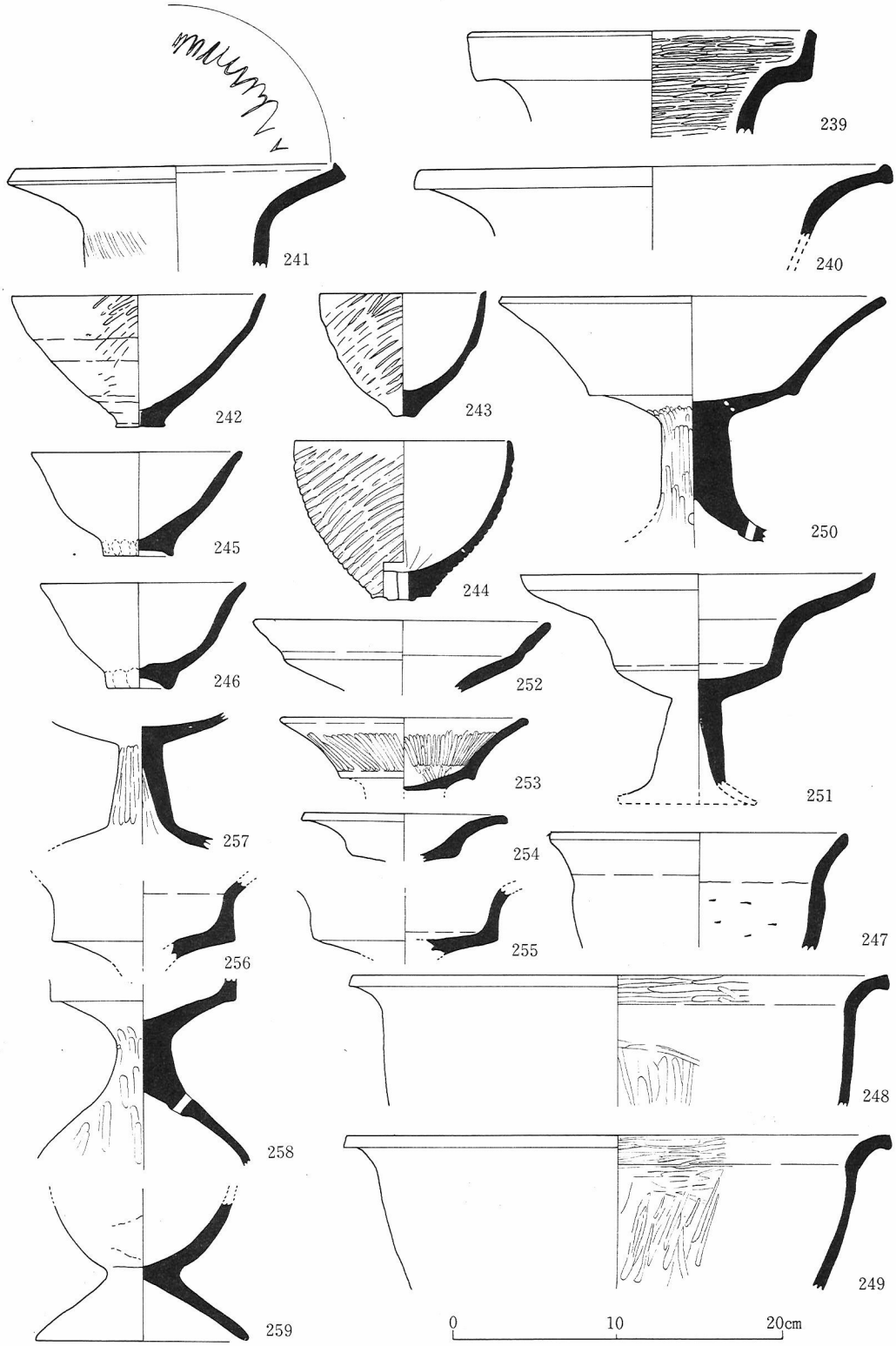
その他に深鉢の底部や、突帯文土器の細片が出土している。

(2) 弥生土器

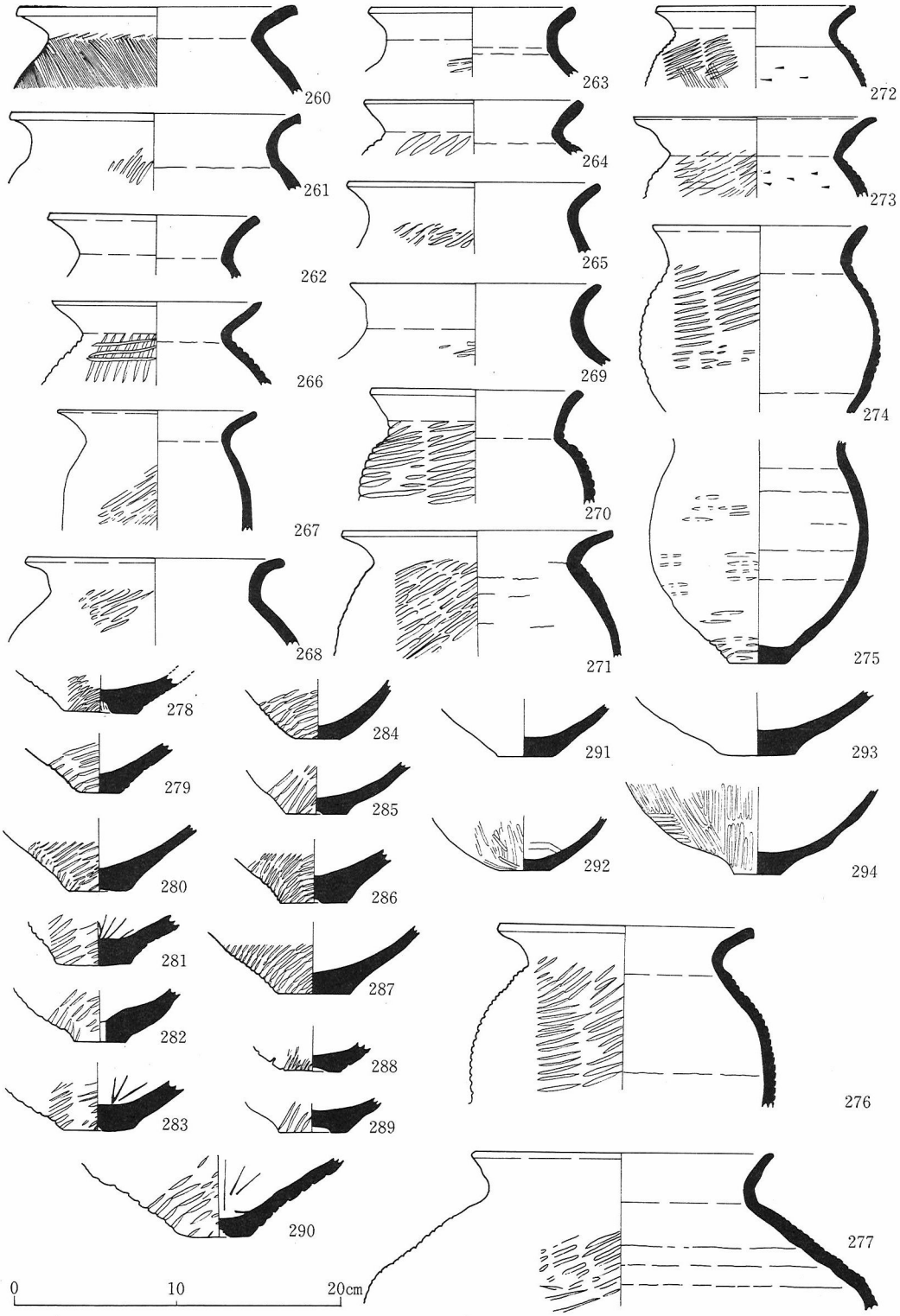
今回、ここで取り扱う弥生土器とは、弥生時代後半から庄内期にかけての土器を含んでいる。従来、弥生土器と庄内式土器を区別し、時期差として庄内式を古墳時代に含めて考える考え方もある。しかしながら、今回の調査では河内地方の弥生時代最終末の形式と考えられる北鳥池下層式に続くと考えられるタイプの土器に従来の庄内甕が伴なって出土しており、両者の時期差は区別できない。また、弥生時代終末の遺構と考えているＳＤ78やＳＥ５などの遺構は、溝や井戸状遺構であり、他の遺構と明確に区別されるものであり、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。これらのことより、弥生時代の最終末から庄内期にかけて連続した遺構と考え、ここではこれらを弥生時代に属する遺構・遺物と考えておきたい。そこで弥生土器の分類についても、器種毎の分類をおこない、庄内式と弥生土器との区別はタイプ分けでおこない時期差では分けていない。以下器種毎のタイプ分けの説明をおこないたい。



第47図　縄文土器拓影



第48図　ＳＤ78出土遺物



第49図　ＳＤ78出土遺物実測図

壺　5タイプに分類をおこなった。壺aは中期段階の壺（377)、壺bは2重口縁の壺で、加飾する大型のものをb_2(5)(6)(296)(375) それ以外のものをb_1(239)、壺cは口縁部が大きく外反する広口壺(240)、壺dは外反する口縁端部を内側に折り返す広口壺(241)、壺eは口縁部が直口する壺で大型で口縁部の短いものe_1(365)、小型で口縁部が長いものをe_2(308)(309) に分ける。その他に小型壺(348)がある。

甕　4タイプに分類できる。「く」の字形に外反する口縁部をもつもので端部に面をもつもの甕a(261)(262)、丸く終るもの甕bとし、甕bの中で内面をナデ調整するものをb_1(263)(359)(360)、ケズリ調整するものをb_2(312)に分けた。甕cは「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部をもつもので、口縁端部を上方へつまみ上げ受口状にするものをc_1(361)(362)、丸く終るものをc_2(273)(310)とする。甕d(370)(371)は、所謂布留式甕である。

高杯　3タイプに分類できる。水平方向にのびる杯部から大きく外反する口縁部をもつ高杯a(250)(252)(253) と水平方向にのびる杯部より角度をかえて直立したのちに外反する口縁部をもつ所謂二重口縁の高杯b(251)(255)に大きく分けられる。その他に半球状の杯部がつく高杯c(259)がある。

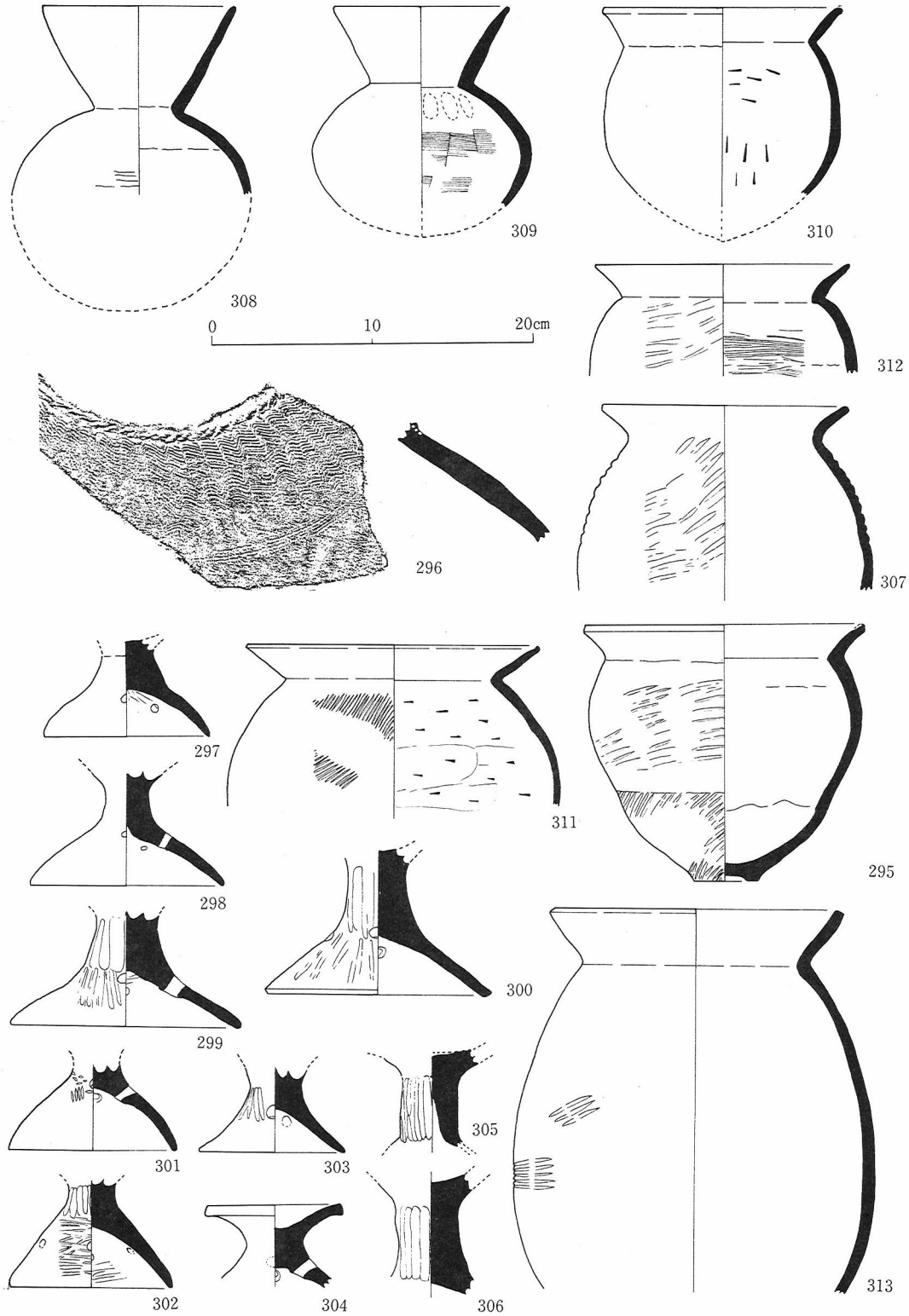
鉢　4タイプに分類できる。鉢a(247)は、外反する口縁部をもつもので内外面の調整から縄文土器と考えられる。鉢b(242)(243)(244)は、平底の小さな底部から内弯気味の口縁がつくもので、甕の下半と同形態のタイプである。鉢c(245)(246)は、高台状の底部にすり鉢状の体部から外反する口縁部をもつもので当初から鉢として製作されたもの。鉢dは大型のもの（248)(249)。その他に小型鉢がある。

ＳＤ78内出土遺物

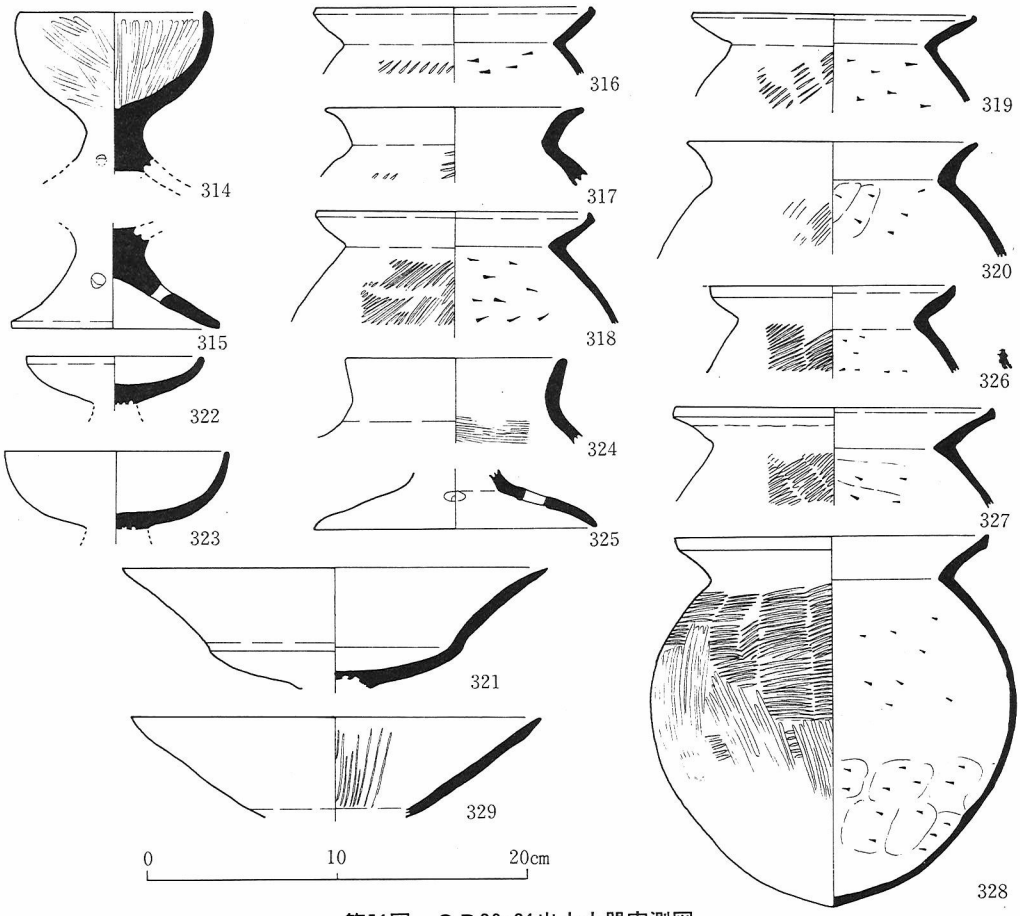
ＳＤ78内からは、大量の弥生時代後半の土器が出土しているが、溝あるいは自然流路の性格上多少他の時期の土器も混じって出土した。第23図の土器は上層から出土している片口鉢である。又鉢a(247)は、縄文土器と考えられる。これらの遺物を除けば比較的まとまった資料である。器種として壺類の出土が少なく、高杯の出土が多いことが特徴である。壺bの所謂二重口縁の壺は出土しているが、壺cの広口壺の出土はほとんどない。壺d(241)は1点だけで他地域からの搬入品である。

甕の出土量は多く、全体の4割を占める。その中でも甕b_1の出土量がもっとも多い。甕a(260)は、口縁端部に面をつくり、体部外面に刷毛目調整しており、古い様相をもっているが、出土量は少ない。体部外面に細かな叩目を施し、内面をヘラケズリ調整で器壁を薄くする甕cの出土量は甕b_1に比して極端に少ない。甕c_1(272)は河内産の庄内甕と呼ばれるもので、c_2(273)は他地域からの搬入品である。

鉢は、比較的全体を復元できるものが出土している。鉢b(242)(243)(244)は、甕の体部下半と同じ形態であり、分割成形の第一段階のものである。このタイプには、底部中央に円孔を穿つものが多く認められる。鉢bはＶ様式後半に認められる形態である。鉢c(245)(246)は、最初から鉢を意識して製作されたもので、口縁部成形後に輪状の粘土紐で底部を高台状につくり



第50図　ＳＤ78・81・83出土土器実測図



第51図　ＳＤ80･81出土土器実測図

出している。鉢ｃはＶ様式に通有に認められる形態である。

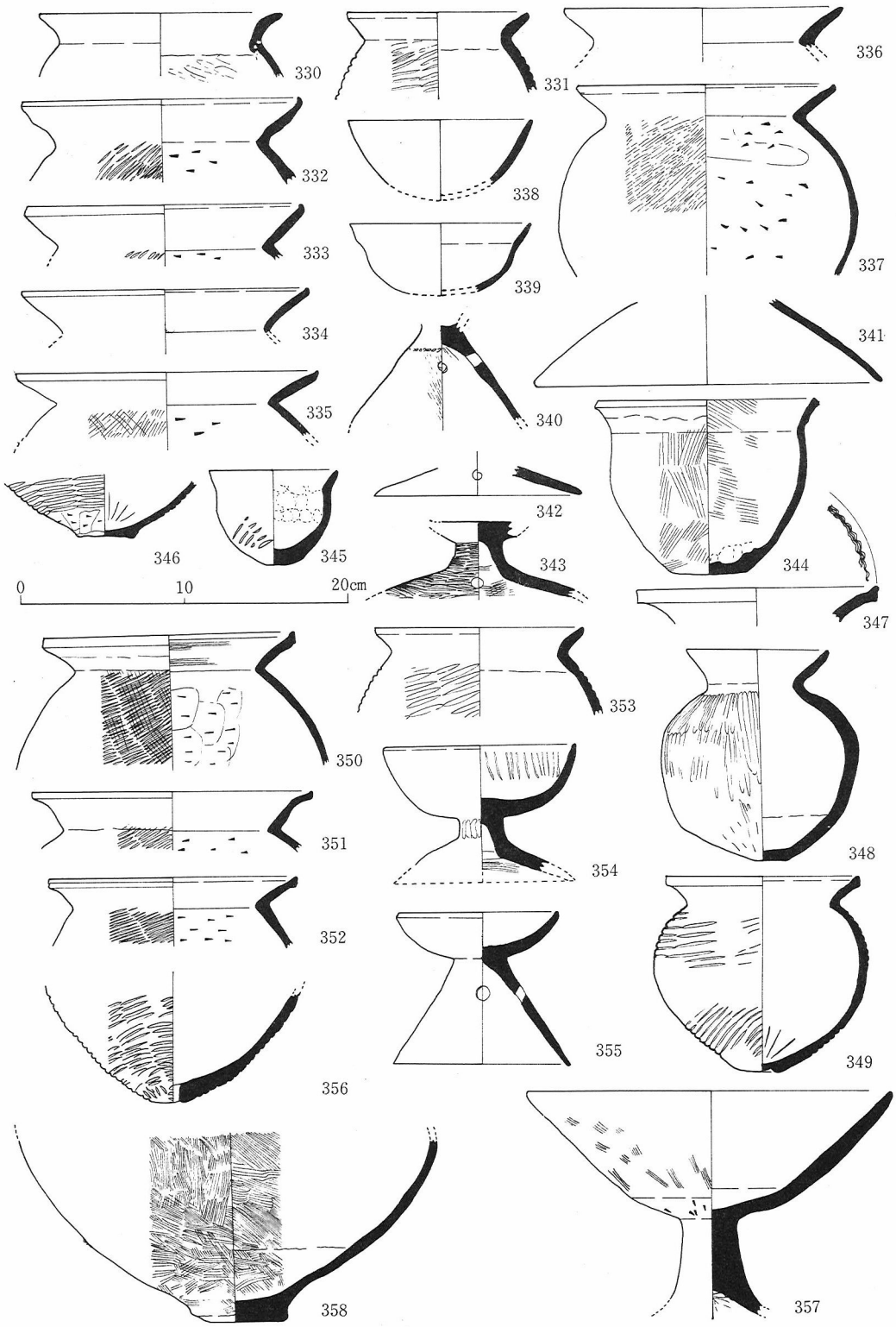
高杯ａ(250)(252～254)(257)は、水平方向の杯部から大きく外反する口縁部がつく。中実の脚柱部をつける。高杯ａの出土量が比較的多い。高杯ｂは二重口縁壺の形態をとるもので中空気味の脚柱がつく。(251)(255)(256)は他地域産の土器である。(259)は高杯ｃで半球状の杯部に裾広がりの脚台がつく。出土量は少ない。

ＳＤ80出土遺物

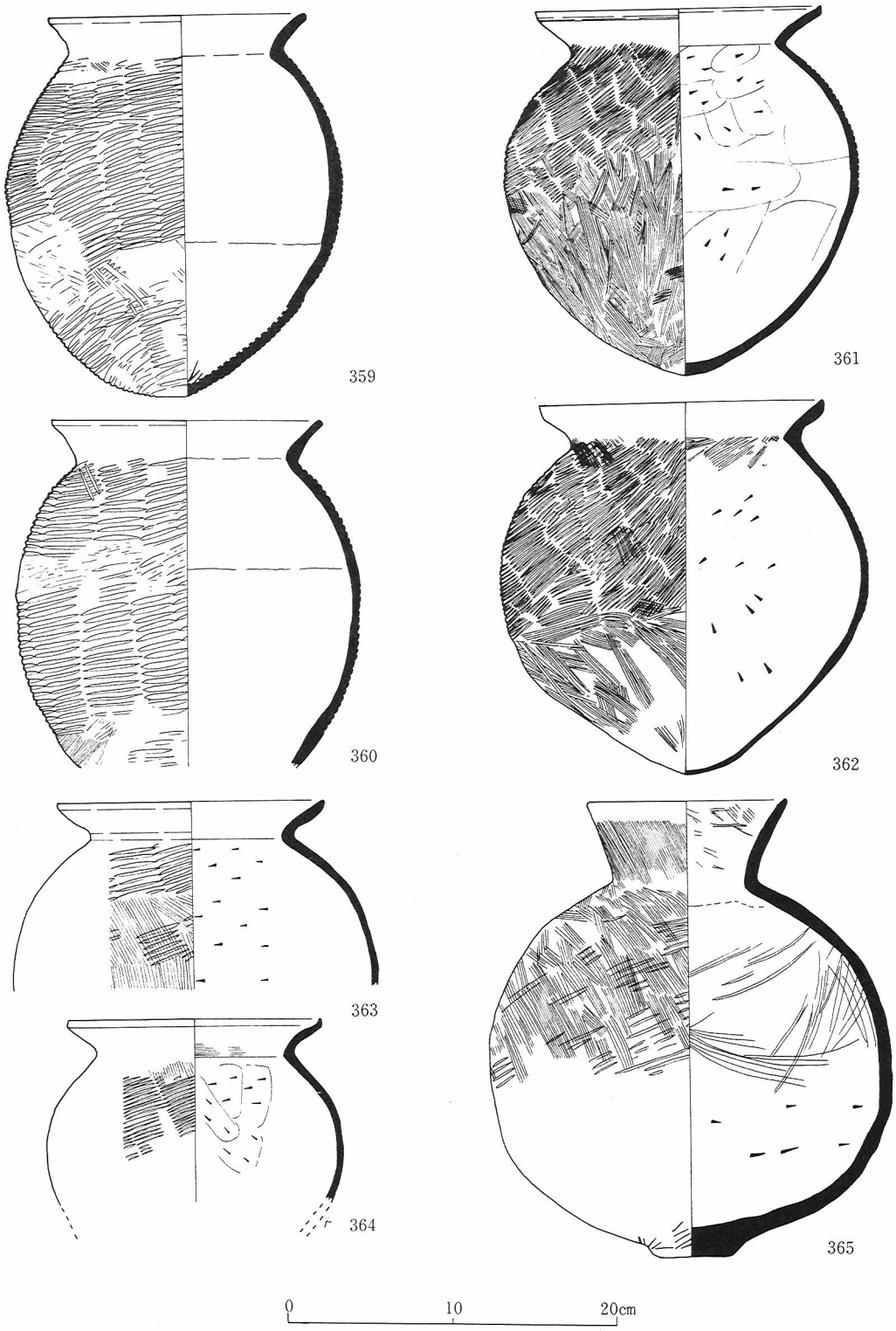
高杯ａ、ｂと甕ｂ、c_1、c_2が出土している。甕b_1の比率が少なく、甕c_1の比率が多いのが特徴である。高杯ｃ(314)は、半球状の杯部に短い脚柱部がつく形態で内外面とも丁寧に仕上げられている。甕c_2(320)は、内面に弱いケズリ調整が認められ、他地域からの搬入品である。

ＳＤ81～83

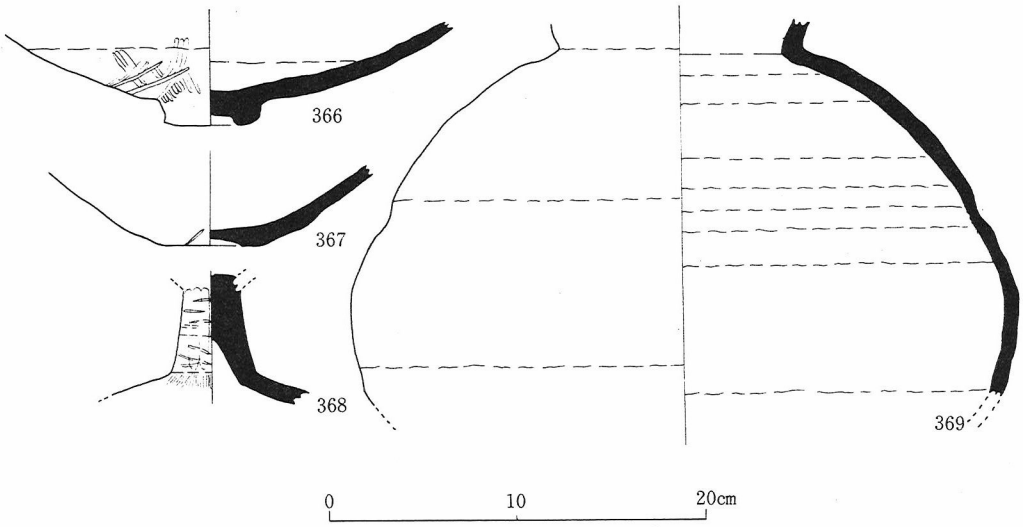
壺e_1・e_2・甕b_1・b_2・c_1・c_2、高杯ａ・ｃ、小型器台が出土している。甕c_1(328)は、口径16.6cm、器高19.6cmを測る。球形の体部に「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部に、端部は上方へつまみ上げ受口状につくる。体部下半は、ヘラまたは半載状の竹などの工具で丁寧にミガキ、外面の叩目を消している。体部内面もヘラで粘土をケズリ取り、器壁を薄くする努力が認めら



第52図　ＳＥ５出土土器実測図



第53図　ＳＥ５出土土器実測図



第54図　ＳＥ６出土土器実測図

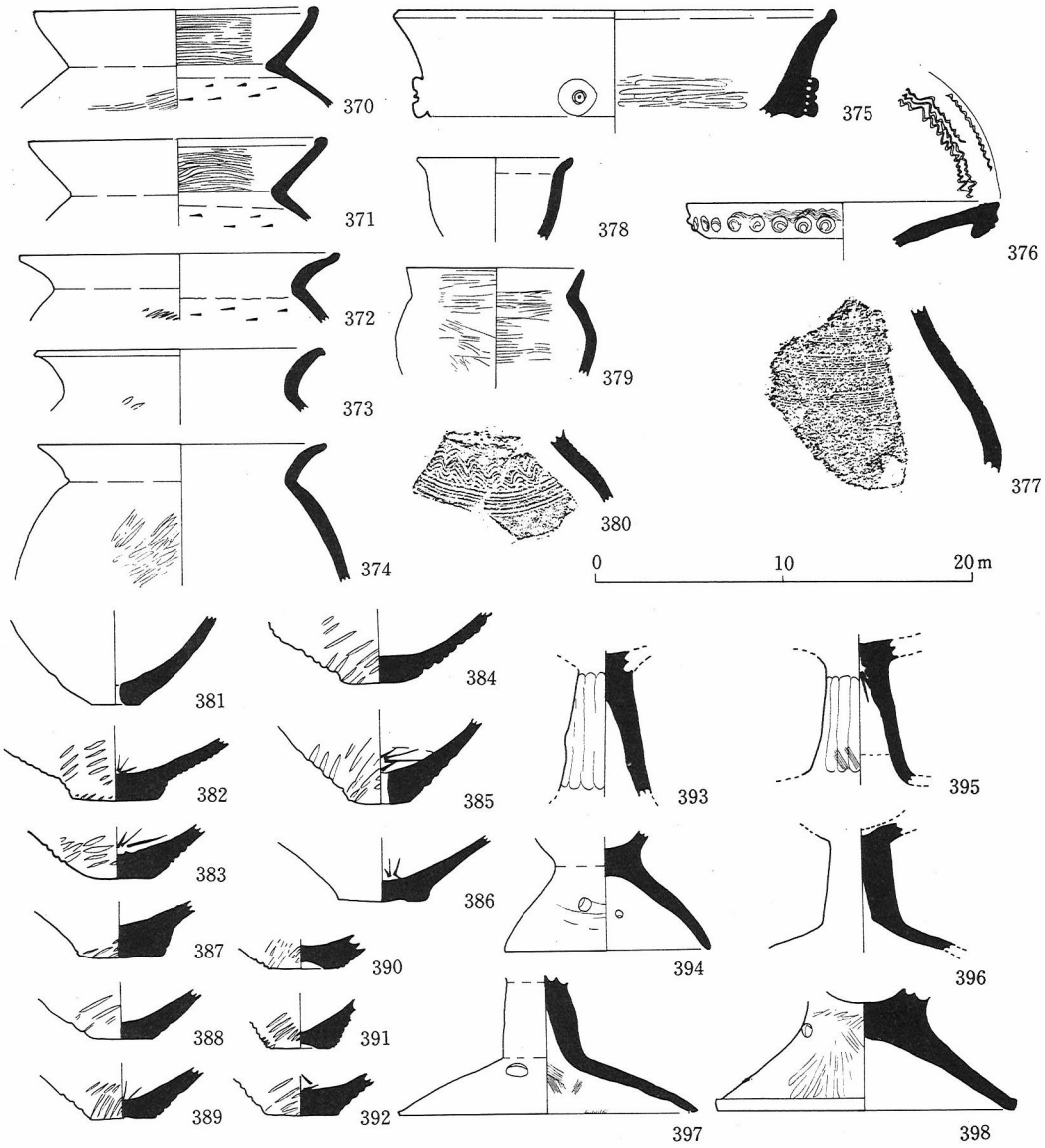
れる。底部はわずかに尖り気味で丸底化の傾向が著しい。

壺e_1(324)は、短く外上方に開く直口の壺口縁部である。壺e_2(308)(309)は、直線的に外方へ大きく広く直口の口縁部に、体部は球形ないし扁平な形をとる。底部は欠損しているが、丸底と考えられる。壺e_1は、Ｖ様式の後半の直口壺につながる器形であり、壺e_2は、庄内期に認められる器形である。ＳＤ81～83の溝内土器では甕b_1の出土量が少なく、甕c_1(326～328)の比率が増加している。出土量は少ないが、ＳＤ78の溝とは出土土器の組成に大きな違いがある。高杯の(329)は、杯底部が平坦で小さく、斜め上方に大きくのびる口縁部がつく。壺e_2(308)(309)、高杯ａ(329)などは、他地産の土器であり、他地域産の土器の出土量が増えることも特徴の一つである。

ＳＥ５

ＳＥ５の出土遺物は、出土状況から第１層（上層）と第２層（下層）に分けることができる。第１層からは甕b_1(330)(331)、c_1(332～337)、小型鉢(339)(338)(345)、高杯(342)(343)が出土している。甕b_1の比率が少なく甕c_1の比率が多くなっている。小型鉢(339)は、底部を欠損しているが、浅い椀状の体部に屈曲して斜上方にのびている口縁部がつく。高杯(343)は、細く短い中空の脚柱部から屈曲して水平に大きく広がる裾部をもつタイプで新しい要素をもつ。(338)(339)と(340)(342)とはともに他地域からの搬入品である。

第２層からは、甕b_1(359)(360)、c_1(350～352)、(361～364)、壺ｃ(347)、e_1(365)、高杯ｂ(357)、ｃ(354)、小型器台(355)、小型甕(349)などが出土している。(359)は口径15.5cm、器高23.0cm、「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終わる。最大部径が体部中位にあることや、底部にわずかに平坦面を残す平底がつくが球形丸底化の傾向が強くうかがわれる。体部外面の下半は、板状の工具でナデつけ、叩目を消して調整を施こし、内面はナデ調整により仕上げている。(361)は口径17.2cm、器高22.2cm、「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部に端部は上方へ



第55図　包含層出土土器実測図

つまみ上げ面をなす。底部がわずかに尖り気味になるが丸底である。体部外面下半は刷毛目で叩目を消して丁寧に仕上げ、内面はヘラケズリで器壁を薄くしている。第２層においても甕b_1の比率が少なく、c_1の比率が大きいことがわかる。(365)は、口径12.1cm、器高27.7cmの大型の直口壺。短く斜上方に開く直口の口縁部に球形の体部と比較的しっかりとした底部がつく。体部外面は叩目調整ののち、刷毛目で仕上げている。また、体部外面の下半全面に煤が付着しており、２次焼成を受けたことがわかる。(365)の壺は、器形的には壺であっても、成形手法及び、用途は甕などと何らかわるところはない。この時期になると、壺、甕、鉢の器形別用途に変化がうかがわれる。その他に小型器台が出土している。口径9.8cm、器高9.3cm、浅い皿状の受部

に直線的に裾広がりとなる脚台がつく。(355)

このようにＳＥ５からは甕b_1、c_1、壺e_1、小型器台が一括出土している。又、第１層と第２層を比較した場合、土器の形式上の差は認められず、ほぼ同一時期と考えられる。このことからＳＥ５出土土器は、良好な一括資料として取り扱えるものである。

ＳＥ６出土遺物

ＳＥ６内からは、弥生時代末の壺・高杯・庄内期の甕などが出土している。壺(369)は、胴部下半の張る扁平な体部で口縁部・底部は欠損している。(366)は、小さな突出した平底に球形の体部がつき、(367)は底部外面が凹む丸底の底部である。(368)は、細い中空気味の脚柱部に角度をかえて、水平方向に広がる裾部がつく。これらの出土遺物の特徴から、ＳＥ６埋没時期は、庄内期の前半頃と考えられる。

包含層内出土遺物

包含層内からは各時代の遺物が出土しているが、ここでは弥生時代から古墳時代前半にかけての遺物を取り扱う。

(377)は、弥生時代中期に属する壺である。頸胴部に櫛描直線文を３条を施す。弥生時代中期の土器片は、この他に数点出土している。

弥生時代後期末～庄内期にかけての土器もコンテナに10杯程度出土している。特に (375) (380)のような壺も出土している。また、古墳時代前半の布留式に属する甕が出土している。(370)(371)は、口縁端部を内方へ丸く肥厚し、内弯気味の口縁部に球形の体部をもつ。体部内面をヘラケズリ調整で薄く仕上げる。布留式に属する甕は数少ない。

Ⅴ．まとめ

今回の調査で、西の口遺跡が弥生時代から平安時代にいたる複合遺跡であることが判明した。平安時代の遺構面は不明瞭だが、古墳～弥生時代の２時期の遺構面は明確に存在しており、後世の削平を受けながらも、古墳時代後期の掘立柱建物５棟、建物内外を区画する溝２条、庄内期の井戸状遺構２基、弥生時代後期の壺棺墓３基を確認できたのは大きな収獲といえる。

ここでは、平安時代～古墳時代の遺構と遺物、及び弥生時代の遺構と遺物の２節に分けた上で、それぞれの内在する若干の問題点を列挙し、まとめとしておきたい。

１）平安時代～古墳時代の遺構と遺物について

平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構としては、土坑３基、井戸２基とそれに付属する覆屋を検出したのみで、集落の具体相を把えるだけのデータは備わっていない。ただ第４層の分布範囲を考えると、当該期の定住集落が本遺跡に広がるとは想定しにくい。むしろ、土坑や井戸などの設定のありようから考えれば、一時的な生産手段としての場としての諸施設と考えるのが妥当であろう。

さて、今回確認した２基の井戸は、ともに、上部構造として井桁を、下部構造（取水口）として円形曲物を設えたもので、平安時代に属するものとしては、瓜生堂上層遺跡[1]に出土例がある。出土遺物が稀少なため、開削時期決定は、黒色土器に求めたい。ＳＫ５出土例も含め、黒色土器椀は全てＡ類で10世紀末に下るものではないが、体部内面でのヘラミガキは施されず、Ａ類生産の盛行期を過ぎたものと考えられる。一方、ＳＥ３で黒色土器椀(34)と共伴した須恵器鉢(33)は、篠古窯跡群前川２・３号窯出土の鉢Ｃタイプで、口縁部を肥厚させ、玉縁状を呈したものであり、水谷寿克・石井清司両氏[2]により、10世紀中頃の編年的位置が与えられているところから、これら黒色土器（Ａ類）椀の実年代観として、10世紀後半の時期が想定されよう。

古墳時代西の口遺跡の歴史的環境

次に、本遺跡で検出された掘立柱建物群を素材として、古墳時代の歴史的環境を考えたい。

本遺跡のすぐ北に生駒山系より発する小河川――箕後（みのご）川がある。箕後川は、横小路から流れ、旧村を南西に横切り、外環状線の付近で東大阪市と八尾市の境を西に流れ、恩智川に注いでいる。荻田昭次氏の考証[3]によれば、「箕後」は「三野郷」に通じるといわれる。現在、八尾市に編入されている上之島、福万寺地区、及び東大阪市市場（現在の花園、玉串）地区は、明治22年４月１日に三野郷村として発足した地域であり、それ以前においても、例えば、中世、河内郡玉串荘の一部である３地区が古くより「三野郷」と称呼されていた。この三野郷には式内社である御野県主神社が存する（現在の八尾市上ノ島南町1丁目70番地）。大化前代、ヤマト国家の地域的従属機関として国造制及び県主制が運用せられたことは夙に知られている。三野県主もその一つであって、若江郡を中心に、河内、高安、大県の諸郡にその領域をもっていたとさ

れている[4]。それは例えば清寧紀に三野県主小根が反乱に加担し、その罪の許しを乞うために、遠方の難波来目邑大井戸田十町を送ったとされる所伝が証左になろうし、また、八尾市北東部の北高安地区の西ノ山古墳〈前期〉、花岡山古墳〈前期〉、心合寺山古墳〈中期〉などの古墳が三野県主一族のものと従来より考えられている[5]わけである。従って箕後川左岸に広がる古墳時代集落が三野県主が治めていたムラの一つである蓋然性は高いといわなければならない。それは、原島礼二氏が三野県の成立を5世紀中葉に求められていること[6]と矛盾をきたすものではない。ただ律令国家成立期以降は三野県主はあまり大きな勢力とはならなかったようであるが、美努(みぬ)連として若江郡を中心に活動していたことが、正倉院文書や続日本後紀等に散見される[7]。

6世紀前半という時期で考えられるのは、桜井屯倉である。安閑紀元年条に「以桜井屯倉與毎国田部給賜香々有媛」と見え、同二年九月条に「詔桜井田部連……、主掌屯倉之税」とあることから、桜井田部連が桜井屯倉の管理を掌っていたことがわかる。桜井とは、和名抄に河内郡内に見える桜井郷のことであり、現在も六万寺町に桜井という地名が残っているように、当該地が本拠であったことは申すまでもない。ただ、この桜井郷については河内志に「六万寺村、旧名桜井、是其遺也、按図亘横小路、四条、客坊諸邑、為古郷域」とあるように、かなり広範囲にわたるとする所伝があることに注意を払う必要がある。

ＳＫ25出土の韓式系土器について

韓式系土器とは、「朝鮮半島からもたらされた土器、あるいはその影響下で渡来人および在地の者が日本で製作し、彼地の土器の諸特徴を如実に表す土器の総称[8]」と定義される。器種としては、平底鉢、丸底広口壺、長胴甕、甑、鍋が確認されている。

今回、ＳＫ25出土土器中、韓式系土器として認知しうるものに、長胴の甕を挙げることができる。甕(122)と(123)はともに体部外面は板状工具によるナデ調整で、内面にはヘラケズリ及び、当て板の痕跡が明瞭に認められるものである。これに対し、甕(124) は体部外面に1単位2.8cmの縄蓆文のタタキメが7単位施され、底部には斜格子目文のタタキメが行われている。従って前者を甕Ⅰ、後者を甕Ⅱとして分類することができよう。胎土はⅠ、Ⅱとも、長石、石英雲母、くさり礫、角閃石が認められる。共伴する須恵器は杯(110)を除き、瓲(112)、高杯(111)からＴＫ208～ＴＫ23型式に位置づけられ、5世紀後半の年代が与えられる。ただ、須恵器杯(110) については土坑の最上層から出土したものであり、ＳＫ25出土土器が他の遺構出土土器とは編年的に大きな隔たりがあることから、混入した遺物と捉えることもできよう。

2）弥生時代の遺構と遺物について

今回の調査で検出した弥生時代の遺構は、古墳時代や平安時代の遺構と重複する場合が多く各々の時期の整地や削平をうけているため全体を明確にできず、溝・井戸状遺構・土坑・ピット・壺棺墓などの断片的な資料を検出したにとどまった。ここでは溝・井戸状遺構・壺棺墓についてまとめておきたい。

壺棺墓について

壺棺１・２・３は、調査地点のもっとも北側の地点で周囲３ｍの範囲内で検出した。特に壺棺１・２は、上部を削平されているものの、保存状態は比較的良好であった。壺棺１・２とも頸部から上部の口縁部を打ち欠いて広げているものの、頸部囲りは径17cm、19cmしかなく明らかに小児用の棺として使用されたことがうかがわれる。また、壺棺１のように鉢を転用して蓋としているところから壺棺２にも何らかの蓋があったと思われる。いずれの棺も壺より少し大きめの墓拡を掘ったのち、正立の状態で棺を裾えている。

さて、本地域において弥生時代中期には、瓜生堂遺跡[9]や鬼虎川遺跡[10]で検出されているように方形周溝墓が群を構成してつくられており、このあり方が中期の一般的な墓制であると考えられている。ところが後期の墓地の発見例が少なく、一部巨摩廃寺遺跡で後期の方形周溝墓が検出されているのみである[11]。また、集落自体も中期の大規模集落から後期には分散的な小規模集落に移っており、この時期に集落の構成や墓制に大きな変化があったものと思われる。

今回検出した壺棺墓の周辺では、同時期の遺構は認められず、また検出地点も調査地の北端にあたるところから、住居跡などの集落の中心から少しはずれた地点に壺棺墓だけをつくっていたようである。弥生時代において日常に使用していた土器を転用した壺棺墓・甕棺墓が集落内で見つかる場合は多い。東大阪市内でも鬼虎川遺跡[12]や西ノ辻遺跡[13]で検出されている。後期では、鬼塚遺跡で口縁部を打ち欠いた大型の壺棺に鉢形土器を蓋にして正立させた状態で出土している[14]。縄手遺跡でも大型の壺棺が検出されており[15]、いずれも集落より少しはずれた地点で単独で検出されており、本例と非常に類似している。畿内における壺棺墓や甕棺墓が、このような例のように一般的なものかどうか、類例の増加を待って考えていく必要がある。

弥生時代の遺構の範囲

その他の遺構として、溝・井戸状遺構を検出している。井戸状遺構は、深さ130cmと190cmと比較的浅く、湧水点にも達していないように思われる。井戸以外の他の用途をもつ遺構であるかもしれない。ＳＤ78は、東から西への傾斜が認められ、他の溝も総じて同一の方向をもっている。これらのことより、集落の中心は、調査地外の東側に広がっていると思われ、今後継続した調査が期待される。

出土遺物について

弥生時代の土器は、遺構内より出土した土器が大半を占め、一部包含層出土の土器が認められる。ここでは遺構内出土土器に限ってまとめておきたい。

ＳＥ５出土土器は、現場の出土状況から第１層と２層とに分けることができた。しかしながら、１層の出土遺物は少なく２層とあまり大きな違いは認められない。しいていえば、１層には小型の土器が多く、中でも高杯・鉢などはすべて搬入品で占められている。また甕b_1の比率が少なく、甕Ｃの内面ヘラケズリ技法をもつタイプの土器が多く出土し、小型の鉢などが含まれていることなどから２層出土の土器よりは若干新しい要素が認められることである。２層の土器は、比較的まとまった良好な一括資料と考えられる。甕では、甕b_1とc_1が共伴している。

甕b_1は「く」の字形に外反する口縁部に最大復径が体部中位にある少し胴張の体部がつき、底部はわずかに平坦面を残すが、丸底化の傾向が著しい土器であり、内面はナデ調整しケズリ調整は認められない。叩目は、底部から頸部まで同一方向に叩き上げる。胎土は、生駒西麓地方の胎土であり、器形、胎土とも北鳥池下層式に続く在地の土器といえる。甕c_1は、所謂庄内甕、河内甕と呼ばれるタイプで球形の体部にほぼ丸底の底部がつき、体部外面に細かな叩目、下半を刷毛目で調整し、内面へラケズリ技法で器壁を薄く仕上げている。甕b_1は、本地域の弥生時代後半の北鳥池下層式に続く土器であり、北鳥池下層式よりもさらに球形・丸底化が進んでいるが、内面のへラケズリ調整はおこなわれていない[16]。このことは、甕b_1は、甕c_1の内面へラケズリ技法の土器が搬入されているにもかかわらず、その技法を取り入れることなく、従来の伝統的な技法の延長上につくられた在地の土器といえる。一部で(312) のように在地産の甕の内面に弱いケズリ調整が認められるものがあるが、器壁を薄くする目的でなく、軽い調整程度で一般的ではない。

甕b_1が、弥生時代から続く本地域の在地産の土器であるとするならば、従来いわれていた生駒西麓産c_1タイプの庄内甕は少なくとも西の口集落以外から搬入されたことになる。その時期は、甕b_1タイプが北鳥池下層式に続く形式であり、甕c_1タイプが従来の庄内式（上田町Ｉ式）の前半に属し、この両者が共伴し、さらに小型器台が伴うという事実から庄内期の前半でも新しい時期に位置づけが可能である。少なくともこの時期では、甕の内面へラケズリ技法は在地の土器に採用されておらず、もっぱら大量に搬入されていた段階になる。甕b_1タイプの土器に内面へラケズリ技法が採用されるのは庄内期の後半になってからであり、最古の布留式に位置づけられる馬場川遺跡Ｔ地点出土の土器には、甕b_1タイプの土器はないところから、庄内期の後半には内面へラケズリ技法をもつc_1タイプの土器にとってかわられたと思われる[17]。少なくとも庄内甕は、後期終末の北鳥池下層式から出現するものではないことがわかる。

ＳＤ78出土土器は、高杯が非常に多く出土している反面、壺の出土量が極端に少ないという特色があり、この遺構の特殊性がうかがわれる。甕で見ると(261) の甕ａは、古い形態を残すものの１点のみで他はb_1タイプの甕で占められている。甕ｃタイプに属する土器が２点出土しているが(272)の甕c_1は庄内甕であり、(273)は他地域からの搬入品である。ＳＤ78出土土器は甕ｃの出土量が少なく、ＳＥ５・ＳＤ80～85などが圧倒的に甕ｃの出土量が多いことと大きな違いがある。このことから、ＳＤ78は他の遺構より先行する可能性が考えられる。以上のことから、今回検出した弥生時代の遺構は、弥生時代の終末から庄内期の前半に属する遺構と考えられる。

最後に炎天下の発掘作業に従事していただいた方々及び短期間に報告書を刊行するためにお手伝いしていただいた諸氏の氏名を記してお礼申し上げます。

大坂徹、森幸三、松下修、西村威、小川幸一、山内康資、柴崎俊也、藤江啓市、倉橋門治
任田邦嗣、飯田矩子、渡辺政子、永澤晴美、今村美子、安原文子、田所和佳、中野彰子、
辻林美幸、大西ひとみ、岩下まり子、谷阪智子、小西明子、背戸香津、加藤奈穂美、上田

直子、榎本雅子、有木久子、田路紀美子、美馬美佐緒、大棒邦子、平井二三子(故)、西森忠幸、神農恵津子、若松尚子、黒松恵。

注(1) 東大阪市遺跡保護調査会『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』1979年

(2) 水谷寿克・石井清司「京都府篠古窯跡群」(『第4回中世土器研究会発表要旨』、1985年)

(3) 荻田昭次『縄手の歴史散歩』1985年

(4) 原島礼二「県の成立とその性格」(『日本古代王権の形成』所収、1977年)

(5) 棚橋利光「御野県主神社」(『式内社調査報告』4〈河内国〉、1979年)

(6) (4)に同じ。

(7) 国史上に散見される美努(奴)連は次のとおりである。

美努連浄麻呂：『続日本紀』慶雲2年12月条～慶雲4年5月条

〃　岡麻呂：『続日本紀』霊亀2年正月条

〃　奥麻呂：『続日本紀』天平宝字8年10月条～神護景雲元年2月条

〃　智麻呂：『続日本紀』天平神護元年条～神護景雲3年条

〃　財女　：『続日本紀』天平神護2年条～宝亀元年4月条

難波部立足　：『続日本後紀』承和12年9月庚午条に、「筑前国宗形郡人権主工従八位上難波部主足。改本姓賜美努宿禰。貫河内国若江郡。」とある。

(8) 『韓式系土器研究』Ⅰ、2ページ、1987年

(9) 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅱ』1973年

(10) 東大阪市立郷土博物館『弥生人のくらし』図録

(11) 財団法人大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』1982年

(12) 財団法人東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第7次発掘報告―遺構編―』1984年

(13) 植附遺跡昭和61年の調査で壺と壺を合口にした棺が検出されている。

(14) 大阪府立花園高校地歴部「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970年

(15) 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡』1967年

(16) 芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報』1980年

(17) 東大阪市教育委員会「馬場川遺跡Ⅳ」1976年

観　察　表

ＳＫ３（第７図、図版三十三）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	甑	1	○30.1 ○30.4(推)	○平底の底部から屈曲してほぼ直線的に立ち上がり口縁部につづいている。端部で短く外反して丸く終る。 ○把手は内弯して先端部は上方につまみ上げている。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面は縦方向のハケメ調整ののち指でナデる。内面上半部はユビオサエを残し、下半部は板状工具により縦方向にナデ調整。	○精良、角閃石、雲母を含む砂粒を含む。 ○にぶい赤褐色5ＹＲ5/4。 ○焼成・良好

ＳＫ26（第19図、図版四十二）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	羽釜B	2	○不明 ○31.6(現)	○口縁部及び鍔部を欠く。 ○長胴形の体部。底部は丸く、砲弾状を呈する。肩の張りは認められない。	○現存の体部外面上位より中央まで縦方向のハケメ調整(8条/cm)。中央から底部まで斜方向→横方向のハケメ調整(7条/cm)。 ○内面は不定方向のユビオサエ痕がつく。	○やや粗い、角閃石、雲母を含む。生駒西麓産の土器。 ○内面・明褐色7.5ＹＲ5/8。外面・褐色7.5ＹＲ3/4。 ○焼成・良好。

ＮＲ１（第24図、図版三十六）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	鉢	3	○15.5 ○9.2	○底部は平底で体部は球体をなす。 ○内弯する上縁は、その端部に狭い面を有し、上端は粘土をつまみ上げているため、上端と内方に鋭い稜がつく。 ○口縁の１ヶ所に片口がつく。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部～底部外面はユビオサエののち上から下へヘラケズリで調整。 ○体部内面はハケメ調整(12条/cm)ののち、斜放射状の暗文がつづく。	○精良、長石、石英の砂粒を含む。 ○橙色5ＹＲ6/6。 ○焼成・良好。胴部下半に３cm大の円形黒斑が付く。(焼成時)

壺棺１・２・３（第32・33図、図版五十一）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
壺棺	鉢	4	○復口34.0 ○残高22.5 ○口縁½残	○底部欠損、壺棺１の蓋 ○すり鉢状の体部にゆるやかな外反する口縁部。端部は面をもって終る。 ○口縁部に片口をつくる。	○口縁部内外面ヨコナデ ○体部外面粗い叩目(2.5条/cm)下半ナデ調整。内面ナデ調整	○やや粗い。２～３mm大の角閃石多量。２～３mm大の長石粒、石英粒少量。 ○褐色(7.5ＹＲ3/4)
	壺 b_2	5	○底径4.2 ○残高52.2 ○体部以下完存	○口縁部欠損、壺棺１ ○最大復径が体部中位にあるほぼ球形の体部にわずかに突出した小さな平底がつく。 ○自立はできない。	○頸部に0.9cm間隔に刻目を施こした突帯を１条めぐらす。 ○体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	○やや粗い。２～３mm大の長石粒、１mm前後の石英、角閃石多量。 ○橙色(7.5ＹＲ6/6)
	壺 b_2	6	○底径5.4 ○残高48.2 ○体部以下完存	○口縁部欠損、壺棺２ ○最大復径が体部中位にある球形の体部にわずかに突出した小さな平底がつく。 ○体部下半に巾1.0cm、長さ15.6cmの横長の孔があけられている。 ○自立はできない。	○頸部に断面三角形の突帯をめぐらし、突帯の両面に刻目を施こす。 ○体部上半に波状文・直線文を交互に３条ずつ施こす。 ○体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整と思われるが、風化が激しく詳細不明。	○粗い。２～３mm大の長石、角閃石粒を多量に含む。 ○橙色 (5ＹＲ7/6)
	壺	7	○胴型27.0 ○残高16.7 ○胴部½残	○口縁部、底部欠損、壺棺３ ○最大復径が体部中位にある球形の体部	○体部外面叩目ののちナデ、下半は刷毛目調整、内面刷毛目調整。	○やや粗い。２～３mm大の閃緑岩。１mm大の角閃石多量。１～２mm大の長石も目立つ。 ○明赤褐色(5ＹＲ5/6)

ＳＫ５（第34・35図、図版三十三・三十四・三十五）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
黒色土器	椀 A1-b	8	○18.1 ○4.6 ○8.4	○平底の底部から口縁部まで内弯しながら続く。 ○口縁部は丸い。 ○高台は断面台形。	○口縁部外面、内面端はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエを施す。内面は縦方向の緻密なミガキ。 ○見込みに縦方向のミガキ。	○精良、長石、角閃石を微量に含む極細砂。 ○内面・黒色N3/。 外面・浅黄橙色10YR8/3。 ○焼成・良好。水ヒしているか。
	椀 A2	9	○17.9(復) ○4.2(現)	○平底の底部から口縁部まで内弯しながら続き、端部は内傾して沈線をもつ。 ○高台は断面三角形。	○口縁外面、内面端はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエを残す。内面は横→斜→横方向の緻密なミガキ。 ○見込みにはミガキなし。	○精良。 ○内面・黒色N3/。 外面・明黄褐色10YR6/6。 ○焼成・良好
須恵器	杯	10	○9.5 ○3.6	○やや丸底の底部から屈曲し体部上位より内弯ぎみに立ち上がる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部へ体部内外面はヨコナデ。 ○底部外面はヘラ切りの後未調整。内面は強い仕上げナデ。	○精良、長石微量に含む。 ○灰色N6/。 ○焼成・良好
土師器	杯 A2	11	○13.4 ○3.1	○平底からやや内弯して口縁部へ開く。 ○口縁部は短く外反し、端部は丸く納める。	○口縁部内外面は強いヨコナデ調整を行なっているため、外面下半に稜がつく。 ○体部から底部にかけて内外面ともユビオサエを残し、未調整。 ○ｅ手法。	○精良、長石、金雲母の細砂を含む。 ○橙色５ＹＲ6/6。 ○焼成・良好。
	椀	12	○16.1(復) ○4.6 ○7.3	○平底の底部から内弯気味に開き、体部下位で屈曲して外反しながら口縁部まで続く。 ○口縁部は、強く外反し、端部は丸く納める。 ○高台は断面台形。	○口縁部内部面とも強いヨコナデ調整。 ○体部外面は成形段階でのユビオサエ（逆時計回り）が残っており未調整。内面は風化のため調整は不明瞭。 ○ｅ手法。	○精良。 ○浅黄橙7.5ＹＲ8/4。 ○焼成・良好。
	甕	13	○18.3 ○16.4	○やや平底気味の丸底。 ○体部は中位から上位にかけて弱く張る。 ○口縁部は短く外反して立ち上がり、端部でさらに屈折して面をなす。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部から底部にかけて外面は逆時計回りのユビオサエを残し、未調整。体部内面は調整不明瞭。底部内面はユビオサエを残す。	○精良。 ○にぶい赤褐色５ＹＲ5/4。 ○焼成・良好。
	甕	14	○12.3 ○8.0(現)	○底部は欠損するが、扁平な体部に短く外反する口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○体部やや下位で弱く張る。	○口縁部内外面ともヨコナデ調整。 ○体部外面は調整不明瞭。内面上半部では頸部成形時のユビオサエののち板状工具で横へナデる。下半部はヘラケズリののちナデで調整。	○やや粗い、１～３㎜の砂粒を含む。 ○橙色2.5ＹＲ6/6。 ○焼成・良好。一部に煤付着。
	甕	15	○12.1 ○6.5(現)	○底部は欠損。 ○張りの小さい体部に短く外反する口縁部がつく。端部は丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整ののちヨコナデにより仕上げる。 ○体部外面は風化著しくユビオサエがかすかに残る。内面は逆時計回り方向の板状工具によるナデを行なう。	○やや粗く、角閃石、長石、石英、金雲母の砂粒を多量に含む。 ○明赤褐色2.5ＹＲ5/6。 ○焼成。
	甕	16	○16.2 ○10.4(現)	○底部から体部下半部を欠損。 ○体部は弱く張り、頸部で内弯しながら口縁端部へ短く外反し、丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整ののちヨコナデで仕上げる。 ○体部外面はユビオサエを残す。とくに下半部には人さし指で逆時計回りにユビオサエを施した痕が明瞭に残存。内面は上位にユビオサエが残り下位にヘラケズリを行なう。	○くさり礫、角閃石、長石、金雲母の砂粒（２～５㎜大）を多量に含む。 ○橙色５ＹＲ6/6。 ○焼成・良好。頸部より以下一面に煤付着。
	羽釜 A	17	○44.3 ○18.0(推)	○底部を欠く。 ○体部は中位で強く屈曲し外へ開く。 ○口縁部は内弯気味に開き、端部は丸く納める。 ○鍔は短く斜下方につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面とも時計回りのヨコナデ。 ○鍔部は外面ヨコナデ。内面はユビオサエを残す。 ○体部外面はナデ、内面は、ユビオサエを行なう。	○やや粗い、石英、長石角閃石等の砂粒を多量に含む。 ○黄褐色10ＹＲ5/6。 ○焼成・良好

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	羽釜A	18	○34.8(復) ○16.7(推)	○底部欠損。 ○体部はやや下位で強く屈曲し、外へ開く。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く納める。 ○鍔は短く水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部から鍔部にかけて内外面ともヨコナデ。 ○体部外面は口縁部から引き続きヨコナデを行ない、屈曲位より、下はタタキメを施す。内面はユビオサエを施す。	○やや粗い、1～5㎜の砂粒、石英、長石、雲母を含む。 ○にぶい赤褐色5YR5/3。 ○焼成・良好。
	羽釜A	19	○39.4 ○7.0(現)	○底部から体部下位を欠損。 ○体部は外へ開く。 ○口縁部は上方につまみ上げ、端部は面をなす。 ○鍔は短く斜下方につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○鍔部外面はヨコナデ調整、内面から体部にかけてユビオサエを残す。	○やや粗い、石英、長石、雲母、1～4㎜の砂粒を含む。 ○橙色7.5YR7/6。 ○焼成・良好。
	羽釜B	20	○21.5(復) ○5.8(現)	○底部、体部ともに欠く。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く納める。 ○鍔部は水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○鍔部外面はヨコナデ、内面はユビオサエを残す。	○やや粗い、1～5㎜の砂粒、角閃石を含む。 ○黄橙色7.5YR7/8。 ○焼成・良好。
	羽釜B	21	○21.7 ○5.6(現)	○底部体部ともに欠く。 ○口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く納める。 ○鍔部は短く水平につく。端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○鍔部外面はヨコナデ。内面はユビオサエを残す。	○やや粗い、1～4㎜の砂粒、角閃石を含む。 ○橙色7.5YR6/8。 ○焼成・良好。
	羽釜B	22	○23.4(復) ○5.7(現)	○底部、体部ともに欠く。 ○口縁部はやや外方へ開き、端部は丸く納める。 ○鍔部は水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデを施すが、その下にユビオサエが残る。内面はヨコナデ調整。 ○鍔部は外面ヨコナデ、内面はユビオサエを残す。	○精良。 ○橙色7.5YR7/6。 ○焼成・良好。
	甑	23	○不明 ○不明	○体部のみ残存。 ○内弯ぎみに立ち上がり、体部上位で内傾する。	○体部内外面ともユビオサエを残す。 ○底部外面はユビオサエ成形ののち、縦方向のハケメ調整、内面はユビオサエののち、ヘラケズリ。	○精良、石英・長石含む。 ○赤褐色5YR5/6。 ○焼成・不良。

SK6(第35図、図版三十三・三十四・三十五)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	24	○9.2 ○2.7	○平底から屈曲後、体部は上方へ大きく開く。 ○受部は短く斜上方へ伸びる。 ○立ち上がりは短く、鋭く内傾し、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○受部～体部外面上半部をヨコナデ。下半部は逆時計回りのヘラケズリ。底部外面はヘラ切り後未調整。 ○体部内面はヨコナデ。底部内面に仕上げナデ。	○精良、黒雲母、長石の砂粒を含む。 ○灰色7.5Y5/1。 ○焼成・良好。水ヒしている。
	杯	25	○11.0 ○3.0	○平底から外方へ開き、体部中位で屈曲して直線的に立ち上がる。 ○口縁部は丸く納める。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部外面はヘラ切りの後未調整。内面は仕上げナデ。	○精良、長石中量に含む。 ○暗緑灰7.5GY5/1。 ○焼成・良好。
土師器	杯A1	26	○16.0 ○3.9(推)	○丸底から外方へ開く体部が外反し、口縁部につづく。 ○口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は丸く納める。	○口縁部は内外面ともヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエを残す。内面は放射状の暗文。 ○底部内面はナデ調整。	○精良、長石、角閃石、くさり礫の細砂を含む。 ○橙色5YR6/6。 ○焼成・良好。水ヒしている。
	甕	27	○13.3 ○11.5	○丸底から球体に近い体部がつづく。 ○口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部でさらに外折して面をなす。	○口縁部内外面とも横方向のハケメ調整ののちヨコナデ。 ○体部～底部外面はユビオサエ成形ののち縦方向のハケメ調整。 ○体部内面上半部は板状工具による縦方向のナデ。下半部は時計回りのユビオサエが円周状に連なる。	○非常に精良。長石を微量に含む程度。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・良好。胴部外面上半に焼成時の黒斑あり。

ＳＥ２（第35図、図版三十三・三十五）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
黒色土器	鉢	28	○19.4(復) ○7.1(現)	○底部欠損。 ○ゆるやかに弯曲する体部に短く外反する口縁部がつづき、さらに端部で外折して面をなす。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面は逆時計回りのヘラケズリのあと、逆時計回りのヘラミガキを行なう。内面は緻密なヘラミガキ調整。	○精良、微量に長石が認められる。 ○内面・暗灰色N3/。 外面・にぶい褐色7.5YR6/3。 内面及び外面の口縁部下手（ヨコナデを施した範囲）まで黒色を示す。 ○焼成・良好
土師器	杯B	29	○16.4(復) ○3.3 ○5.2	○平底から外方へ大きく開いて立ち上がり、口縁部で短く外反する。 ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面ともヨコナデ。体部内面は風化激しいが、下半部はユビオサエを残す。 ○体部内面は風化のため調整法不明 ○ｅ手法。	○不良、長石、石英、角閃石、金雲母の砂粒を含む。 ○浅黄橙色10YR8/3。 ○焼成・やや不良。かなり摩耗している。
	椀	30	○15.0(復) ○4.0 ○6.7	○平底から内弯ぎみに立ち上がり、体部中位で屈曲して、口縁部まで大きく外方へ開く。 ○口縁部は短く外反して、端部は丸く納める。 ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面、体部内面は、29と同じ。 ○体部外面はユビオサエ成形ののちは未調整。 ○ｅ手法。	○石英、金雲母、角閃石の細砂を含む。 ○橙色7.5YR6/6。 ○焼成・やや不良。
	椀	31	○13.5(復) ○4.8 ○4.6	○30と同じ。	○口縁部内外面、体部外面は、30と同じ。 ○体部内面はナデ調整。 ○ｅ手法。	○長石、石英、金雲母の細砂を含む。 ○にぶい褐色7.5YR6/3。 ○焼成・良好。褐色灰(7.5YR5/1)を呈する斑らが点在する。
	甕	32	○17.0(復) ○4.6(現)	○口頸部のみ残存する。 ○内傾する体部に短く外反する口縁部がつづく。 ○口縁端部に外方へ傾く狭い面がある。	○口縁部～体部外面は一面に煤が付着しているため調整法不明。外端のみヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整。 ○体部内面はユビオサエを残す。	○長石、金雲母、石英、角閃石の砂粒を多量に含む。 ○褐色7.5YR5/3。 ○焼成・良好。

ＳＥ３（第35図、図版三十三・三十五）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	鉢	33	○23.9(復) ○3.1(現)	○底部及び体部下半部欠損。 ○内弯して開く体部に短く外傾する口縁部がつづく。 ○口縁端部は面をなす。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。	○精良。 ○灰白色10Y7/1。 ○焼成・良好。
黒色土器	椀 A_{1-a}	34	○14.1(復) ○4.7 ○6.4	○平底からゆるやかに内弯して体部から口縁部まで直線的に開く。 ○口縁端部はかすかに内傾して沈線をもち、丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面はすり石状のものでナデて仕上げる。内面はヘラミガミ。 ○見込みは縦方向のヘラミガキ調整。	○やや粗い、石英、長石、角閃石、くさり礫を含む。生駒西麓産の土器。 ○内面・黒色N2/。 ○外面・にぶい褐色7.5YR5/4。 ○焼成・良好。

ＮＲ２（第36図、図版三十六・四十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A_{1-a}	35	○13.6 ○3.9(推)	○天井部の大部分（口縁部とを分ける稜付近以外）をテイネイにヘラケズリ（時計回り）し、ほとんど平らにつくる。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は突出して、鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.0cmを測り、稜から先端まで垂直におちる。	○口縁部～体部内外面はヨコナデ。	○精良、長石含む細砂。 ○灰色N5/。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A_{1}-a	36	○12.5 ○4.6	○天井部は丸味を帯び、¾をヘラケズリ（時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜し段を構成する。	○35と同じ。	○精良、長石を含む細砂。 ○青灰色5BG⁶⁄₁。 ○焼成・良好。
	蓋 A_{1}-a	37	○14.4(復) ○4.7(推)	○天井部は丸く½をヘラケズリ（逆時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く、鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.1cmを測り、端面は内側に傾斜し、段を構成する。	○35と同じ。	○粗い、1～7㎜大の長石を多量に含み突出している。 ○灰色N⁶⁄₁。 ○焼成・良好。
	蓋 A_{1}-a'	38	○14.7 ○5.6	○天井部は丸くふくらんで、⅔をヘラケズリ（逆時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く丸味を帯びる。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.4cmを測り、端面は内側に傾斜し、段を構成する。	○35と同じ。	○やや粗い、長石含む細砂、7㎜大の礫がとび出している。 ○灰色N⁶⁄₁。 ○焼成・良好。
	蓋 A_{1}-b	39	○12.1(復) ○4.0(現)	○天井部の大部分を欠損。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く丸い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜し段を構成する。	○35と同じ。	○きわめて精良、長石、微量に含む。 ○暗緑灰色10G⁴⁄₁。 ○焼成・良好。
	蓋 A_{1}-b	40	○不明 ○不明	○天井部は扁平なつくりで、¾をヘラケズリ（逆時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は鋭く丸い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.5cmを測り、口縁部はほぼ垂直に下降し、端面はやや内側に傾斜して、内端に1条の沈線がめぐるが、段は構成しない。	○天井部内面に同心円文状のタタキメが見られる。	○精良、長石を中量含む。 ○灰色N⁶⁄₁。 ○焼成・良好。
	蓋 B	41	○15.1(復) ○4.2(現)	○自然釉が付着しているため、天井部のヘラケズリは不明だが、丸味をもっているので、広範囲にはわたらないと思われる。 ○天井部と口縁部とを分ける稜や凹線は認められない。 ○口縁部は外へ開いて、端部は丸く納める。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。	○やや粗雑、4㎜大の長石を含む。 ○灰色N⁵⁄₁。 ○焼成・良好。
	杯 A_{3}-a	42	○11.6(復) ○4.4(現)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾して先端は鋭い。 ○内面に段を構成する。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部はやや平扁で、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の¾である。	○35と同じ。	○精良。 ○灰色N⁵⁄₁。 ○焼成・良好。
	杯 A_{4}-b	43	○13.1(復) ○3.6(推)	○立ち上がりは1.0cmを測り、内傾しながら、先端で垂直に立ち、丸味をもつ。 ○受部は短く外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸味をおび、ヘラケズリ(逆時計回り)の½である。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部のヘラケズリは粗く、底部中央ではヘラ切り痕がそのまま残る。	○精良、長石、微量に含む。 ○灰色N⁵⁄₁。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	壺	44	○15.9(復) ○22.3(推)	○尖り気味の底部に、体部は丸くつくり、肩が張る。 ○頸部は外反しながら開き、口縁部は上下に拡張させている。 ○口縁端部は鋭いがやや丸味をもつ。	○外面底部から胴部にかけて、縦方向の平行タタキメが施され、胴部から頸部へ、その上にカキメ調整が行なわれる。 ○内面底部から体部全面に同心円状のタタキメを施す。 ○口縁部内外面、頸部内面はヨコナデ。	○精良、3㎜の砂粒を含む。 ○内面・灰色N5/。 外面・片部まで灰白色N8/。以下底部まで暗灰色N3/。 ○焼成・良好。

ピット内土器（第31図、図版四十二・四十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A_1-a	45	○不明 ○不明	○口縁部～体部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.6cmを測り、端部で短く外に開き、内側に段を構成する。		○精良、長石を中量含む。 ○灰色N6/。 ○焼成・良好。 ○SP20内出土。
	蓋 A_1-b	46	○不明 ○不明	○口縁部～体部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短いが、やや丸味を帯びる。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.1cmを測り、端面で内側に傾斜してわずかに段を構成するが、先端は丸く納めている。		○精良、長石多量に含む。 ○灰色7.5Y5/1。 ○焼成・良好。 ○SP22内出土。
	蓋 A_1-b	47	○不明 ○不明	○口縁部～体部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は鋭く、ほとんど外へ張り出さない。 ○口縁部先端から綾までの高さは2.2cmを測り、端面で内側に傾斜して段を構成するが、先端は丸く納めている。		○精良、長石微量に含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。 ○SP52内出土。
	杯 A_1-a	48	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○立ち上がりは2.5cmを測り、ほぼ垂直に立つ。先端は鋭い。 ○受部は水平に伸び、先端は鋭い。	○立ち上がりへ体部内外面のヨコナデ調整はきわめてテイネイである。	○精良、長石微量に含む。 ○灰色N5/1。 ○焼成・良好。 ○SP22内出土。
	杯 A_2-b	49	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○立ち上がりは1.6cmを測り、強く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は水平に伸び、先端は丸味を帯びる。		○精良、長石微量に含む。 ○灰色10Y5/1。 ○焼成・良好。体部外面に自然釉付着。 ○SP75内出土。
	杯 A_4-a	50	○不明 ○不明	○立ち上がり～体部のみ残存。 ○立ち上がりは0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に短く外反する。先端は鋭い。 ○受部は水平に伸び、先端は丸く納める。器厚は厚い(6㎜)。		○精良、長石微量に含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。 ○SP48内出土。
	高杯	51	○不明 ○不明	○脚部のみ残存。 ○筒部はゆるやかに外方に開いて裾部で段をなす。端部は内下方につまみ上げている。	○筒部外面は粗いカキメ調整。裾部～端部外面はヨコナデ。 ○筒部内面はシボリメ。	○精良。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。 ○SP23内出土。
土師器	壺	52	○不明 ○12.1(現) ○7.7	○平底から屈曲後、外傾して開き、体部中央でさらに屈曲して内弯する。	○体部外面上半は、縦方向のハケメ調整(6条/cm)。下半は斜方向のハケメ調整(6条/cm)を幾度か行なう。底部は横方向のハケメ調整（6条/cm)。 ○体部内面は最大径以下に逆時計回りのユビオサエ痕がつく。	○精良。 ○橙色5YR6/8。 ○焼成・良好。 ○SP7内出土。

ＳＤ65（第38図、図版三十七・三十八・四十五・四十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A1-a	53	○13.5 ○4.9	○天井部は扁平で、3/4をヘラケズリする。 ○天井部と口縁部とを分ける綾は短く突出して鋭い。 ○口縁部先端から綾までの高さは2.7cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○底部のヘラケズリの方向は不明。（自然釉付着のため） ○口縁部～体部内外面はヨコナデ。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰色５ＰＢ5/1。 ○焼成・良好。表面の摩耗が甚しい。
	蓋 A1-b	54	○13.9 ○5.1	○天井部は丸く、1/2をヘラケズリ（逆時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は丸味を帯びる。 ○口縁部先端から綾までの高さは2.7cmを測る。 ○口縁部はやや開いて下降し、端部はやや丸味をもつ。	○53と同じ。	○長石、角閃石等の砂粒を多量に含む。 ○灰色Ｎ6/。 ○焼成・不良。かなり摩滅し、胎土中の砂粒が表面に出ている。焼成時の歪みを口縁部にうける。
	蓋 A1-b	55	○13.9(復) ○5.2(推)	○天井部はやや丸味を帯び、3/4をヘラケズリ（時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける綾は、丸味をもつ。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.4cmを測り、端面は内側に傾斜して、段を構成する。	○53と同じ。	○精良、長石、金雲母、石英の砂粒を含む。 ○明青灰色５ＢＧ7/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A1-b	56	○14.2 ○5.3	○天井部は丸味を帯び、2/3をヘラケズリ（時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は鋭く、丸い。 ○口縁部先端から綾までの高さは2.2cmを測る。 ○口縁部はほぼ垂直に下降し、端部は丸味をもつ。	○53と同じ。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰色５Ｂ5/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A1-b	57	○13.0(復) ○4.5(推)	○天井部は扁平で、2/3をテイネイにヘラケズリ（時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は鋭く、丸い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.1cmを測り、端面でやや外反し、内側に段を構成する。	○53と同じ。	○やや不良、長石、チャートの砂粒を含む。 ○青灰色５Ｂ6/1。 ○焼成・良好。
	杯 A1-a	58	○12.9 ○5.5	○立ち上がりは2.1cmを測り、よく内傾し、端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に伸び、先端は鋭い。 ○底部はやや扁平で、ヘラケズリ（時計回り）は底部の3/4である。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部内面に仕上げナデあり。 ○底部内面に同心円文状のタタキメが残る。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰色10ＢＧ6/1。 ○焼成・良好。
	杯 A1-a	59	○12.6 ○5.3	○立ち上がりは2.0cmを測り、内傾して、端面はやや外に開くが、内側に鋭い段を構成する。 ○受部は水平からやや外上方に伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸く、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の1/3である。	○底部内面の仕上げナデは認められない。	○精良、長石を含む砂粒を多量に含む。 ○灰白色10Ｙ7/1。 ○焼成・良好。乾燥時の歪みあり。
	杯 A2-a	60	○12.5(復) ○4.9(推)	○立ち上がりは1.7cmを測り、ほぼ垂直に立ち、端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に短く伸び、先端はきわめて鋭い。 ○底部はほぼ扁平でヘラケズリは底部の3/4である。	○底部内面の仕上げナデは認められない。 ○自然釉付着のため、ヘラケズリの方向は不明。	○精良。 ○内面・灰白色Ｎ7/。 外面・オリーブ色 2.5ＧＹ6/1。 ○焼成・良好。外面に灰釉付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯 A_2-a	61	○15.5(復) ○4.8(推)	○立ち上がりは1.7cmを測り、垂直に立ち、先端は鋭い。内側にかすかに段を構成する。 ○受部は外上方へ伸び、先端は鋭い。 ○底部はやや扁平で、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の⅔である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○明青灰色10BG 7/1。 ○焼成・良好。表面の摩滅が甚しい。
	杯 A_2-a	62	○12.0 ○5.2	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾して、先端は鋭いが段はない。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ（時計回り）は底部の⅔である。	○58と同じ。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰色5B 6/1。 ○焼成・良好。口縁が乾燥時に歪んで、だ円を呈している。
	杯 A_2-a	63	○9.5(復) ○4.9(推)	○立ち上がりは1.6cmを測り、内傾して、端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平からやや外上方に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸く、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の½である。		○精良、長石、黒雲母を砂粒で含む。 ○灰色N 5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-b	64	○13.6(復) ○5.3	○立ち上がりは2.0cmを測り、垂直に立ち、先端は丸く納める。 ○受部はやや外上方へ伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸く、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の½である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○青灰色10BG 5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-b	65	○13.7(復) ○4.5(現)	○立ち上がりは1.9cmを測り、内傾し、先端は丸く納める。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸味をもつ。 ○底部の大部分を欠損しているため、形状不明。	○底部のヘラケズリは時計回り。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○明青灰色5PB 7/1。 （自然釉部・青黒色 5BG 1.7/1）。 ○焼成・良好。体部外面に部分的な自然釉、受部に指圧痕2ヶ所有り。
	杯 A_2-b	66	○12.9(復) ○5.1	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾して、先端は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部はやや外上方に伸び、先端は丸味を帯びる。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の½である。		○精良、長石を含む砂粒を含む。 ○青灰色10BG 5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-b	67	○13.7(復) ○5.9(推)	○立ち上がりは1.7cmを測り、ほぼ垂直に立ち、先端は丸く納める。 ○受部はやや外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の½である。		○精良、長石の砂粒を含む。 ○灰色10Y 5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-b	68	○14.2(復) ○4.3(推)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾して、端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に伸び、先端は丸味を帯びる。 ○底部はやや歪んで、扁平な感じである。ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の⅔である。		○精良、長石の砂粒を微量を含む。 ○青灰色10BG 5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-b	69	○12.5(復) ○4.7(推)	○立ち上がりは1.5cmを測り、内傾して、先端は丸く納める。 ○受部は水平に伸び、先端は丸味を帯びる。 ○底部は丸く、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の⅓である。		○精良、長石を含む砂粒を含む。 ○青灰色5B 6/1。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯 A_{3}-a	70	○12.4(復) ○4.5	○立ち上がりは1.3cmを測り、やや内傾し、端面はほぼ垂直に立ち、内側に段を構成する。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は扁平で、ヘラケズリ(逆時計回り)は底部の⅔である。	○仕上げナデは認められない。 ○底部のヘラケズリはテイネイに行なわれている。	○精良、長石、金雲母の砂粒を含む。 ○青灰色10BG5/1。 ○焼成・良好。
	高杯	71	○11.4 ○10.8 ○7.9	○杯部は浅く、口縁部は短く外反する。体部との境に1条の凹線(幅2㎜)がめぐる。 ○脚部は細長くラッパ状に開き裾部で段をなす。脚端部内下方につまみ上げており、先端は鋭い。 ○脚部の透し孔は四角形で三方にあけられている。	○口縁部内外面、体部内面ともヨコナデ調整。杯底部内面に仕上げナデが認められる。 ○体部外面は時計回りのテイネイなヘラケズリを行なう。 ○脚筒部にカキメを施す。 ○裾部～端部はテイネイなヨコナデ調整。	○精良、長石を多量に含む。 ○灰白色10Y8/1。 ○焼成・良好。
	提瓶	72	○7.1(復) ○8.0(現)	○口頸部～肩部のみ残存。 ○短く外反する口頸の端部は外方につまみ出され、頸部との境は段をなす。 ○体部前面は丸くふくれ、背面は扁平。 ○体部両側の耳は環状。	○頸部外面はカキメ調整。 ○体部前面は自然釉付着のため調整法不明。	○精良、1～3㎜の砂粒を含む。 ○内面・灰色N5/。 外面・明緑灰色10G7/1。 ○焼成・良好。外面に灰釉付着。
土師器	杯 B	73	○12.1(復) ○4.0(現)	○平底から内弯気味に開いて、そのまま口縁端部までつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○摩耗のため内外面とも調整法不明	○粗い、石英、長石、角閃石の砂粒を多量に含む。 ○にぶい赤褐色2.5YR5/4。 ○焼成・不良。
	鉢	74	○10.7(復) ○6.2	○やや上げ底の底部から屈曲後、直線的に、ラッパ状に大きく開いて口縁部に続く。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面、体部～底部内面はヨコナデ調整。 ○体部外面はハケメ調整(14条/cm)。 ○底部は外周から中心に向かってのヘラケズリ。	○きわめて精良、砂粒は認められない。水ヒを行なう。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・良好。
	壺	75	○11.5(復) ○9.4	○底部は丸底でやや扁平なつくりの体部。 ○口径と胴部径はほぼ同じ。 ○口縁部はゆるやかに開いて外反する。端部は丸く納める。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部はヘラケズリと思われるが、摩耗のため方向不明。	○きわめて精良、1～3㎜大の砂粒を微量に含む。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・良好。
	甕 B_{1}	76	○19.7(復) ○2.4(現)	○口縁部のみ残存。 ○短く外反する口縁部。 ○端部はわずかに面をなす。	○内外面ともにヨコナデ調整するほか、頸部外面にはヘラ状工具によるあたりがつく。	○精良、0.5～2㎜の砂粒、雲母を含む。 ○橙色5YR6/6。 ○焼成・良好。
	羽釜	77	○17.5(推) ○5.0(現)	○鍔部周辺のみ残存。 ○内傾する体部に外反する口縁部がつく。 ○鍔部は水平につき、端部は丸く納める。	○体部内面にユビオサエ痕が残る以外は内外面ともヨコナデ。	○精良、1～4㎜の砂粒、雲母を含む。 ○にぶい赤褐色5YR5/4。 ○焼成・良好。

S D67 (第39・40図、図版三十九・四十・四十一・四十二・四十五・四十七)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A_{2}-a	78	○14.6 ○3.8(現)	○天井部と口縁部との境界に1条の凹線(幅2㎜)がめぐる。 ○口縁部はやや外方に下降し、端部でさらに外折し、鋭い。 ○天井部は大部分を欠損するが丸味をもつと考えられる。	○底部は逆時計回りのヘラケズリのあと不定方向のナデ調整。	○精良。 ○明青灰色5B7/1。 ○焼成・良好。
	蓋 B	79	○12.3 ○3.5	○天井部と口縁部とを分ける稜や凹線は認められない。 ○天井部のヘラケズリは認められない。 ○口縁部はやや開き気味に下降し、先端は丸味を帯びる。	○天井項部はヘラ切り後、粗いナデを施す。 ○全体に調整は粗い。	○精良。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯 A_2-a	80	○10.8(復) ○5.0(推)	○立ち上がりは1.6cmを測り、ほぼ垂直に立つ。端面はわずかに外反し、内側に段を構成する。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は鋭い。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、長石を0.1～1mmの砂粒で含む。 ○青灰色5B5/1 ○焼成・良好
	杯 A_2-b	81	○14.1(復) ○4.8(推)	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾して、先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリの方向は不明。	○精良、長石の砂粒を含む。 ○灰白色N7/。 ○焼成・良好。
	杯 A_3-a	82	○12.2(復) ○4.2(現)	○立ち上がりは1.4cmを測り、強く内傾する。先端は鋭いが、端面の内側に段はない。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。	○底部にヘラケズリがみられるが、方向は不明。	○精良。 ○灰白色N7/。 ○焼成・良好。
	杯 A_4-b	83	○12.2(復) ○2.5(現)	○立ち上がりは0.8cmを測り、逆「ノ」の字状に短く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。	○口縁部～体部内外面はヨコナデ。	○精良。 ○灰白色N8/。 ○焼成・良好。
	杯 A_4-b	84	○12.9(復) ○3.9(推)	○立ち上がりは、0.7cmを測る。立ち上がりの形態は83と同じ。 ○受部は水平にやや長めに伸び先端は丸く納める。 ○底部は扁平。	○底部は逆時計回りのカキメ調整(9条/cm)を施す。	○精良。 ○青灰色10BG5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_4-b	85	○11.7 ○2.5	○立ち上がりは、0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に短く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平だが凹凸激しい。	○体部外面に強くヨコナデ調整を行なう。 ○底部はヘラ切りの後未調整。	○精良。 ○灰白色N7/。 ○焼成・良好。
	杯 A_4-b	86	○10.0(復) ○3.4	○立ち上がりは0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に短く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は83と同じ。	○83と同じ。	○精良。 ○青灰色10BG5/1。 ○焼成・良好。
	杯 B	87	○9.6 ○3.7	○体部と底部とは明瞭な角度で分かれる。 ○体部は直線的に外上方に伸びそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部はヘラ切りの後未調整。 ○底部内面に渦巻状の仕上げナデが認められる。	○精良。 ○内面・灰白色N8/。 外面・灰白色7.5Y7/1。 ○焼成・良好。
	瓶	88	○11.7(推) ○15.4(推)	○頸部はきわめて細く、口頸部は大きくラッパ状に開く。 ○頸部やや下位に2条の凹線をめぐらし、口縁部との間に櫛描き斜線を施すが、頸部上位に凹線を1条めぐらせることにより櫛描き斜線を中断させている。 ○肩部に1条、体部下位に1条の凹線をめぐらし、その間に櫛描きより点文をめぐらす。	○底部はナデ調整による。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○明青灰色5B7/1。 ○焼成・良好。
	瓶	89	○不明 ○9.9(推)	○頸部は太く、口頸部は外反して開く。 ○体部はやや上位で肩が張る。	○頸部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部は粗い逆時計回りのヘラケズり。	○やや粗い、長石多量に含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	提瓶	90	○5.5(推) ○21.1(推)	○口縁部欠損。 ○口頸部は短く外反する。 ○体部は前面が丸くふくれ、背面は平らである。 ○体部両側の耳は環状	○体部前面は回転を利用したカキメ調整。	○精良。 ○灰色N6/。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	提瓶	91	○不明 ○15.4(現)	○口頸部欠損。 ○口頸部は短く外反するか。 ○体部前面はあまりふくらみをもたず、中央で内側に凹む。背面は斜めに扁平となっている。 ○体部両側の耳は円形粘土を貼り付けたものである。	○体部前面は回転を利用したカキメ調整。 ○体部背面は中心から外周に向う逆時計回りのヘラケズリ。	○精良、0.5mmの砂粒を多く含む。 ○灰色7.5Y5/1。 ○焼成・良好。
	甕A	92	○21.6(復) ○18.7(現)	○口頸部～肩部のみ残存。 ○短く外反する口頸部は、端部で上方につまみ上げて面をなす。外面上位に断面半円形の段をつくり外面端との間に1条の浅い凹線をめぐらす。 ○最大径は高位置。	○口頸部内外面ともヨコナデ。 ○肩部内面に同心円文のタタキメを施す。 ○肩部外面は自然釉付着のため不明。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○内面・明青灰色5B7/1。 外面・青灰色5B5/1。 断面・紫灰色5RP5/1。 ○焼成・良好。
	甕B	93	○不明 ○不明	○口頸部のみ残存。 ○短く外反する口頸の端部は直立して頸部との境界は段をなす。 ○提瓶の口頸部かもしれない。	○内外面ともヨコナデ。特に、頸部外面はテイネイなヨコナデを施す。	○精良、長石中量に含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	甕A	94	○22.0(復) ○3.2(現)	○口頸部のみ残存。 ○外反する口頸部は端部で下方に伸びる。	○内外面ともヨコナデ。	○精良。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	甕B	95	○24.8 ○7.3(現)	○口頸部～肩部のみ残存。 ○短く外反する口頸部は端部で水平に粘土を引き出して丸く仕上げる。 ○体部はあまり肩が張らず、最大径は中位置になるようである。	○口径部～体部内外面ともヨコナデ。 ○肩部内面は同心円文のタタキメを施したのち、ヨコナデで仕上げる。	○精良、0.1～3mmの長石を砂粒で含む。 ○灰色N6/。 ○焼成・良好。
土師器	杯A_2	96	○12.3 ○3.9	○やや上げ底の底部から内弯気味に開き口縁部で直線的に外傾する。 ○口縁端部はわずかに外反して丸く納める。 ○体部中央のヘラミガキ痕が凹線状に1条めぐる。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面は不定方向のヘラケズリ。内面は放射状の暗文。	○精良。 ○橙色2.5YR7/8。 ○焼成・良好。
	杯B	97	○10.7(復) ○3.5	○丸底から内弯して開き、口縁部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は外反して鋭い。 ○器表面の摩耗がはなはだしい。	○内外面ともヨコナデ調整。体部外面にかすかにユビオサエ痕が部分的に認められる。	○精良。 ○橙色2.5YR7/8。 ○焼成・良好。
	杯B	98	○11.1(復) ○3.3	○平底から屈曲後内弯して開きそのまま口縁部につづき、端部はわずかに外反して丸く納める。	○内外面は97と同じ。 ○口縁端部のみ強いヨコナデ。	○精良、微量に長石が認められる。 ○明赤褐色5YR5/6。 ○焼成・良好。
	杯B	99	○11.5 ○3.4	○丸底から内弯気味に開き、口縁部で外反し、そのまま端部につづき、丸く納める。	○内外面は97と同じ。	○やや粗い、長石が多量に認められる。 ○橙色5YR6/6。 ○焼成・良好。
	杯B	100	○9.8 ○3.7(現)	○底部欠損。 ○内弯して開く体部に口縁部は垂直気味に立ち上がる。 ○口縁端部は外反して丸く納める。	○内外面は97と同じ。	○精良。 ○浅黄橙色7.5YR8/6。 ○焼成・良好。
	杯B	101	○17.5 ○4.3(現)	○内弯して開く体部がそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部は外反して丸く納める。	○摩耗のため調整法不明。	○精良。 ○赤褐色5YR4/6。 ○焼成・良好。
	杯B	102	○9.0 ○3.1	○口縁部欠損。 ○丸底から体部は内弯して開く。	○器表面の摩耗がはなはだしく調整法不明。 ○底部にユビオサエが残る。	○精良。 ○橙色5YR6/8。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	高杯B	103	○17.3 ○6.2(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部はやや深みをもつ。 ○平らな杯底部の内周に粘土をつぎたして外上方に開くため外面に接合時の段がつく。杯口縁部は短く外反し、鋭い。	○口縁部内外面はヨコナデ調整。 ○体部外面はユビオサエののち粗いナデ調整。内面は下放射状の暗文がつく。 ○杯底部は縦方向（上→下）のヘラミガキ調整。 ○脚柱状部内面にシボリメの痕跡を残す。	○精良、微砂粒を含む。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・ふつう。
	高杯B	104	○16.0(復) ○5.5(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部は浅い。以下103と同じ。	○杯部の調整法は103と同じ。	○精良。 ○赤褐色5YR3/8。 ○焼成・良好。
	高杯B	105	○18.2(復) ○4.0(現)	○104と同じ。	○杯部の調整法は103と同じ。	○精良、長石が微量に認められる。 ○橙色5YR6/8。 ○焼成・良好。
	高杯A	106	○16.6 ○5.7(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部は深く、平底よりゆるやかに開き、体部下位で屈曲して、口縁部まで外反してつづく。 ○口縁部と体部との境界には浅い段がつく。 ○口縁端部は鋭く光る。	○内外面ともヨコナデ。	○精良。 ○浅黄橙色7.5YR8/6。 ○焼成・良好。
	壺	107	○不明 ○11.9(現)	○口縁部は欠損。 ○底部は平底で体部は丸くふくらむ。 ○体部上位から中央にかけて浅い凹線を3条めぐらし、その間に櫛描き波状文をめぐらす。	○体部内面はナデ調整。他は摩耗のため不明。	○精良。長石微量に含む。 ○淡橙色5YR8/4。 ○焼成・良好。
	甕B2	108	○16.7 ○7.7	○口縁部はよくゆるやかに外反する。端部は内方にわずかに粘土がふくれる。 ○口径より、胴部径が大きい。	○口縁端部は内外面ともヨコナデ調整。 ○体部外面にハケメ調整。内面にユビオサエ痕がわずかに認められるが、摩耗のため詳細は不明。	○精良、1～3mmの砂粒、多くの雲母を含む。 ○赤褐色5YR3/8。 ○焼成・良好
	羽釜	109	○22.4 ○6.2(現)	○口縁部～鍔部のみ残存。 ○口縁部はゆるやかに外反し、端部はわずかに面をなす。 ○鍔部は外上方につき、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○鍔部はナデ。 ○体部内面はユビオサエののちナデ。	○精良、1～2mmの砂粒、角閃石、くさり礫、雲母を多く含む。 ○赤橙色～茶橙色10R6/8。 ○焼成・良好。

S K25（第41図、図版四十二・四十三・四十四）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯A3-a	110	○不明 ○不明	○立ち上がりは1.1cmを測り、逆「ノ」の字状に短く内傾する。先端は鋭く光っている。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。		○精良、長石微量に含む。 ○明青灰10BG7/1。 ○焼成・良好。
	高杯	111	○15.2 ○10.0 ○9.8	○杯部は浅く大きい。体部と口縁部との境に1条の稜がめぐり、稜は丸味をもつ。口縁部は丸く納める。 ○脚部は低い。筒部はゆるやかに外方へ開き、裾部で大きく広がって、脚端部につづく。端部は丸く納めている。	○口縁部内外面はテイネイなヨコナデ。体部へ底部内面には不定方向のナデを行なう。 ○杯体部～底部外面は手持ちによる時計回りのヘラケズリののち、部分的に底部から体部に向かってナデが認められる。 ○脚筒部～端部外面、裾部～端部内面ともにテイネイなヨコナデ。筒部内面にシボリメを行なう。	○精良、長石が微かに認められる。 ○青灰色5B6/1。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	壺	112	○8.9 ○9.8	○頸部は太く、短く外反して開き、口縁部で急に屈折して直線的にラッパ状に開くため、境界が強い稜となり1条の凹線がめぐる。口縁端部は丸味をもつ。 ○体部は丸くふくらんで肩の張りは少ない。 ○穿孔直前の瑕の未製品か。	○口縁部内外面、体部内面ともテイネイなヨコナデ調整。 ○体部上半部はヨコナデ調整。体部下半～底部は、手持ちによる逆時計回りのヘラケズリののち、さらに下から上にヘラケズリを行ない仕上げとする。	○非常に精良、微細な長石が認められる。 ○灰色N6/。 ○焼成・良好。
	提瓶	113	○7.5 ○6.1(現)	○口頸部のみ残存。 ○口頸部は外反して開くが、端部で内弯して漏斗状をなす。	○口頸部内面は密なヨコナデ調整。	○精良、長石を含む砂粒。 ○灰色N6/。 ○焼成・良好。
土師器	杯B	114	○14.5 ○3.9(現)	○口縁部～体部のみ残存。 ○内弯して開く体部から、そのまま口縁端部にまでつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○内外面ともヨコナデ。	○精良、微砂粒、雲母を含む。 ○橙色5YR6/6。 ○焼成・ふつう。
	高杯A	115	○13.5 ○11.7 ○8.7	○杯部は丸底から大きく開き、体部下位でさらに外方へ外傾して開いて、口縁部につづく。口縁端部は丸く縮める。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がり、脚高1/4下方でラッパ状に広がり、脚端はヘラで切断するため、断面角形になり稜がつく。	○摩耗のため調整法不明。ただ脚部柱状部内面にシボリメを残す。	○粗い、細かい砂粒を多量、雲母を含む。 ○浅黄橙色(7.5YR8/4) ○焼成・ふつう。摩耗著しい。底部末端の一部黒色呈す。
	高杯A	116	○12.9(復) ○9.5(現)	○杯部は丸底からよく内弯して開き、そのまま口縁部につづく。口縁端部は丸く納める。 ○柱状部はゆるやかに下方へ広がる。	○杯部、口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面に部分的にハケメ調整法が残るが、その他は摩耗激しく不明。	○精良、長石を0.1～3mmの砂粒で含む。 ○橙色 5YR7/6。 ○焼成・ふつう・杯部外面にごく少量の煤付着。
	高杯A	117	○14.7(復) ○13.1 ○11.1	○丸底から内弯して開き、口縁部ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は丸く納める。 ○柱状部はゆるやかに下方に広がるが、脚高2/3下方で直線的に広がるため内面に稜がつく。脚端は丸く納める。	○摩耗激しく調整法不明。	○やや精良、0.1～6mmの砂粒で含む長石、少量の雲母を含む。 ○橙色7.5YR7/6。 一部橙色2.5YR7/6。 ○焼成・ふつう。一部赤色化。
	高杯	118	○不明 ○6.4 ○10.2	○脚部のみ残存。 ○柱状部はゆるやかに下方に広がり、現脚高1/2下方で急にラッパ状に広がり、脚端はヘラで切断するため、断面角形になり稜がつく。	○柱状部の内面にシボリメがつく。	○やや精良、0.1～3mmの砂粒で含む長石、多量の雲母を含む。 ○橙色 5YR7/6。 ○焼成・ふつう。黒色化部分有り。(黒斑か)
	鉢	119	○12.0 ○6.0	○丸底から屈曲し、体部はほぼまっすぐに立ち上がる。 ○口縁部は外反し、端部は丸く納める。	○口縁部内外面とも横方向のハケメ調整(11条/cm)。 ○体部外面は横方向のハケメののち、縦方向のハケメ調整。	○精良、長石、石英、くさり礫、チャート、角閃石を含む。 ○橙色7.5YR6/6。 ○焼成・良好。
	壺	120	○9.7 ○13.0	○丸底で体部中央やや上位で張りをもつ。 ○ゆるやかに外傾し、線端で短く外反する口縁部。端部は丸く納める。	○外面は摩耗のため調整法不明。 ○体部内面は上半にユビオサエを残し、下半は時計回りにヘラケズリを施す。	○やや精良、細かい砂粒で含む長石、雲母を含む。 ○浅黄橙色(7.5YR8/6)0.5×橙色(7.5YR7/6)0.5。 ○焼成・ふつう。器体外面及び口縁部内面に黒色の有機物(多量に雲母を含む)。内面体部から底部の広範囲に煤付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	壺	121	○8.2 ○7.9	○平底気味の底部から体部は内弯して開き、口縁部につづく。 ○口縁部はやや外反気味に立ち上がる。端面は手づくねのため不整備面。	○内外面とも粗いナデ。	○長石、石英、黒雲母等を砂粒で含む。 ○灰オリーブ色5Y½。 ○焼成・不良。
	甕 B2	122	○15.0(復) ○10.9(現)	○口径よりも胴部径が大きい。 ○口縁部は短く外反し、端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面は板状工具によるナデ調整。 ○体部内面はユビオサエののち、斜方向→縦方向（上→下）の順でヘラケズリする。	○やや精良、1.5mm以下の砂粒で含む長石、多量の雲母を含む。 ○明赤褐色5YR⅝。 ○焼成・ふつう。外面が全体に黒っぽく変色。
	甕 A2	123	○15.3 ○29.9	○ゆるやかに外反する口縁部。端部は外方につまみ出してナデルため丸く納める。 ○長胴形の体部。最大径は体部ほぼ中央にある。	○口縁部内外面ともテイネイなナデ。頸部内面には粗い横方向のハケメ調整。 ○体部外面は土器の接合面を平滑にするために板状工具によるゆるいナデ調整。内面は下から上へヘラケズリする。また、成形時の当て板痕がみられる。	○細かな胎土、長石、石英、角閃石、くさり礫、金雲母を含む。 ○明赤褐色5YR⅝。 ○焼成・良好。体部外面に黒斑。
	甕 B1	124	○19.4 ○31.9	○「く」の字状に外反する口縁部。口縁端部は面をなす。 ○球形の体部口径より腹部径が大きく、最大径は体部ほぼ中央にある。	○口縁部内外面ともテイネイなヨコナデ。 ○体部上位より下位まで1単位2.8cmの縄席文のタタキメが7単位つけられる。底部は斜格子目のタタキメが施されている。内面はナデ調整。	○精良、長石、角閃石を含む。 ○明赤褐色5YR⅝。 ○焼成・良好。
	羽釜	125	○20.9 ○7.1(現)	○口縁部～鍔部のみ残存。 ○やや内傾する体部に大きく外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く納める。 ○鍔部は水平につき、端部は丸く納める。	○内外面ともヨコナデ。	○やや粗い、0.1～4mmの長石、角閃石の砂粒、雲母を多量に含む。 ○にぶい橙色7.5YR⅝。 ○焼成・ふつう。体部の一部除き、大部分黒色化。（使用時に付着した煤と思われる。）

第4層（第42図、図版三十五・四十八・四十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 B	126	○11.0(復) ○4.0(推)	○天井部と口縁部とを分ける凹線は認められない。 ○口縁部は無線から内傾して下降し、端部は鋭角的であるが丸く納める。	○口縁部～天井部の内外面ともヨコナデ。天井部へラケズリは認められない。	○精良、微砂粒を含む。 ○内面・灰色N⅞。 ○焼成・ふつう。外面は緑色及び黒色の自然釉付着。一部剝離により、生地色が出ている。
	蓋 B	127	○11.3(復) ○3.0	○天井部と口縁部とを分ける凹線や稜は認められない。 ○口縁端部は丸くなって終る。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部～天井部外面は時計回りのヘラケズリ。天井頂点は未調整。 ○体部～天井部内面はヨコナデ。	○精良、0.2～2mmの砂粒を含む。 ○内面・暗灰色N⅜。 外面・灰色N⅝。 ○焼成・ふつう。内外面に自然釉付着。後に剝脱したか、焼成時の変色かで一部灰変。
	杯 A4-a	128	○12.4(復) ○3.3(現)	○底部欠損。 ○立ち上がりは短く（1cm）内傾し、先端はやや鋭い。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸くなって終る。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。 ○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の0.5～2mmの砂粒を含む。 ○青灰色5B⅝。 ○焼成・良好。
	杯 A4-a	129	○12.8(復) ○3.5(現)	○128と同じ。	○128と同じ。 ○体部内面にユビオサエ（成形時）が残る。	○精良、0.1～2mmの砂粒を多量に含む。 ○内面・青灰色5B⅝。 ○焼成・良好。外面全体に自然釉付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯 A_{4}-a	130	○12.6(復) ○3.1(現)	○128と同じ。	○128と同じ。	○精良、0.1～2㎜の砂粒を含む。 ○内面・青灰色5PB5/1。外面・暗青灰色5B3/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{4}-a	131	○12.1(復) ○3.5(現)	○128と同じ。	○128と同じ。	○精良、1～2㎜の砂粒を含む。 ○灰白色N7/0。 ○焼成・良好。外面に自然釉が一部付着。
	杯 A_{5}-a	132	○10.3(復) ○3.5(推)	○128と同じ。	○128と同じ。	○精良、0.5～1㎜の砂粒を含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{5}-a	133	○10.4 ○3.4	○立ち上がりは短く(0.3cm)内傾し、先端は鋭い。 ○受部は水平から外上方気味に伸び、先端は丸く納める。	○口縁部内外面、底部内面はヨコナデ。底部内面に仕上げナデあり。 ○底部外面はヘラ切りの後、未調整。	○精良、長石を砂粒で含む。 ○明青灰色5B7/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{6}-a	134	○10.3(復) ○2.5(推)	○小形化を示し、立ち上がりは強く内傾し、先端は鋭い。 ○受部は外上方に大きく伸び、高さは立ち上がりとほぼ同高である。	○口縁部内外面、底部内面はヨコナデ。 ○底部外面は未調整。	○精良、少量の砂粒を含む。 ○青灰色5BG5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{6}-a	135	○11.0(復) ○2.7(推)	○134と同じ。	○134と同じ。	○精良。 ○緑灰色10GY5/1。 ○焼成・良好。
	壺	136	○8.2(復) ○6.9(現)	○口縁部欠損。 ○平底から大きく開いて立ち、屈曲後強く内弯する。	○体部外面上半部～内面はヨコナデ。 ○体部外面下半部に手持ちによるヘラケズリを残す。 ○底部はヘラケズリ後未調整。	○精良、少量の微砂粒、1～3㎜の砂粒を含む。 ○にぶい黄橙色10YR7/3。 ○焼成・良好。生焼きでは。(一見、土師器色を呈す。)
	鉢	137	○11.0(現) ○9.5(復) ○8.5	○底部中央が孔穴の欠損。口縁部は欠く。 ○体部は外方へ開く。体部中央に2条の浅い凹線をめぐらす。	○体部内外面ともヨコナデ。 ○底部側面、外面とも不定方向のヘラケズリ。	○精良、2㎜大の砂粒数個含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。自然釉のため外面灰変。
土師器	杯 A_{1}	138	○17.5(復) ○4.3(現)	○底部欠損。 ○内弯して立ち上がる体部がそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部はわずかに内傾し、軽く巻き込む。	○口縁部内外面ともヨコナデ調整。 ○体部外面は風化のため調整法不明。 ○体部内面はヨコナデののち放射状の暗文。	○やや精良、微砂粒を含む。 ○橙色5YR6/6。 ○焼成・ふつう。
	杯 A_{1}	139	○17.1(復) ○5.3(現)	○底部欠損。 ○内弯して立ち上がる体部がそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部外面と内面端をヨコナデ調整。 ○体部外面上半部はヘラケズリ、ヨコナデののちミガキ調整。下半分はヘラケズリ(時計回り)。 ○体部内面は放射状の暗文。	○精良、0.5㎜以下の微砂粒を含む。 ○橙色2.5YR6/8。 (摩滅部断面・浅黄橙色10YR8/3。) ○焼成・ふつう。
	杯 A_{2}	140	○10.6(復) ○3.9(現)	○底部欠損。 ○体部は内弯して立ち上がり、そのまま口縁部につづく。 ○口縁端部はわずかに外反し、丸く納める。	○口縁部外面は1.7cm毎に軽くユビオサエしたあと、テイネイなヨコナデ調整。内面はヨコナデ調整。 ○体部外面はヘラケズリ(時計回り)の後、粗いナデ。内面はヨコナデの後、放射状の暗文。	○精良、0.1～2.5㎜の砂粒で含む長石、雲母を含む。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・ふつう。
	杯 A_{2}	141	○11.4(復) ○3.1	○中央部が上げ底になる底部から内弯しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は内傾し、軽く巻きこむ。	○口縁部内外面ともヨコナデ調整。 ○体部～底部外面はユビオサエが残る。 ○体部内面は緻密な放射状の暗文。	○精良。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・良好。煤付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	杯B	142	○14.7(復) ○4.4	○平底から内弯しながら続く体部がそのまま口縁部までつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部内外面とも磨耗はげしく調整法不明。	○精良。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・良好。煤付着。
	杯B	143	○13.3(復) ○2.6	○平底から外方へ大きく開いて立ち上がり、口縁部で内弯する。 ○口縁端部は内傾し、丸く納める。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ。調整。 ○体部下部～底部外面はユビオサエを残す。	○比較的精良、長石を0.1～2mmの砂粒で含む。 ○にぶい橙色(5YR6/4)0.7×橙色(5YR7/6)0.3 ○焼成・ふつう。
	甕A1	144	○21.3(復) ○4.0(現)	○口頸部のみ残存。 ○やや肩の張る体部に短く外反する口頸部がつづく。 ○口縁端部は面をなす。	○口縁部外面及び内面端はヨコナデ。内面は斜方向から横方向のハケメ調整。 ○頸部外面にはヘラ原体のアタリがつく。体部上半部はヨコナデ。 ○頸部内面はハケメ調整ののち指でナデ消している。	○比較的精良、0.1～1.5mmの長石、砂粒で含む角閃石、多量の雲母を含む。 ○にぶい赤褐色2.5YR5/4。 ○焼成・ふつう。
	甕A1	145	○14.2(復) ○3.7(現)	○口縁部～体部上半部のみ残存。 ○体部上位で屈曲し内弯しながら短く外反する口縁部につづく。 ○口縁端部は面をなす。	○口縁部外面及び内面端はヨコナデ調整。内面は斜方向のハケメ調整ののち粗いナデ。 ○体部外面はヨコナデ調整。内面はユビオサエのあとヨコナデ。	○やや粗い、0.1～3.5mmの砂粒で含む長石、多量の雲母を含む。 ○内面・にぶい褐色 5YR5/3。 口縁部・黒色 7.5YR2/1 ○焼成・ふつう。
	甕A1	146	○15.7(復) ○4.7(現)	○口縁部～体部上半部のみ残存。 ○体部は強く張る。 ○口縁部は短く強く外反し、端部はわずかに面をなす。	○口縁部外面及び内面端はテイネイなヨコナデ調整。内面は横方向のハケメ調整。 ○体部外面はヘラケズリ（逆時計回り）ののち、ヨコナデ調整。内面は斜方向の粗いナデ。	○比較的精良、0.1～3.5mmの砂粒で含む長石、雲母を含む。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・ふつう。
	甕A2	147	○19.8(復) ○5.8	○底部及び体部大半を欠損。 ○肩の張らない体部に、ゆるく外反する口頸部がつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部外面はヨコナデ。内面は横方向のハケメ調整。 ○頸部外面にはヘラ原体の下から上へのあたりがつく。体部上半部にハケメ調整。 ○頸部内面はヨコナデ調整。	○精良、0.1～1.5mmの砂粒で含む長石、多量の角閃石、雲母を含む。 ○にぶい橙色7.5YR7/4。 ○焼成・ふつう。
	甕B2	148	○15.1(復) ○5.2(現)	○口頸部のみ残存。 ○肩の張らない体部にゆるく外反する口縁部がつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ調整。 ○頸部内外面にユビオサエが残る。	○やや粗い、0.1～2mmの長石、石英、角閃石を砂粒で含む。雲母を含む。 ○にぶい橙色(7.5YR6/4)0.5×橙色(7.5YR6/6)0.5 ○焼成・ふつう。
	羽釜	149	○25.2(復) ○7.9(現)	○口縁部～鍔部のみ残存。 ○直線的に立ち上がる体部にゆるやかに外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く納める。 ○鍔部は短く水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部外面上半部はヨコナデ。下半分はヘラ工具によるあたりがつく。内面は横方向のハケメ調整。 ○体部内面は粗いナデ。 ○鍔部はヨコナデ調整。	○やや粗い、2.5mm以下の砂粒で含む長石、多量の雲母を含む。少量の角閃石混入か。 ○にぶい赤褐色5YR5/4。 ○焼成・ふつう。
	羽釜	150	○20.1(現) ○3.5(現)	○鍔部のみ残存。 ○鍔部はやや長く水平につき、端部は丸く納める。	○体部～鍔部外面をヨコナデ。 ○体部内面は板状工具の当て痕がつく。縦方向のナデか。	○精良、石英、角閃石、雲母、1～4mm大の粒子を含む。 ○褐色7.5YR5/2。 ○焼成・良好。
	甑	151	○25.2(復) ○13.7(現)	○口縁部～体部上半部のみ残存。 ○体部は外傾し、そのまま口縁端部までつづく。 ○口縁端部は面をなす。	○口縁部外面はヨコナデ。内面はハケメ調整ののちヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエのあとハケメ調整。内面はユビオサエを残す。	○精良、微砂粒、雲母を含む。 ○橙色5YR7/6。 ○焼成・ふつう。

第5層（第43・44図、図版四十五・四十六・四十七・四十八・四十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A_1-a	152	○14.4(復) ○4.6(現)	○天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.6cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。 ○口縁部外面先端に浅い刻み目を入れている（約3mm間隔）。	○精良、微砂粒を含む。 ○青灰色5BG5/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-a	153	○12.3(復) ○4.3(推)	○天井部と口縁部とを分ける稜は強く張り出して鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.3cmを測り、口縁部はやや外方に開き、端部は鋭い。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、1mm大の長石を含む。 ○青灰色5PB5/1。 ○焼成・良好。内面に色むら有り。
	蓋 A_1-a	154	○12.9(復) ○4.0(現)	○天井部は扁平なつくりと想定される。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く、鋭い。稜はつまみ出している。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.3cmを測り、口縁部はわずかに外方へ開き、端部は鋭い。	○天井部は口縁部との稜付近以外は全て、時計回りのヘラケズリのあと、テイネイにヨコナデ調整されている。	○精良、微砂粒を含む。 ○灰色N5/0。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-a	155	○13.8(復) ○4.4(推)	○天井部は扁平なつくりで、口縁部との境界となる稜付近以外を全てヘラケズリ（逆時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.1cmを測り、端面は外方へ開き、鋭い。	○口縁部先端は強いヨコナデ調整を行っている。	○精良、微砂粒、2～3mmの長石を含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-a	156	○12.2(復) ○4.5(現)	○天井部と口縁部との稜は152と同じ。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.0cmを測り、口縁部は外方へ開き、内側に段を構成する。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-a′	157	○17.1(復) ○5.4(推)	○天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭いが、わずかに丸味を帯びる。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.5cmを測り、口縁部はわずかに外方へ開き、端部は鋭い。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、微砂粒を含む。 ○内面・明青灰色。5PB7/1。 外面・灰白色N8/1。 一部外面・オリーブ灰色2.5GY6/1。 ○焼成・良好。一部に焼きむら有り。
	蓋 A_1-a′	158	○不明 ○4.7	○天井部は扁平なつくりで3/4をヘラケズリ(時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く、やや丸味を帯びる。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.1cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。		○精良、長石微量に含む。 ○灰色N6/0。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-a′	159	○14.8(復) ○5.1(推)	○天井部はやや丸味をもち、2/3をヘラケズリ（逆時計回り）する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜は短く、やや丸味を帯び、稜の幅は小さい。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.3cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。		○精良、1～2mmの長石を含む。 ○内面・青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。外面の釉が斑点状に灰変。
	蓋 A_1-b	160	○14.4(復) ○4.7(推)	○天井部と口縁部とを分ける稜は幅広く(4mm)、鈍く丸い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.3cmを測り、口縁部は外方へ開き、内側にわずかに段を構成する。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、多量の砂粒を含む。 ○内面・灰白色N7/0。 外面・緑灰色10G5/1。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋 A_1-b	161	○15.6(復) ○3.6(推)	○天井部と口縁部とを分ける稜は幅狭く(2㎜)、鋭く、丸い。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.5cmを測り、口縁部はわずかに外方へ開き、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、長石、砂粒を含む。 ○灰白色N7/0。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-b	162	○12.6(復) ○4.2(現)	○天井部と口縁部とを分ける稜は鈍く、丸い。 ○口縁部先端から稜までの高さ2.2cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の微砂粒、1～2㎜の長石を含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A_1-b	163	○14.0(復) ○3.7(現)	○口縁部のみ残存。 ○天井部と口縁部とを分ける稜はほとんど退化し、丸くなっている。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.3cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。		○粗雑、砂粒、1～2㎜の長石を多量に含む。 ○内面・青灰色5BG5/1。 外面・暗青灰色5BG3/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A_2-a	164	○16.9(復) ○5.2(推)	○天井部と口縁部とを分ける凹線は幅狭く(2㎜)、やや深い(1㎜)。 ○口縁部先端から稜までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜して段を構成する。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、多量の砂粒を含む。 ○明青灰色5PB7/1。 ○焼成・ふつう。
	蓋 A_2-b	165	○14.7(復) ○4.5(推)	○天井部と口縁部とは浅い凹線によって分かれる。 ○口縁部先端から凹線までの高さは1.9cmを測り、口縁部はやや外方へ開き、先端は丸く納める。	○天井部のヘラケズリは時計回り。	○精良、砂粒、3㎜大の長石を含む。 ○明青灰色5PB7/1。 ○焼成・良好。
	蓋 A_3	166	○14.6(復) ○5.3(推)	○天井部と口縁部とは体部ユビナデによる1条の稜線によって分かれる。(ユビナデによる稜線は凹線の退化したものと考えられる。) ○口縁部先端から稜までの高さは2.2cmを測り、端面は内側に傾斜するが、先端は丸味を帯びる。	○天井部のヘラケズリは逆時計回りである。	○やや不良、長石を含む砂粒を含む。 ○灰白色N8/0。 ○焼成・良好。
	蓋 B	167	○12.1(復) ○3.7(現)	○天井部と口縁部とを分ける稜や凹線は認められない。 ○口縁部は垂直に下降し、端面で外方へ開き、鋭い。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の砂粒を含む。 ○内面・暗青灰色5B3/1。 外面・暗青灰色5PB3/1。 ○焼成・良好。一部摩滅し、地色が出ている。
	蓋 B	168	○15.4(復) ○4.4(推)	○天井部と口縁部とを分ける稜や凹線は認められない。 ○口縁部は外方へ開いて下降し先端は丸く納める。 ○器厚が他に比して厚い(7㎜)。	○天井部のヘラケズリは逆時計回りである。	○精良。 ○灰白色2.5Y7/1. ○焼成・良好。
	蓋 B	169	○14.5(復) ○3.0(現)	○天井部と口縁部とを分ける稜や凹線は認められない。 ○口縁部はやや外方に開き気味に下降し、端部は丸く納める。	○天井部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、砂粒、1～3㎜の長石を含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	蓋 B	170	○10.8(復) ○2.7	○天井部は扁平で、2/3をヘラケズリ(逆時計回り)する。 ○天井部と口縁部とを分ける稜や凹線は認められない。 ○口縁部は外方に開いて下降し先端は丸く納める。	○ヘラ切りが粗雑であったために、天井頂部にコブ状のあとが付着したままになっている。 ○全体につくりは粗雑。	○精良、微砂粒、1～3㎜の長石を含む。 ○オリーブ灰色5GY5/1。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯 A_2-a	171	○14.9(復) ○5.5(推)	○立ち上がりは1.9cmを測り、やや内弯する。端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸味をもち、ヘラケズリ（逆時計回り）は底部の½である。	○底部内面に仕上げナデが見られる。	○精良、微砂粒、1mm大の長石を含む。 ○青灰色5BG5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-a	172	○13.2(復) ○4.0(現)	○立ち上がりは1.9cmを測り、内傾する。端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は外上方に伸び、先端は鋭い。		○精良、1～3mmの長石を少量含む。 ○灰色N6/0。 （一部・暗灰色N3/0。） ○焼成・良好。一部黒変。
	杯 A_2-a	173	○13.6 ○5.1	○立ち上がりは1.6cmを測り、垂直気味に内傾する。端面は内側に傾斜して段を構成する。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。 ○底部は丸味をもち、⅔をヘラケズリ（逆時計回り）する。	○底部のヘラケズリは密に行われている。	○精良、長石を中量含む。 ○灰色N6/0。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-a	174	○不明 ○不明	○立ち上がりは1.6cmを測り、ゆるやかに内傾する。先端は鋭い。 ○受部は水平に短く伸び、先端はやや丸味を帯びる。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで、密に行われている。	○精良、微砂粒を含む。 ○明青灰色5PB7/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-a	175	○不明 ○不明	○立ち上がりは1.5cmを測り、強く内傾する。先端は鋭い。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。	○自然釉付着のため、底部のヘラケズリの方向は不明。	○精良、多量の砂粒を含む。 ○明青灰色5B7/1。 ○焼成・良好。焼成時に砂粒が黒変。外面部に釉が著しい。
	杯 A_2-b	176	○15.7(復) ○5.0(推)	○立ち上がりは1.7cmを測り、内傾する。端面は内側に傾斜して、わずかに段を構成する。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、2～3mmの長石を含む。 ○灰白色N7/0。 ○焼成・良好。
	杯 A_2-b	177	○14.3(復) ○4.5(現)	○立ち上がりは1.8cmを測り、垂直気味に立つ。先端は丸味を帯びる。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。		○精良、砂粒、1～3mmの長石、少量の角閃石を含む。 ○灰色N6/0。 （一部外面・暗灰色N3/0。） ○焼成・ふつう。焼きむら有り。（特に外面は一部黒変。）
	杯 A_2-b	178	○12.3 ○4.2(推)	○立ち上がりは1.6cmを測り、ほぼ垂直に立つ。端面は内側に傾斜して、わずかに段を構成するが、先端は丸い。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。	○底部外面に自然釉の付着が著しくヘラケズリ（底部の½になされている）の方向は不明。	○精良、1～5mmの長石を多量に含む。 ○緑灰色0G5/1。 ○焼成・ふつう。外面に自然釉著しく付着。
	杯 A_2-b	179	○不明 ○不明	○立ち上がりは1.5cmを測り、ゆるやかに内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸味を帯びる。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで密に行われている。	○精良、多量の砂粒、1～5mm大の長石を含む。 ○灰白色N7/0。 ○焼成・やや不良。
	杯 A_3-b	180	○12.3 ○4.6(推)	○立ち上がりは1.4cmを測り、強く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は水平に短く伸び、先端は鋭い。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、1～3mmの砂粒を含む。 ○灰色N6/0。 ○焼成・良好。外面部は自然釉付着のため、変色が大きい。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯 A_{3}-b	181	○13.2 ○4.1(現)	○立ち上がりは1.2cmを測り、逆「ノ」の字状に内傾して、端面で垂直に立つ。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。	○底部のヘラケズリ（逆時計回り）は粗雑。	○精良、少量の微砂粒を含む。 ○青灰色10BG5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{3}-b	182	○12.9(復) ○3.7	○立ち上がりは1.1cmを測り、垂直に立つ。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平で、2/3をヘラケズリ（逆時計回り）する。	○底部のヘラケズリは密に行われている。	○精良、微砂粒、1mm大の長石を含む。 ○青灰色10BG5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{3}-b	183	○13.0(復) ○3.9(推)	○立ち上がりは1.1cmを測り、短く内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は水平に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平で、2/3をヘラケズリ（逆時計回り）する。		○精良、微砂粒、2mm大の長石を含む。 ○紫灰色5PB5/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{4}-a	184	○12.8 ○4.2	○立ち上がりは0.9cmを測り、逆「ノ」の字状に内傾する。先端は鋭い。 ○受部は大きく外上方に伸び、先端は丸く納める。	○底部内面に粘土紐のマキアゲ痕が残っている。	○精良、長石を微量含む。 ○暗緑灰色10GY3/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{4}-a	185	○12.6 ○3.6(現)	○立ち上がりは0.8cmを測り、逆「ノ」の字状に短く内傾する。先端は鋭い。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○焼成時に体部がうすくはがれて瘤状になった跡が残っている。	○底部のヘラケズリは逆時計回りで粗雑。	○精良、少量の微砂粒を含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。外部一面に自然釉付着。焼成17階で他の土器と接合し、その跡が余分な帯状のこぶとなり付着。（不良品）
	杯 A_{4}-a	186	○12.2 ○3.1(推)	○立ち上がりは0.7cmを測り、逆「ノ」の字状に強く内傾するが、先端は短く外反して鋭い。 ○受部は水平に伸び、先端は鋭い。	○底部のヘラケズリは逆時計回り。	○精良、少量の砂粒を含む。 ○灰色N6/0。 ○焼成・良好。外面に自然釉付着。
	杯 A_{4}-a	187	○11.0 ○3.7(推)	○立ち上がりは0.6cmを測り、逆「ノ」の字状に短く垂直に立つ。先端は鋭い。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は丸味をもち、1/2をヘラケズリ(逆時計回り)する。	○底部のヘラケズリは粗雑。	○精良、微砂粒、1mm大の長石を含む。 ○緑灰色10GY6/1。 ○焼成・良好。
	杯 A_{4}-b	188	○10.4 ○3.8	○立ち上がりは0.6cmを測り、逆「ノ」の字状に内傾する。先端は丸く納める。 ○受部は外上方に短く伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平である。	○底部の1/4に時計回りのヘラケズリが行われているが、手法は粗雑。 ○底部中央はヘラ切り後、未調整。	○精良、長石、石英を砂粒で含む。 ○明青灰色5PB7/1。 ○焼成・良好。
	杯	189	○不明 ○不明	○受部～底部のみ残存。 ○受部は外上方に伸び、先端は丸く納める。 ○底部は扁平なつくりで、3/4をヘラケズリ(逆時計回り)する。		○精良、長石微量に含む。 ○青灰色5B5/1。 ○焼成・良好。
	高杯	190	○11.7(復) ○4.3(現)	○杯部のみ残存。 ○杯部は浅く、体部と口縁部・底部の境に各1本の断面三角形の凸条がめぐる。口縁部は外反し、端部は鋭い。 ○脚部の透し穴は三方にあくらしい。	○杯部内外面ともテイネイなヨコナデ調整。	○精良、1～2mmの長石を含む。 ○青灰色5B5/1。 一部内面・灰色10Y5/1。 一部外面・紫灰色5P5/1。 ○焼成・良好。内外面とも、焼きむらにより一部変色。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技技法の特徴	備考
須恵器	高杯	191	○不明 ○4.5(現)	○脚部のみ残存。 ○筒部は低く、裾部で外方に大きく開く。脚端部は断面四角形を呈す。 ○透し孔は四角形で三方にあけられている。	○杯底部内面に粗い仕上げナデが認められる。 ○脚部内外面ともヨコナデ。	○精良、長石微量に含む。 ○青灰色５Ｂ⁶⁄₁。 ○焼成・良好。
	高杯	192	○不明 ○16.2(復) ○15.0	○脚部のみ残存。 ○脚部は脚筒部を細長くしぼり、裾部は大きく外方へ広がり、端部は上方につまみ上げている。 ○透し孔は長方形２段で三方にあく。 ○脚部中央に２条、裾部に１条の凹線をめぐらしている。	○脚部上位より凹線までカキメ調整。 ○脚部下位から端部まで内外面ともヨコナデ調整。 ○筒部内面にシボリメを残す。	○精良、少量の砂粒を含む。 ○灰色Ｎ⁵⁄₀。 ○焼成・良好。杯部外面脚台部内外面に自然釉付着。
	瓶	193	○不明 ○18.5(現)	○肩部に２条、体部中央に１条の凹線をめぐらし、その間に櫛描き列点文をめぐらす。 ○中央孔は外より内にむかって穿たれている。	○肩部外面～体部内面はヨコナデ。 ○底部は逆時計回りの粗いヘラケズリ。	○精良、長石を中量に含む。 ○明青灰色５ＰＢ⁷⁄₁。 ○焼成・やや不良。
	瓶	194	○12.5(推) ○18.4(推)	○口頸部は細長くラッパ状に開く。 ○頸部やや下位に２条の凹線をめぐらし、口縁部との間に振幅大の櫛描き波状文をめぐらす。 ○体部は193と同じ。	○口頸部は内外面とも密なヨコナデ。 ○底部のヘラケズリは施されず。ヘラ切り後未調整である。	○精良 ○青灰色10ＢＧ⁵⁄₁。 ○焼成・良好。
	坩	195	○7.4 ○7.9	○体部中位よりやや上で最大径をもつ。 ○短い口縁がわずかに内傾して直線的に立つ。 ○底部は扁平である。	○口縁部～体部内外面ともヨコナデ調整。 ○底部は逆時計回りのヘラケズリを密に行なう。	○精良、長石やや多量に含む。 ○赤灰色2.5ＹＲ⁵⁄₁。 ○焼成・不良。（還元焔の温度低く、灰色を呈さない。）
	提瓶	196	○9.8 ○4.6(現)	○口頸部のみ残存。 ○短く外反する口頸の端部は直立して頸部との境界は段をなす。	○内外面ともヨコナデ。	○精良、少量の砂粒を含む。 ○内面・暗青灰色5Ｂ⁵⁄₁。外面・青灰色５Ｂ⁶⁄₁。 ○焼成・良好。外面に自然釉多く付着。
	甕Ａ	197	○21.7(復) ○7.7(現)	○口頸部～肩部のみ残存。 ○外反する口頸部はその端部で上下に拡張されている。外面上位に鋭い断面三角形の段をつくる。 ○肩の張る体部と思われる。	○口頸部内外面ともテイネイなヨコナデ調整。 ○肩部外面に平行タタキメを施す。	○精良、長石微量に含む。 ○内外面・灰色Ｎ⁵⁄₀。断面・赤白色５Ｒ⁵⁄₁。 ○焼成・良好。
	甕Ａ	198	○25.8(復) ○17.4(現)	○口頸部のみ残存。 ○大きく外反する口頸部は、端部で上方に内折する。外面上位に断面三角形の段をつくる。	○口頸部内外面ともヨコナデ調整。	○やや粗い、長石を多量に含む。 ○緑灰色10ＧＹ⁵⁄₁。 ○焼成・良好。
	甕Ａ	199	○20.5 ○6.9(現)	○口頸部～肩部のみ残存。 ○外反する口頸部は端部で上方につまみ上げて面をなす。外縁端で粘土をひき出して断面三角形の段をつくる。 ○体部最大径はかなり高位置になるようである。	○口縁部内外面、頸部内外面ともヨコナデ調整。 ○頸部外面は密なカキメ調整。 ○肩部外面は暗緑色の自然釉が付着しているが、密なカキメ調整を施しているようである。 ○肩部内面には同心円文状のタタキメがつく。	○精良、長石を多量に含む。 ○灰色7.5Ｙ⁶⁄₁。 ○焼成・良好
	甕Ａ	200	○24.3(復) ○8.2(現)	○口頸部～肩部のみ残存。 ○外反する口頸部は端部で、上下外に粘土をつまみ出している。 ○体部最大径はかなり高位置。	○口頸部内外面ともヨコナデ調整。 ○肩部外面は密な平行タタキメを施してのち、カキメ調整。 ○肩部内面は同心円文のタタキメがつく。	○精良、長石を多量に含む。 ○灰色Ｎ⁶⁄₀。 ○焼成・良好。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	甕A	201	○21.9 ○5.0(現)	○口頸部のみ残存。 ○外反する口頸部はそのまま端部につづく。外面上位に断面三角形の段をつくり、段を利用して1条の浅い凹線をめぐらす。	○口頸部内外面ともヨコナデ。	○精良、長石微量に含む。 ○灰白色10Y7/1。 ○焼成・良好。
土師器	甕B1	202	○18.1 ○5.1(現)	○丸くふくらむ体部にごく強く短く外反する口縁部がつく。口縁端を平らにナデるため、端部は外折して面をなす。	○口縁部外面及び内面端はヨコナデ。 ○頸部外面にヘラ状工具のあたりがつく。 ○肩部内面は粗いナデ調整。	○精良、0.1～1mmの砂粒を含む。 ○橙色2.5YR6/6。 ○焼成・ふつう。
	甕	203	○13.4(復) ○7.8(現)	○口径より胴部が大きい。 ○体部は丸く、肩の張りは小さい。 ○口縁部は「く」の字状に短く外反し、口縁端を強くヨコナデするために外面にわずかに稜がつく。	○肩部内面にユビオサエ痕がわずかに残るほかは摩耗激しく調整法不明。	○やや粗い、5mm以下の大粒の砂粒で長石を含む。 ○内面・灰白色2.5Y7/1。外面・橙色2.5YR7/6。 ○焼成・ふつう。内外面とも、焼きむらのため濃淡の斑らを呈す。
	甕A2	204	○18.5(復) ○5.9(現)	○口縁部は弱く外上方に開くため、頸部との境界に稜はつかない。端部は丸く納める。	○頸部外面にユビオサエの後、不明瞭なハケメ調整がみられるが、摩耗激しく、不明。	○やや粗い、0.1～2mmの砂粒、角閃石を多量に含む。 ○にぶい褐色7.5YR5/4。 ○焼成・ふつう。
	羽釜	205・206・207	○25.0(復) ○6.8(現)	○口縁部～鍔部のみ残存。 ○やや内傾して立ち上がる体部に大きく直線的に外反する口縁部がつくため、内面に稜をなす。 ○口縁端部は丸く納める。 ○鍔部はやや外上方につき、端部は丸く納める。	○口縁部内面に横方向のハケメ調整(6～7条/cm)する以外は内外面とも密なヨコナデ。	○0.1～1mmの砂粒、角閃石を多量に含む。生駒西麓産の土器。 ○にぶい赤褐色2.5YR ○焼成・良好。
	羽釜	208・209	○19.9(復) ○5.0(現)	○鍔部周辺のみ残存。 ○内傾する体部に外反する口縁部がつく。 ○鍔部は水平からやや外上方につき、端部は丸く納める。	○摩耗激しく調整法不明。	○粗い、5.5mm以下の大きいめの砂粒で含む長石多量の角閃石、雲母を含む。 ○橙色5YR6/6。 ○焼成・やや不良。
	羽釜	210	○17.5(復) ○9.0(現)	○口縁部～体部のみ残存。 ○内傾して立ち上がる体部に短く外反する口縁部がつく。口縁端部はわずかに面をなす。 ○鍔部はやや外下方につく。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部外面に縦方向の細かいハケメ調整(14条/cm)を施す。	○やや粗い、4mm以下の砂粒で含む長石、比較的多量の角閃石、多量の雲母、くさり礫を含む。生駒西麓産の土器。 ○にぶい橙色7.5YR6/4。 ○焼成・ふつう。羽部下面より胴部にかけて黒色化。(使用時の変色)
	羽釜	211	○17.7(復) ○8.6(現)	○210と同じ。 ○鍔部は水平につく。	○口縁部内外面ともヨコナデ調整する以外は摩耗のため調整法不明。	○粗い、5mm以下の大きいめの砂粒で含む長石多量の角閃石、多量の雲母を含む。 ○橙色(2.5YR6/6)0.5×橙色(5YR6/6)0.5 ○焼成・ふつう。焼きむら有り。濃淡斑ら部と黒色化部有り。外面羽部表面に少量の黒色の有機物。
	ミニチュア土器	212	○4.6 ○3.7	○丸底から屈曲後、そのまま口縁端部まで開いて立ち上がる。 ○口縁部は外反し、端部は丸い。端面は手づくねのため不整面。	○口縁部は手づくねのユビオサエが残る。	○やや粗い、長石、石英、角閃石を含む。生駒西麓産の土器。 ○にぶい赤褐色5YR5/4。 ○焼成・ふつう。

包含層（第47図、図版五十一）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
縄文土器	浅鉢	233	○不明	○口縁部欠損。 ○椀形の小型の浅鉢。	○貝殻の項部による沈線を三条配する。 ○内面ナデ調整。	○やや粗い。こまかな石粒多量。こまかな角閃石少量。 ○黒色（10YR2/1）
	浅鉢	234	○不明	○粗製の浅鉢口縁部。 ○口縁端部面をもち、内面に一条の浅い沈線を施す。	○外面貝殻による条痕、内面ナデ調整。	○やや粗い。1㎜大の長石、石英粒多量。こまかな角閃石少量。 ○黄褐色（2.5Y5/3）。
	深鉢	235	○不明	○粗製の深鉢頸部。 ○体部からわずかに外方へ屈曲する頸部。	○頸部外面ナデ調整。頸部以下体部外面横方向のケズリ調整。	○粗い。2～3㎜大の角閃石多量。1㎜前後の長石粒、雲母少量。 ○黒褐色（7.5YR3/2）
	深鉢	236	○不明	○粗製の深鉢頸部。 ○体部からわずかに外反する頸部。	○頸部に貝殻項部による三条の沈線を施したのち、巻貝による押圧文を施す。 ○内面ナデ調整。	○やや粗い。1㎜前後の石粒多量。こまかな角閃石微量。 ○にぶい黄褐色(10YR5/3)
	深鉢	237	○不明	○粗製の深鉢。	○頸部に貝殻項部による4条の沈線文を施す。 ○内面ナデ調整。	○やや粗い。1㎜前後の長石、石英粒多量。こまかな角閃石、雲母少量。
	深鉢	238	○底径4.8 ○残高1.3 ○底部1/2残	○精製深鉢の底部。 ○底部すり鉢状に凹む。	○底部外面へラケズリ。内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石多量。1㎜大の石粒小量。 ○明赤褐色（5YR5/8）

SD78（第48図、図版五十二～五十五・五十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	壺 b_1	239	○口径21.1 ○口縁完存	○所謂2重口縁の壺。直立気味の頸部から外反したのち、角度をかえて垂直に立ち上がる。	○口縁部外面磨滅が著しく不明。内面は横方向に丁寧なヘラミガキ。	○やや粗い。長石、石英粒多い、角閃石少量含む。 ○橙色5YR6/6、内面は明赤褐色5YR3/6。
	壺 c	240	○復口28.5	○広口壺。外反する口縁部に端部を拡張して面をなす。	○口縁部内外面ナデ調整。	○灰白色10YR8/2。
	壺 d	241	○復口19.6 ○残高6.2	○広口壺。直立する頸部から外反する口縁部をもち、端部を内側に折り返し、内傾の端面をもつ。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○頸部外面は粗いハケ目（5条/cm） ○口縁部内面に不規則な波状文。	○精製。小さな砂粒、雲母、くさり礫 ○にぶい橙色7.5YR7/4。 ○他地域からの搬入品。
	鉢 b	242	○復口15.4 ○器高8.0	○しっかりした厚手の平底。甕の体部下半と共通する体部。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○底部に径1.0cmの円孔。	○体部外面に粘土紐の痕跡が顕著。 ○体部外面の叩目をナデにより消している。 ○底部と体部下半の接合が顕著で、段になっている。	○やや粗い、1㎜大の角閃石が非常に多い。長石、石英、雲母少量 ○赤い石粒（くさり礫）微量。 ○にぶい赤褐色5YR5/4。 ○底部完存、体部全体の1/4残。
	鉢 b	243	○長口10.2 ○短口9.1 ○器高7.4	○尖り気味の丸底。すり鉢状の体部に口縁は直口する。 ○口縁部は楕円形を呈する。	○体部外面叩目。内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2㎜大の長石、こまかな石英角閃石を含む。 ○にぶい赤褐色。
	鉢 b	244	○復口12.8 ○器高9.8	○平底の底部から内弯気味の口縁部がつく。端部は丸く尖り気味。 ○底部の中央に0.6cmの円孔。円孔は内面から外へ穿孔し、その際底部外面へ粘土がはみ出したため、底部は凹凸があり水平に立てられない。	○体部外面に左下りの叩目（2.5条/cm）を底部末端まで施す。内面ナデ調整、底部内面にしぼり目の痕跡がある。	○やや粗い。1㎜大の角閃石が非常に多い。長石、石英、雲母少量、 ○暗赤褐色(2.5YR3/3) ○底部完存、体部全体の1/2残。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	鉢c	245	○復口12.7 ○器高6.4	○外反する口縁部で端部内面はわずかに内傾する。 ○底部外面に指頭圧痕を施し、高台状の底部をつくる。	○内外面とも丁寧にナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石が非常に多い。長石、雲母を含み石英は微量。 ○にぶい褐色(7.5YR5/4) 底部完存。体部1/6残。
	鉢c	246	○復口12.5 ○器高6.4	○椀形の体部に外反する口縁部をもつ。端部は丸く終わる。 ○底部外面に粘土をつぎ足して高台状の底部をつくる。	○内外面とも風化が激しく詳細不明	○やや粗い。1～2mm大の角閃石が非常に多い。長石、石英等の石粒も目立つ。 ○橙色（5YR6/8） ○口縁部付近に黒斑あり。
縄文土器	鉢a	247	○復口18.0 ○残高7.0	○「く」の字状に外反する口縁部で端部を外側にわずかに肥厚させる。	○口縁部は内外面ともヨコナデ。 ○体部外面、こまかな刷毛目状の工具で調整したのち、ナデ調整。内面は右回りの弱いケズリ。	○やや粗い。こまかな角閃石、雲母が顕著。石英、長石、赤い石粒が少量。 ○外面、明赤褐色(5YR5/6) 内面、黒褐色(2.5Y3/1) ○口縁全体の1/6残
弥生土器	鉢d	248	○復口32.6 ○残高8.0	○大型のもの。すり鉢形の体部に外反する口縁部をもち、端部は面をつくる。	○口縁部内面を横方向、体部内面を縦方向のヘラミガキ。 ○口縁部外面ヨコナデ、体部外面タテのヘラミガキののちナデ調整。	○やや粗い、1～2mm大の角閃石多量。長石、石英、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR5/6) ○全体の1/4残。
	鉢d	249	○復口33.0 ○残高9.4	○248と同じ形態	○248と同じ技法。	○やや粗い、こまかな角閃石多量。長石、石英雲母を含む。 ○にぶい赤褐色(5YR5/4) ○248と同一個体？
	高杯a	250	○復口23.0 ○残高14.2	○水平方向にのびる杯部の腰に鋭い稜をもち、口縁部は大きく外反する。 ○中実の脚部、裾部欠損。	○口縁部内面はナデ調整。 ○脚部外面、縦方向のヘラミガキ。 ○脚部裾に4ヶ所の円孔。	○やや粗い、角閃石多量に含む。 ○橙色(7.5YR6/6)。
	高杯b	251	○復口21.6 ○残高	○水平方向にのびる杯底部より角度をかえて直立したのち外反する口縁部が付く。 ○屈曲部で内外面に弱い稜がつく。 ○口縁端部は受口状に仕上げる。 ○中空の脚をつける。	○口縁部内面ナデ調整、外面ヘラミガキ調整。 ○脚部外面ヘラミガキ調整。内面にしぼり痕あり。	○精良、こまかな長石、石英粒を多量に含む。雲母、赤い石粒少量。 ○にぶい黄橙。 ○他地域産。 ○口縁部の1/3残。
	高杯a	252	○復口13.4 ○残高3.5	○水平方向にのびる杯底部から角度をかえて内弯気味に外上方にのびる口縁部。 ○屈曲部の内面に段、外面に稜がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ。 ○杯部内外面ナデ調整。	○精良、こまかな長石粒少量、赤い石粒（くさり礫）が目立つ。 ○にぶい黄橙(10YR7/3) ○他地域産。 ○口縁部の1/6残。
	高杯a	253	○口径15.1 ○残高4.2	○斜上方にのびる杯底部から大きく外反する口縁部がつく。 ○杯部の腰に段をもつ。 ○杯底部に脚部との接合面を残す。	○杯部内面は中心部に向かって放射状にヘラミガキ。外面も腰部に向かってヘラミガキを施す。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量、長石粒も目立つ、雲母、石英少量。 ○明赤褐色(2.5YR5/6)。 ○杯部完形。
	高杯a	254	○復口7.4	○杯部の腰にするどい稜をもち口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をなす。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。	○粗い。1～2mm大の長石石英多量。こまかな角閃石、雲母少量含む。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 ○口縁全体の1/4残。
	高杯b	255	○残高3.5	○257と同じ形態。 ○屈曲部の内面に段、外面に稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ。	○精良、こまかな石粒を少量、赤い石粒（くさり礫）微量。 ○にぶい黄橙色(10YR7/2) ○他地域産。 ○杯腰部全体の1/3残。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	高杯b	256	○残高4.5	○水平方向にのびる杯底部より角度をかえて直立したのち外反する。 ○屈曲部で段状の稜がつく。	○杯部内外面ヘラミガキ。 ○杯底部と屈曲部との接合痕残す。杯底部端に垂直に粘土紐を積み、外面にわずかにはみ出す。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。長石、雲母を含む。 ○赤褐色（5YR4/6）。 ○杯腰部全体の1/2残。
	高杯a	257	○残高8.0	○水平方向にのびる杯底部。 ○細い中空の脚柱部から角度をかえて広がる裾部。	○杯底部内外面ナデ。 ○脚柱部外面縦方向のヘラミガキ。内面にしぼり痕。	○精良、こまかな白い石粒少量。 ○橙色（5YR6/8）。 ○他地域産。 ○杯底部1/2残、脚柱部完存。
	高杯b	258	○残高10.9	○斜上方にのびる杯底部から角度をかえて直立する口縁部。 ○中実の短い脚柱部から内弯して広がる裾部。	○杯部内面ナデ、外面ヨコナデ、脚柱部外面縦方向のヘラミガキ、裾部外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。 ○裾部に4ヶ所の円孔。円孔は外面から内面に穿ち、内面に粘土のはみ出しがある。	○やや粗い。2～3mm大の長石が目立つ。角閃石雲母少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 ○脚柱部完存、裾部1/6、杯底部1/10残。
	高杯c	259	○裾口径12.8 ○残高8.4	○半球形の杯底部から柱状部分がなく、直接裾広がりの脚台がつく。裾端部は丸く終わる。	○杯部内面ヘラミガキ？裾部内面ナデ調整と思われるが、磨滅のため詳細不明。	○やや粗い、1mm前後の細かな角閃石多量、長石、雲母少量。 ○褐色(10YR4/6)～明赤褐色(2.5YR5/8)。 ○裾部の1/6残。
	甕a	260	○復口16.8 ○残高5.4	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は面をもって終わる。	○口縁部内外面ヨコナデ、体部外面細かな刷毛目(9本/cm)。頸部に刷毛原体圧痕を残す。 ○体部内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。1～2mm大の長石も目立つ。赤い石粒微量。 ○にぶい赤褐色(5YR5/4)。 ○口縁の1/3残。
	甕a	261	○復口17.6 ○残高4.5	○261と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面叩目(2.5条/cm)。頸部内面に粘土接合痕で段になっている。	○やや粗い、1～2mm大の角閃石多量。長石、石英、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 ○口縁の1/4残。
	甕a	262	○復口12.2 ○残高3.8	○261と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面に叩目がわずかに認められる。 ○頸部内面に口縁部接合時の粘土が段になって残る。	○やや粗い。1～2mm大の長石粒多量。こまかな角閃石、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR5/6)。 ○口縁の1/8残。
	甕b_1	263	○復口12.4 ○残高4.1	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終わる。	○口縁部内外面ヨコナデ、体部外面叩目調整。 ○頸部内面に接合痕を残す。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量、長石粒少量。赤い石粒微量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 ○口縁の1/3残。
	甕b_1	264	○復口13.4 ○残高3.2	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面叩目調整、内面ナデ調整。	○やや粗い、1mm前後の角閃石と5mm前後の閃緑岩の石粒含む。長石、雲母少量。赤い石粒微量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 口縁の3/4残。
	甕b_1	265	○復口15.2 ○残高4.1	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面叩目調整。	○やや粗い、1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○にぶい褐色(7.5YR5/4) ○口縁の1/3.5残。
	甕b_1	266	○復口12.8 ○残高5.2	○263と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面に叩目(2.5条/cm)、内面指押えのちナデ調整。	○やや粗い、1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○にぶい黄褐色(10YR5/3)。口縁部から頸部に黒斑。 ○口縁の1/3.5残。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 b_1	267	○「く」の字形に	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終わる。 ○体部はわずかに張る。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面左下りの叩目(2.5条/cm)。 ○体部上半の叩き目を板状の工具で消している。体部内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の長石粒が多い。 雲母、細かな角閃石少量。 ○橙色(7.5YR 7/6)。 ○口縁の1/8残。
	甕 b_1	268	○復口15.6 ○残高5.3	○263と同じ形態。	○265と同じ技法。	○粗い。2mm前後の角閃石多量。1～2mm大の石粒多い。 ○にぶい赤褐色(5YR 5/4)。 ○口縁の1/4残。
	甕 b_1	269	○復口15.0 ○残高4.7	○263と同じ形態。	○266と同じ技法。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○にぶい赤褐色(5YR 5/3)。 ○口縁の1/7残。
	甕 b_1	270	○復口12.8 ○残高7.0	○「く」の字形に外反する口縁部に端部はわずかに面をなす。 ○体部の上半がわずかに張る。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面に左下りの叩目 (2条/cm)。 体部内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。長石、石英、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5/8)。 ○口縁の1/2.5残。
	甕 b_1	271	○復口16.4 ○残高7.7	○263と同じ形態。	○口縁部内外面左まわりのヨコナデ体部外面左下りの叩目(3条/cm)。 ○体部内面ナデ調整をおこなうが、粘土の接合痕残す。	○やや粗い。2mm前後の角閃石多量、長石、雲母少量。 ○褐色 (7.5YR 3/4)。 ○口縁の1/6残。
	甕 c_1	272	○復口12.0 ○残高5.0	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部。端部はわずかに上方へつまみ上げ面をなす。 ○頸部内面に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面に細かな叩目(4.5条/cm)。体部肩から下は叩目ののち、刷毛目(8条/cm)で調整。 ○体部内面の上半は左回りのケズリ。	○精良。こまかな角閃石を多量に含む。 こまかな長石、雲母少量。 ○褐色 (10YR 3/4)。 ○口縁の1/6残。
	甕 c_2	273	○復口14.6 ○残高5.0	○「く」の字形に屈曲外反する口縁部に端部は丸く終わる。 ○頸部内面に弱い稜がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面の叩目(3条/cm)は頸部を越えて、口縁部下半まで達する。体部内面は左まわりケズリ。	○精良、こまかな石英、長石粒を多量に含む雲母、赤い石粒 (くさり礫) を少量。 ○にぶい黄橙色(10YR 7/3) ○他地域産。 ○口縁の1/7残。
	甕 b_1	274	○復口13.0 ○残高11.5	○「く」の字形に外反する口縁部に球形に近い体部がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ、体部外面に左下りの叩目(2条/cm)。体部内面ナデ調整。内面に粘土紐のつなぎ目残す。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、石英粒少量。 ○明赤褐色(5YR 5/8)。 ○口縁の1/8残。
	甕 b_1	275	○底径3.4 ○残高13.7	○球形に近い体部に小さな平底の底部がつく。 ○口縁部欠損。	○体部外面叩目。叩目は底部の末端まで施し、底部の調整はしない。 ○体部外面の磨滅が激しい。 ○体部上半ナデ、但し体部上半部に粘土紐の痕跡があり、下半と上半の境に段がつく。 ○体部下半刷毛目ののちナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。中に5mm前後の閃緑岩の石粒含む。長石粒も目立つ。 石英、雲母少量。 ○体部上半黄褐色 (10YR 5/8)。 ○体部下半赤褐色 (5YR 4/6)。 ○体部上半と下半で粘土が違うことがわかる。 ○底部完存、体部1/2残。
	甕 b_1	276	○復口15.4 ○残高11.0	○肩の張る球形に近い体部から外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面に左下りの叩目(2.5条/cm)。内面ナデ調整。 ○体部中位に粘土紐のつなぎ痕。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量、2～3mmの長石粒目立つ。赤い石粒(くさり礫)、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR 5/8)。 ○口縁の1/8残。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 b_1	277	○復口18.4 ○残高9.4	○肩の張る球形に近い体部から短く外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ、口縁部接合時に頸部までヨコナデが及んだため、体部とつなぎ部分の叩目が消されている。 ○体部外面叩目。表面のナデによって不鮮明。粘土紐のつなぎ目残る。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石、長石粒多量5mm前後閃緑石の石粒、くさり礫微量、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 ○口縁1/4.8残。
	甕	278	○底径4.5 ○残高2.4 ○底部完存	○平底の底部	○叩目(2.5条/cm)が末端まで施され突出しない。外底面に円孔があけられているが　通していない。 ○内外面ナデ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石、長石粒を含む雲母少量。 ○褐色 (7.5YR1/3)。
	甕	279	○底径3.0 ○残高3.0 ○底部の1/5残。	○小さな平底の底部	○叩目(2条/cm)が外底面まで施され丸底化の傾向がある。不安定で立たない。 ○内底面ナデ調整、しぼり痕がある。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。長石、雲母少量。 ○褐色 (7.5YR1/3)。
	甕	280	○底径3.8 ○残高3.0 ○底部完存	○平底の底部	○叩目(2.5条/cm)が末端まで施され外底面の粘土少しはみ出す。外底面が磨かれたように平坦になっている。使用痕か、わずかに凹。内底面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量、こまかな長石粒、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR5/6)。
	甕	281	○底径4.5 ○残高2.8 ○底部完存。	○平底の比較的しっかりした底部わずかに突出する。	○叩目(2条/cm)を末端まで施す。 内底面ナデ調整、しぼり痕がある。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量、長石粒少量。 ○橙色 (7.5YR6/6)。
	甕	282	○底径4.2 ○残高1.8 ○底部完存	○平底の底部で中央に径 2.5cm深さ 3mmの規模で凹む。	○叩目(3条/cm)を末端まで施すが弱い。内底面ナデ調整。	○やや粗い。1mm前後角閃石、長石粒、雲母を含む。 ○明赤褐色(5YR5/6)。
	甕	283	○底径3.8 ○残高4.0 ○底部完存	○小さな平底の底部。中央部わずかに凹む。	○叩目(1.5条/cm)が内底面まで及び、丸底化の傾向が顕著に認められる。	○やや粗い。1～2mm前後の角閃石多量。長石粒雲母少量。 ○赤褐色 (5YR4/6)。
	甕	284	○底径3.3 ○残高3.0 ○底部完存	○小さな平底の底部。	○叩目(2条/cm)が外底面まで施され、丸底化の傾向が顕著。 ○内底面ナデ調整。	○やや粗い。1mm大の角閃石が多量。こまかな長石粒、雲母少量。 ○にぶい橙色(7.5YR6/4)。
	甕	285	○底径3.5 ○残高3.2 ○底部完存	○平底の底部。	○叩目(3条/cm)を末端まで施す。 ○内底面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石、長石粒多量、雲母少量。 ○暗赤褐色(5YR3/3)。
	甕	286	○底径4.0 ○残高2.5 ○底部完存	○平底の底部。底面中央部径0.8cm、深さ0.2cm程度凹む。	○叩目(2.5条/cm)を末端まで施す。 ○内底面ナデ調整。	○やや粗い。1mm前後の角閃石多量。 長石粒、雲母も目立つ。 ○明赤褐色(2.5YR5/8)。
	甕	287	○底径4.6 ○残高2.9 ○底部完存	○平底の底部、底面中央からはずれたところに径0.8cm、深さ0.3cmの凹みがある。	○叩目(2.5条/cm)を末端まで施したのち、底面に粘土を継ぎたして、底部を成形。 その際に自重で底面の粘土が外へはみ出している。	○やや粗い。1～2mm大の長石粒、石英粒多量。雲母、角閃石少量。 ○暗赤褐色(2.5YR3/4)。
	甕	288	○底径4.1 ○残高2.6 ○底部完存	○平底の底部、底面中央部に0.8cm、深さ0.2cm規模の凹みあり。	○叩目(2.5条/cm)が底部末端まで施されている。内底面ナデ調整、しぼり目あり。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。長石粒も目立つ。 ○褐色(7.5YR4/6)。
	甕	289	○底径3.6 ○残高1.5 ○底部完存	○平底の底部、中央で径 2.1cm深さ 0.3cmの規模で皿状に凹む。	○叩目(4条/cm)を末端まで施すが弱い内底面ナデ調整。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量。こまかな長石粒、雲母。 ○にぶい赤褐色(5YR4/3)。
	甕	290	○底径3.8 ○残高4.6 ○底部完存	○平底の比較的しっかりした底部。中央に径1.2cm、深さ0.5cmに凹む。	○叩目(2条/cm)を末端まで施す。外底面磨かれている。内底面ナデ、しぼり目あり。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石、長石粒多量、雲母少量。 ○暗褐色(7.5YR3/3)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕	291	○底径3.4 ○残高3.0 ○底部完存	○小さな平底の底部。内底面に工具の先で刺突したような凹みが大小7ヶ所ある。	○底部外面ナデ、内底面ナデ調整。 ○外底面に黒斑。	○やや粗い。1㎜前後の角閃石多量。こまかな長石、雲母少量含む。明赤褐色(5YR5/6)。
	壺	292	○底径3.0 ○残高3.3 ○底部1/6残。	○小さな平底の底部。突出部はほとんどない。	○底部外面、体部の下半ヘラミガキ ○内底面にこまかな刷毛目(12条/cm)	○やや粗い。1㎜大の長石、雲母少量。角閃石微量。 ○明赤褐色(5YR5/8)。
	壺	293	○底径4.6 ○残高3.7 ○底部完存。	○平底の底部。外底面末端、丸くなる。 ○底面中央に小さな凹み2ヶ所。	○底部外面、体部外面ヘラミガキ、内底面ヘラミガキののちナデ調整。	○やや粗い。2～3㎜大の長石、石英粒多量。角閃石、雲母微量。 ○明赤褐色(5YR5/8)。
	壺	294	○底径2.7 ○残高5.5 ○底部完存。	○小さな平底の底部で完形であれば自立はできないと思われる。 ○底部中央にいびつな浅い凹みがある。	○底部外面、体部下半外面縦方向のヘラミガキ。内底面ヘラミガキ調整。	○やや粗い。2～3㎜大の長石、石英粒多量、角閃石、雲母少量。 ○暗赤褐色(5YR3/4)。
	甕 b_1	295	○復口17.1 ○器高15.8 ○底部完存 ○体部1/6残	○「く」の字形に外反する口縁部で端部はわずかに面をなす。 ○体部中位よりやや上に最大径部をもつ球形の体部。 ○底部中央に皿状の凹みをもつ平底の底部。	○口縁部内外面ナデ調整。 ○体部外面、叩目ののちナデ仕上げ。体部上半の方がより丁寧にナデている。体部上半と下半の継ぎ目で段が出きている。分割成形によるひずみか。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石多量。1㎜前後の長石、雲母少量。 ○にぶい赤褐色(5YR5/4)。 ○他地域産。
	壺 b_2	296	○復頸19.2 ○器高3.5 ○頸部1/3残	○加飾する大型の壺。球形の体部上半部分。	○頸部に刻目を施した貼付突帯。 ○体部上半に3列の波状文(9条)と最下段に直線文(3条)を施す。 ○内面ナデ調整。粘土紐の継ぎ痕残す。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石多量。2㎜前後の長石、こまかな雲母少量。 ○にぶい褐色(7.5YR5/4)。
	高杯	297	○裾径10.2 ○残高5.9 ○裾部実存	○太く短い中実の脚柱部から内弯気味に広がる脚台がつく。 ○裾端部は丸く終る。	○裾部外面ヘラミガキののちナデ仕上げ。 ○内面ナデ、しぼり痕を残す。 ○円孔を3ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。	○やや粗い。1㎜前後の角閃石、長石粒を多量に含む。 ○明赤褐色(5YR5/8)。
	高杯	298	○復裾12.0 ○残高7.0 ○裾部1/2残 ○脚柱完存	○細く短い中実の脚柱部に内弯気味に広がる脚台がつく。 ○裾端部は丸く終わる。	○脚柱部外面縦方向のヘラミガキ、裾部外面ナデ。 ○内面ナデ、しぼり痕を残す。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。	○やや粗い。1㎜前後の角閃石多量。石英、長石粒少量。 ○明赤褐色(5YR5/8)。
	高杯	299	○復裾14.2 ○残高7.0 ○裾部1/2残 ○脚部完存	○298と同じ形態。	○脚柱部、裾部外面縦方向のヘラミガキ、裾部内面ナデ調整。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石多量、長石、石英粒少量。 ○明褐色(7.5YR5/6)。
	高杯	300	○裾径14.0 ○残高9.0 ○脚台部完存	○中実の脚柱部になだらかに裾部へ移行する。裾端部は面をもって終わる。	○脚柱部、裾部外面、縦方向のヘラミガキ、裾部内面ナデ。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。その際、内面に粘土のはみ出しが多く残る。	○良、1㎜前後の角閃石多量。こまかな長石、雲母少量。 ○橙色(7.5YR6/6)。
	高杯	301	○復裾10.4 ○残高5.3 ○脚柱完存 ○裾部1/2残	○299と同じ形態。	○脚柱部、裾部外面、縦方向のヘラミガキ、裾部内面ナデ。 ○円孔を4ヶ所、外面から内面へ等間隔に穿つ。しぼり痕を残す。	○やや粗い。1㎜前後の角閃石多量。こまかな長石粒、雲母少量。 ○にぶい赤褐色(5YR4/4)。
	高杯	302	○復裾8.6 ○残高5.0 ○脚柱完存 ○裾部1/2残	○中実の短い脚柱部よりなだらかに裾部へ移行する脚台がつく。裾端部は丸く終わる。	○脚柱部、裾部外面縦方向のヘラミガキ、裾部内面ナデ。内孔を外面から内面へ3ヶ所穿つ。 ○脚柱部上端に放射状に刻目を入れ杯底部との接合の強度を増している。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石、長石粒を多量。 ○橙色(5YR5/8)。
	高杯	303	○復裾10.0 ○残高6.4 ○脚柱完存 ○裾部1/2残	○299と同じ形態。	○脚柱部、縦方向、裾部横方向のヘラミガキ。裾部内面ナデの円孔を5ヶ所、等間隔に穿つ。	○やや粗い、2～3㎜大の長石、石英粒多量、こまかな角閃石、雲母微量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	高杯	304	○復口8.2 ○残高4.5 ○口縁½残	○天地不明 ○短い脚柱部に斜上方に外反する杯部がつく。口縁端部下方にわずかに拡張し面をなす。	○杯内外面ナデ調整。裾部に4ヶ所の円孔を外面から内面へ穿つ。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量、2～3mm大の長石粒、雲母少量 ○明赤褐色(5YR⅝)。
	高杯	305	○脚径3.5 ○残高5.7 ○脚柱完存	○中空の円筒形の脚柱部。	○脚柱部外面縦方向のヘラミガキ。 ○内面にしぼり痕。	○やや粗い。1mm前後の角閃石、2～3mm大の長石粒多量。 ○にぶい赤褐色(5YR¾)。
	高杯	306	○脚径3.9 ○残高6.5 ○脚柱完存	○中実の太い円筒形の脚柱部。	○脚柱部外面縦方向のヘラミガキ。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量、2～3mm大の長石粒も目立つ。 ○明赤褐色(5YR⅝)。

SD82(第50図、図版五十七)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕b	307	○復口15.0 ○残高11.5 ○口縁½残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終わる。	○口縁部内外面ナデ。体部外面粗い叩目(2条/cm)、内面ナデ調整。	○やや粗い、2～3mm大の角閃石多量。 1～2mm大の長石も目立つ。 ○明褐色(7.5YR⅝)。

SD83(第50図、図版五十六)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	壺e_2	308	○復口12.0 ○残高11.7 ○口縁⅔残	○体部に比し、直線的に外方へ大きく伸びる直口の口縁部。体部は球形で、丸底と思われる。	○口縁部内外面ナデ調整。 ○体部内外面ナデ調整。	○精良、こまかな石粒を少量。 ○赤橙色(10R⅝)。 ○他地域産。
	壺e_2	309	○口径10.8 ○残高12.6 ○口縁完存	○扁平で球形の体部に「く」の字形に斜上方に開く直口の口縁部。口縁部端は丸く尖り気味に終わる。	○口縁部内外面ナデ調整。 ○体部外面ナデ、内面上半指押え下半刷毛目ののち、ナデ仕上げ。	○精良、こまかな石粒少量。 ○赤橙色(10R⅝)。 ○他地域産。
	甕c_2	310	○口径13.5 ○残高11.2 ○口縁完存	○「く」の字形に口縁部に端部は丸く終わる。口縁部外面中央部が粘土の継ぎたしで少しふくらむ。頸部内面に稜をもつ。	○口縁部内外面ナデ。 体部外面ナデ、内面左まわりの弱いケズリ調整。	○粗い。1～2mm大の石粒長石粒など多量。 ○淡橙色(5YR⅔)。 ○他地域産。
	甕c_1	311	○復口48.1 ○残高10.2	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部端部はわずかに上方へつまみ上げる。 頸部内面に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ。 ○体部外面こまかな叩目。 内面右まわりのケズリ調整。	○やや粗い。こまかな石粒多く含む。 ○灰黄褐色(10YR⅝)。 ○他地域産。
	甕b_2	312	○復口15.8 ○残高6.9 ○口縁1/10残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。	○口縁部外面強いヨコナデ。体部外面叩目ののち、ナデ調整、内面弱いケズリ調整。器壁の厚さは0.7cmとあまり薄くなっていない。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量。1mm大の長石粒、雲母少量。 ○外面、黒斑。内面、赤褐色(5YR⅘)。

SD85(第50図、図版五十六)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕b_1	313	○復口18.3 ○残高23.7 ○口縁⅙残	○「く」の字形に外反する口縁部で端部はわずかに面をなす。最大径部が胴部下半にくる胴長の体部。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面粗い叩目ののち、ナデ仕上げ。内面はナデ調整。	○粗い。1～2mm大長石、石英粒多量、赤い石粒(くさり礫)微量。 ○にぶい黄橙色(10YR¾)。

ＳＤ80（第51図、図版五十七・五十八）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	高杯c	314	○復口10.0 ○残高8.5 ○口縁⅛残	○半球状の杯底部に短く細い中実の脚柱部がつく。口縁端部は丸く終わる。	○杯部内面放射状のヘラミガキ、外面ヘラミガキ、脚柱部ナデ。裾部に４ヶ所の円孔。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。長石粒少量、赤い石粒（くさり礫）雲母含む。
	高杯	315	○裾口11.0 ○残高5.2 ○裾口縁⅙残	○短い脚柱部に裾広がりの脚台がつく。裾端部は面をもって終る。 ○杯部欠損。	○裾部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。 ○裾部に３ヶ所円孔、円孔は外面から内面へ穿たれ、内面に粘土のはみ出しがある。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。長石粒雲母少量。 ○褐色(10YR⅔)。
	甕c_1	316	○復口14.2 ○残高5.9 ○口縁¼残	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部。端部はわずかに上方へつまみ上げ面をなす。頸部内面に稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面細かな叩目(6条/cm)。内面、左まわりのヘラケズリ調整。	○良。こまかな角閃石、長石を多量に含む。 ○にぶい黄褐色(10YR⅔)
	甕b	317	○復口13.6 ○残高3.6	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面叩目調整。	○良。こまかな角閃石、長石粒を含む。 ○にぶい黄褐色。
	甕c_1	318	○復口14.8 ○残高4.5 ○口縁¼残。	○317と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面細かな叩目(5条/cm)。内面右まわりのヘラケズリ調整。	○良、１mm大の角閃石多量、2～3mmの長石粒、雲母微量。 ○にぶい黄褐色(10YR⅔)
	甕c_1	319	○復口14.2 ○残高5.9 ○口縁⅙残。	○317と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面こまかな叩目(6条/cm)、内面右まわりのヘラケズリ。	○良、１mm大の角閃石多量、2～3mm大の長石粒、雲母微量。 ○にぶい黄褐色(10YR⅔)
	甕c_2	320	○口径15.0	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。頸部内面の稜は弱い。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面こまかな叩目(4条/cm)ののちナデ調整。内面左まわりの弱いケズリ。	○やや粗い。２～３mm大の長石、石英粒多量雲母、赤い石粒（くさり礫）微量。 ○他地域産。 ○橙色（5YR⅞）。
	高杯a	321	○復口12.8 ○残高6.7 ○口縁⅓残	○斜め上方にゆるやかにのびる杯底部に大きく外反する口縁部がつく。 ○端部は丸く尖り気味に終る。 ○屈曲部外面に稜、内面に段がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○杯部内外面ナデ調整。 ○脚柱部は挿し込み式。	○精良、赤い石粒、長石粒多量。雲母微量。 ○にぶい橙色(7.5YR⅞)。 ○他地域産。

ＳＤ81（第51図、図版五十六・五十七）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	小型器台	322	○復口9.4 ○残高2.5 ○口縁¼残	○浅い皿状の受部に口縁端部はわずかに上へつまみ上げられる。 ○脚柱部を受部底に挿し込む。	○受部内外面ナデ調整。	○精良。こまかな石粒雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR⅝)。 ○他地域産。
	高杯c	323	○復口11.8 ○残高4.1 ○口縁½残	○椀状の杯、口縁端部丸く尖り気味に終る。脚柱部は杯底部に組み合わせる。	○杯内面、放射状のヘラミガキののちナデ、外面ナデ調整。	○精良。こまかな石粒。雲母微量。 ○明赤褐色（2.5YR⅝)。 ○他地域産。
	壺e_1	324	○復口11.7 ○残高4.1 ○口縁⅙.5残	○直口壺、短く外上方に開く直口の口縁部。	○口縁部内外面ナデ調整、体部内面刷毛目(6条/cm)、外面ナデ調整。	○やや粗い、長石、石英粒多量、雲母、こまかな角閃石微量。 ○にぶい赤褐色(5YR⅝)。
	高杯	325	○裾径15.0 ○残高3.1 ○裾口½残	○脚柱部より角度をかえて内弯気味に広がる裾部。端部は尖り気味に丸く終る。	○裾部内外面ナデ調整。裾部に４ヶ所の円孔。円孔は外面から内面に向って穿つ。	○精良。こまかな石粒少量含む。 ○淡赤橙色(2.5YR⅞)。 ○他地域産。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 c_1	326	○復口12.9 ○残高4.5 ○口縁⅓残	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部。 ○端部は上方へつまみ上げて、受口状になり、面をなす。頸部内面に稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ、体部外面こまかな叩目(6条/cm)、内面左まわりのケズリ？調整。	○精良。こまかな角閃石雲母を多重に含む。 ○暗褐色 (7.5YR3/3)
	甕 c_1	327	○復口17.0 ○残高5.1 ○口縁⅕残	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部。 ○端部は上方へわずかにつまみ上げて面をなす。頸部内面に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面こまかな叩目(5条/cm)。内面右まわりのケズリ。	○良。1～2mm大の角閃石多量、こまかな石粒少量。 ○にぶい黄褐色(10YR6/4)。
	甕 c_1	328	○復口16.6 ○器高19.6 ○全体の½残	○球形の体部に「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁をもつ。口縁端部は上方へつまみ上げて受口状になり面をなす。 ○底部はわずかに突り気味になるが、ほぼ丸底。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半はこまかな叩目(6条/cm)。中位は棒状の工具で叩目を消す。下半はナデ調整。 ○体部内面上半は右下から左上へケズリ上げ、下半は右まわりに横にケズる。器壁の厚さは底部に至るまで3mm前後に統一されている。	○良。こまかな角閃石多量、こまかな石粒、雲母少量。 ○暗褐色(10YR3/3)。
	高杯 a	329		○斜め上方にまっすぐにのびる口縁部に杯底部は水平ににつく。	○口縁部外面ナデ、内面は放射状のヘラミガキ調整。	○こまかい石粒、赤い石粒少量。 ○明赤褐色(2.5YR5/8)。 ○他地域産。

ＳＥ５ 第１層（第52図、図版五十八・六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 b_1	330	○復口15.4 ○残高4.0 ○口縁¼残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナデ。 ○体部外面叩目ののちナデ仕上げ。内面棒状工具によるナデつけ。 ○頸部内面に接合時の粘土がはみ出したまま調整しないで段になっている。	○やや粗い。1mm前後の角閃石、雲母多量。こまかな石粒少量。 ○にぶい褐色(7.5YR5/4)。
	甕 b_1	331	○復口11.4 ○残高5.0 ○口縁⅓残	○331と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面粗い叩目(2条/cm)、内面ナデ仕上げ。	○やや粗い、1～2mm大の角閃石、雲母多量、こまかな石粒少量。 ○にぶい褐色(7.5YR5/4)。
	甕 c_1	332	○復口17.4 ○残高5.0 ○口縁⅙残	○「く」の字形に屈曲外反する口縁部、端部は上方へつまみ上げ面をなす。この際、口縁部中央がわずかにふくらむ。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面こまかな叩目(6条/cm)。内面左まわりのケズリ調整。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量。長石粒、雲母少量。 ○にぶい黄橙色(10YR6/3)。
	甕 c_1	333		○333と同じ形態。	○333と同じ技法。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量。長石粒、雲母少量。 ○にぶい黄橙色(10YR6/3)。
	甕 c_1	334	○復口17.8 ○残高2.5 ○口縁¼残	○体部以下欠損。 ○333と同じ形態。	○333と同じ技法。	○やや粗い。1mm前後の石粒。
	甕 c_1	335	○復口19.0 ○残高4.0 ○口縁⅙残	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部、端部はわずかに上方へつまみあげ、狭い面をなす。 ○頸部内面に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面、こまかな叩目(6条/cm)の上に粗い刷毛目(4条/cm)で調整。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量、2mm大の長石粒少量。 ○灰黄色(2.5Y6/2)。
	甕 c_1	336	○復口17.8 ○残高2.5 ○口縁¼残	○体部以下欠損。 ○333と同じ形態。	○333と同じ。	○やや粗い。1mm大の角閃石多量、2mm大の長石粒少量。 ○灰黄色(2.5Y6/2)。
	甕 c_1	337	○復口15.9 ○残高12.0	○336と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面こまかな叩目、内面右まわりのケズリ調整。	○やや粗い。1mm大の角閃石、長石粒を含む。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	鉢	338	○復口11.8 ○残高4.0 ○口縁⅓残	○底部以下欠損。 ○浅い椀状を呈する杯部、口縁部は丸く終る。	○口縁部内外面、横方向の丁寧なヘラミガキ調整。	○精良。こまかな石粒少量。 ○にぶい橙色(5YR 7/6)。 ○他地域産。
	小型鉢	339	○復口11.6 ○残高4.3 ○口縁⅓残	○底部以下欠損。 ○浅い椀状の体部に屈曲して斜上方にのびる口縁部。端部は尖り気味に丸く終る。	○口縁部、体部、内外面ともナデ調整か、磨滅激しく詳細不明。	○精良。こまかな石粒微量。 ○他地域産。 ○橙色(5YR 6/8)。
	高杯	340	○残高6.0	○杯部、脚裾端欠損。 ○脚柱部はなく、杯底部から斜下方に広がる脚台をもつ。	○脚裾、外面ヘラミガキ、内面ナデ杯部との境に棒の先端による圧痕 ○裾部に４ヶ所の円孔。 ○内面にしぼり痕。	○やや粗い。1～2mm大の長石、石英粒多量。雲母少量、角閃石微量。 ○橙色(2.5YR 6/8)。
	高杯	341	○復裾22.0 ○残高5.1 ○裾口⅓残	○杯部欠損。 ○内弯気味に広がる脚台。裾部端は丸く終る。	○裾部内外面ヘラミガキか、磨滅激しく詳細不明。	○精良。こまかな石粒少量。 ○他地域産。 ○橙色(7.5YR 7/6)。
	高杯	342	○復裾13.2 ○残高1.8	○杯部欠損。 ○低く大きく広がる脚台。	○内外面ともナデ調整か、磨滅が激しく詳細不明。	○精良。こまかな砂粒を含む。 ○他地域産
	高杯	343	○脚柱3.0 ○残高4.3 ○脚柱完存	○杯部、裾部欠損。 ○細く短い中空の脚柱部から屈曲して、水平に大きく広がる裾部。	○脚柱部外面、縦方向のヘラミガキ裾部横方向の丁寧なヘラミガキ。 ○裾部内面刷毛目(8条/cm)調整。 ○裾部に円孔を外面から内面へ穿つ。	○精良。こまかな石粒微量。 ○他地域産。 ○にぶい橙色(5YR 6/4)。
	鉢	344	○復口13.2 ○器高10.7 ○口縁½残	○小型の甕と区別が難しい。 ○口縁部がゆるやかに外反し、端部は面をなす。 ○最大復径が中位より上にあり胴部は張り出さない。 ○底部は平底。	○口縁部外面ヨコナデ、接合痕残す。 ○体部外面縦方向の刷毛目(6条/cm)。 ○内面横方向の刷毛目調整。 ○底部内面、圧痕、及び焼けこげが認められる。	○やや粗い。１mm前後の角閃石多量、２～５mmの石粒目立つ。 ○褐色(7.5YR 4/6)。
	小型鉢	345	○口径7.9 ○器高5.8 ○完存	○球形の体部にゆるやかに外反する口縁部がつく。端部は丸く終る。 ○平底の小さな底部がつく。	○口縁部内外面ヨコナデ。体部外面叩目ののち、ナデ仕上げ。内面、丁寧なナデ調整。	○やや粗い。１mm前後の角閃石、長石粒多量。 ○にぶい褐色(7.5YR 5/4)。
	甕	346	○底径3.7 ○残高3.5 ○底部完存	○小さな平底の底部。底部の器壁を0.5cmと薄くつくる。	○底部外面を左方向のヘラケズリ、体部外面は粗い叩目(2.5条/cm)。内面はナデ調整。 ○内底面にしぼり痕。	○良、こまかな長石、雲母少量。 ○にぶい橙色(7.5YR 7/3)。 ○他地域産。

ＳＥ５ 第２層（第52図、図版六十～六十二）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	壺c	347	○復口14.8 ○残高2.1 ○口縁¼.5残	○外反する口縁部に端部はわずかに上方へつまみ上げて面をなす。	○口縁部内外面ナデ調整。 ○口縁部内面に櫛描波状文（４条）を１列めぐらす。	○やや粗い。1～2mm大の長石、石英粒多量。 ○明赤褐色(2.5YR 5/8)。 ○他地域産。
	小型壺	348	○口径8.7 ○器高12.9 ○完存	○小型の球形の体部から短く外反する口縁部をもつ。端部は丸く終る。 ○底部は小さな平底、かろうじて自立はするが不安定。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部上半縦方向のヘラミガキ。下半は下から上へ弱いケズリ調整。	○やや粗い。1～2mm大の石英、１mm前後の長石多量。こまかな角閃石、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR 5/6)。
	小型甕	349	○口径11.8 ○器高12.0	○小型の球形の体部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ端部をわずかにつまみ上げ、面をつくる。 ○底部は小さな平底でわずかに凹む。自立はするが不安定。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面粗い叩目(2.5条/cm)ののちナデ調整を施す。内面ナデ調整。 ○底部内面しぼり痕を残す。	○良、こまかな石粒多量こまかな角閃石微量。 ○赤褐色(2.5YR 4/6)。
	甕c_1	350	○復口15.4 ○残高8.2	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部、端部は上方へつまみ上げ、受口状を呈す。 ○頸部内面に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面こまかな叩目(5条/cm)ののち、刷毛目(5条/cm)で調整する。内面は右まわりのケズリ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。2～3mm大の長石、石英粒少量。 ○暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 c_1	351	○口径17.2 ○残高3.5 ○口縁完存	○336と同じ形態	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面叩目(5条/cm)、内面右方向のケズリ調整。	○良、こまかな角閃石多量、赤い石粒（くさり礫）雲母、長石粒少量 ○暗褐色(7.5YR3/4)。
	甕 c_1	352	○口径15.2 ○残高4.1 ○口縁完存	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部、端部は上方へつまみ上げ受口状を呈し、端部に1条の浅い沈線がめぐる。 ○頸部内面に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面こまかな叩目(7条/cm)、内面は左まわりのケズリ調整。	○良、こまかな角閃石多量、こまかな長石粒）雲母少量。 ○黒褐色(2.5Y3/2)。
	甕 b_1	353	○復口12.8 ○残高5.3 ○口縁1/4残。	○331と同じ形態	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面粗い叩目(2.5条/cm)、内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量、雲母、長石粒少量。 ○明褐色(7.5YR5/6)。
	高杯 c	354	○口径11.8 ○残高7.3 ○杯、脚柱部完存	○浅い椀状の杯部に細く短い脚柱がつく。 ○脚柱部から屈曲して広がる裾部がつくと思われる。	○杯部内面縦方向のヘラミガキののち、ナデ仕上げ、外面、横方向のヘラミガキ調整。 ○脚柱部、裾部外面ヘラミガキ、裾部内面刷毛目調整。	○精良、こまかな石粒、雲母少量。 ○明赤褐色(2.5YR5/6)。 ○他地域産。
	小型器台	355	○口径9.8 ○器高9.3	○浅い皿状の受部に口縁端部をわずかに上方へつまみ上げ、面をなす。 ○直線的に裾広がりとなる脚台がつく。	○受部口縁内外面ヨコナデ。受部・脚裾部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。 ○裾部に外面から内面へ穿つ4孔の円孔がある。	○精良、こまかな石粒、雲母少量。 ○橙色(2.5YR6/8)。 ○他地域産。
	鉢	356	○残高7.0 ○底部完存	○丸底の底部。底部中央に外面から内面へ向けて、径 0.8cmの円孔を穿つ。	○体部下半粗い叩目(2.5条/cm)、内面ナデ調整。 ○底部の部分に粘土継ぎ足した痕跡があり、その上からさらに叩目を施して底部は丸くつくっている。	○やや粗い、1～2mm大の長石、雲母、角閃石少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。
	高杯 b	357	○口径22.3 ○残高12.8 ○杯部、脚柱部完存	○水平方向にのびる小さな杯部から角度をかえて直線的にのびる口縁部がつく。口縁端部丸く終る。屈曲部で内外面に稜がつく。 ○円筒形の中実の脚柱部。	○口縁、杯部外面刷毛目ののちヘラミガキ。内面ナデ調整。 ○脚柱部外面磨滅が激しく詳細不明ヘラミガキか。内面しぼり痕。	○やや粗い。1～2mm大の長石、石英粒多量。雲母、赤い石粒（くさり礫）少量。 ○明赤褐色（5YR5/6)。 ○他地域産。
	壺	358	○底径5.8 ○残高11.5 ○底部完存	○小さな突出した平底の底部。 ○体部下半は球形。	○底部外面ナデ、内底面粗い刷毛目(原体幅1.2cm、条数7条)。 ○体部外面、内面同一原体の刷毛目調整。	○やや粗い。1～2mm大の長石、石英粒多量。こまかな雲母多量。角閃石微量。 ○灰黄褐色(10YR6/2) ○他地域産？ ○体部下半に煤が付着。
	甕 b	359	○口径15.5 ○器高23.0 ○完存	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。 ○最大部径が体部中位にあり、少し胴長であるが球形化が著しい。 ○底部はわずかに平担面を残すが、丸底化が著しく、自立はしない。	○口縁部内外面ヨコナデ。 ○体部外面、左下りの粗い叩目(2.5条/cm)を全面に施す。体部下半と接合部分でナデにより叩目を消している。 ○底部末端まで叩目が施される。	○やや粗い。1～2mm大の長石、石英粒多量。こまかな角閃石、雲母少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。 ○体部下半全面に煤の付着が著しい。
	甕 b_1	360	○復口16.4 ○残高21.0	○底部欠損、他の形態は(1)と同じ。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面粗い叩目(2条/cm)内面ナデ調整。	○粗い。2～3mm大の角閃石多量。1mm大の長石粒、雲母少量。 ○にぶい赤褐色(2.5YR4/4)
	甕 c_1	361	○口径17.2 ○器高22.2 ○完存	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部端部は上方へつまみ上げ面をなす。頸部内面に鋭い稜をもつ。 ○底部はわずかに尖り気味ながら、丸底である。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部上半左下りのこまかな叩目(6条/cm)下半を叩目ののち刷毛目(原体幅1.2cm、条数6条）で仕上げる。底部はナデ調整。 ○体部内面上半は左まわりのケズリ下半は下から上のケズリ上げる。	○やや粗い。こまかな角閃石、雲母多量。1～2mm大の長石、石英粒少量。 ○浅黄色(2.5Y7/3)。 ○体部下半（底部付近をのぞく）に煤の付着が著しい。 ○体部内面下半に黒色の炭化物。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 c_1	362	○復口16.8 ○器高22.7	○361と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に叩目の痕跡あり。口縁部を叩板で叩き出したのちにヨコナデで調整する。 ○体部外面細かな叩目(6条/cm)下半は刷毛目＋ナデ調整。 ○内面頸部刷毛目、他はケズリ調整。	○良。こまかな角閃石多量、こまかな長石粒、雲母少量。 ○にぶい黄橙色(10ＹＲ6/3)。
	甕 c_1	363	○復口16.1 ○残高11.6	○361と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面叩目ののち刷毛目調整。円面右まわりのヘラケズリ調整。	○良。こまかな角閃石多量、こまかな長石、雲母少量。 ○浅黄色。
	甕 c_1	364	○復口15.3 ○残高11.2 ○口縁½残	○体部下半欠損。 ○361と同じ形態。	○口縁部内外面ヨコナデ。 ○体部外面左下りのこまかな叩目。(5.5条/cm)体部内面、右まわりのケズリ調整。	○精良、こまかな角閃石雲母、石粒を少量。 ○黒褐色(2.5Ｙ3/2)。
	壺 e_1	365	○口径12.1 ○器高27.7 ○完存	○大型の直口壺。 ○短く斜上方に開く直口の口縁部。 ○最大部径が体部中位にある球形の体部。 ○底部はわずかに突出し、比較的しっかりした平底。	○口縁部内面ヨコナデ、外面縦方向の刷毛目（原体幅1.05cm、条数７条)。 ○体部内面、板状工具によるナデつけ、外面の上半と底部付近に叩目(2.5条/cm)を残す。外面上半は刷毛目(原体は同じ)で叩目の上から調整し、下半は板状工具で軽くケズルように下から上へナデつける。	○やや粗い。2～3mm大の長石粒多量。こまかな石英粒、雲母少量。こまかな角閃石微量。 ○明褐色(7.5ＹＲ5/6)。 ○底部をのぞく体部下半に煤の付着が著しい。

ＳＥ６（第54図、図版六十三）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	壺	366	○底径5.0 ○残高5.2 ○底部完存	○わずかに突出する小さな平底の底部。 ○底部中央は凹む。	○体部下半外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の閃石、長石粒多量。雲母、石英粒少量。 ○褐色(10ＹＲ4/6)。
	壺	367	○底径5.0 ○残高3.9 ○底部完存	○突出部はなく、中央部が凹む平底の底部。	○体部下半外面叩目ののちナデ仕上げ。 ○内面ナデ調整。	○やや粗い。こまかな角閃石多量。2～3mm大の長石粒少量。 ○明褐色(7.5ＹＲ5/6)。
	高杯	368	○残高6.2 ○脚柱完存	○細い中空気味の脚柱部より角度をかえて、水平方向に広がる脚裾部をもつ。	○脚柱部、横方向のヘラミガキ、裾部ヘラミガキ。裾部内面ナデ調整。	○精良、こまかな石粒少量。 ○明赤褐色。 ○他地域産。
	壺	369	○残高19.9	○口縁・底部欠損。 ○最大復径は体部中央より下位にある下ぶくれの壺。	○体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。内面に粘土紐の接合痕顕著。(粘土紐幅1.8cm)	○やや粗い。1～2mm大の角閃石、長石粒多量。雲母、石英粒少量。 ○褐色(7.5ＹＲ4/)。 ○367と同一個体か？

包含層（第55図、図版六十四）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 d	370	○復口15.0 ○残高5.2 ○口縁½残	○球形の体部から「く」の字形に鋭く屈曲し、外弯気味の口縁部がつく。 ○口縁端部は内方へ丸く肥厚する。	○口縁部外面ナデ、内面刷毛目(7条/cm)。 ○体部外面刷毛目、内面は頸部から少し下がったところから、右まわりのケズリ調整。	○やや粗い。１mm前後の石粒多量、雲母少量。 ○にぶい橙色(7.5ＹＲ6/4)。 ○他地域産。
	甕 d	371	○復口15.8 ○残高4.3 ○口縁½残	○(1)と同じ形態。	○(1)と同じ技法。	○(1)と同じ。 ○(1)と同一個体と思われる。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕 c_2	372	○復口17.0 ○残高3.5 ○口縁1/6残	○「く」の字形に鋭く屈曲外反する口縁部。 端部はわずかに上方へつまみ上げ、面をなす。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面叩目ののち、ナデ調整。内面右まわりのケズリ調整。	○やや粗い。1㎜前後の石粒多量、赤い石粒、(くさり礫)少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。
	甕 a	373	○復口15.2 ○残高3.2 ○口縁1/6残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は面をもって終る。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面叩目、内面ナデ調整。	○やや粗い。1㎜前後の長石、石英粒多量。 雲母、角閃石少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。
	甕 b_1	374	○復口15.4 ○残高7.3 ○口縁1/10残	○「く」の字形に外反する口縁部に端部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面叩目ののちナデ調整。 内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石多量。長石、石英粒少量。 ○褐色(10YR4/6)。
	壺 b_2	375	○復口23.2 ○残高5.6	○大型の二重口縁壺。 ○外反する口縁部で端部は面をもって終る。 ○外面の屈曲部で段をもつ。	○口縁部内外面ヘラミガキ調整。 ○口縁部は径2㎝の円形浮文(十竹管文)を施すが間隔は不明。	○やや粗い。1～3㎜大の長石粒多量。こまかな石英粒、角閃石少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。
	壺 b_2	376	○復口16.6 ○残高2.4 ○口縁1/7残	○加飾する壺。 ○外反する口縁部で端部を下方に拡張する。	○口縁部外面、縦方向のヘラミガキ、内面横方向のヘラミガキ調整。 ○口縁端部に波状文を施こしたのちに径1㎝の円形浮文(十竹管文)を4～5㎜間隔を施す。 ○口縁部内面にも波状文を施す。	○やや粗い。1～2㎜大の長石粒多量。角閃石、石英粒、雲母少量。 ○褐色(7.5YR5/6)。 ○器台の口縁部の可能性がある。
	壺 a	377	○残高7.3	○中期の壺胴部片。	○頸胴部に櫛描直線文(9条)を3条施す。内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石多量。こまかな長石粒微量。 ○にぶい黄褐色(10YR4/3)。
	小型鉢	378	○復口8.2 ○残高4.3 ○口縁1/6残	○すり鉢状の体部にわずかに外反する口縁部がつく。 端部は丸く終る。	○磨滅が激しく詳細不明。	○やや粗い。1㎜大の長石、石英粒多量。 ○黄褐色(10YR5/6)。 ○他地域産。
	小型丸底壺	379	○復口9.4 ○残高5.7 ○口縁1/10残	○球形の体部にわずかに外反する口縁部がつく。端部は丸く終る。	○口縁部内外面ヨコナデ調整。 ○体部外面、刷毛目ののちヘラミガキ調整。 ○内面左まわりの弱いケズリ調整。	○やや粗い。1～2㎜大の石英粒多量。こまかな長石粒少量。 ○にぶい黄橙色(10YR7/3)。 ○他地域産。
	壺	380	○残高3.4	○加飾する壺頸胴部片。	○頸胴部外面に波状文(6条)を施したのち、密接して直線文(同一原体)を施す。 ○内面ナデ調整。	○やや粗い。1㎜大の角閃石多量。1～3㎜大の長石粒少量。 ○明赤褐色(5YR5/6)。
	鉢	381	○底径2.4 ○残高4.6 ○底部完存	○底部中央に内面から外面に円孔(径0.6㎝)を穿つ。	○体部下半外面叩目、内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2㎜大の角閃石、長石粒多量。 ○にぶい黄褐色(10YR5/4)。
	壺	382	○底径4.6 ○残高2.9 ○底部完存	○突出した平底の底部。	○底部、体部下半叩目ののちナデ調整を施す。内面ナデ、内底面にしぼり痕。	○やや粗い。1～2㎜大の長石粒、こまかな角閃石多量。 ○赤褐色(5YR4/8)。
	甕	383	○底径3.9 ○残高2.5 ○底部完存	○平底の底部。	○底部外面、叩目ののちナデ仕上げ内面ナデ、しぼり痕残す。	○やや粗い。こまかな石粒、角閃石多量。 ○褐色(7.5YR4/3)。
	鉢	385	○底径3.3 ○残高4.2 ○底部完存	○小さな平底の底部。 ○底部中央に外面から内面に径0.6㎝の円孔を穿つ。	○体部下半外面叩目(2.5条/㎝)、内面ナデ調整。しぼり痕残す。	○やや粗い。こまかな角閃石多量、長石粒少量 ○褐色(10YR4/6)。
	壺	386	○底径4.8 ○残高3.2 ○底部完存	○突出した平底の底部。	○底部、体部下半外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。しぼり痕残す。	○やや粗い。1～2㎜大の長石粒、雲母多量。こまかな角閃石少量。 ○暗褐色(10YR3/4)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕	387	○底径4.7 ○残高2.5 ○底部完存	○突出した平底の底部。	○底部外面叩目、内面ナデ調整。	○良、こまかな角閃石、石粒少量。 ○にぶい黄褐色(10YR5/4)。
	甕	388	○底径3.1 ○残高1.8	○突出し、少し丸底傾向の底部。	○底部外面叩目、内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の長石・角閃石含む。 ○にぶい黄褐色。
	甕	389	○底径3.3 ○残高2.4	○突出した平底の底部。	○底部外面叩目、内面ナデ調整。 ○内底面にしぼり痕を残す。	○やや粗い。1mm大の長石粒・角閃石を含む。 ○褐色(7.5YR5/4)。
	甕	390	○底径3.4 ○残高1.2	○突出した平底の底部。 ○底部の中央が凹む。	○底部外面叩目、内面ナデ調整。	○やや粗い。角閃石・雲母を多量に含み、2～3mm大の長石粒少量。 ○にぶい黄褐色(10YR5/3)。
	甕	391	○底径3.6 ○残高1.5 ○底部完存	○小さな平底の底部。 ○底部中央が浅く凹む。	○底部外面叩目(3.5条/cm)、内面ナデ調整。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。石粒少量。 ○にぶい黄橙色(10YR6/4)。
	甕	392	○底径4.0 ○残高2.0 ○底部完存	○小さな平底の底部	○底部外面末端まで叩目。底部内底面しぼり痕	○やや粗い。1～2mm大の角閃石、長石、石英粒多量。 ○褐色(7.5YR5/4)。
	高杯	393	○残高7.4 ○脚柱完存	○杯部、裾部欠損 ○中空の細長い脚柱部	○脚柱部外面へラミガキののち、ナデ、内面ナデ調整。	○精良、こまかな石粒少量。 ○にぶい橙色(7.5YR7/4)。 ○他地域産。
	高杯	394	○裾径11.0 ○残高6.0 ○裾口1/6残	○杯部欠損 ○杯部から内弯気味に広く、裾部がつく。裾部に外面から内面へ穿つ円孔4ヶ所。	○脚裾部外面へラミガキ、内面ナデ調整。	○良。1mm前後の角閃石多量。長石、石英粒少量。 ○褐色(10YR5/4)。
	高杯	395	○残高7.0 ○脚柱完存	○杯部、裾部欠損。 ○中空の細長い脚柱部。	○脚柱部外面ナデ、内面ナデ調整。	○精良、こまかな石粒少量。 ○橙色(7.5YR7/6)。 ○他地域産。
	高杯	396	○残高6.0 ○脚柱完存	○杯部、裾部欠損。 ○円筒形の脚柱部から角度をかえて水平方向に広がる裾部。 ○脚柱部に径1cmの孔があく中空の脚部。	○脚柱部外面へラミガキののち、ナデ調整。裾部内面ナデ調整。	○やや粗い。1mm前後の長石、石英粒多量。雲母少量。 ○にぶい橙色(7.5YR6/4)。 ○他地域産。
	高杯	397	○裾復15.9 ○残高7.3 ○裾径1/6残	○杯部欠損 ○短い中空の脚柱部から角度をかえて内弯気味に水平方向に広がる裾部。 ○裾部に円孔を穿つ。	○脚柱部外面へラミガキののち、ナデ調整。裾部外面ナデ、内面刷毛目ののちナデ調整。	○やや粗い。2～3mm大の長石粒、こまかな石英粒多量。 ○橙色(7.5YR6/6)。 ○他地域産。
	高杯	398	○裾復15.6 ○残高5.8 ○裾径1/6残	○杯部欠損 ○太く短い脚柱部からなだらかに広がる脚裾部。裾端部は面をもつと終る。	○裾部外面縦方向のへラミガキ、内面ナデ調整。 ○裾部に外面から内面へ4ヶ所の円孔を穿つ。	○やや粗い。1～2mm大の角閃石多量。1mm大の長石粒、雲母少量。 ○赤褐色(5YR4/6)。

図　　版

図版一　遺跡周辺の調査前航空写真

昭和60年撮影

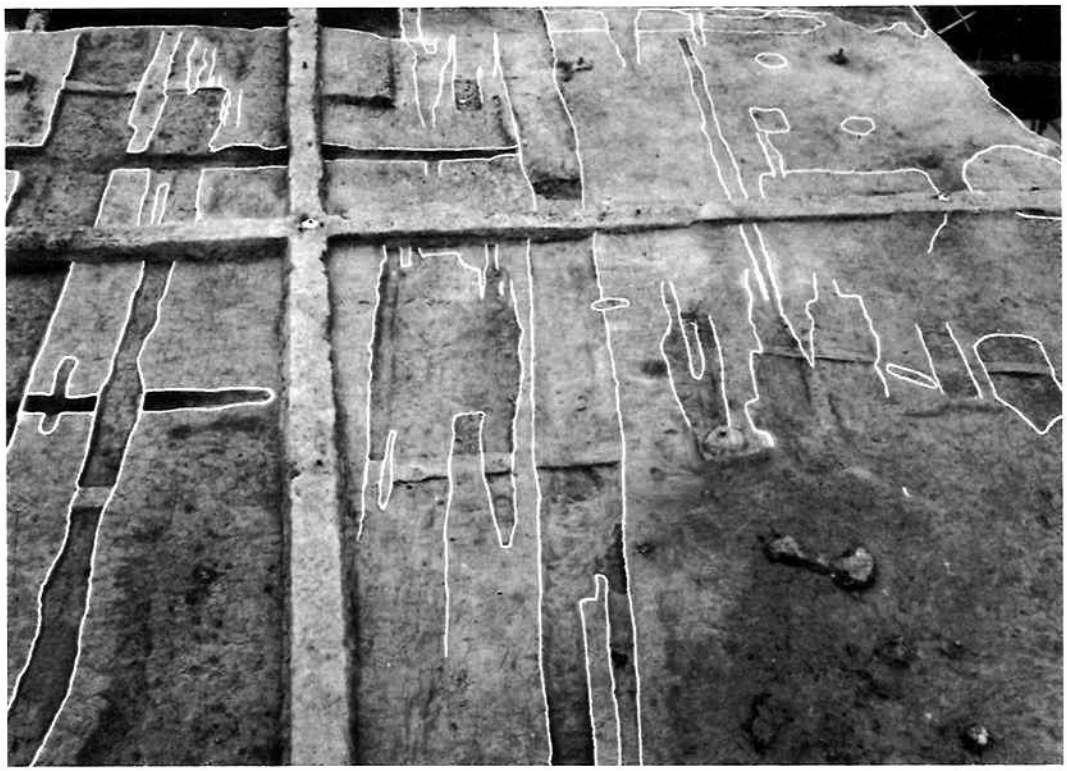
図版二　土層断面

1．調査地中央部断面

2．調査地東端断面

図版三　平安時代以降の遺構

1．畝掘削前の状況



2．畝検出状況

図版四　平安時代の遺構

1．ＳＫ５　土器出土状況

2．ＳＫ６　土器出土状況

図版五　平安時代の遺構

1．ＳＥ２　上部検出状況

2．ＳＥ２　上部検出状況

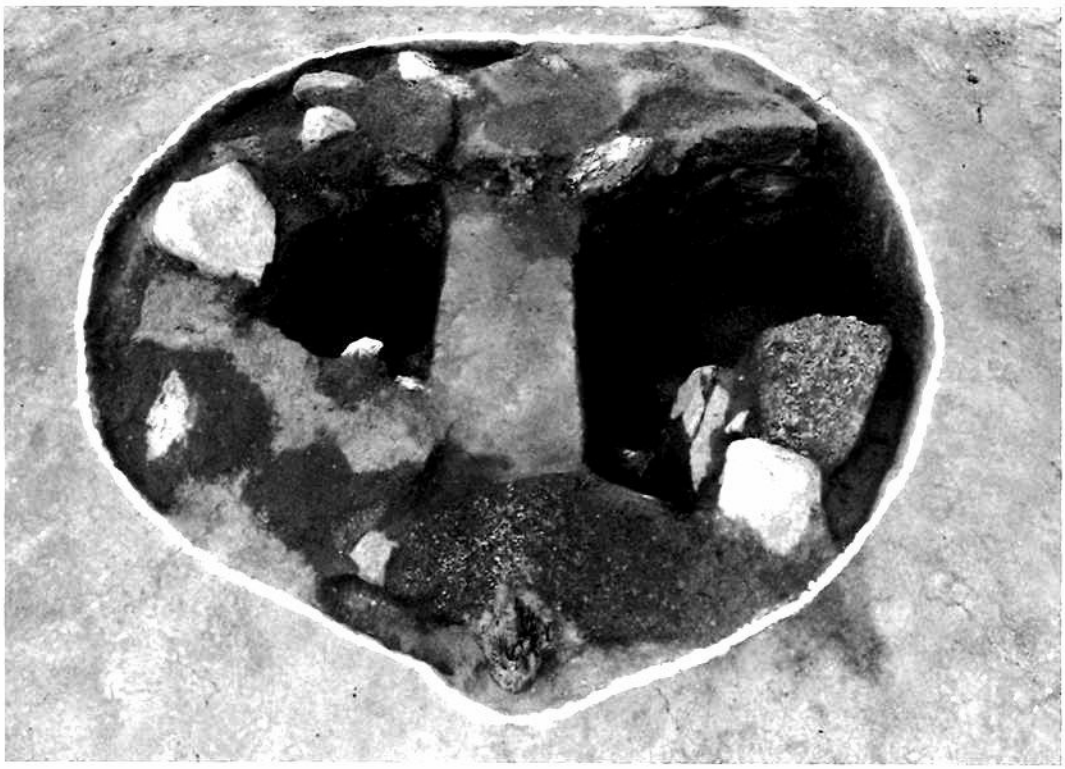
図版六　平安時代の遺構

1．ＳＥ２　井戸枠組み合わせの状況

2．ＳＥ２　最下部検出状況

図版七　平安時代の遺構

1．ＳＥ３と覆屋検出状況



2．ＳＥ３　上部構造検出状況

図版八　平安時代の遺構

1．ＳＥ３　下部構造検出状況

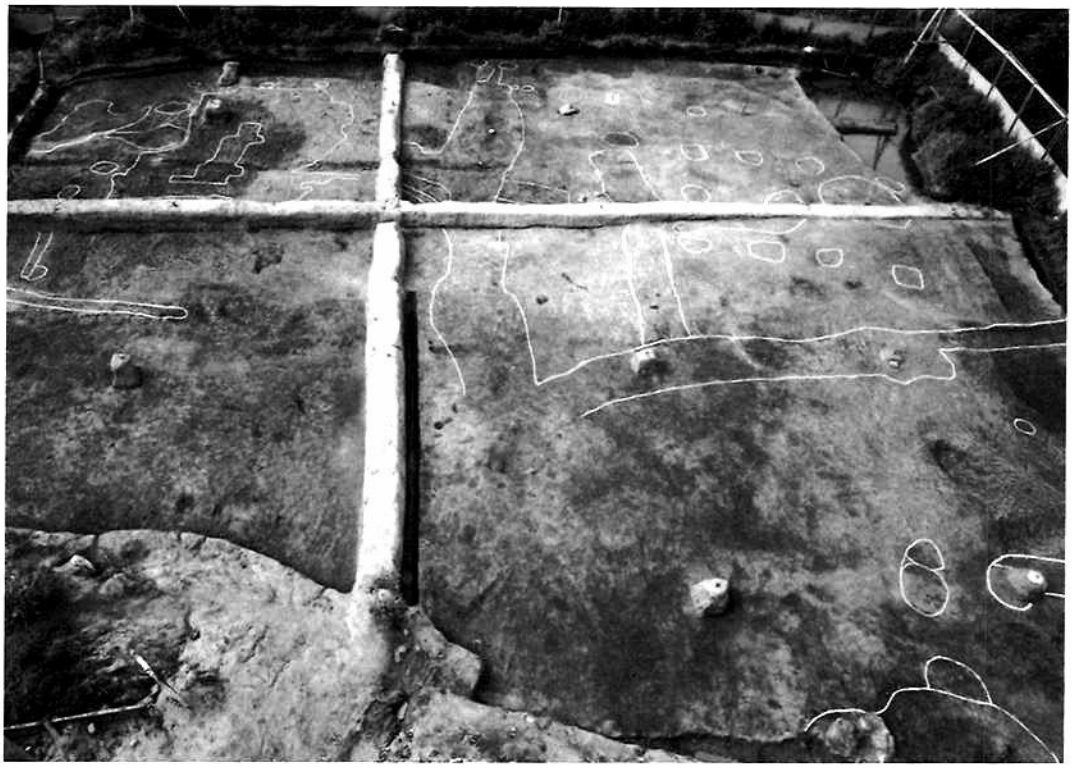
2．ＳＥ３　下部構造検出状況

図版九　平安時代の遺構

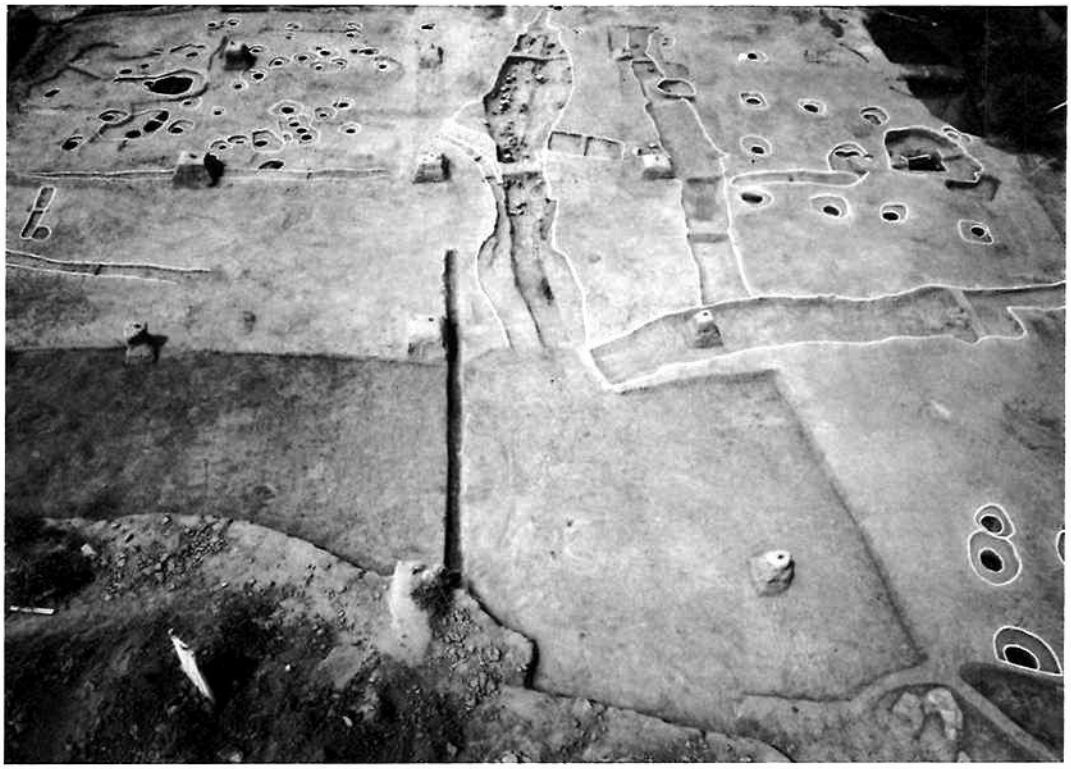
1．SE3　最下部検出状況

2．SK3　土器出土状況

図版十　古墳時代の遺構

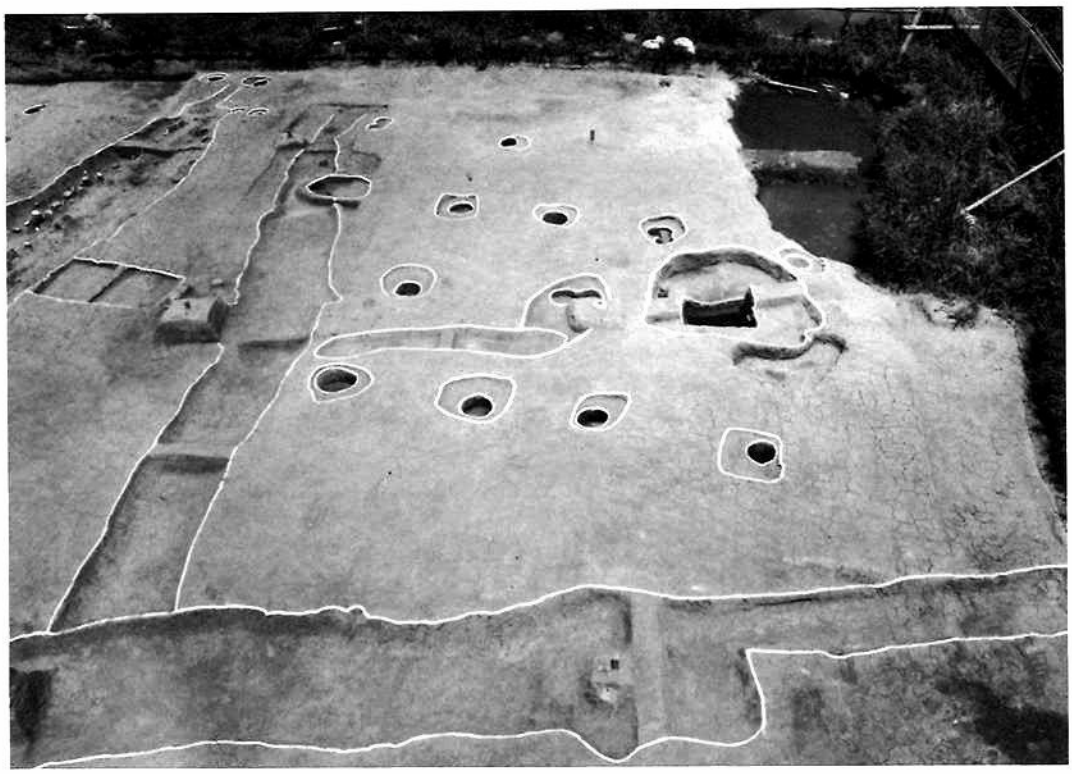


1．遺構全景　掘削前の状況

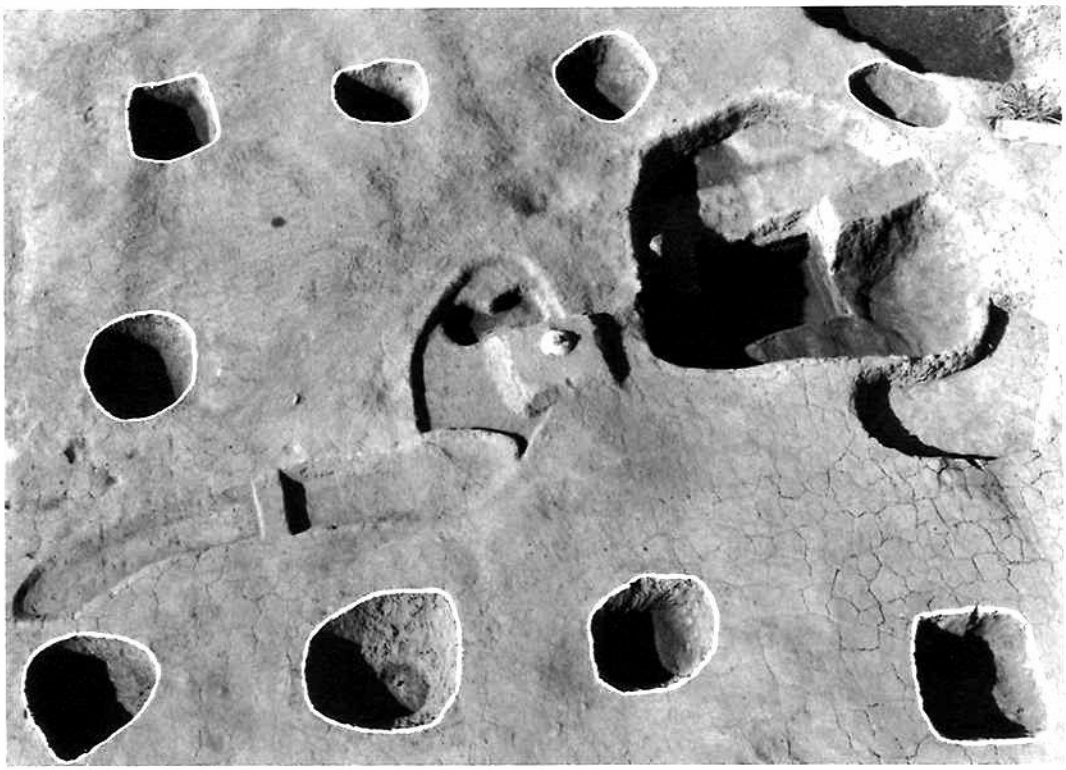


2．遺構全景　検出状況

図版十一　古墳時代の遺構

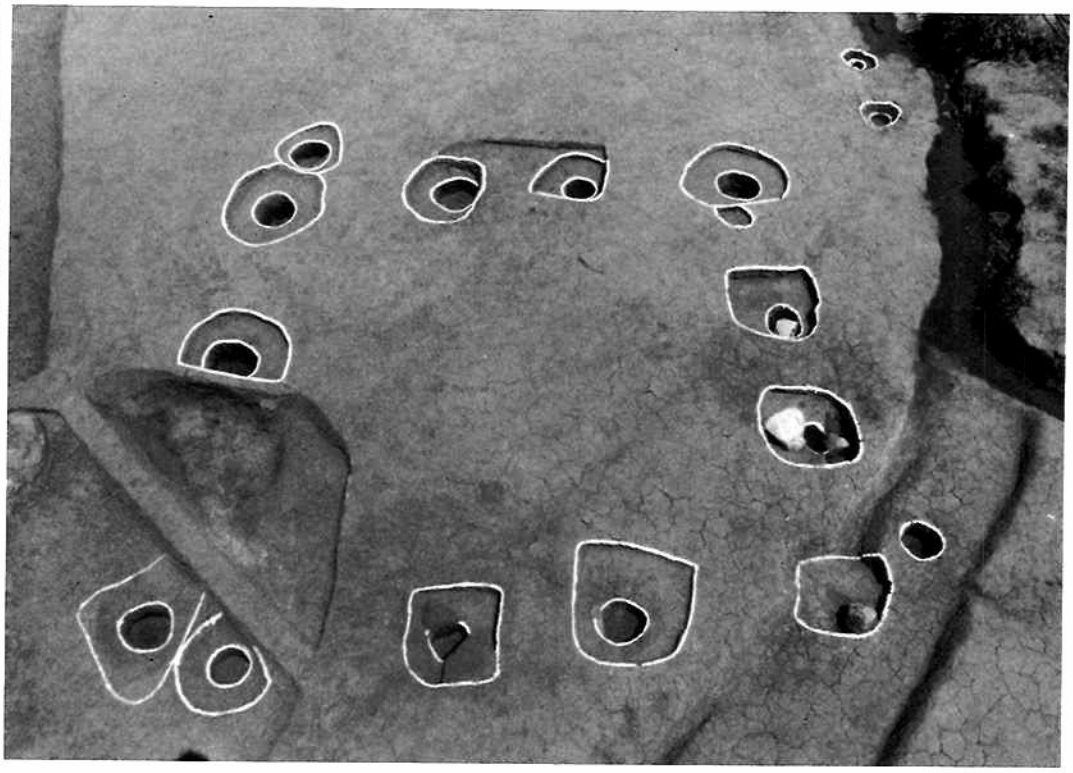


1．ＳＤ65、ＳＤ67、ＳＢ１　検出状況

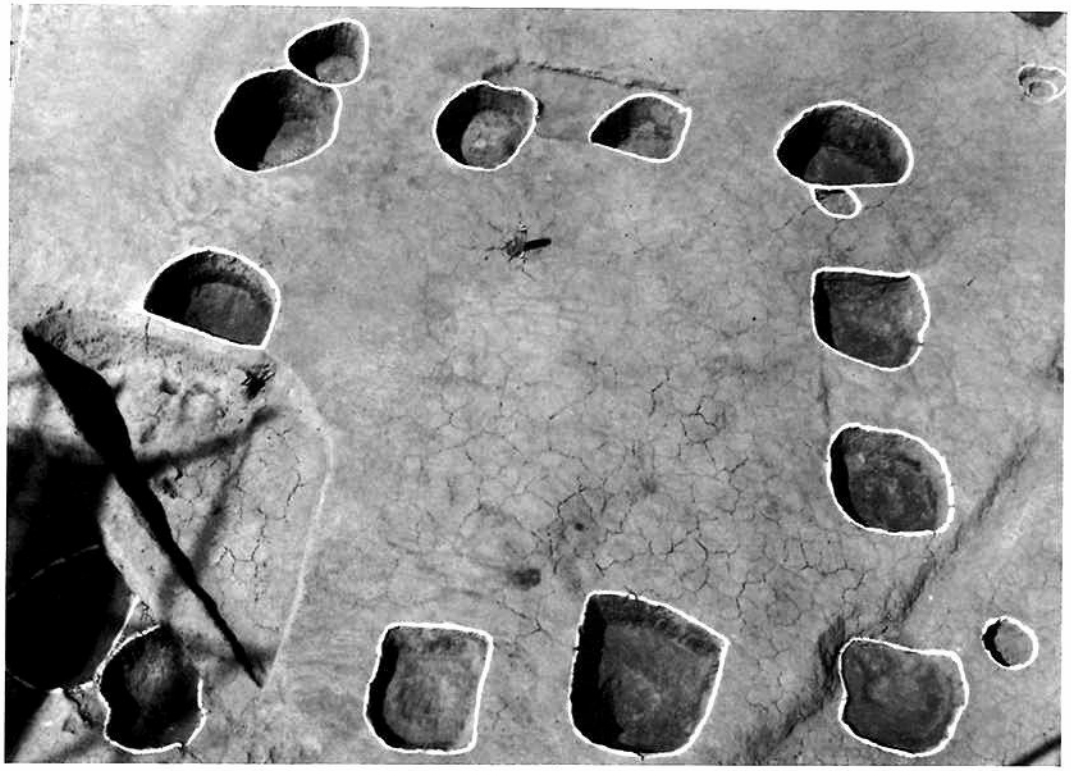


2．ＳＢ１　完掘状況

図版十二　古墳時代の遺構

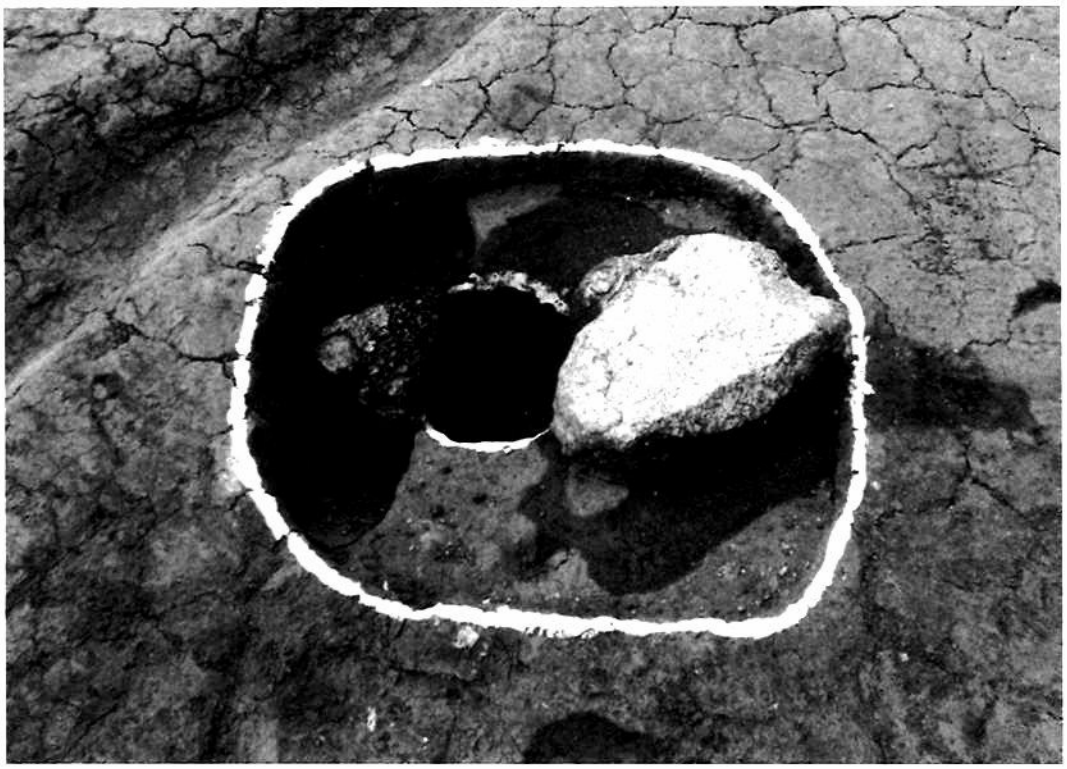


1．ＳＢ２　検出状況



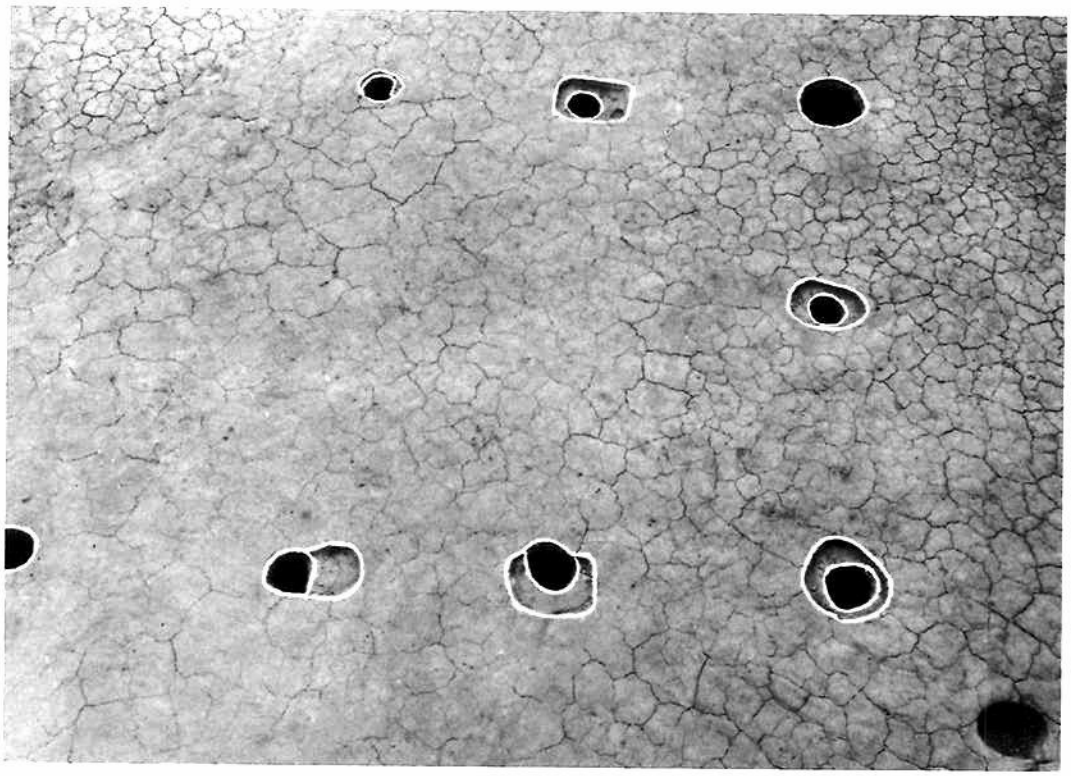
2．ＳＢ２　完掘状況

1．ＳＢ２の根石　検出状況

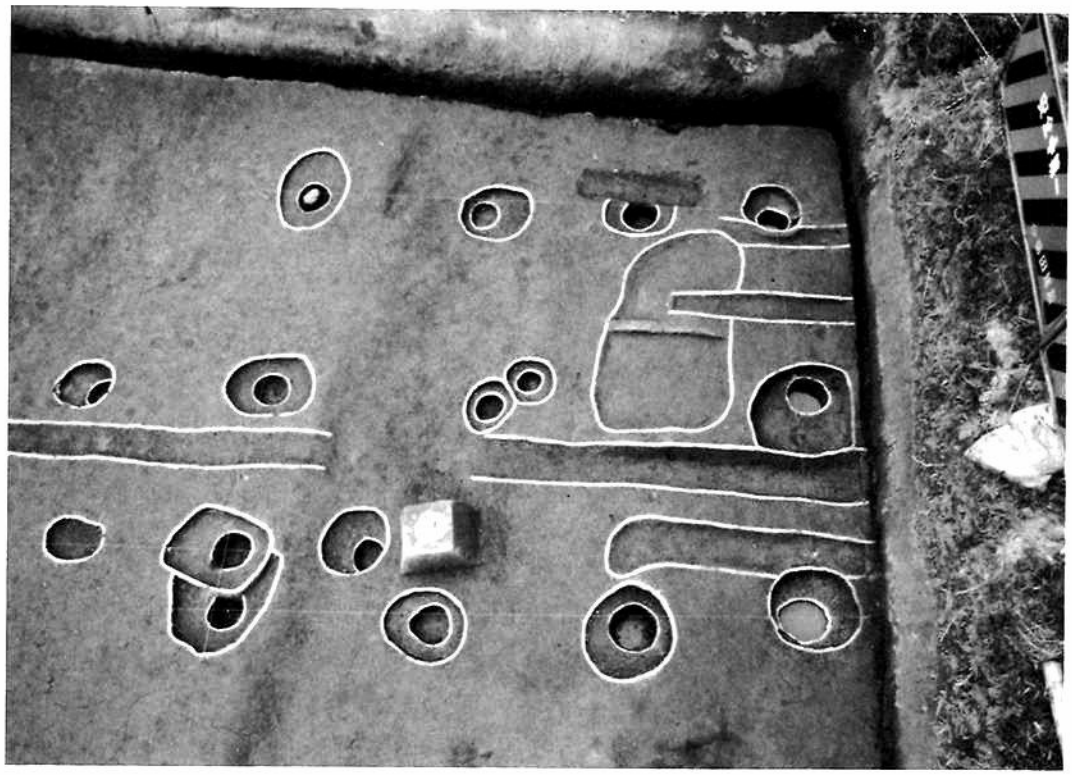


2．ＳＢ２の根回り石　検出状況

図版十四　古墳時代の遺構



1．ＳＢ３　検出状況



2．ＳＢ４　検出状況

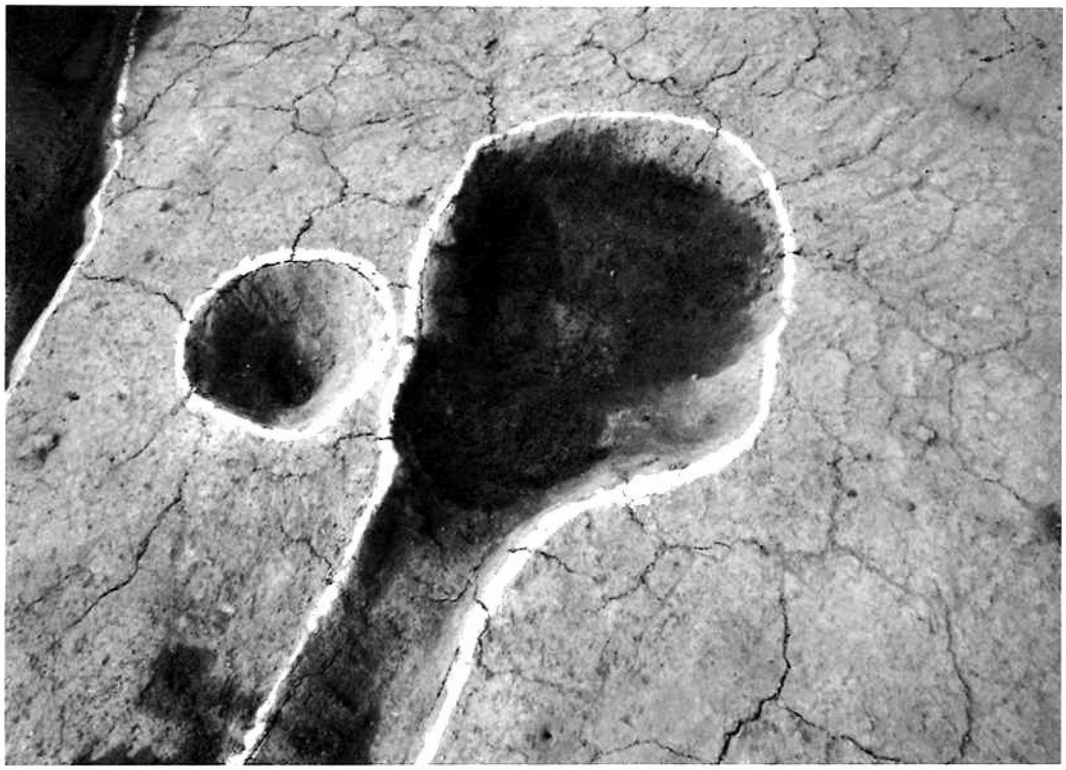
図版十五　古墳時代の遺構

1．ＳＫ25　土器出土状況

2．ＳＫ25　土器出土状況

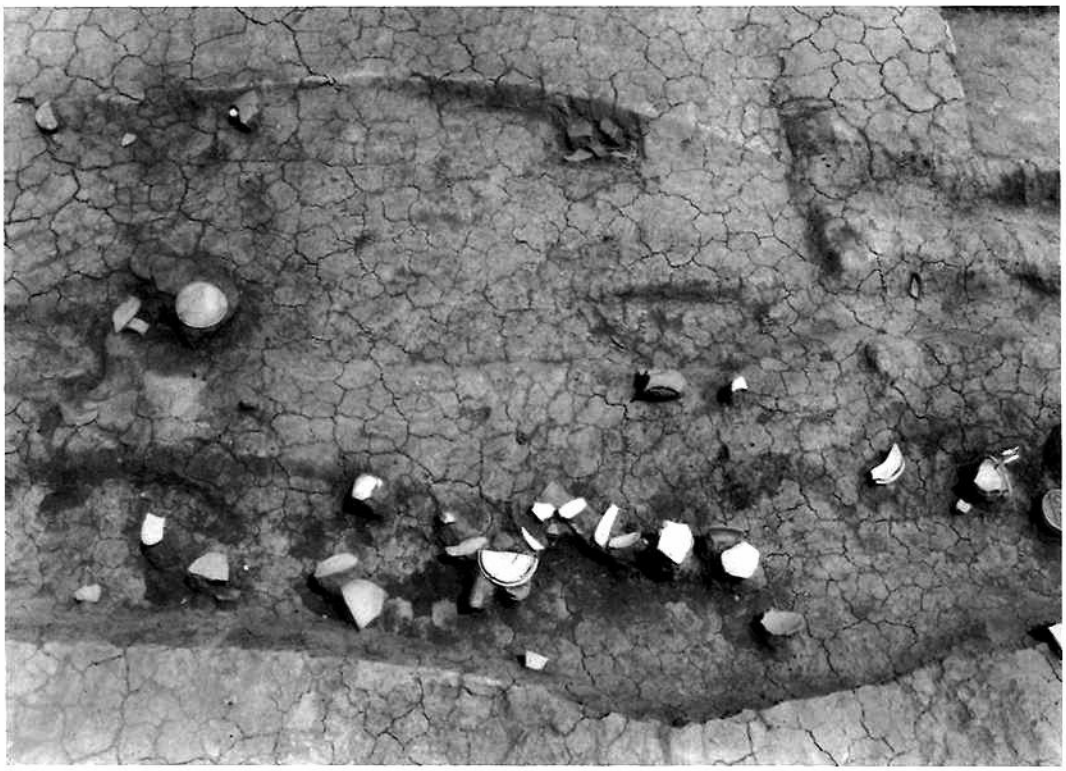
図版十六　古墳時代の遺構

1．ＳＫ26　土器出土状況



2．ＳＫ26　完掘状況

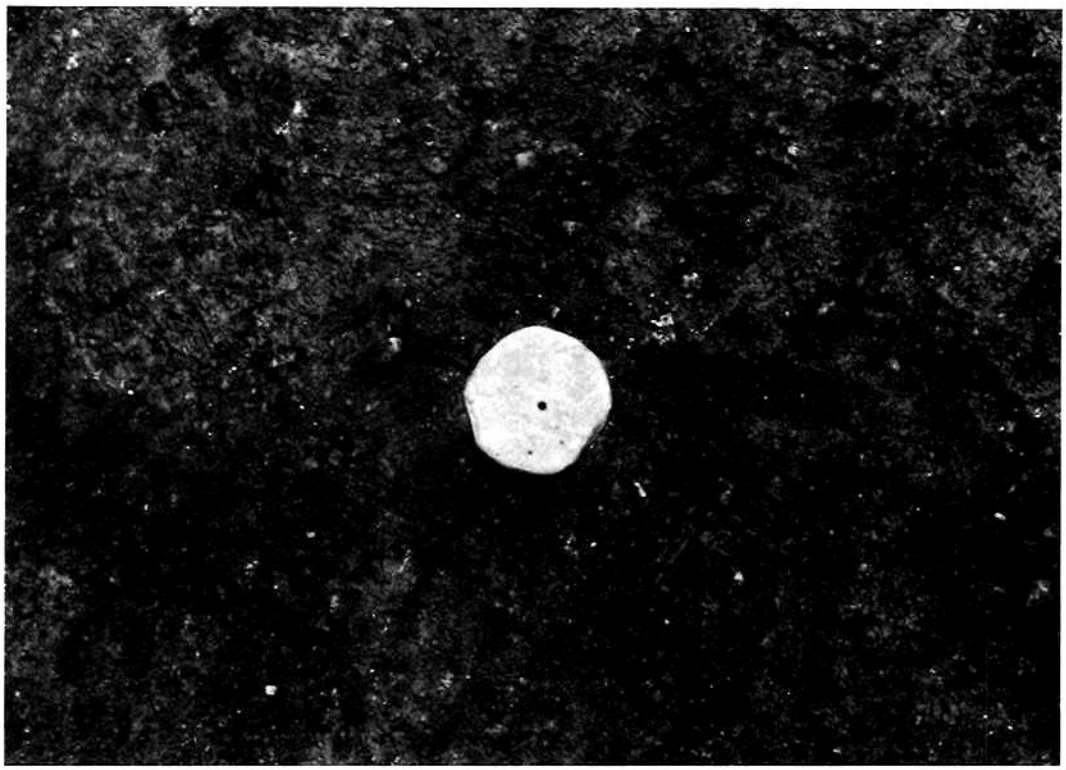
1．ＳＤ65　土器出土状況



2．ＳＤ65　土器出土状況

図版十八　古墳時代の遺構

1．ＮＲ２　検出状況



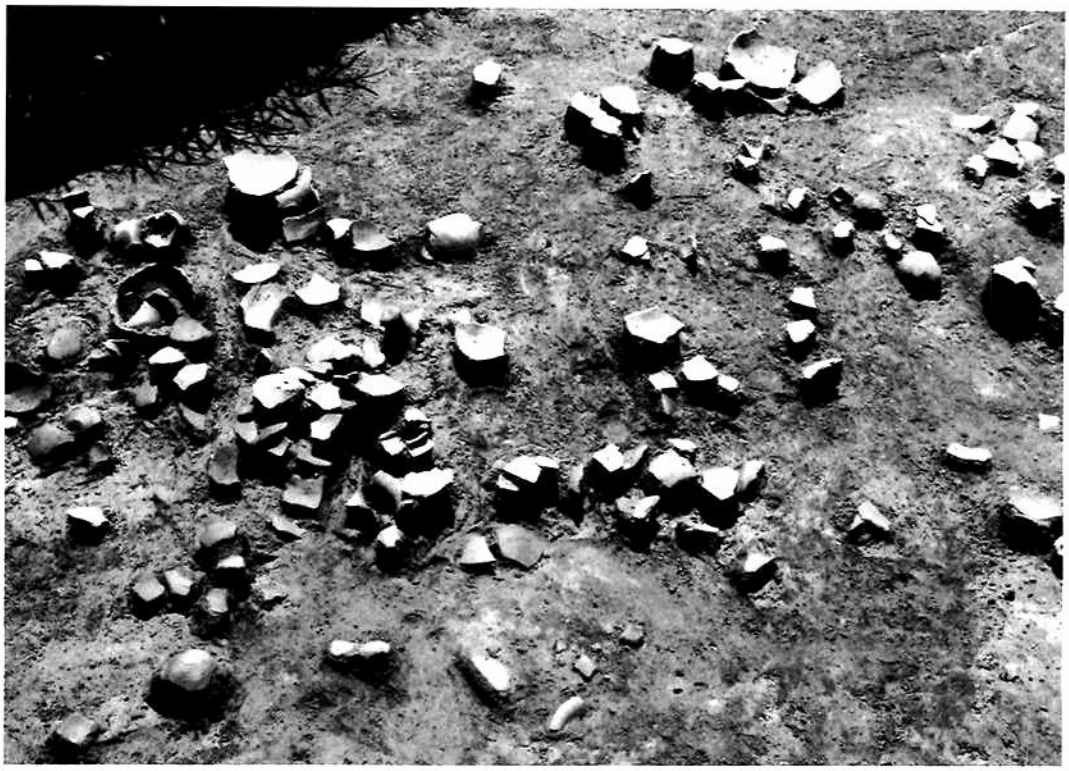
2．第５層内有孔円板出土状況

1．ＳＤ78　検出状況

2．ＳＤ78　完掘状況

図版二十　弥生時代の遺構

1．ＳＤ78　完掘状況



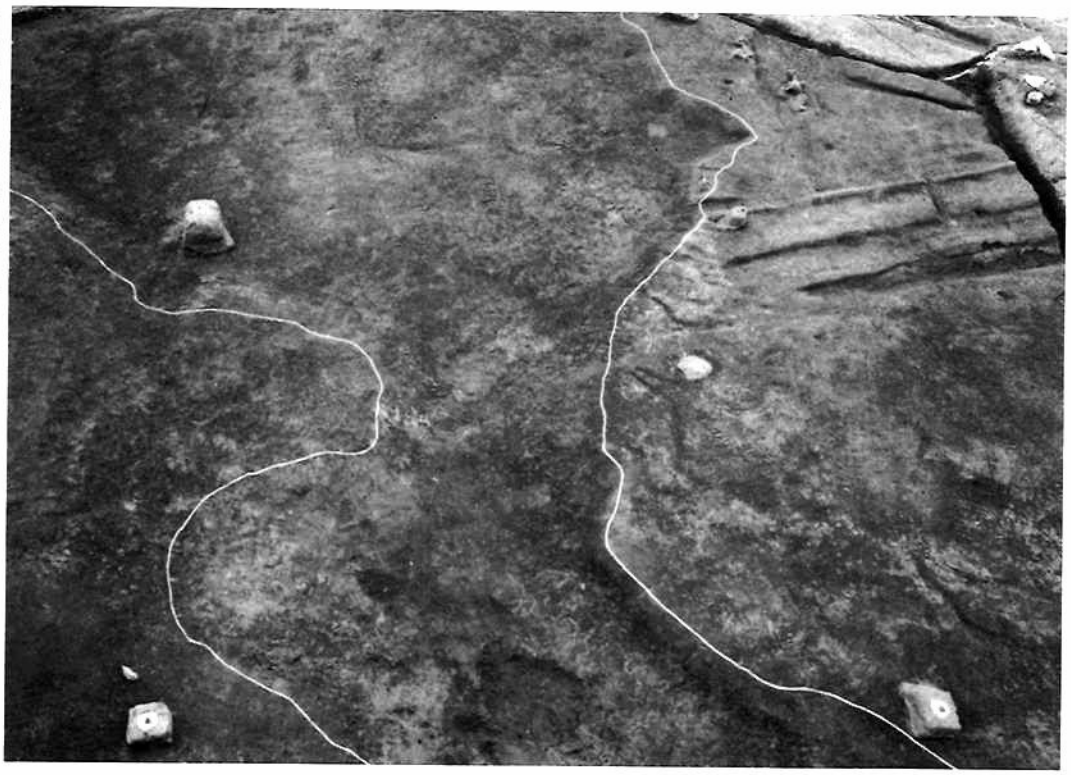
2．ＳＤ78　土器出土状況

図版二十一　弥生時代の遺構

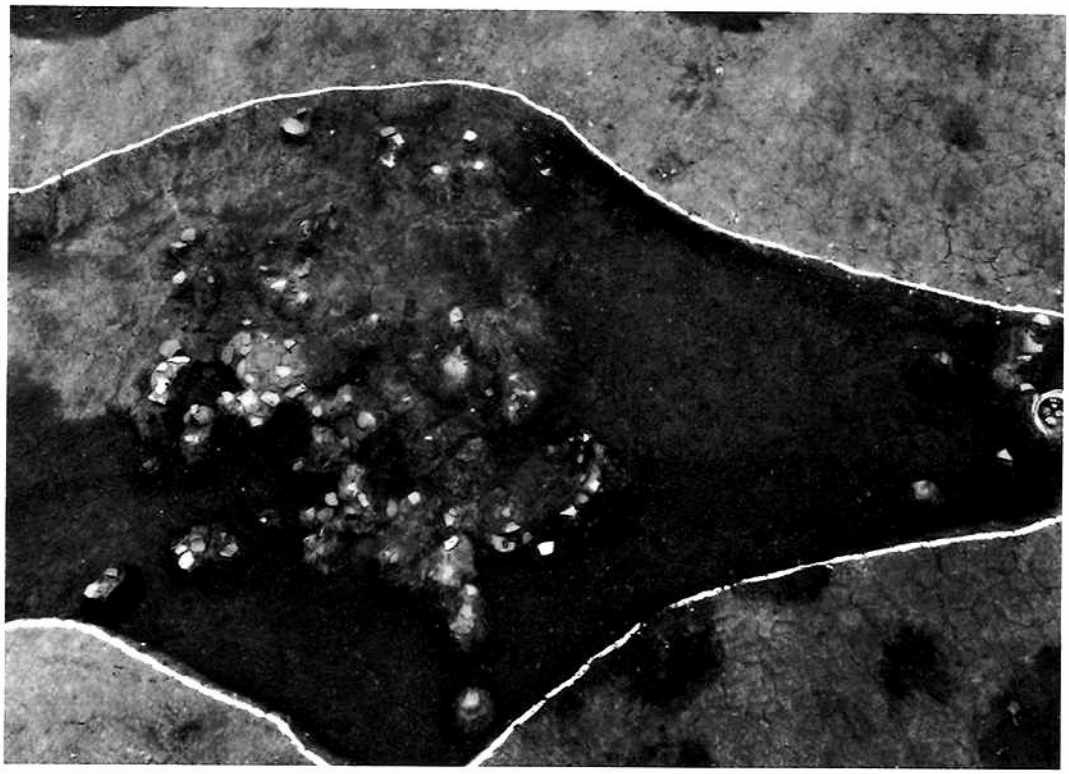
1．SD78　土器出土状況

2．SD78　土器出土状況

図版二十二　弥生時代の遺構

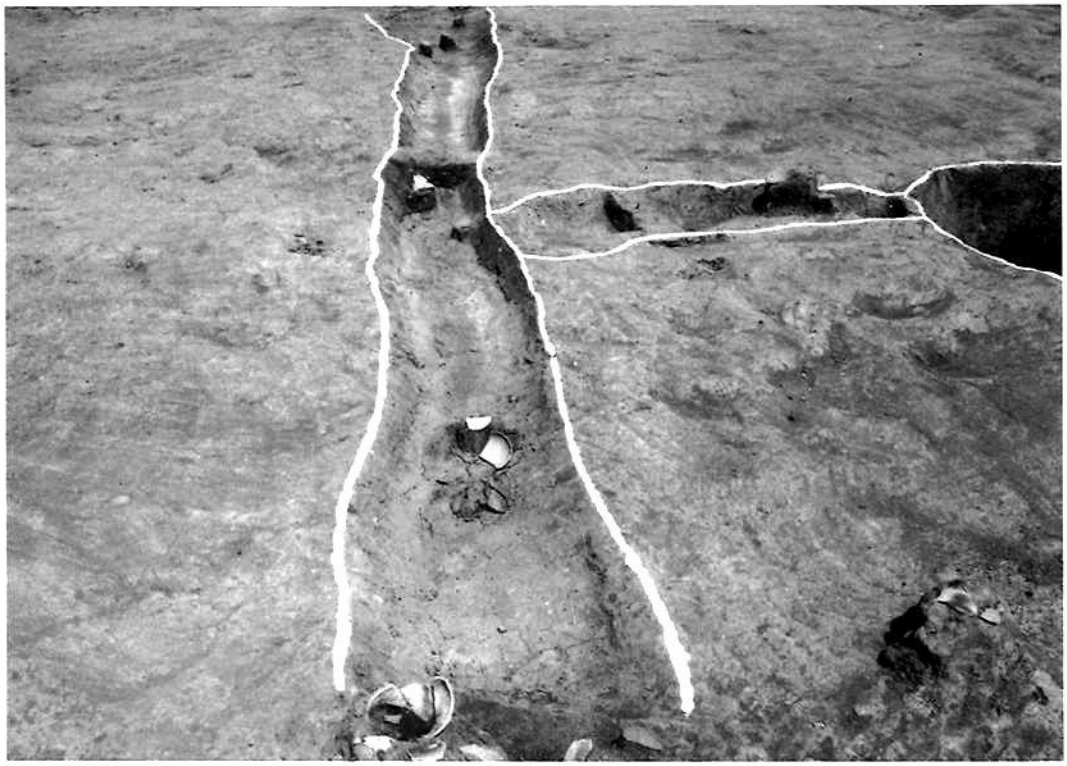


1．ＳＤ80　完掘状況

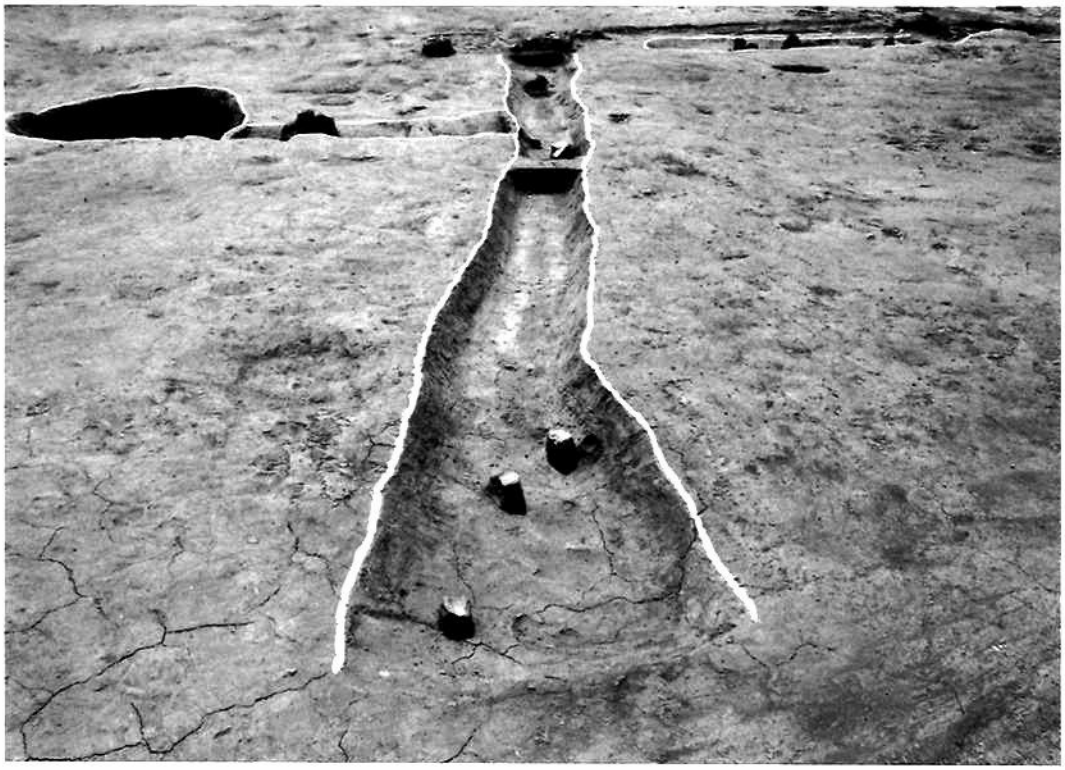


2．ＳＤ80　土器出土状況

図版二十三　弥生時代の遺構

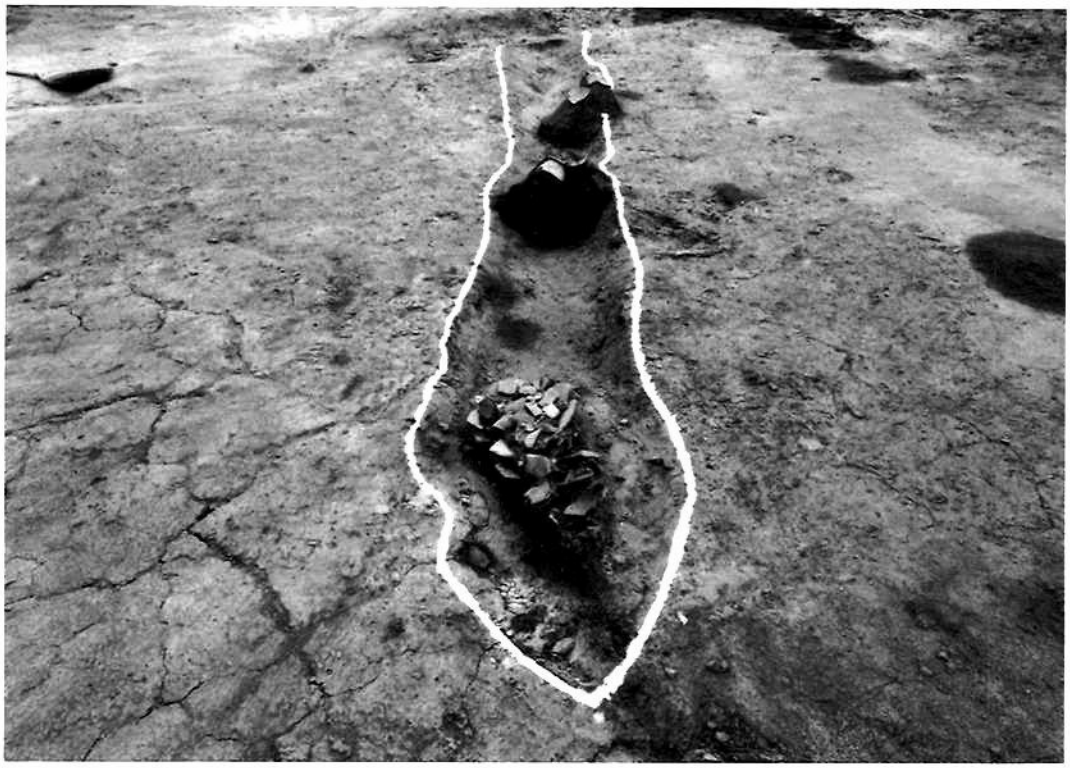


1．ＳＤ81・82　完掘状況

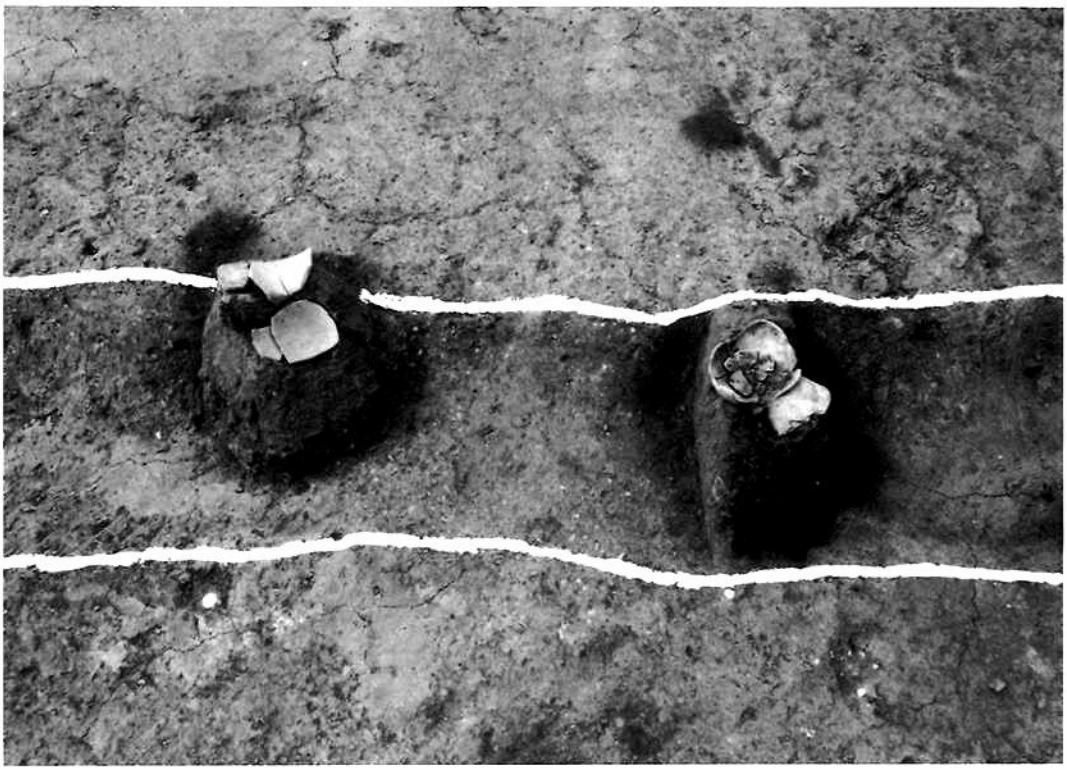


2．ＳＤ81・82　完掘状況

図版二十四　弥生時代の遺構

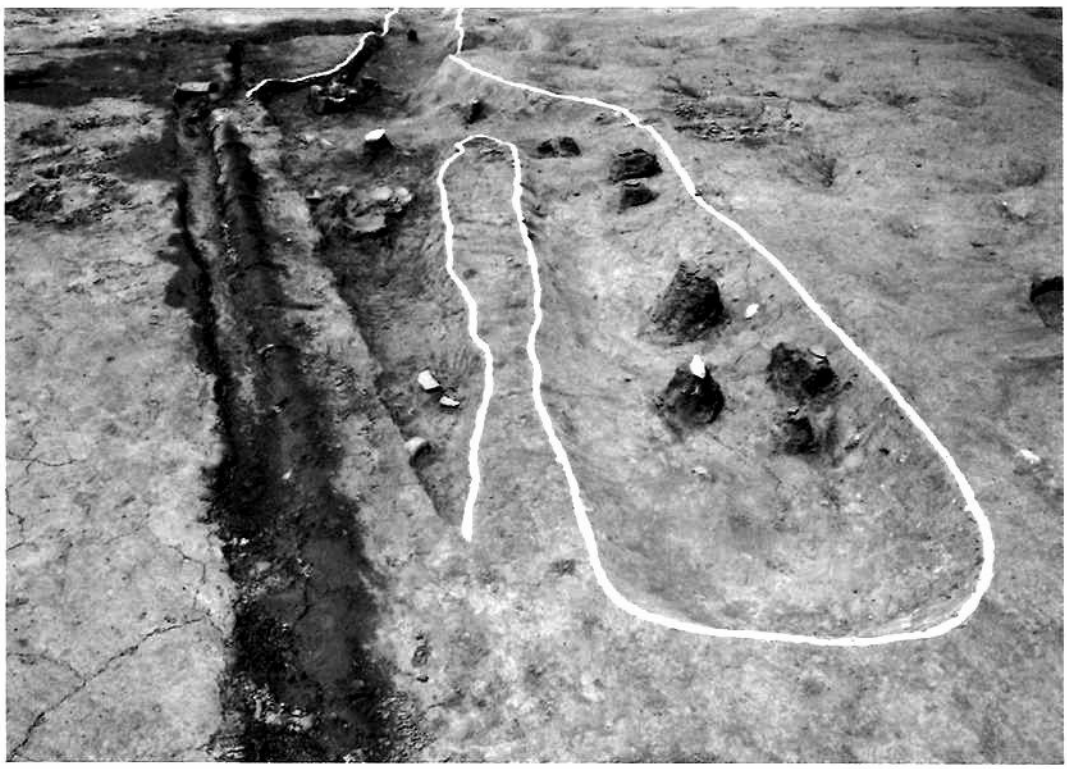


1．ＳＤ83　土器出土状況

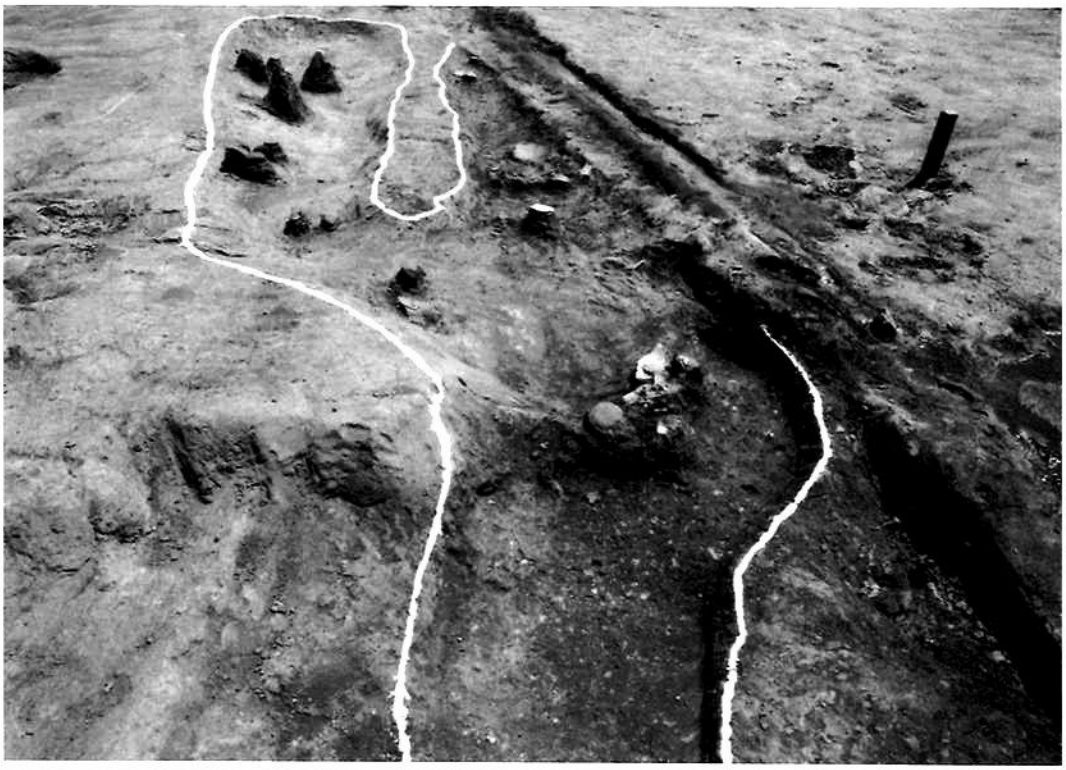


2．ＳＤ83　土器出土状況

図版二十五　弥生時代の遺構



1．ＳＤ83　完掘状況



2．ＳＤ83　完掘状況

1．ＳＥ５　第１層土器出土状況

2．ＳＥ５　第２層土器出土状況

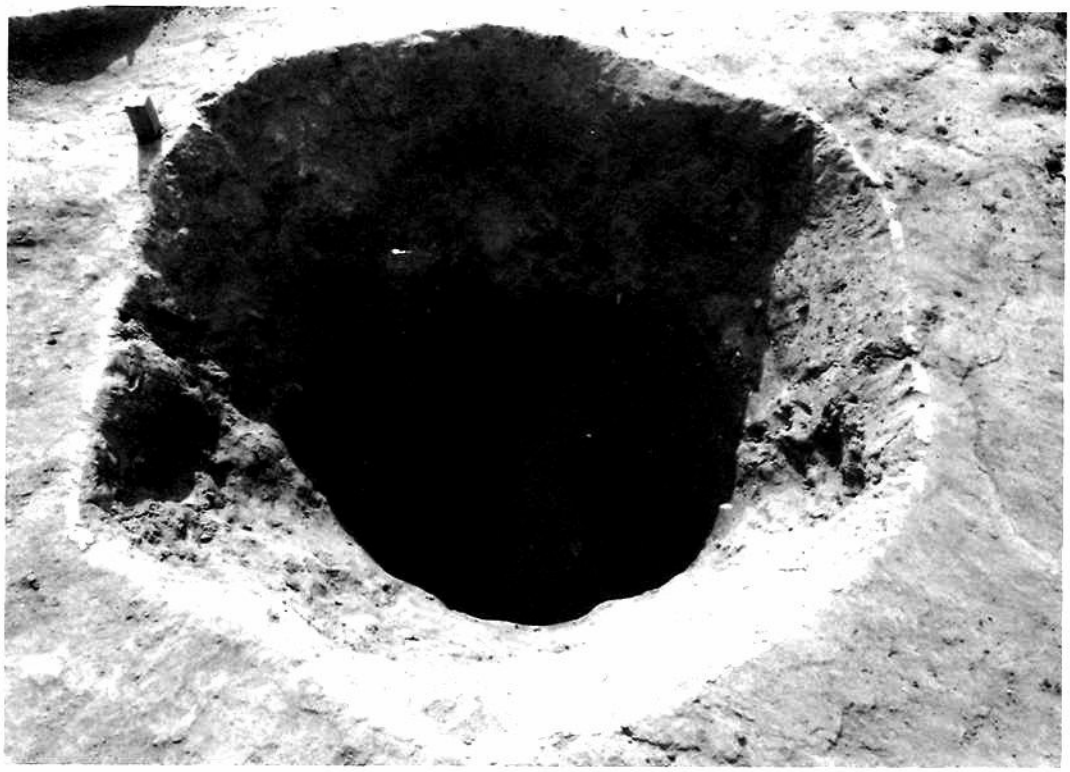
図版二十七　弥生時代の遺構

1．ＳＥ５　第２層土器出土状況

2．ＳＥ５　第２層土器出土状況

図版二十八　弥生時代の遺構

1．ＳＥ５　最下層土器出土状況



2．ＳＥ５　完掘状況

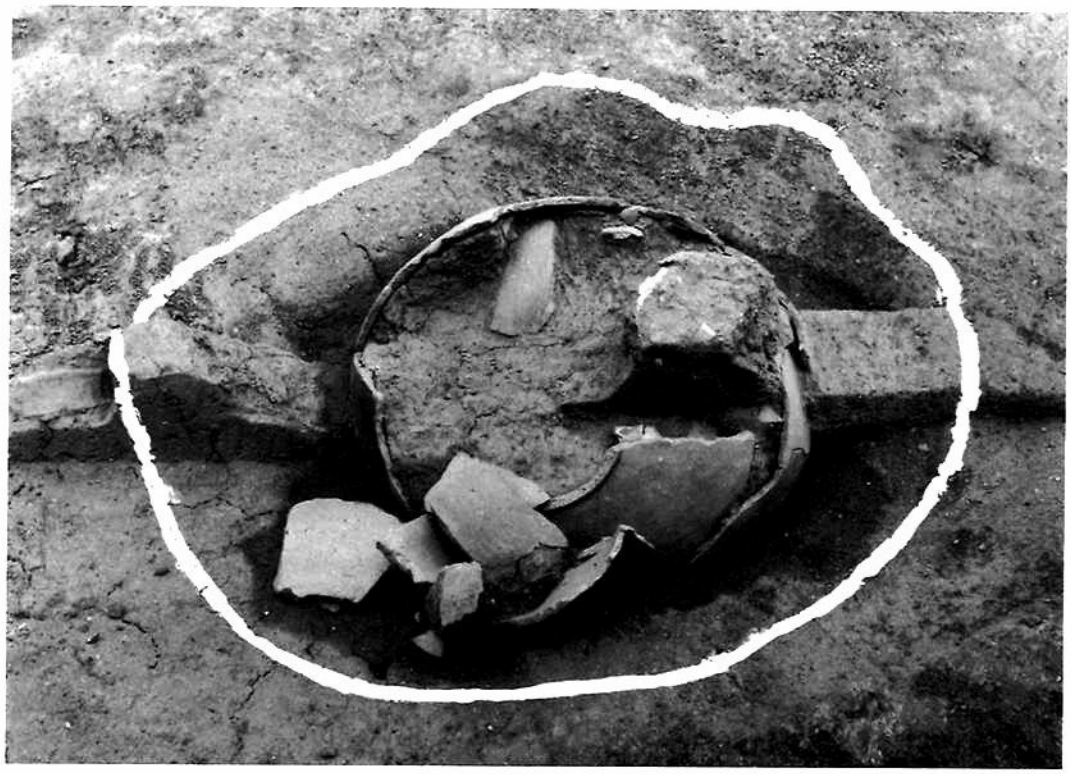
図版二十九　弥生時代の遺構

1．遺構全景

2．ＳＥ６　完掘状況

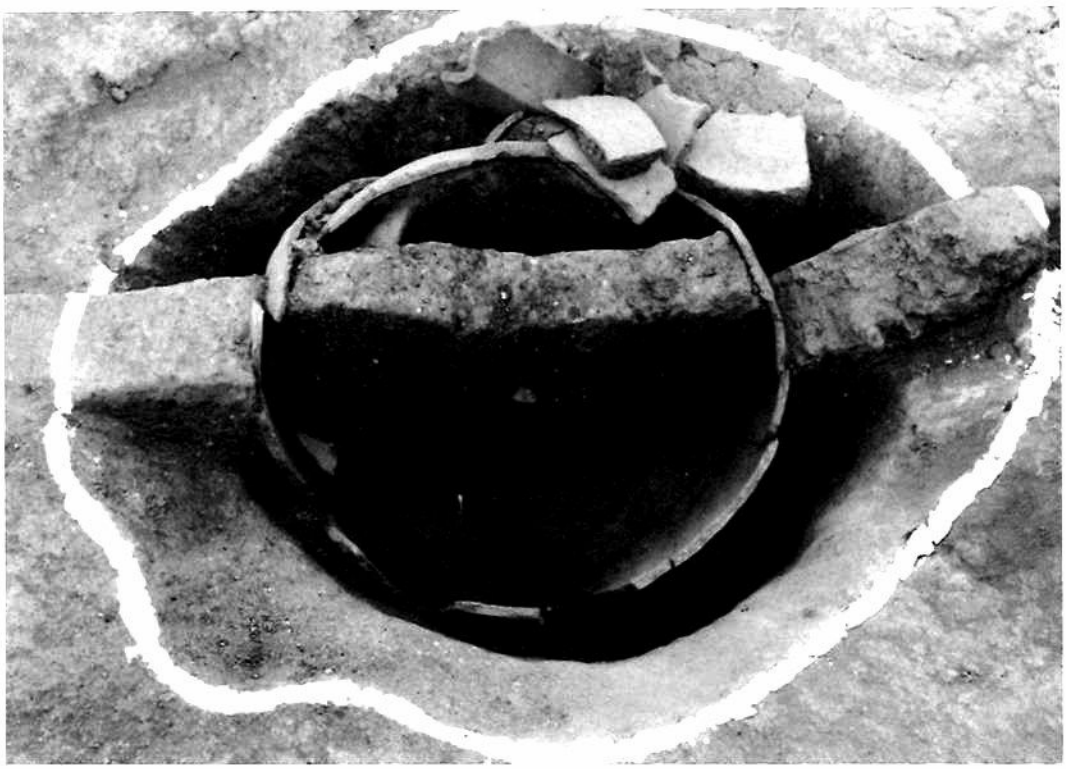
図版三十　弥生時代の遺構

1．壺棺1・2・3全景

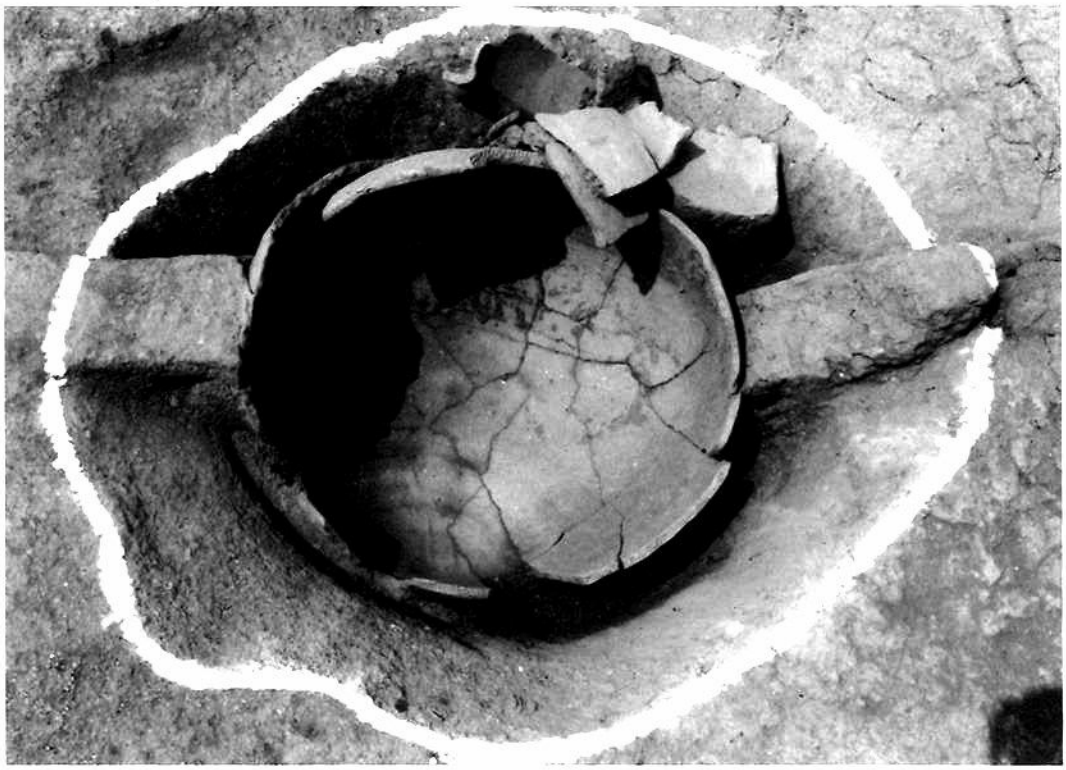


2．壺棺1　検出状況

図版三十一　弥生時代の遺構

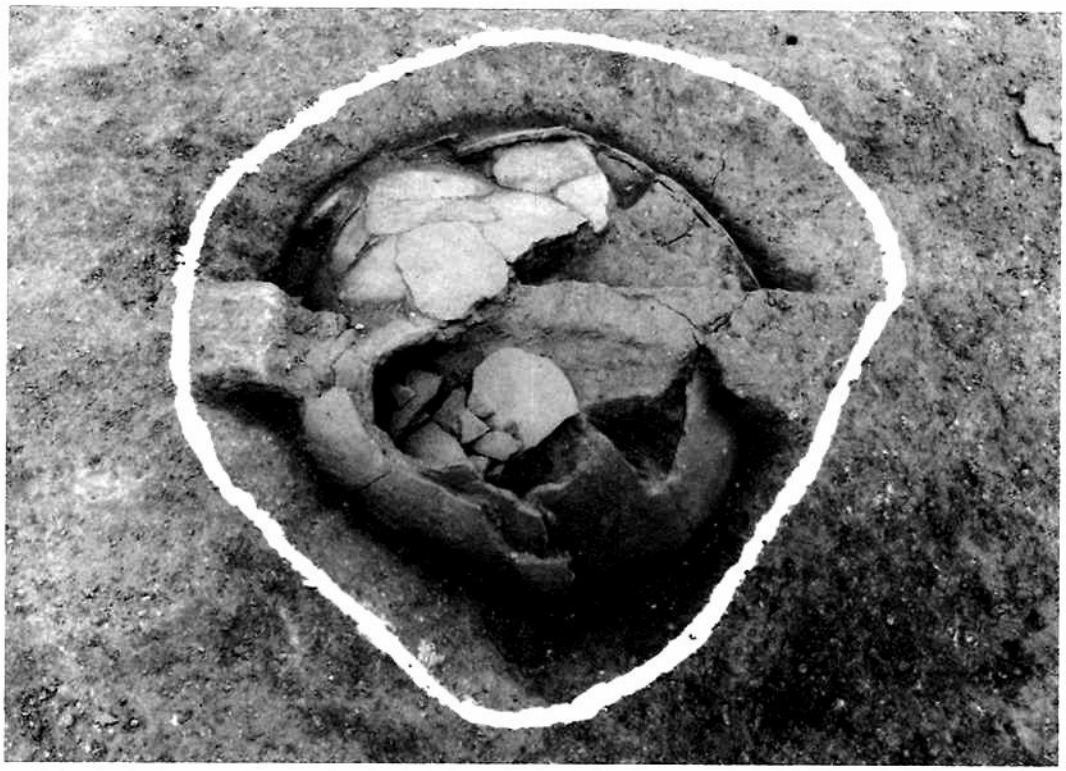


1．壺棺1　内部の状況

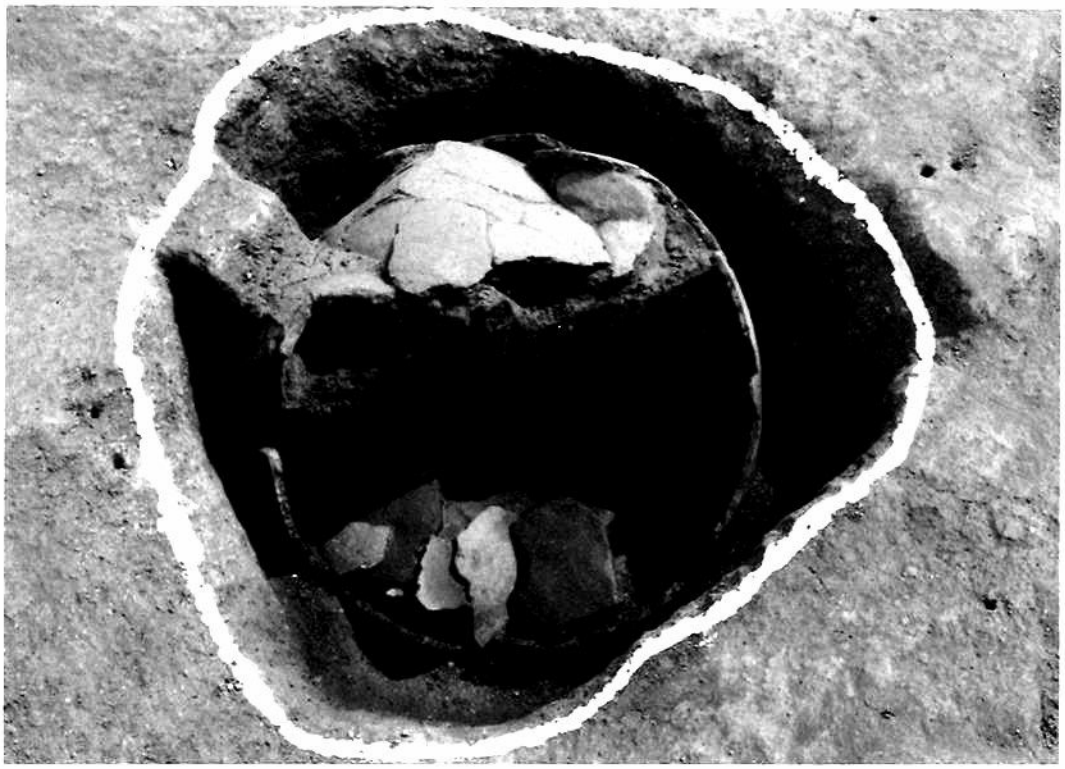


2．壺棺1　完掘状況

図版三十二　弥生時代の遺構



1．壺棺２　検出状況



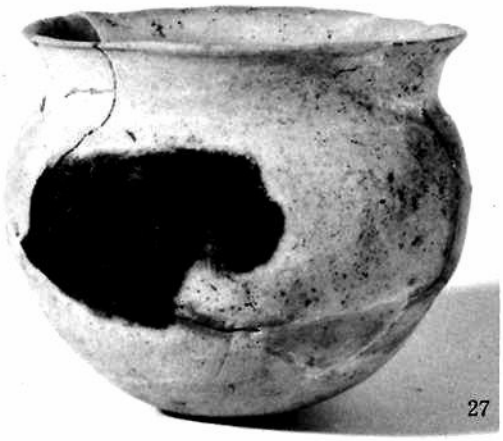
2．壺棺２　内部の状況

図版三十三　黒色土器・土師器・須恵器

ＳＫ３　土師器甑(１)　ＳＫ５　黒色土器椀(８)　須恵器杯(10)　土師器杯(11)　椀(12)　ＳＫ６　須恵器杯(24、25)
ＳＥ２　土師器杯(29)　椀(30、31)　ＳＥ３　黒色土器椀(34)

図版三十四　土師器

17


27

18

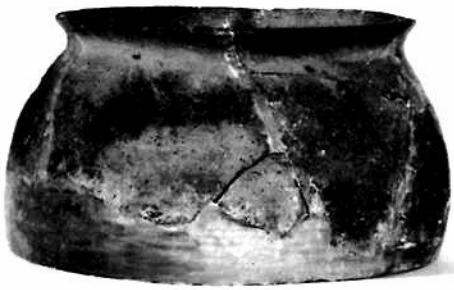
14

20

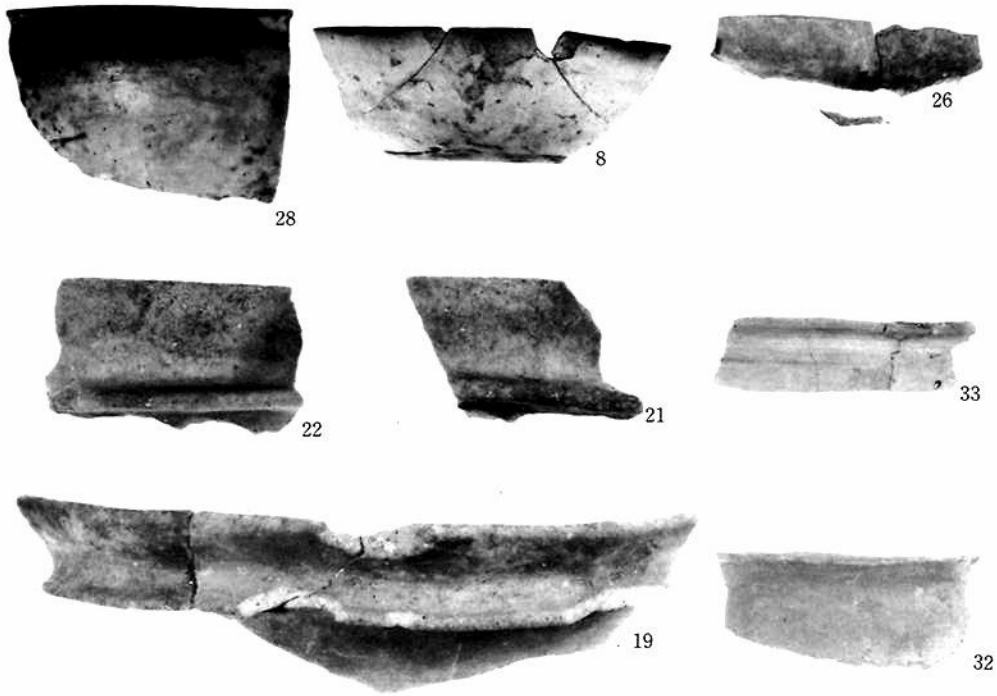
23

15

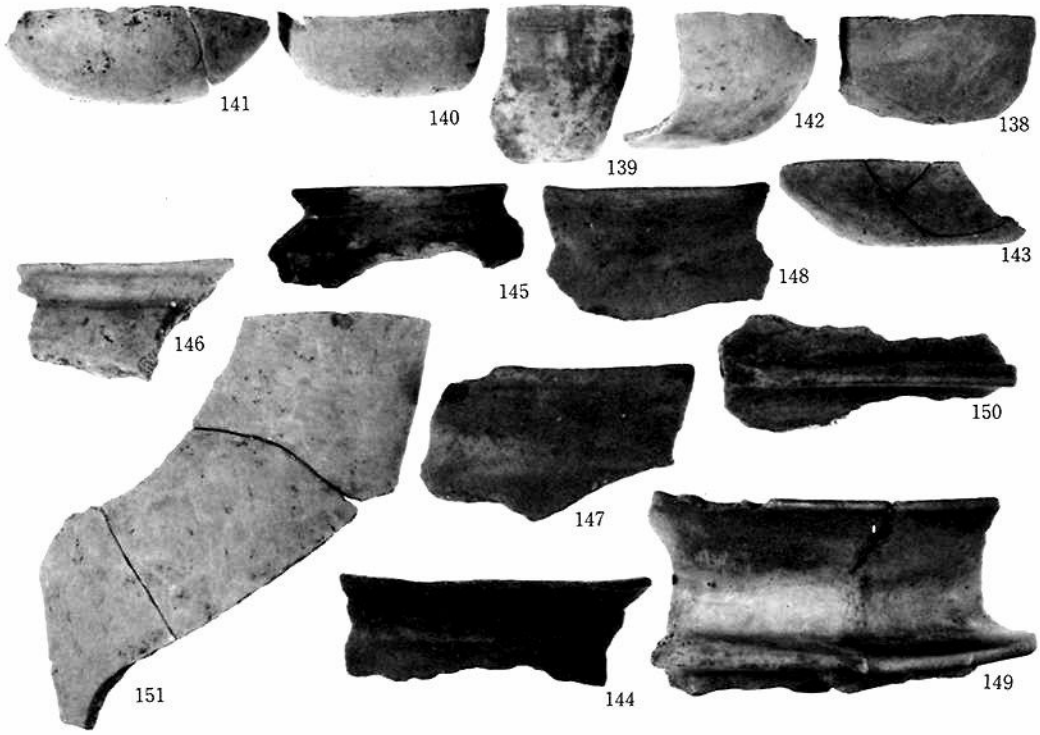
13


16

ＳＫ５　羽釜(17･18･20)　甑(23)　甕(13～16)　ＳＫ６　甕(27)



1．ＳＫ５　黒色土器椀(８)　羽釜(19、21、22)　ＳＫ６　土師器杯(26)　ＳＥ２　黒色土器鉢(28)　甕(32)
ＳＥ３　須恵器鉢(33)



2．第４層土師器杯(138～143)　甕(144～148)　羽釜(149、150)　甑(151)

図版三十六　須恵器・土師器

35

36

3

38

40

44

イ

ＮＲ１　土師器鉢(３)　ＮＲ２　須恵器杯蓋(35、36、38、40)　壺(44)　土師器壺(イ)

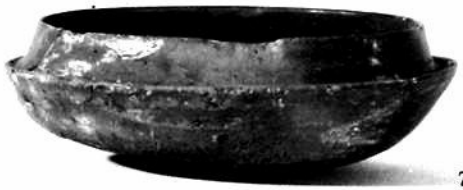
図版三十七　須恵器

62

59

58

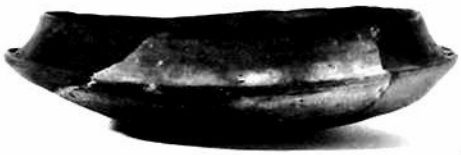
63


70

67

69

60


68

64

65

61

S D65　杯身

図版三十八　須恵器・土師器

71

53

54

73

55

74

56

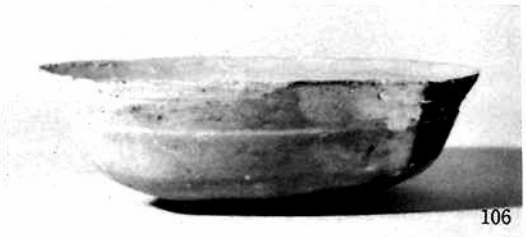
75

57

S D65　須恵器杯蓋(53～57)　高杯(71)　土師器杯(73)　鉢(74)　壺(75)

104

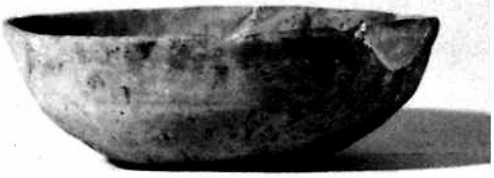
103



106

97

99



96

78

79

109

ＳＤ67　須恵器杯蓋(78、79)　土師器杯(96、97、99)　高杯(103、104、106)　羽釜(109)

図版四十　須恵器

91

90

ＳＤ67　提瓶

193

88

89

194

195

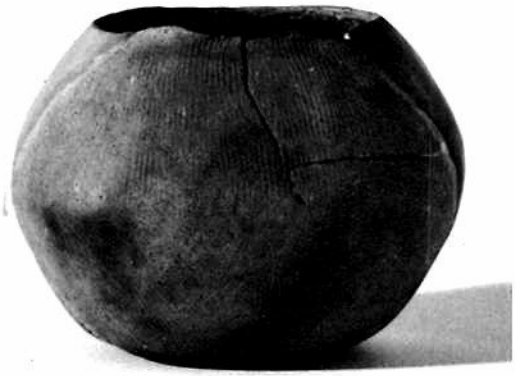
S D67　瓦泉(88、89)　第5層瓦泉(193、194)　坩(195)

図版四十二　須恵器・土師器

111

2

112



52

107

108

ＳＫ26　土師器羽釜(２) ピット　壺(52)　ＳＤ67　壺(107)　甕(108)　ＳＫ25　須恵器高杯(111)　壺(112)

116

118

114

117

125

113

115

ＳＫ25　土師器杯、高杯、羽釜、須恵器提瓶

図版四十四　漢式系土器・土師器

122

119

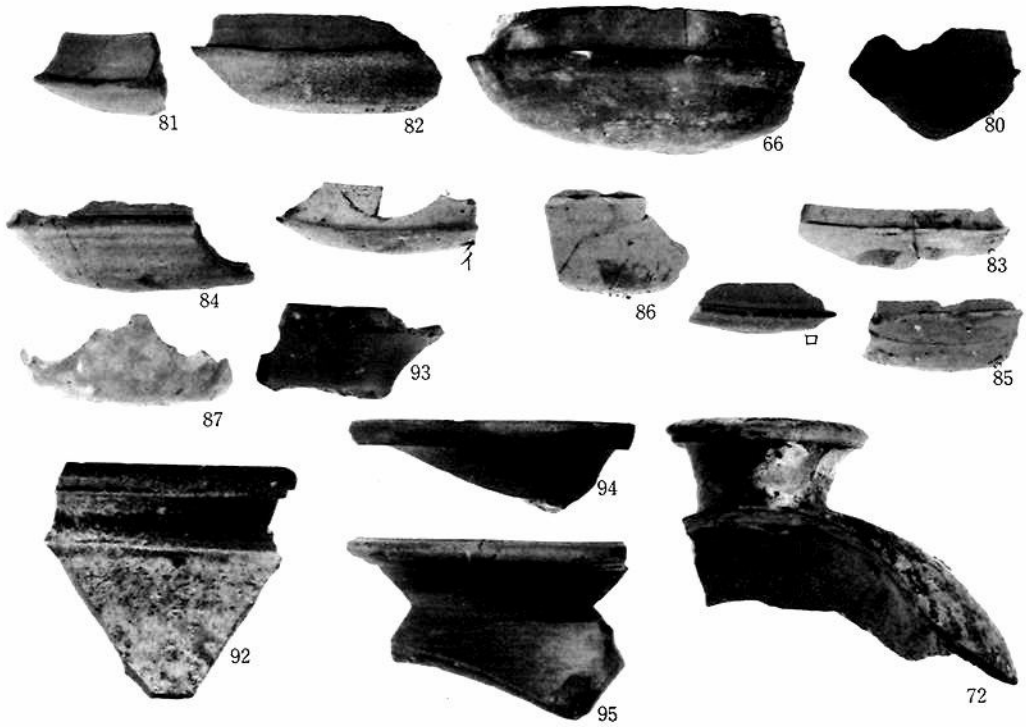
120

123

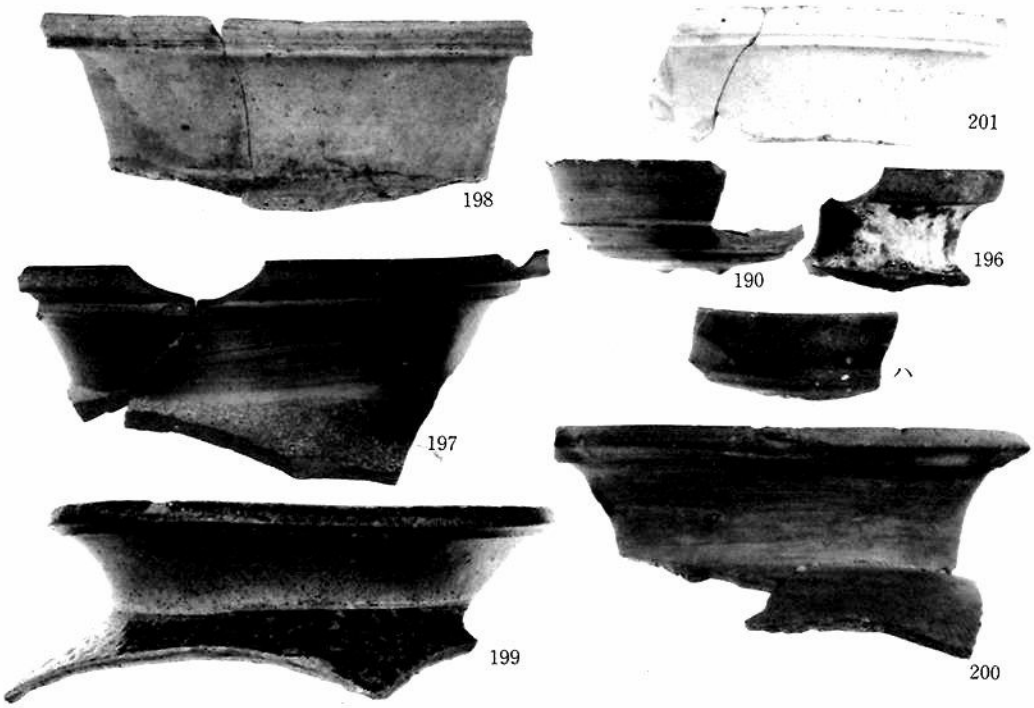
121

124

ＳＫ25　漢式系土器甕、土師器杯、壺、鉢

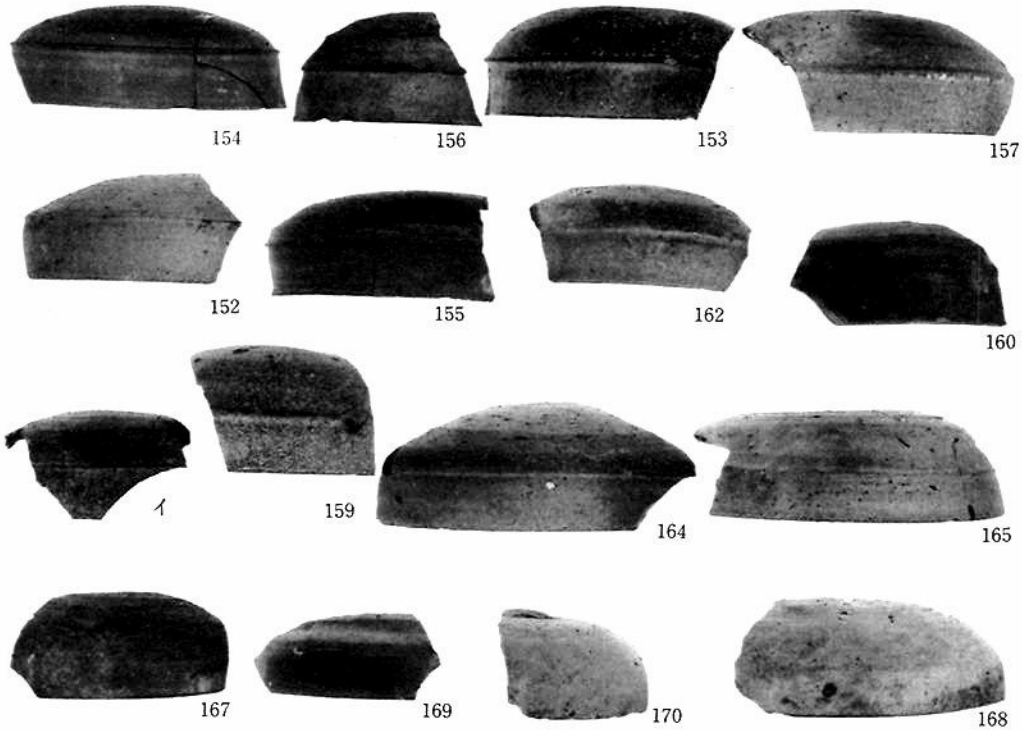


1．ＳＤ65　杯身(66)　提瓶(72)　ＳＤ67　杯身(80～87、イ、ロ)　甕(92～95)

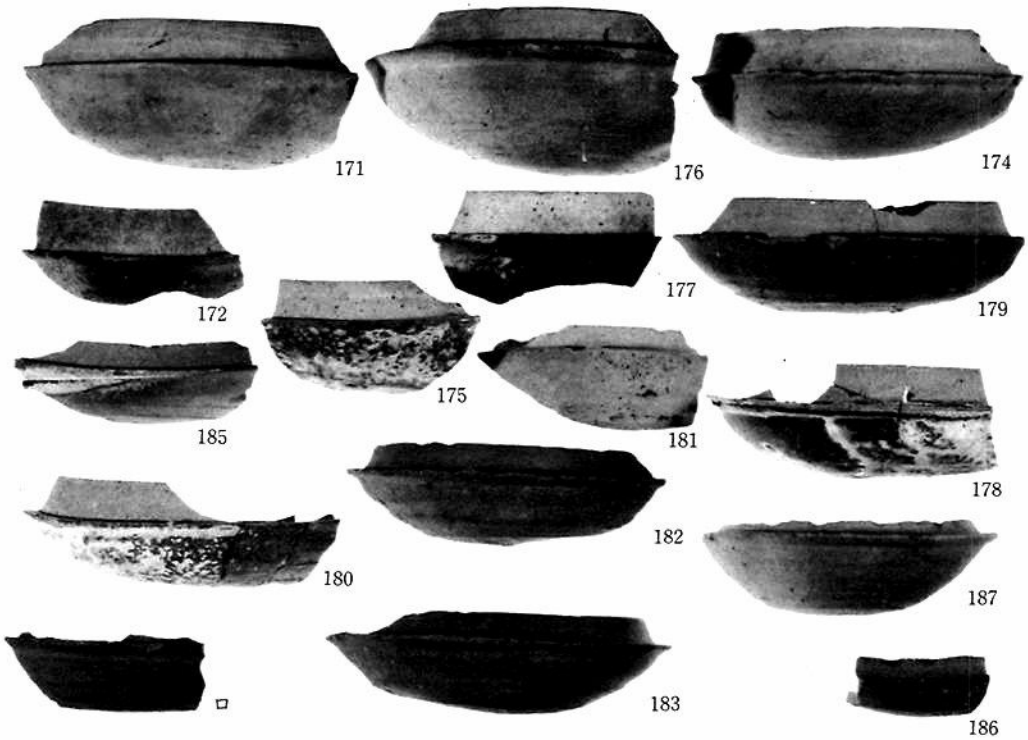


2．第5層　甕

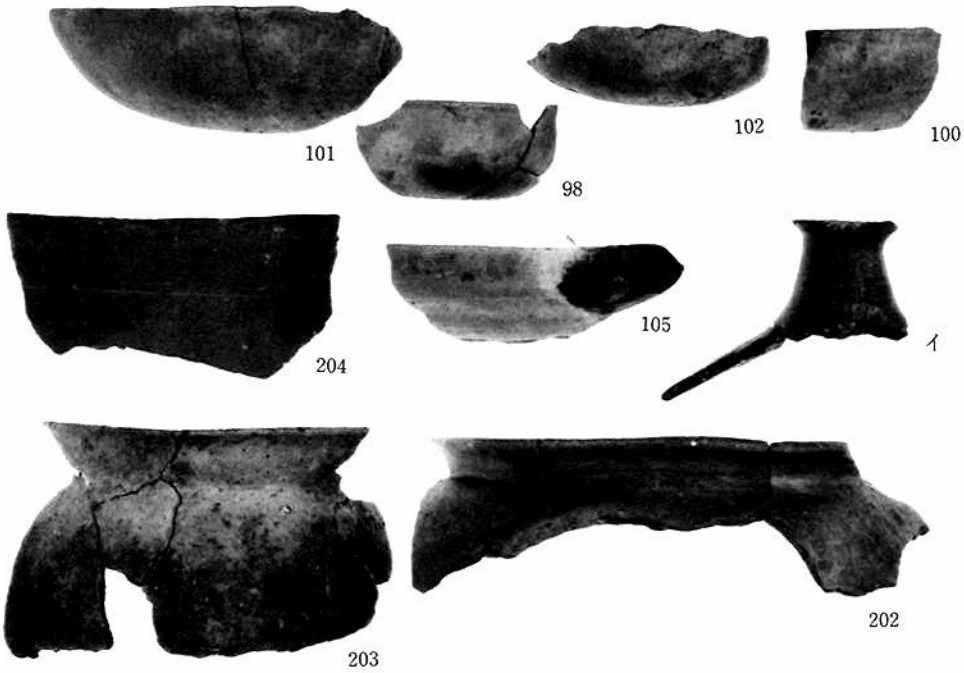
図版四十六　須恵器



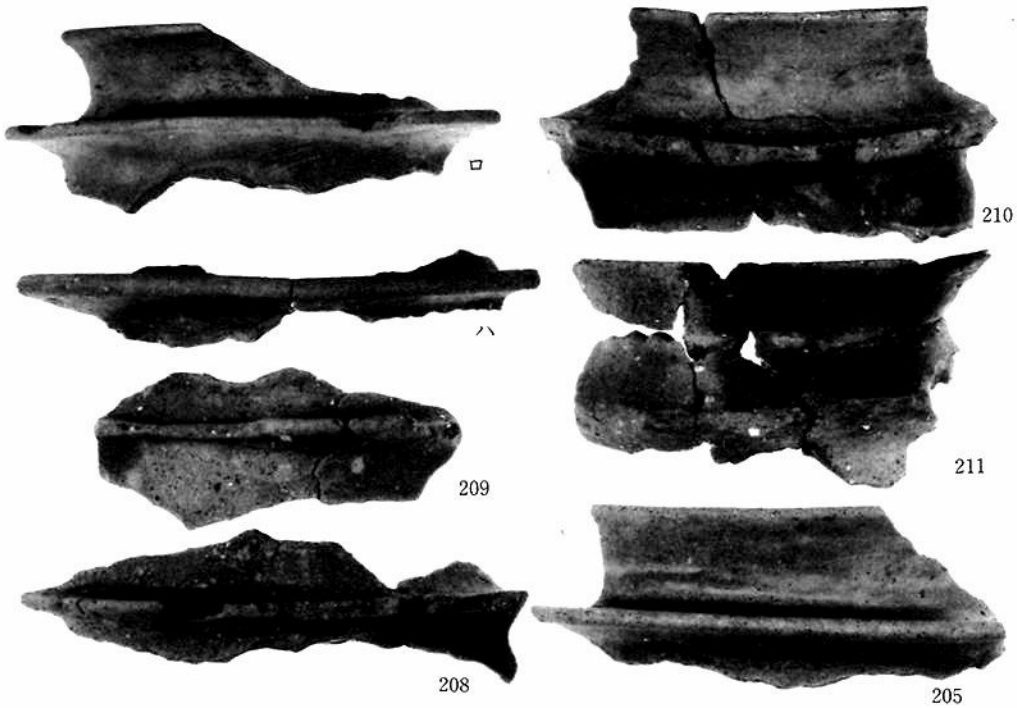
1．第5層　杯蓋



2．第5層　杯身

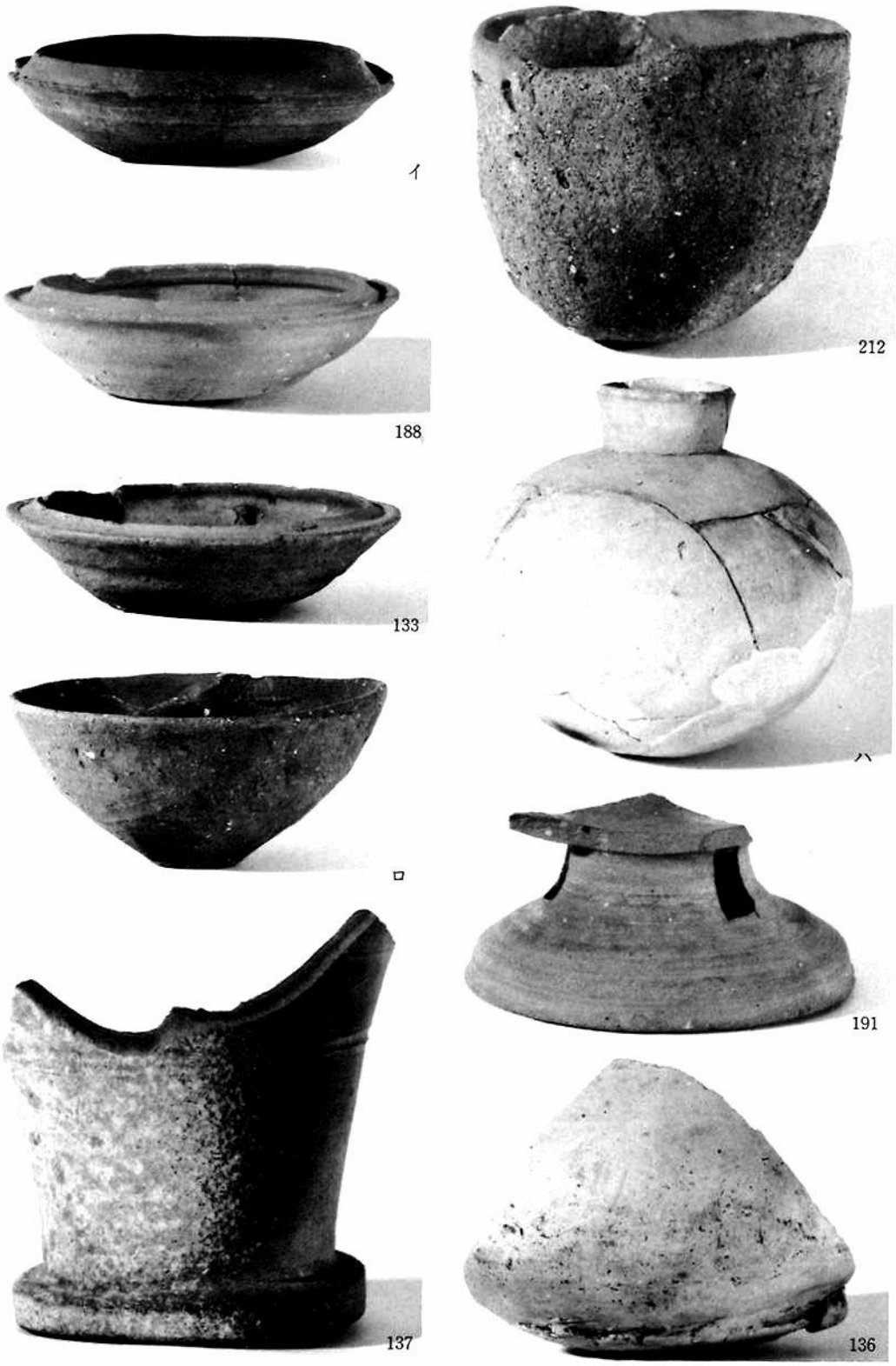


1．ＳＤ67　杯(98、100～102) 高杯(105) 、第５層　甕(202～203) 高杯(イ)

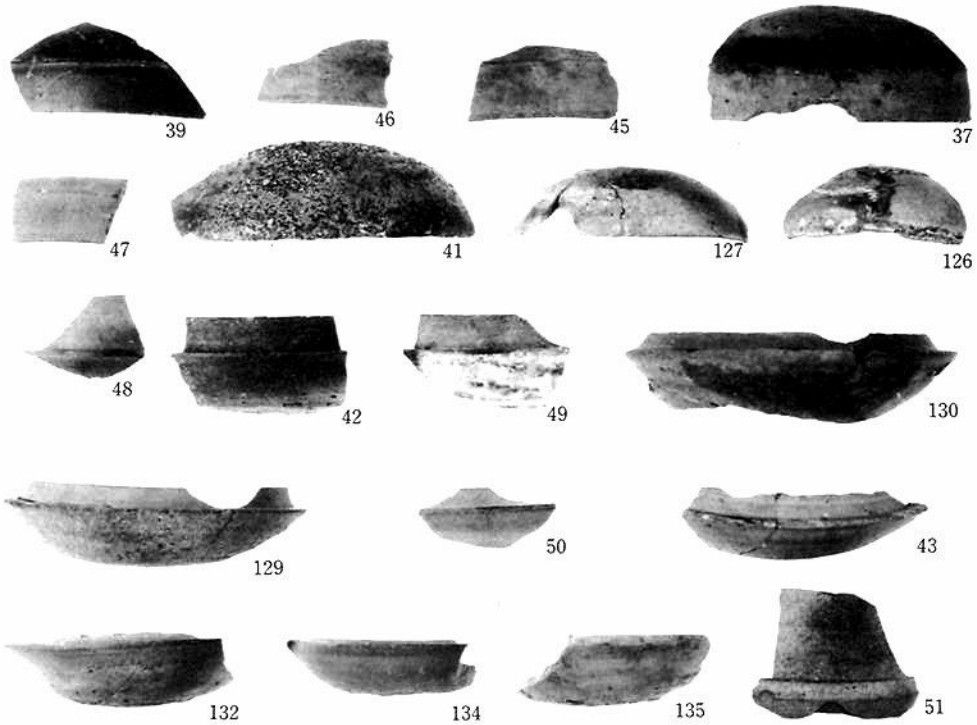


2．第５層　羽釜

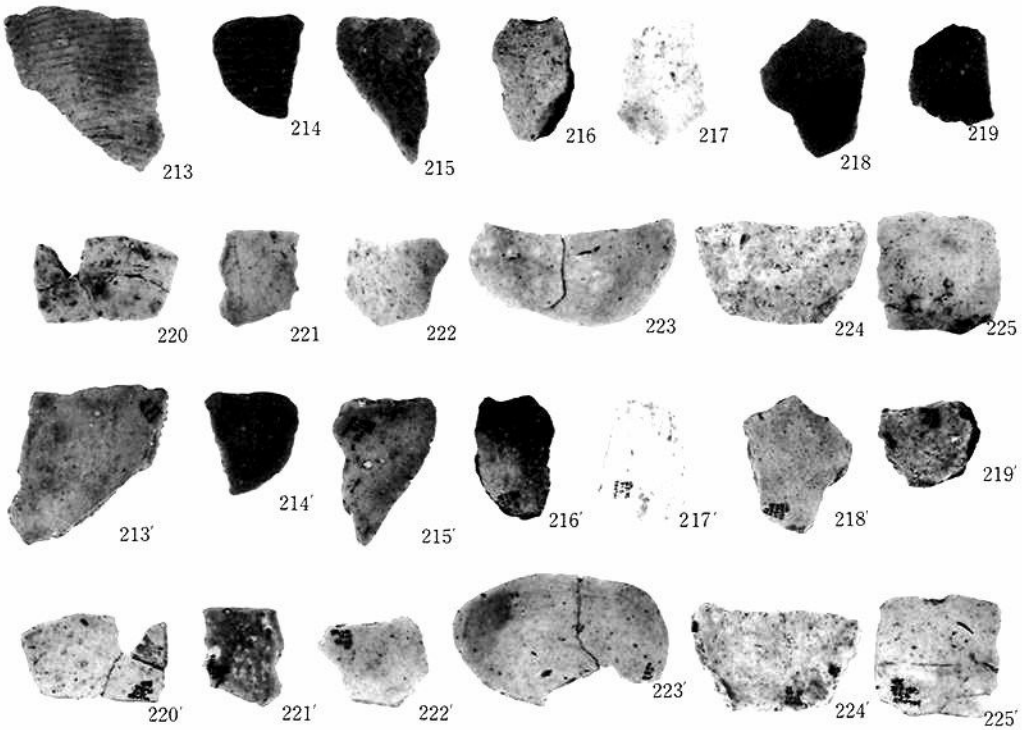
図版四十八　須恵器・土師器



第4層　須恵器杯身(133) 壺(136) 鉢(137) 第5層 須恵器杯身(188、イ) 高杯(191) 土師器鉢(ロ) 壺(ハ) ミニチュア土器(212)

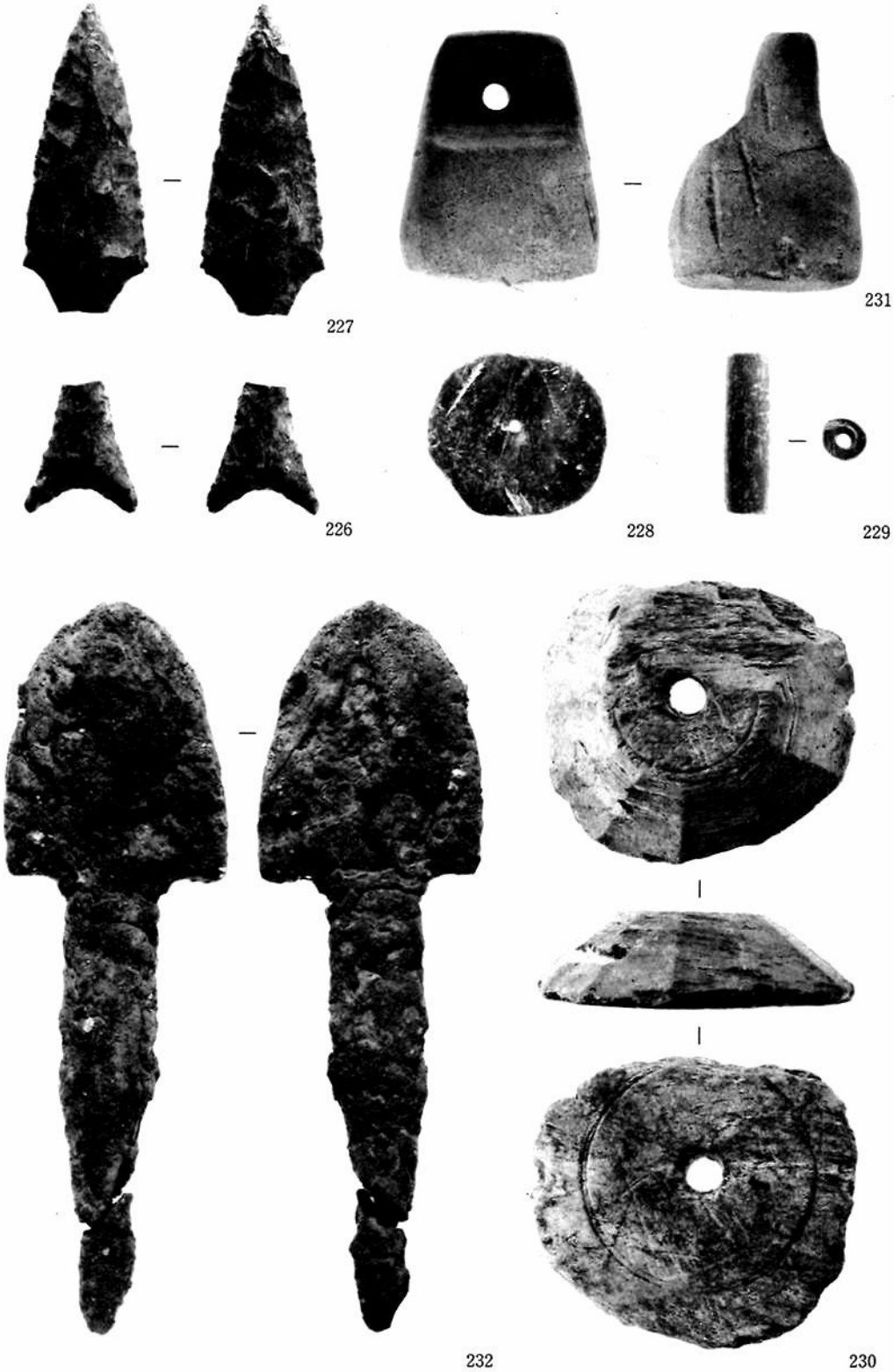


1．須恵器　ＮＲ２　杯蓋(37、39、41) 杯身(42、43) ピット 杯蓋(45～47) 杯身(48、49) 高杯(51)
第４層　杯蓋(126、127) 杯身(129、130、132、134、135)



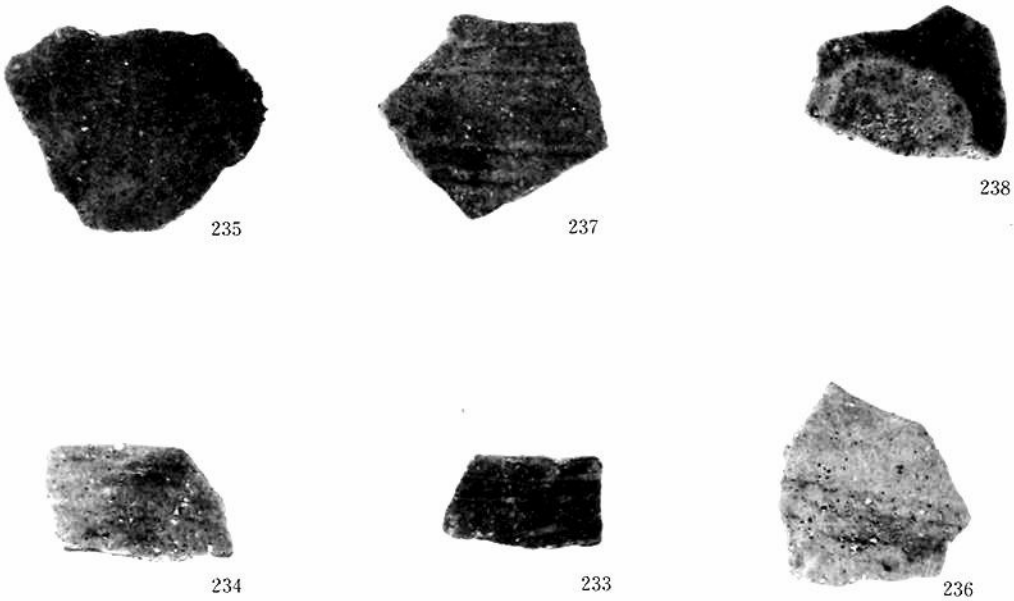
2．製塩土器　ＳＤ65 (213、214、216、218、219、220、222、223、224)
第５層 (215、217、221、225)

図版五十　その他の遺物

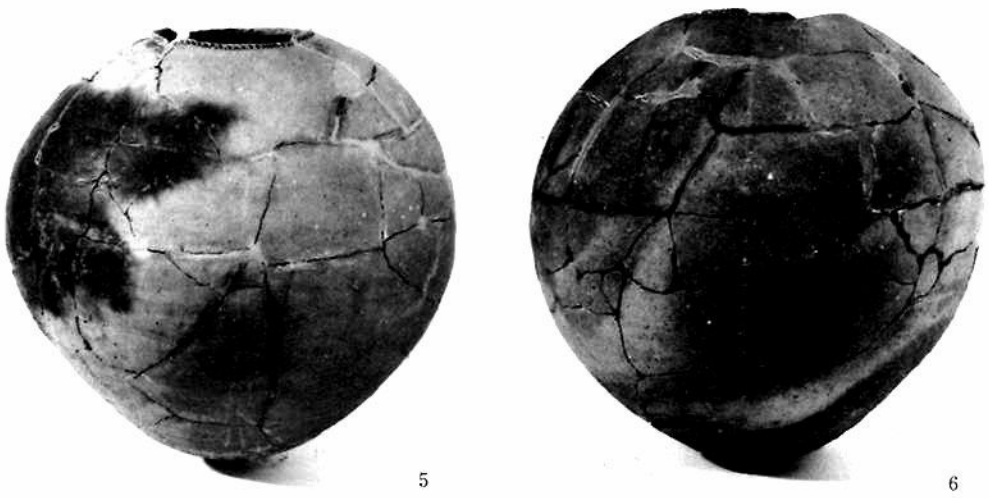


石鏃(226、227) 有孔円板(228) 管玉(229) 滑石製紡錘車(230)
分銅型石製品(231) 鉄鏃(232)
※229のみ S＝1.5/1 その他は S＝1/1

図版五十一　縄文土器・弥生土器



1．包含層　深鉢・浅鉢



2．壺棺1・壺棺2

244

242

246

243

245

S D78　鉢

239

241

257

253

259

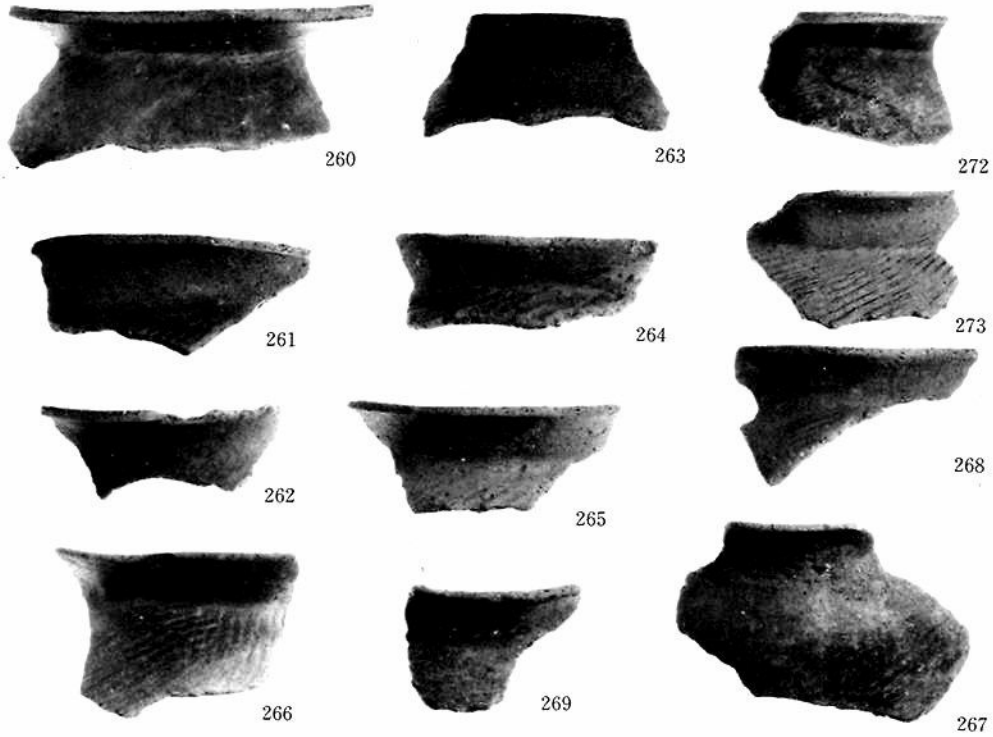
295

251

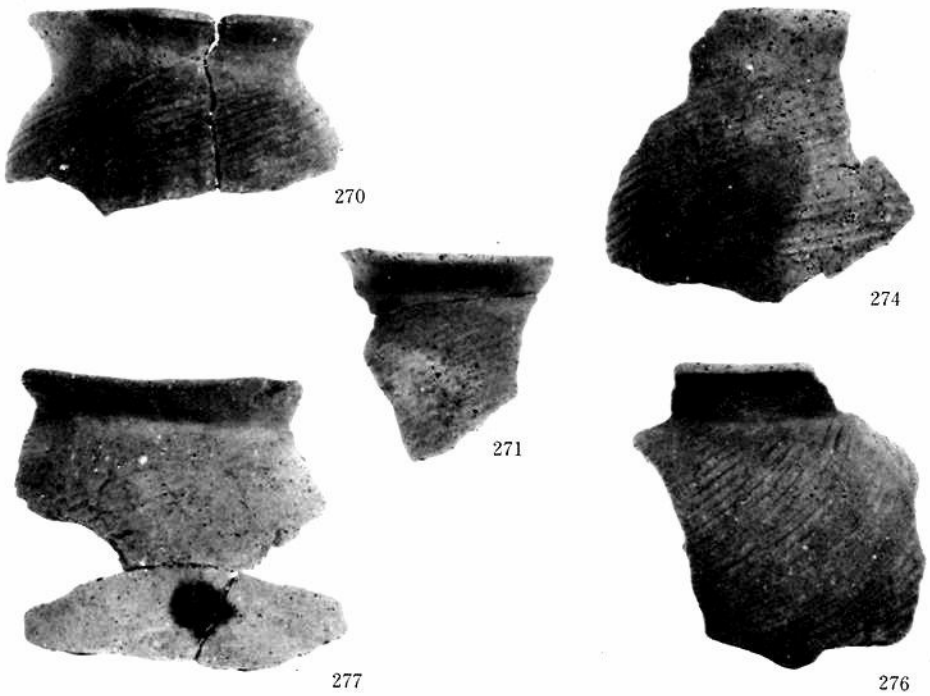
250

S D78　壺・高杯・甕

図版五十四　弥生土器



1．SD78　甕



1．SD78　甕

図版五十五　弥生土器

298

297

302

300

297

299

ＳＤ78　高杯脚部

図版五十六　弥生土器

323

308

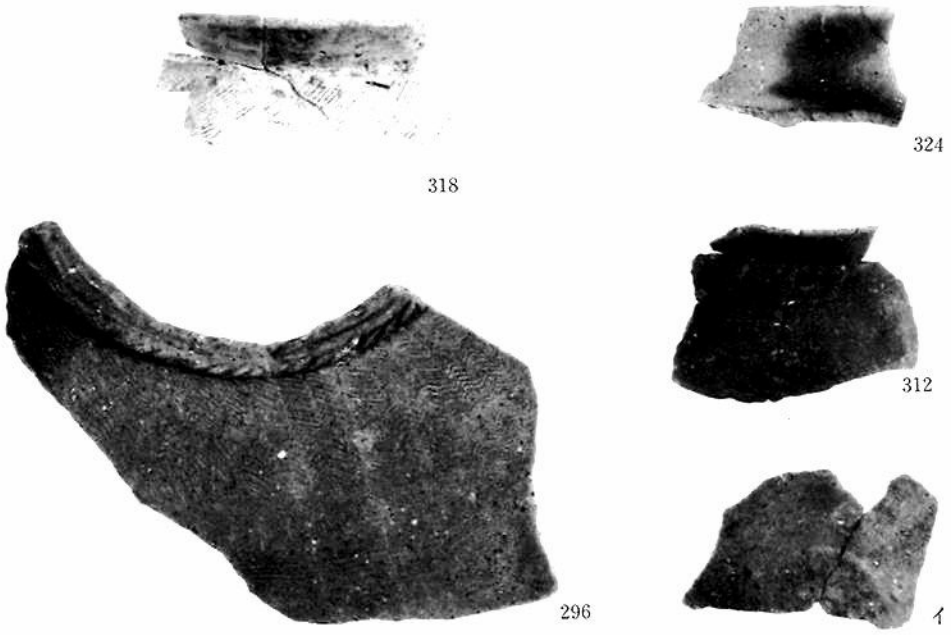
328

309

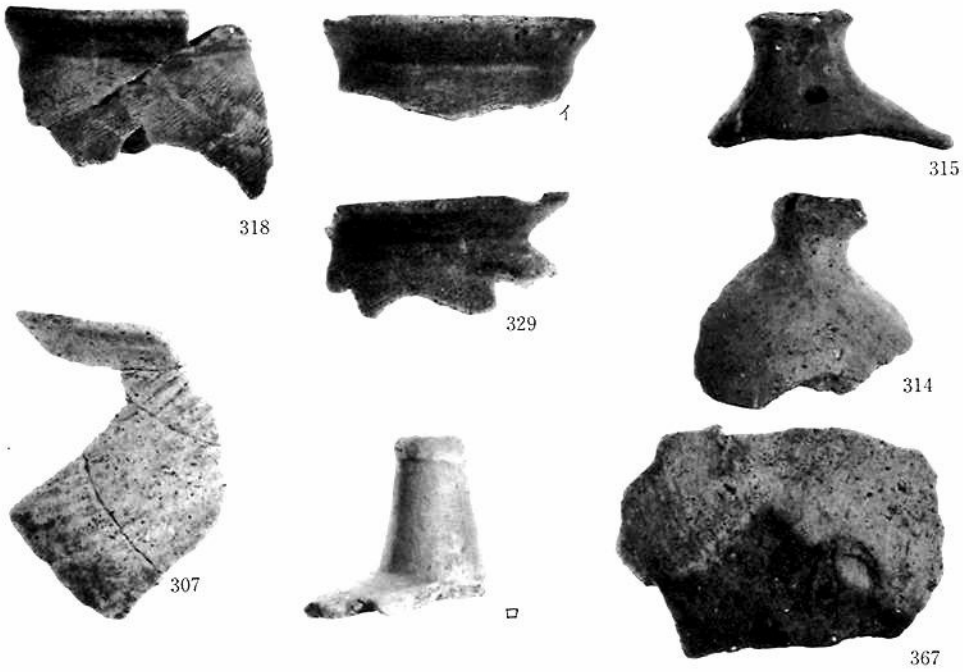
313

310

ＳＤ83　壺(308･309)甕(310)　ＳＤ85　甕(313)　ＳＤ81　高杯(323)　甕328



1．ＳＤ80 甕(318)　ＳＤ83 甕(312)　ＳＤ81 壺(324)(イ)　ＳＤ78 壺(296)



2．ＳＤ80 高杯(314･315)甕(318)　ＳＤ81 甕(329･イ)高杯(ロ)　ＳＤ82 甕(307)　ＳＥ６ 壺(367)

図版五十八　弥生土器

320

363

344

366

303

366

7

4

ＳＤ78　甕(275)高杯(303)　ＳＤ80　甕(320)　ＳＥ５　第１層鉢(344)甕(363)　壺棺１片口鉢(４)
壺棺３壺(７)

398

301

イ

304

397

258

ＳＤ78　高杯(258・301・304・イ)　包含層高杯(397・398)

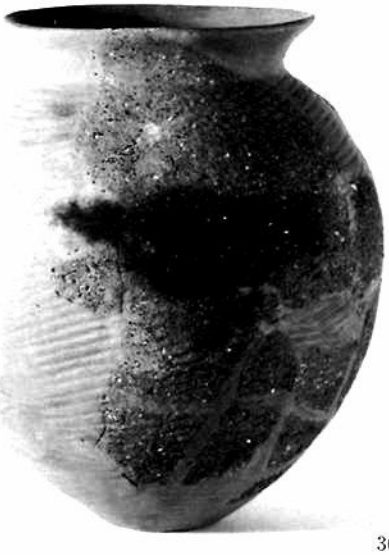
図版六十　弥生土器

345

343

350

362



360

365

ＳＥ５　第１層高杯(343)小型鉢(345)　第２層甕(350・360・362)壺(365)

357

355

354

348

356

349

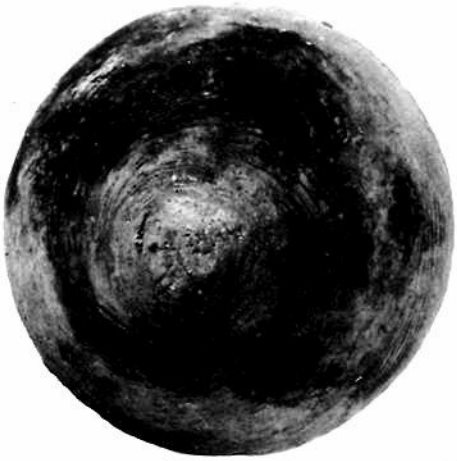
358

ＳＥ５　第２層壺・甕・高杯・鉢・小型器台

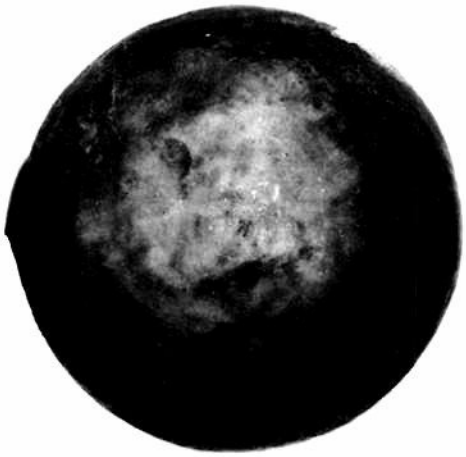
図版六十二　弥生土器

359

361

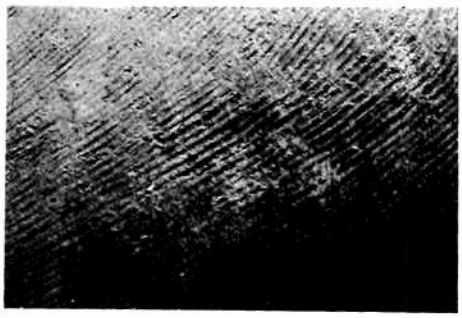


359'



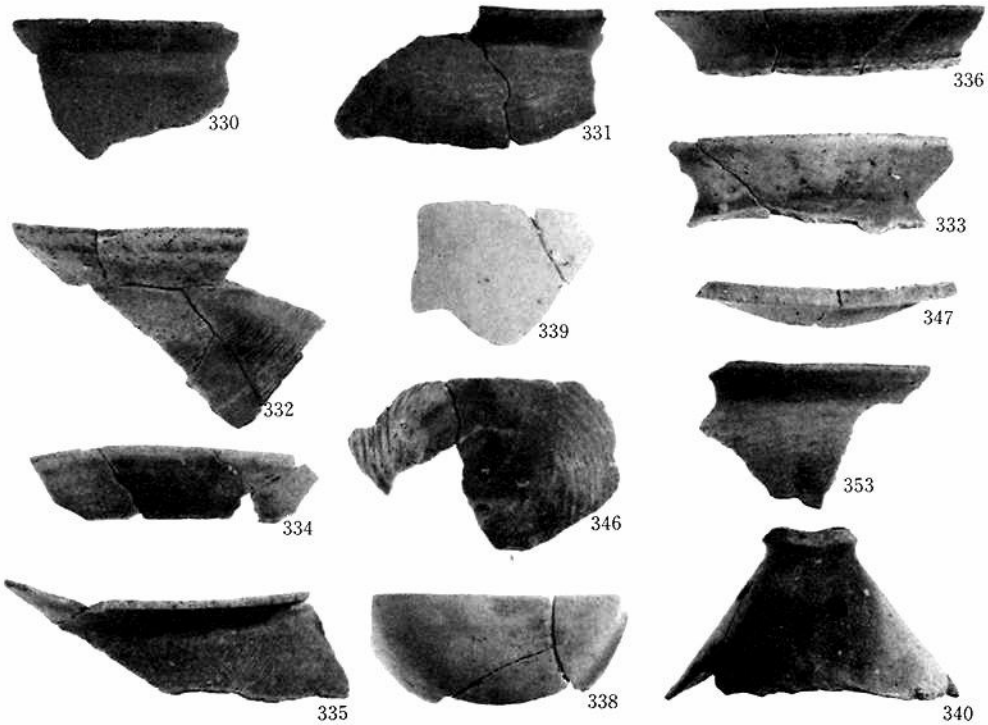
361'

359"

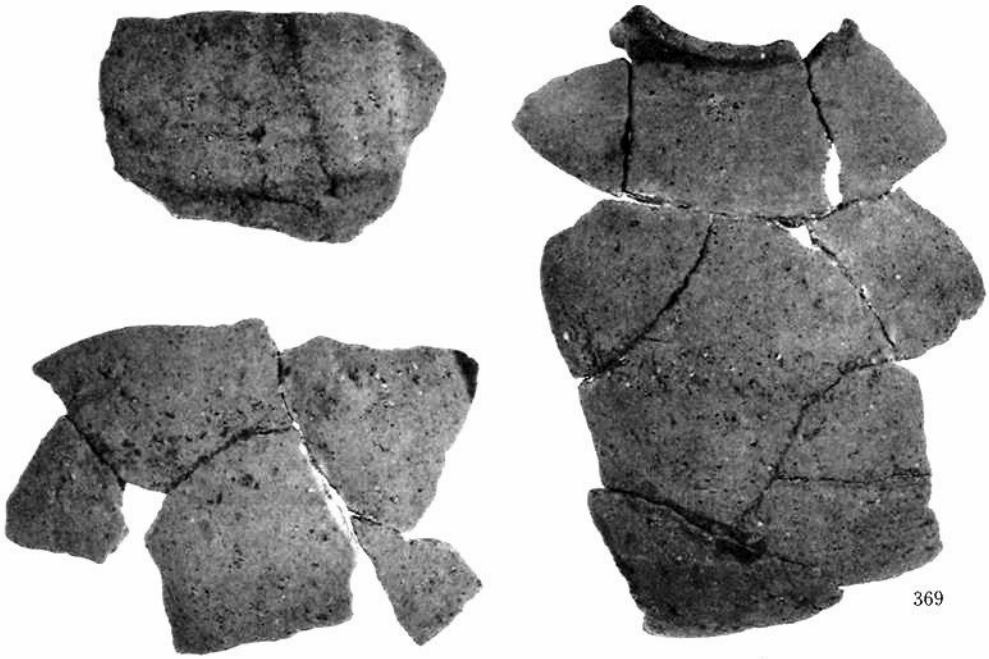


362"

ＳＥ５　第２層甕

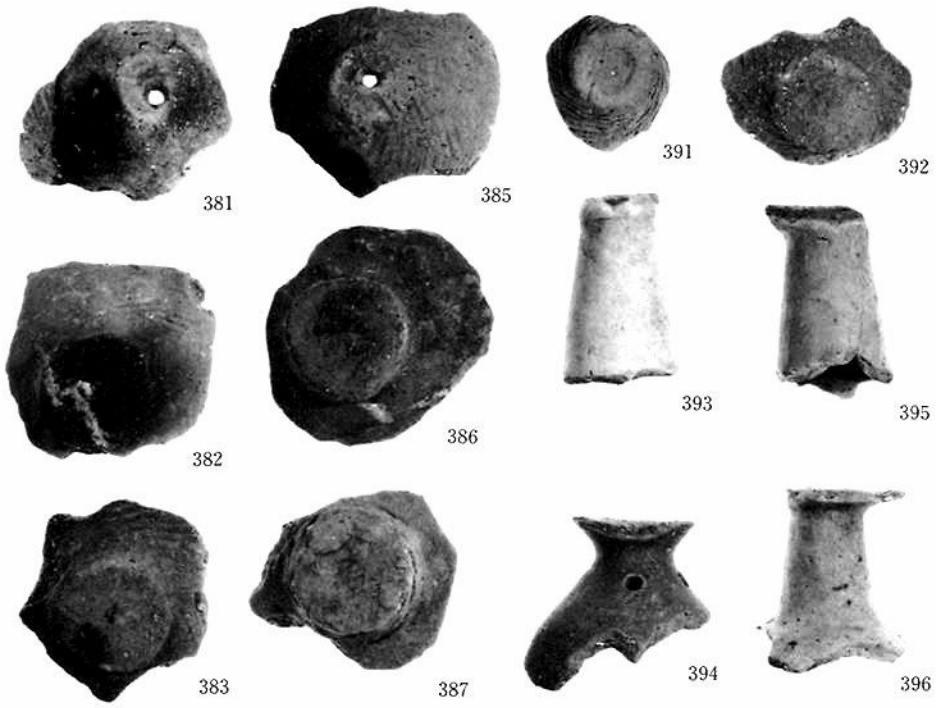


1．ＳＥ５　第１層甕(330～336)　高杯(340)　鉢(338・339)　第２層壺(347)　甕(353)

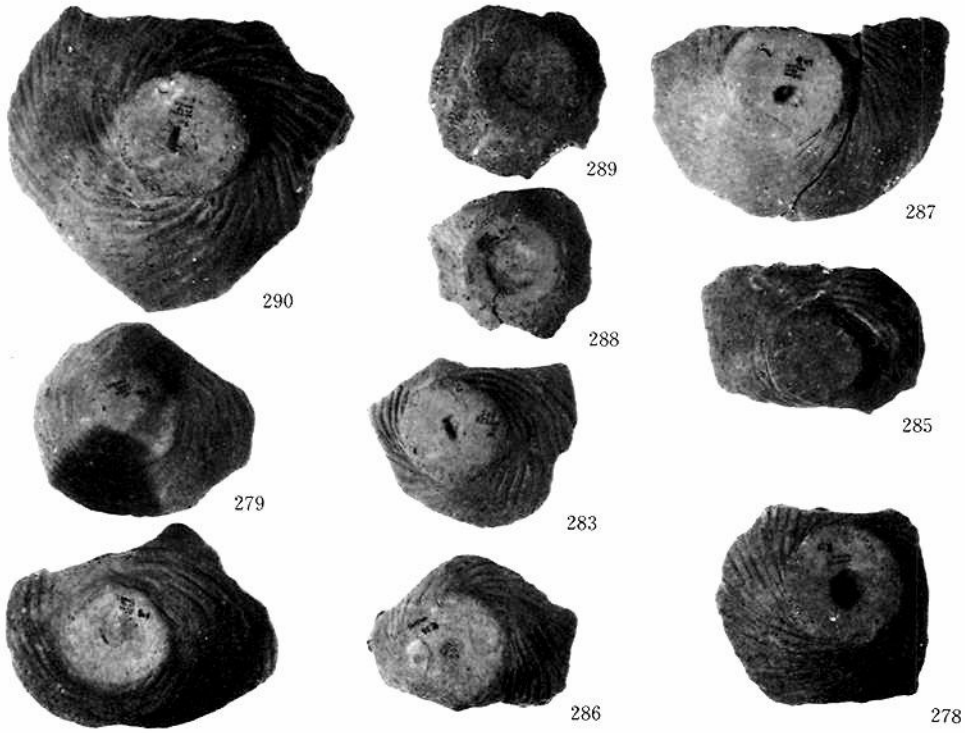


2．ＳＥ６　壺

図版六十四　弥生土器



1．包含層　甕底部・高杯脚部



2．ＳＤ78　甕底部

西の口遺跡第1次発掘調査概要

―市立縄手中学校分教場建設工事に伴う第1次調査―

1987年3月31日

発　行　財団法人 東大阪市文化財協会

印　刷　ドウミ印刷広研社